改修

新制漢文

教授參考書

卷四

特259
520

始

特259
520

文學博士 北村澤吉編

改修 新制漢文 教授參考書 卷四

東京
大阪 寶文館發行

一 國體之尊嚴……二
二 春夜宴桃李園序……八
三 江南春 詩……一五
四 絕句 詩……一七
五 大學鈔……一九
一 三綱領八條目……二〇
二 君子愼獨……二三
六 中庸鈔……二五
一 天命之謂性……二五
二 君子居易……二七
三 天下之達道五……二八
四 學・問・思・辨・行……三〇
七 岳陽樓記……三三
八 遊洞庭湖 詩……四〇
九 登岳陽樓 詩……四二
一〇 黃鶴樓 詩……四五
一一 范文正公文集序……四八
一二 送溫處士赴河陽軍序……五六
一三 送安井仲平東游序……六一
一四 永州游記……六七
一 始得西山宴游記……六七
二 鈷鉧潭記……七〇
三 鈷鉧潭西小邱記……七一
一五 漁翁 詩……七四
一六 鸞鵠者傳……七六
一七 前出師表……七九
一八 蜀相 詩……八四
一九 前赤壁賦……八六
二〇 後赤壁賦……九二
二一 孟子論……九六
二二 何必曰利……一〇一
二三 仁者無敵……一〇四
二四 以五十步笑百步……一〇七
二五 四端……一一一
二六 保民而王……一一六
二七 靜夜思 詩……一一八
二八 磧中作 詩……一一九
二九 胡笳歌、送顏眞卿使赴河隴 詩……一三〇
三〇 予豈好辯哉……一三一
三一 物之不齊物之情也……一三六
三二 正氣歌並序……一四三
三三 和文天祥正氣歌並序……一四九
三四 述懷 詩……一五三
三五 讀文天祥正氣歌……一五五
三六 舍生而取義……一五七
三七 浩然之氣……一六九
三八 漁父辭……一六四
三九 賣花翁 詩……一六六
四〇 伯夷頌……一六八
四一 聖之時者……一七〇
四二 此之謂大丈夫……一七三
四三 留侯論……一七五
四四 博浪沙 詩……一八〇
四五 經下邳圯橋懷張子房 詩……一八一
四六 上樂翁公書……一八四
四七 送母路上短歌 詩……一八八
四八 中秋無月侍母 詩……一八九
四九 柳子厚墓誌銘……一九〇
五〇 祭十二郎文……一九七
五一 論子書……二〇三

改修 新制漢文教授參考書 卷四

卷四の編纂方針

生徒は本學年を以て普通教育を終り、國民の中堅として祖國を荷ふに足る教養を完うすべき筈なり。されば漢文科に於てもその學科本來の使命に鑑み、本學年に於ては生徒の德性涵養に最後の努力を拂はざるべからず、是を以て本卷に於ては務めて和漢著名の詩文中、特にこの目的達成に有效なるもののみを選び、或は諷誦の間自ら人情の美點に感激せしめ、或は讀解の間忽然として人たるの道を覺らしめんことを期したり。本卷卷頭先づ第一に「國體之尊嚴」を冠せしめ、卷を終るに「勸學」の一篇を以てせしが如き、編者がこの微衷の一表現なり。

本卷は和漢著名の詩文にその材料を採りたりと雖も、從來の五學年用教科書に往々見たる徒に難解高遠にして生徒の心情に緣遠き者は、悉く之を斥け、我等が祖先以來、知識階級の常識として知られたるもののみを取ることに力めたり。これ本卷が從來の五卷に比して日本人の作多き一因なり。

凡そ文を作るには、その內容に應じたる夫々の形式あるべきものと信ず。然るに方今中學卒業生の現狀を見るに、往々にして文章體制に無頓着なる者あり。編者ここに感ずる所あり、同種類體制の文は成るべく接近せしめ、生徒をして文體に關する注意を喚起せしめんことに意を用ひたり。

從來の漢文教科書教授參考書は、徒に單語の註解にのみ力めて、句或は文として、その意が如何やうに連絡するかに至つては、之を等閑に附してかへりみず。殊に最高學年、教材の比較的難しきものに就いてこの憾大なりき。本參考書の最も力を注ぎたるは實にこの點の改善にありたり。教授者諸賢幸に十分精讀の上參考に供せられんことを。

目次終

五二 早起詩……一〇五
五三 春曉詩……一〇六
五四 春望詩……一〇八
五五 陳情表……一一〇
五六 瀧岡阡表……一一六
五七 歸去來辭……一二五
五八 牛山之木……一三〇
五九 勸學……一三一

一　國體之尊嚴

要旨

第五學年劈頭第一にあたり、識見高邁なる東湖の文によりて先づ祖國國體の萬邦に冠絶せる所以を想起せしめ、以て中堅國民としての覺悟を固からしむ。

作者

藤田東湖　名は彪、字は斌卿、東湖はその號。通稱は虎之助、後、誠之進と改む。水戸藩の儒者、幽谷の子。勤王家として聞る。藩主齊昭に重用せられ、史官及び側用人として最も善く輔佐の任を盡せり。安政二年の震災に遇うて母と共に壓死す。時に年五十。著す所、弘道館記述義・回天詩史・常陸帶等あり。東湖天資英靈、容貌魁偉、眼光人を射る。刻苦書を讀み、憤然として大志あり、屢、大變に遇ひて益〻志節を砥礪す。終生の間大義を明にし人心を正すを以て己が任となし、敬神振武を以て政教の基本となす。その大事に遇ふや觀ち死を以て之に當り曾て畏避するなき者、蓋しその父幽谷の遺訓に遵ふもの多きに居る。所謂水戸學は東湖に負ふ所最も多く、我國民道德の闡明は水戸學によること甚だ大なり。

出所

弘道館記述義は天保年間東湖が烈公の命を受けて作れる、「弘道館記」（德川齊昭撰。卷三第四六課參照）の義解なり。本課は弘道館記の「國體以之尊嚴」の句に對する義解より採れり。

弘道館記述義には慶應二年新鐫本、東湖全集本（明治十八年、藤田健が、東湖晩年の手定本に據りて出版せしものを採りたりといふ）ありて頗ちたる加藤虎之助氏著弘道館記述義小解を以て最も優れたりとなす。

兩者、字句に若干異同あり。又その解釋本は明治十六年以來數種出で居れど、昭和三年鈴木愚太郎氏が出版して廣く天下の學校圖書館等に頒ちたる加藤虎之助氏著弘道館記述義小解を以て最も優れたりとなす。

解釋

〔吾日出之鄉、陽氣所發〕　吾が日の本は陽氣の發出する本源で。

原文は夫日出之鄉に作れるも今、章を斷ちて取れる關係上夫字を吾字に改めたり。原文には、この前に於て日本なる國號の由來を說き、その內に「維昔天孫降臨下土也、相朝暾夕晞之所照曜、以爲此地萬住……景行帝幸子湯縣也、以爲是國直向日所出、因命之曰日向、或務帝定國郡也、東西爲日縱、南北爲日橫、神皇愛純陽光明之域、既已如此、且夫以天日經緯國郡、而我處其根本、凡四海百蠻、皆仰我末光」云々とあれば、本文の陽氣は邪氣のない晴々しい氣の意なり。卽ち日出づる所なるが故に陽氣の發する所たるなり。

〔地靈人傑食饒兵足〕　土地は非常によく人物は大變すぐれ、食物も澤山あり兵備も充實して居る。

唐の王勃の滕王閣序に「人傑地靈」とあり

〔好生愛民〕　好生は他人の生を好み殺傷を嫌ふこと、書經、大禹謨に「好生之德洽于民心」とあり。

愛民は人民を可愛がること。卽ち好生は往に他を殺傷せざる方面に就いていひ、愛民は殺傷せざるどころか積極的に之に仁心を施すことをいふ。

〔至於其勇武、則皆根諸天性〕

それら上下の人の勇武の點に至つては、皆先天的にもつてゐる。根はねざすと訓ず。諸は之於、根諸天性」は生れつきから出てゐること宋史、岳飛傳に「君臣大倫、根於天性」

〔此其國體之所以尊嚴也〕　此は上述の土地よく、人すぐれ、上下各美德を具へ、殊に先天的に武勇なる事をうく。

〔抑所謂勇武者〕　しかし自分がこゝに勇武といつたのは

抑には普通三用法あり。（1）語を一轉して反對の意をあらはす場合。それとも。さはなくて、など譯す。論語、學而篇「求」之與抑與」之與。（2）文面を改むる場合。しかし。しかもなど譯す。韓愈の送孟東野序。三子者之鳴、信善鳴矣、抑不」知天將、和其聲而使鳴國家之盛邪。（3）單に發語となるもの。一體、さてと譯す。左傳昭公十三年、抑齊人不」盟、若之何。こゝは（2）の用法と見るも可なり。

所謂一者の形式は「何々と謂はれるそれは」と他から引用せることを指示す。而してその引用たる、（1）他人の語句を引用する場合（2）己が前文に述べたる語句を引用する場合の二用法あり。こゝは（2）の場合なり。以下我國人の天性に根ざすといへる武勇の特質に就いて論ずるなり。

〔非惟勁悍猛烈、以逞其威、蓋亦必發於忠愛之誠〕　こゝにいふ勇武とは唯强く手荒くて、その威をふりまはして人をおどすことのみを意味するのではなく、必ず他をいつくしむ誠心から發する强さをいふのである。

勁悍はつよくたけきこと。無分別に力のみ强きにいふ。晉書、陶璜傳に「夷獠勁悍歷世不」賓」とあり。

忠愛はまごころから出た愛（忠はまごころ）。禮記王制篇に、「致其忠愛」とあり。

蓋は自己の考を婉曲に表はす詞。自分は……だと思ふ、自分は……のことを意味してゐるのだ。

〔請論其略〕　所謂勇武者が必ず忠愛の誠より發せることについてその大體を論じよう。

〔神劍〕　靈妙不可思議なる劍。

日本書紀卷一に「……時素戔嗚尊乃拔所

帯十握劍一寸二斬其蛇一至レ尾劍刃少缺、故割二裂其尾一視レ之、中有二一劍一……素戔嗚尊曰、是神劍也、吾何敢私以安乎、乃上二獻於天神一也

〔平國之矛〕　大己貴命が常に用ひて國土を平定せられし矛。

大己貴命が國土を天孫に讓らんとせし時、天孫の使者經津主・武甕槌の二神にこの矛を授け、天孫に獻上せんことを依頼せり。日本書紀卷二に大己貴神自二於二神一（經津主神武甕槌神）曰、我怙之子既避去矣、故吾亦當レ遁、如吾防禦者、國内諸神必當二同禦一、今我奉レ避誰復敢有二不レ順者一、乃以二平レ國時所レ杖之廣矛一授二二神一曰、吾以二此矛一卒有二治功一、天孫若用二此矛一治レ國者、必當二平安一、今我當レ於二百不足之八十隈一將二隱去一矣、言訖遠隱、

〔方二是時一〕　神劍を獻じ給ひし時、又平國の矛を獻じ給ひし時、を指す。方は猶當のごとし、ちやうどその時に。

〔素戔嗚尊獲二罪於天祖一〕　日本書紀卷一に素戔嗚尊之所レ爲也其無狀……天照大神……發慍、乃入二于天石窟一閉二磐戸一而幽二居焉一……諸神歸二罪過於素戔嗚尊一而科レ之以二千座置戸一……已而竟遂降焉、是時素戔嗚尊自レ天而降二到於出雲國簸之川上一……とあり。

〔大己貴命將レ避二國於天孫一〕　國土を天孫に獻上して己は避け隱れんとせしなり、その事實は平國之矛の條參照。

〔乃獻二其寶器一〕　朝廷を怨み奉るどころか、かへつて（乃）その大切なうつは（神劍、平國之矛）を獻上までした。

乃は轉勁を示す。そのまゝでは居ず捩ぢまはす意あり。普通なら怨む所を、さはなくて、かへつてといふ意なり。

〔輸二奉一上之誠一〕　上に奉する誠心をありだけ捧げた。

輸は十分いたすこと、ありだけをつくすこと。

〔其忠愛之厚何如也〕　なんとまあ忠愛の情の厚いことではないか。

何如也はいかばかりぞやの意。

〔五瀨命…慷慨撫レ劍、以二逆虜未レ滅爲一憾一〕　無念やる方なく劍をなでながら、はむかふ惡者どもがまだ滅亡しないのを遺憾とせられた。

日本書紀卷三に戊午年夏四月丙申朔甲辰、皇師勒レ兵、步趨二龍田一而其路狹嶮、人不レ得二竝行一、乃還更欲レ東踰二膽駒山一而入二中洲一、時長髓彦者聞レ之曰、夫天神子等所二以來一者、必將レ奪二我國一、則震起二屬兵一、徼二之於孔舍衞坂一與レ之會戰、有二流矢一中二五瀨命肱脛一、皇師不レ能二進戰一……五月丙寅朔癸酉、軍至二於茅渟山城水門一、時五瀨命矢瘡疼甚、乃撫レ劍而雄誥之曰、慨哉大丈夫被二傷於虜手一、將二不レ報而死一耶、……進到二于紀伊國竈山一而五瀨命薨二于軍一、因葬二竈山一、とあり。即ち命が慷慨されしと薨去との間には若干の時日を隔てたる如き書きぶりなり。然るに古事記には到紀國男之水門而詔、負嚢奴之手手死、爲男建而崩（古事記傳十八之卷）とありて薨去の直前慷慨せられし如き書きぶりなり。東湖のこの文臨レ慨慷慨撫レ劍云々の臨の一字に重きをおきて見れば古事記の事實に據れるものの如く以逆虜未滅爲憾といふ書きぶりは書紀に據れるものゝ如し。

〔日本武尊疾篤云々〕　日本武尊が御危篤の際、草薙劍に深く御心をかけられ、その御心持を歌に作り給うた。

〔雄刀〕　は立派な刀こゝでは草薙劍をいふ。史記商君傳に屈虞之勁矛、干將之雄（屈虞・干將は古のすぐれたる刀鍛冶）司馬相如の子虛賦に建二干將之雄戟一など又、吳越春秋其他に雄劍の語あればこれらの語に倣ひて雄刀の語を作りしならん。

或は雄刀（草薙刀の薙を同意の文字雄で書く）とありしを傳寫の際誤りしかとも思はるれども、未詳。姑く前の如く解釋す。

教科書頭註は日本書紀卷三にある事實に據りたるものなれど、其後更に研究の結果、こゝは古事記の事實に據る方一層適切なることに氣づきたり。即ち古事記（古事記傳二十八卷）に據るに日本武尊、東征より尾張國に還りまし、その佩び給へる草薙劍をば美夜受比賣の許におきて、更に膽吹山の賊を討ち給へる時病を獲給ふ。かくて御歸途、能煩野に到りまし御病おもり給ふや、草薙劍を御心にかけられて、寔登賣能、登許能辨爾、和賀游岐斯、都流岐能多知、曾能多知波夜と歌ひ給ひ、歌ひ擧りて崩じましたることゝなれり。

〔其威憤悲壯、從容嫺雅〕　その感じ憤り悲しみのうちに壯烈の氣を帶びたる御態度（五瀨命）とゆつたりとおちついて、風流で奥ゆかしい御樣子（日本建尊）

從容、おちついてさわがぬ說。

嫺雅、みやびやか、風流。嫺は閑と同じ。

〔士猶重二廉恥一卑二怯懦一〕　士は武士。

支那の文にて士といふは必ずしも武士に限らず、今の知識階級の意なり。然れども この文は我が武士をいふ。

廉恥は廉潔にして恥を知ること。怯懦共に氣の弱きこと、即おくびやう。

〔以二汙名辱一先爲レ戒〕　己の名譽を汚し祖先を辱しむることなばしてはならぬこととした。

汙は汚と同じ、汗と混ずべからず。

戒は氣をひきしめて慎しむこと。

〔忠義孝烈、不レ乏二其人一〕　孝烈は孝心の極めて厚いこと。後漢書、宋弘傳に「以二剛强孝烈一著レ名」とあり。

其人は忠義孝烈の人をいふ。

〔丹心血誠、誓二天日一貫二金石一〕　それらの人の事に當りては、その眞心は決して僞なく、極めて盛で。

丹心は赤心に同じ、至誠にして僞なきをいふ。血誠は赤誠丹誠に同じ、至誠にして僞なきをいふ。その意丹心と同じ。誓二天日一はその心の僞なきを太陽に誓ふなり。韓退之の柳子厚墓誌銘（本書四九課）に「指二天日一涕泣誓二生死不二相背負一」とあり。

貫二金石一は硬き金石をも貫く程誠の盛なるをいふ。朱熹の語類に「陽氣發處、金石亦透」とあり。

〔而其跡不レ迫、流風如レ馨、餘情可レ掬者〕　而もその事に處するや悠容迫らず、やつてのけた、その美風は後世に遺つて今も馨り、その情趣は今なほ遺つてつきぬものがあるのは。

跡は事跡にて、事に處したやうかたをいふ。流風は後に遺れる美風。流弊の反對なり。孟子、公孫丑上篇に「其故家遺俗、流風善政猶有二存者一」とあり。

餘情は餘韻と同じ後に遺れるおもむき。ここはあり餘る情に非す。

掬は兩手ですくふこと。元來情趣は目に見えざるものなれども、澤山殘れることは兩手もて掬ひ取らるゝ位なりといふなり。

抑〻熱誠の迸る所往々粗暴となり焦燥となるものなれど、我國人は然ることなくよくおちついて事に處したりとなり。この氣分「而」の一字によく表はる。

〔上世遺俗所使然〕　上世から遺つてゐる美俗がさうさせたのである。

〔自有一種蕩然氣象非海外異邦所企及者〕　他國が如何に工夫しても、とても眞似られない、一種特別の盛な精神作用が我國にのみ自然にあるのである。

一種は一種特別の一種なり。

蕩然は衆盛の貌、管子、侈靡篇に「蕩然若夏之靜雲、乃及人之體」氣象の氣は神氣にて精神をいひ象は精神の發動せるすがたをいふ。所企及の企及はくはだておよぶ、即ち出來ること。この「所」は「可」の意としてみば極めて明瞭なり。「所」にはかゝる用法あるなり。

「非海外異邦所企及」を「一種蕩然氣象」の修飾句の如く說けば理解せしめ易し。

〔蓋國體不得獨尊嚴必有資於天地正大之氣〕　思ふに國體はたゞそれだけ獨立して尊嚴とはなり得ない、必ず天地間に充滿せる正大の氣によらねばならぬ。正大之氣は、至正至大なる天地の元氣にして人に宿りては道德性となるもの。宇宙の原理などいはんが如し。

資はよると訓す、本とする、どだいとすること。

〔天地之氣不得獨正大亦必有參於仁厚義勇之風〕　而して天地正大之氣といふも、たゞ抽象的にあるに非す、必ず人間社會の美風によりてその正大性を保ち得るのである。

參はまじはると訓す。

この仁厚義勇之風は、前文にあげたる神代より後世に至る迄の實例をうけていふ。蓋以下こゝ迄は次の斷定を下す準備なり。

〔然則風俗之淳漓國體之汙隆繫焉〕　然らば一國風俗の美惡こそ實に國體の尊嚴性を發揮するや否やの根本となるのである。

風俗、上の敎化を風といひ、下の之に化せらるゝを俗といふ。

淳漓は醇醨と同じ、醇は味の濃い酒、醨は薄い酒、轉じて美惡の意となる。汙隆は盛衰と同じ。

「焉」は風俗之淳漓をうく。即ちこの文は國體之汙隆、繫風俗之淳漓といふ意味なるが風俗之淳漓が今論ずる要點なる故、之を上に出して力を強め後に「焉」を以てうけしなり。さればこの形式は「風俗之淳漓こそは」の語氣を表はすこと、なる。

〔在上君子〕　上に立ちて政治をする人。君子はこゝでは爲政者の意。

敎授上の注意

一、この文は弘道館記の第一段、弘道者何、人能弘道也、道者何、天地之大經、而生民不可須臾離者也、弘道之館、何爲而設也、蓋惟、上古神聖、立極垂統、天地位焉、萬物育焉、其所以照臨六合、統御宇內者、未嘗不由斯道也、寶祚與之無窮、國體與之尊嚴、蒼生與之安寧云云、この「國體與之尊嚴」の部に對する述義なり。記に於ては我が國體は皇祖皇宗以來實現せられ居る斯道によりて尊嚴なりといへるに對し、述記は斯道が何如なる具體的の形もて行はれ居るかといふことを論證せしなり。勿論唯この一節のみを讀みて以て之が東湖の國體に關する考の全部なりと思ふは早計なり。ここは單にその一面を論ぜしに過ぎず。從つてこゝの「國體」なる語は極狹義に解すべし彼の國體論の全體を知らんとせば、述義の全部、少くとも「寶祚與之無窮」以下「髮夷戎狄率服」までの述義は是非熟讀せざるべからず。

一、今日より見れば、東湖の論には或は論じ足らざる點もあるべけんも、そは當時の時勢上やむを得ざる所なり。

一、我勇武は必ず忠愛の誠より發すてふ觀方は、實によくその特質を究めたる論なり十分玩味せられたし。忠愛の誠より發するが故に必ず正々堂々の軍となり。無我無私の崇高なる犧牲的行爲となり、而も必ずその反面には一視同仁の溫情を伴ふ。かの內に姦邪鬪爭陰謀の心を藏して徒に「發へる平和」を愛する「血に餓みたる平和論者」流とは全くその撰を異にす。嗚呼吾等は幸にして世界に冠絕せる國體を有し、萬邦無比の良國民性を受けつげり。知らず將來の子孫之を何如樣にうけんとするかな。請ふ敎授者よく自ら反省せられて十分子弟を感起せしめられんことを。

一、本課の如き敎材に於ては、文の形式上の詮索は餘りなさゞるをよしとす。

二　春夜宴桃李園序

要旨

形式に於ては含蓄多き駢麗文を讀解せしめ、內容上に於ては風雅の情を涵養せしむるを以て要旨となす。

作者

李白字は太白、青蓮と號す、武后の長安元年(西紀七〇一)に生れ肅宗の寶應元年(七六二)卒す。

支那に於て詩の最盛なりし時代は唐、唐約三百年間に於て詩の最も盛なりしは盛唐(唐の詩を論ずるにその世を四期に分つ、唐初より玄宗の開元初迄約百年間を初唐、開元より代宗の太曆初迄約五十年間を盛唐、太曆より文宗の大和迄約七十年間を中唐、大和より唐末迄約八十年間を晩唐といふ。)而して盛唐に於て最すぐれたる詩人は李白と杜甫なりといはる。李白の詩は飄逸清麗を以て優り杜甫の詩は雄渾沈鬱を以て優る。李白はかく非凡の詩人なるが亦その文にも誦すべきもの尠からず、本篇の如きはその尤なるものなり。李白は道士吳均と親交あり老莊思想を好む、從つてその作中往々この傾向を見はす、本篇に於ても之を見るべし。

出所

古文眞寶は前集後集に分る、前集には卷初、勸學文を載せ以下五言古風、七言古風、長短句、歌、行、吟、引、曲に分類して漢より宋までの古詩を選載し後集は辭、賦、說、解、序、記、箴、銘、文、頌、傳、碑、誄、表、原、論、書、に分類して戰國より宋迄の古文を採錄す、名づけて眞寶といふは字の如く眞の寶の意にして蓋し以て古文の粹玆に集るとなせしならん、この書編者明ならず、或は宋の永陽の黃堅なる者なりとなせど(明、青藜閣跋)黃堅の事蹟亦知るべからず。この書我國に渡來せしは足利時代の初世なるべく、その採る所往々玉石混淆の嫌あれども各時代にわたりて詩文を蒐收せると皆類別して閱讀に便にせしとの爲五山僧間に盛に行はれ文を習ふ者必ず之を模範となし德川時代に至りては相當に讀まれたるもの丶如し。註釋書としては楠原篁洲の古文眞寶前集諺解大成(十册)、林羅山の諺解を鵜飼石齋が補成せる古文眞寶後集諺解大成(十册)を比較的優れたる者となす。何れも早稻田大學出版部漢籍國字解全書中に收めらる。尙明治に至りての註釋書としては久保天隨の古文眞寶新釋前集後集各一册あり稍〻參考となすに足る。

題名

李太白集には「春夜宴從弟桃花園序」に作り唐文粹(宋の姚鉉編、一百卷)には「春夜宴諸從弟桃園序」に作る。李白、春夜、桃李の咲ける園にて從弟と酒宴せる時、詩など作りその前書に作れるものこの序文なり、抑〻「序」とは文體の名にして事理の始末を敍ぶるをその特色となす。文體明辨(明徐師曾撰八十四卷)に按爾雅云、序緒也、宇亦作敍、言其蒸敍事理次第有序若絲之緒也、と、而して一概に序といへども、その內容によりて讀集序、集序、送序、後序、贈序、壽序等に分つべし。中等學校漢文教科書にとらるゝものには集序、送序多し集序とは詩、文集の成れる所以或はその作者の性行學識を稱述してその集の價値を鼓吹するものにして、本教科書第四卷第一一課「范文正公文集序」の如き是なり。送序とは親戚知人を送るの際その別離の情を述べ或は勗勉の旨を寓するものにして同第一二課「送溫處士赴河陽軍序」、一三課「送安井仲平東游序」の如き是なり而して本課の如きは宴集賦詩の所以を敍したるものにして讀集序に屬す。

分段

本課は三段に分つべし。

第一段　篇首より良有以也まで。

第二段　況陽春より慢康樂まで。

第三段　幽賞未已より篇末まで。

解釋

〔夫天地者萬物之逆旅〕　廣大無邊の天地は萬物を宿泊せしむる宿屋なりとの意。「夫」は「天地」を指し、ハと譯す。「者」は「天地」を承けて之を強く明確に提示す。ハ、と訓す。「夫…者」は「アノ……トイフコノモノハ」とその中間の事物を強く明確に提示する形式なり。(者個は這個と同じくコノモノにて此の者の字も參照すべし)逆は迎なり、旅は客なり旅人なり、逆旅は旅人を迎へる所の意にて宿屋のこと、莊子、山木篇、「陽子之宋、宿於逆旅」後讀書郭泰傳、「每行宿逆旅、輒掃席而待、及其去後、人至見之、曰、此必郭有道昨宿處也」

〔光陰者百代過客〕　日月はその旅屋を過ぎる悠久の旅客なり。

光陰者は、「夫天地者」の「夫」に支配せらる。光は晝、陰は夜(一說に光は日、陰は月)にして日月、歲月、時間のこと。過客は通行する人。日月は逝き又來り永久に連りて絕ゆることなきが故に百代過客といへるなり。光陰は前句の「萬物」の一なり、「者」の字の意前と同じ。

〔而浮生若夢〕　然るに人生のはかなきこと恰も夢の如しとなり。

人、世上に生ずる虛浮、定め無きが故に浮生といふ、若は如と同じ。莊子、刻意篇、「其生若浮、其死若休。」

渺々たる天地悠々たる日月を考へて轉てそ

の間に於けるこの己が一生を顧みればそのはかなさ短さを痛切に感ぜらるゝ譯なり。この氣分を表はせるもの両の一字なりよく玩味せらるべし。

〔爲歡幾何〕 既に人生夢の如しとせばその間歡樂をなすこと幾何程も出來ぬわけなり故に精々時に及んで樂しむべしとなり。この考あるが故に次の句に於て古人の夜迄も遊べる行爲を肯定し賛成するなり。

歡攉全く同じ、攉亦回用せらる。歡は音クワン。ヨロコビ、タノシミと訓す喜びて聲氣を動かすなり故に字、欠（氣が口より出ること）に從ふ、喜より強し、「歡樂」、「歡心」の語及六朝時代、男女互にその愛人を「歡」と呼びたること等よりこの字の本義を知るべし。

〔古人秉燭夜遊〕 古の人が晝のみでは足らず、夜迄も燈火をつけて遊んだのはの意。文選（支那南朝梁の昭明太子―姓は蕭名は統―が周からその當時迄のすぐれた詩文を選びて文選と名づく。我が王朝時代に最も讀まれたる漢籍なり）卷十九、古詩十九首（作者不詳）の第十四首目に、

生年不滿百、常懷千歳憂、晝短苦夜長、何不秉燭夜遊、爲樂當及時、何能待來茲。（下略）

とあり「古人」とはこの十九首の作者などを指せるなり。

秉は說文に从ヨ又持禾とあり禾と彐（又）と合せたる文字なり、彐（又）は手の象形文字なれば、この字は手にて禾を握れる意となる故にトルと訓ず。

〔良有以也〕 げに尤もなことだ。良は「ゲニモ」と譯す、以は攸、所以と同じ、理由なり、詩經邶風旄丘「何其久也、必有以也」、列子、周穆王篇、「宋人執而問其以。」文選卷四十二、魏文帝與吳質書の内に「年一過往、何可攀援、古人思秉燭夜遊、良有以也。」とありこれ恐らく李白の本となる所なるべし。

〔況陽春召我以煙景〕 さらでだに徒に過すべきでないがまして陽春の時節は殊たなびく美景を以て我を招待するが如く、といふ意。

況は「浮世如夢」が故に時に及んで歡を爲すべし」といふ事に對して用ひ、陽春……以下二句を支配す、況は俗字。煙景は煙霞風景なり、春氣朦朧たる故にいふ。

〔大塊假我以文章〕 又、天地は文章を作る才能を我に與へられたりいかんぞ歡を爲さゞるとなり。

大塊は大きな一つのかたまりの義、天地。莊子齊物論篇、「夫大塊噫氣、其名爲風」、大宗師篇、「大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。」假我は召我に對す、共に天地自然が吾に歡樂せよといふが如く見ゆるなり。

〔會桃李之芳園〕 桃李の咲き香ふ芳ばしき園に會して。

會は集なり、會合なり、「桃李之芳園」は前前句の「煙景」の一なり、煙景もて招待せられし故この會合をするなり。

〔序天倫之樂事〕 兄弟互に相樂しむことをのべる。

倫は倫次の倫にて類、品等の意、天倫とは天然に備はれる順序にて卽ち兄弟をいふ、穀梁傳、隱公元年、「兄弟天倫也。」但ここで

兄弟といふは必ずしも父母を同じうする者のみに限らず、從兄弟、再從兄弟、三從兄弟をも含むものなり。支那現代語にては兄弟は弟といふ意味となる。序は舒と同じ、のべる、しるす、詩文を作ること。

序ニ天倫之樂事ニ ことは前前句にある大塊我に假せし文章を以てするなり。

この文章もて舒する：ことあるによりて次の優劣のこと引き出さる。

〔群季俊秀、皆爲惠連〕 この園に會合せる多くの若者は皆詩文のオすぐれたること昔の謝惠連といふ人の如しとなり。

季は伯仲叔季の季なるが、ここでは一族中の年若き者をいふ。俊は淮南子泰族訓篇に「知過ニ萬人ニ者、謂ニ之英ニ、千人者、謂ニ之俊ニ」とあれど必ずしも拘泥せざれ、元來俊の字は浚といふ音にすぐれたるものといふ意あるなり、故に人のすぐれたる者を俊といひ馬のすぐれたるものを駿といひ、山のすぐれたるを峻といふ、漢字の構成に於てかく字の一方が意味を示し（イ、馬、山等）他の一方が音を表はす（浚）樣に出來たるものを諧聲或は形聲文字といふ、但この音を表はすのみと考ふる部分も單に無意義の音を表はすのみと考ふるは誤にしてその音には必ず意義を含むものと心得べし、例へば浚の音にすぐれたるものの意を含むが如し。

秀は從ニ禾從ニ人の字にて禾の實なり（人は仁にて實をいふ）實れば目立つて出づるよりすぐれたる義に引伸せらる、或は從ニ禾、尤の聲にて尤と同語源、故にすぐれたるものの意となると。

〔謝惠連〕 南北朝時代の宋の人靈運の族弟族弟は三從弟なり、その關係は左の如し。

- 謝夏
  - 奕―玄―玙―靈運
  - 安―□―□―□
  - 據―□―□―□
  - 萬―□―□―□
  - 戩―冲―方明―惠連

惠連幼にして敏、十歳よく詩文を屬す、靈運甚だ之を愛して云ふ惠連に對すれば輒ち佳句ありと、嘗て永嘉郡太守たりし時、詩を思ひ終日就らず、忽ち夢に惠連を見る、卽ち「池塘生ニ春草ニ」の句を得大に喜び、神助なりといへり。世に靈運を大謝、惠連を小謝といふ、小謝の詩は大謝に及ばず。

爲、他動詞の時は……ヲナス、……トナスと訓じ、自動詞の時は……タリと訓じて、だ、であると譯す。

〔吾人詠歌、獨慚ニ康樂〕 然るに自分の作のみは拙にして謝康樂に及ばない、となり。

謝康樂とは謝靈運のことにして嘗て康樂侯に封ぜられたるを以て謝康樂といはるるなり。彼は文才秀で族弟惠連と並稱せらる。前の句と此の句とを合せ解せば『今こゝに會せる羣季は皆惠連と比せらるゝ程の才あれども年長の己のみは甚だ劣りて、惠連と並稱せられた靈運に及ばないのを遺憾に思ふ』（是は勿論謙遜していふなり）といふ意なり。

吾人は複數な意味することもあれど、ここは單數にて李白自らいふ。

獨慚ニ康樂ニの獨は前の句の皆に對す、四字句の關係上慚の上に在れども、意味は寧ろ

吾人にかゝるなり。康樂に對して慚づるとは卽ち康樂に劣ることなり。

慚愧同じ、面目なく思ふ、きまりわるく思ふこと、この字ハザと名詞には用ひず、注意すべし。

〔幽賞未」已〕 心の底から深く靜かにその景を賞翫して興なか〳〵盡きずとなり、幽はかすかと訓すれども微(スコシ)とは異なり、奥深いこと。幽賞とは表面的でなく、心の底から靜かに景色を味ひ賞する事なり。未だゼずといへば普通やがてその動作が實現さるることを豫想すれども(未已といへばやがて已むことを豫想するが如し)こゝは寧ろ已む無く。盡きる無きことを意味す、卽ちもうやんでもよいのだが、なか〳〵已まぬ。いつまでもつづく、とやまぬ方の意味強きなり。

〔高談轉清〕 俗氣ばなれの談話が益々はづむ。

高談は高尚なる談論にて祿利榮達などいふ俗氣ばなれた話なり今の趣味談といはんが如し、尙、高談といふ語には思ふ存分話すといふ意あり、後漢書、馮衍傳、「申」眉高談、無」愧二天下一」の用例の如き是なり、こは自ら別義に屬す。

轉、いよいよ、益ゝ。

清は高談なるが故に清といへるなり。

〔開二瓊筵一以坐一花一〕 花の間に美しき席を設けて坐し。

瓊はたまなり、筵はむしろ、竹を編んで造つた敷物、瓊筵は玉の如く美しい席、月光にて奇麗に見ゆればかくいふ。坐一花は宴席を花影の間に設けたるが爲にいふ、この二字にて花中に埋もれたる樣見るが如し、「以」は「而」と同意、次の句の「而」と變化あらしめたるなり。

〔飛二羽觴一而醉一月〕 月光の下にて盃を交換して醉ふ。

觴はさかづきの總名、羽觴といふは盃の形雀に象り頭尾羽翼を有すればなりと(漢書、孟康の注に據る)飛の字は羽觴の言より生す。醉一月とは月影を盃中に浮べながら酒を飲める故にいふ。又坐一花にて春を、醉一月て夜を表はす、坐一花といひ醉一月といふ語極めて簡にして意極めて深きを十分玩味せらるべし。

尙、醉一月については蘇軾の「山城薄酒不堪一飲、勸一君且吸杯中月。洞簫聲斷月明中、惟憂月落酒盃空」(月夜與一客飲二酒杏花下一)など思ひ合はすべし。

〔不一有二佳作一何伸二雅懷一〕 かゝる美景に對しながら是非良き詩を作らではどうしてこの風流心を滿足せしめ得んや、さあ、皆々佳作をなすべしとなり。

伸は申、信同じ、屈の反對、十分盡すこと、雅は風雅の雅、風流、みやびのこと、雅懷は風流な懷、雅思といふも同じ、こゝでは坐一花、醉一月一によりてそゝられたる情懷なり。

不——何——の形に於ては、上句の不——は……ズンバと假設、條件的に調む、不——則不——(不死則不已)の上句亦同じ、これらの用法は、若不——の形よりも意味強く「是非トモ……デナケレバ」の意となる。

〔如詩不一成、罰依二金谷酒數一〕 かゝる美景に對して詩の成らざる者あらば、金谷の故事によりて罰酒を飲ますべし、となり。

金谷酒數、西晉の頃石崇(字季倫)といふ者あり河陽の金谷(河南省洛陽縣の西に在り。)に別館を有し之を金石園と呼び林泉の美をつくせり、崇嘗てこゝに潘岳等當時の文人多數を會して飲酒賦詩、一時の盛を極めたりといふ、その時石崇の作れる金谷詩序の内に、

余與二衆賢一共送往二澗中一、晝夜遊曼、屢遷二其坐一、或登二高臨一下、或列二坐水濱一、時琴瑟笙筑合二載車中一、道路並作、及レ住、命二與一鼓吹一遞奏、遂各賦レ詩、目叙二中懷一、或不レ能者、罰酒三斗、の句あり。

金谷酒數とはこの罰酒三斗を指すなり、斗とは酒器の名なり。

教授上の注意

一、この課を取扱ふに際し最も注意すべきは享樂主義の奏勵に陷らぬやうにすることに在り。否進んで享樂主義と餘裕ある生活との區別を明確にせしむるに在り。前者は己を誤り國家社會に害毒を流すものなれども後者は人生に處するに最も必要のことなり殊に最近生活の煩雜となるにつれ日夜營々として心身を勞することのみ多くなる傾向あればその間に處して綽々たる餘裕を以て自然を樂しむの風を養はしむるは肝要のことに屬す但本課に現はれたる酒宴と作詩とのみが風流の全部なりといふには非ず教授者宜しくその趣意をとりて末節に拘泥せず巧に現代的に活用して取扱はれたし。

一、本文は最も簡單なる表現法を以て最も深奥なる内容を盛る、句中一の冗字なく、文中一の閒句なし、一字は一字と結ばれ一句は一句と聯り、寸分の隙なく、極めて精緻巧妙に組立てられたること恰も精巧なる彫刻品の如し、洗練推敲足らざる繁冗なる口語文のみ行はるゝ現代に於ては以て他山の石となすべきなり、これ十分推敲洗練を經てはじめて成されたるものなれば讀者亦數回反覆熟讀してはじめてその妙味を覺るべく、教授者先つこの妙味を體得しかゝらでは教授上の效果少かるべし。少くとも左の對句の妙位は生徒に理解せしむべし。

(夫天地者萬物之逆旅
光陰者百代之過客)

(況陽春召我以煙景
假我以文章)

(會桃李之芳園
序天倫之樂事)

(群季俊秀皆爲惠連
吾人詠歌獨慚康樂)

(幽賞未已
高談轉清)

(開瓊筵以坐花
飛羽觴而醉月)

かく一篇の大部分對句より成れる文を駢儷文といひ。對句の字數主として四字、六字より成れる者を特に四六文といふなり。駢儷文は古文と別なり、此文古文眞實に敎めらるれども實はその所に非るなり。

一、本課に於ては爲惠連、慚康樂、金石酒數等の故事を巧に織込みてその内容を豐富にしてあれば教授者適宜之を説明するを要す。簡潔を主とする支那文學殊に駢儷文に於ては故事は重要なる役割を演ず、これら故事を象徴的に點綴することによりてその背景を描き出し讀者をして自由に聯想を馳せしむ、是を盛に用ふるは支那文學の一特性にしてその藝術的なる所以も之に負ふ所大な

り、然るに近來青年學徒は故事の家鄰を以て普通の語源の研究と同一視して之をなすもなさゞるも文の意味をとるには大したる差なしなどゝ考へ之を輕忽に附せんとするは大なる誤なり。

今茲にボイコットなる語ありとしその經濟絶交の意なるを知ればその起源がもと英國の貪慾なる地主の名に起れることを知ると知らざるとは、この語の用法に大して關係なきも、金石酒數等はその由來を知らざれば文意を知るに大なる支障を來すなり、注意せられたし。

三　江南春

要旨

本課及第四課は第二課と關連して春を詠じたる詩を授け、以て吟誦に資せんとす。

作者

杜牧字は牧之、樊川と號す、唐京兆萬年の人、官は中書舍人に至る。爲人、剛直にして奇節あり、齪齪小謹をなさず、其の詩風骨遒上、晩唐柔靡の風無し、人號して小杜となし以て杜甫に分つ。

出所

三體詩は宋の周弼撰と稱せらる。唐の作家百六十七人の詩四百八十五を集めたるものにて三體とは七言絶句、七言律詩、五言律詩の三體について選びたればいふ。首に選例を載せ、七絶を實接・虚接・用事・前對・後對・拗體・側體の七格に分ち七律は四實・四虚・前虚後實前實後虚・結句・詠物の六格に分ち、五律は四實・四虚・前虚後實・前實後虚・一意・起句・結句の七格に分つ、蓋當時江湖派中遽に相授受して此の規程ありしならん。

この書、元の釋圓至注、清の高士奇補註あり。我國にも熊谷立閑の三體詩備考大成二十卷あり初學の徒に便なり、漢文大系には元、斐庾の增註本を收めたり。「江南春」は實接の部に收めらる。

解釋

〔江南春〕　江南は揚子江の南、卽ち今の江蘇・安徽兩省に屬する地方にして、南京を中心とす。杜牧嘗て宣州團練判官となる。宣州は今の安徽省寧國府の地なり。この詩は蓋しその任に赴ける途中の作ならん。釋圓至の三體詩注に、余觀二本集一、此詩蓋牧之赴二宣州一時、記二道中所レ見景一耳。とあり。

〔千里鶯啼綠映紅〕　千里の道中、鶯はなちこちに啼き、葉の綠は花の紅と相映じて、春は闌だ。

〔水村山郭酒旗風〕　水邊の村落、山間の市邑には、酒屋の旗が春風に飜つてゐる。郭は外城をいふ、支那の市邑部落皆城壁を繞らすを以て、村落市邑皆郭といひ得るなり。

〔南朝四百八十寺〕　南朝時代に建立せる多數の寺。「十」は「シン」と發音し、平

聲に轉用す。「四百八十」は口調の關係より言ひたるにて、必ずしも四百八十にあらず南朝とは、宋・齊・梁・陳の四朝をいふ。（皇紀一〇八〇年、允恭天皇の御代より、一二四〇年、敏達天皇の御代に至る。）此の間佛教盛に行はれ、特に梁の武帝篤く之を信じ多く寺塔を建てたり。

〔多少樓臺煙雨中〕 幾多の高き建築物が、小雨のそぼる中に、うつすりと見える。多少の少は單に添へたるのみ、異同の同、緩急の緩の如し。煙雨は、きりあめのこと二階屋・三階屋等の屋根あるか樓といひ、屋根なくして高き建物を臺といふ。

教授上の注意

一、「南朝四百八十寺」の句によりて詩全體に懷古的の落着きを添へ、次の「煙雨」の語とよく調和す。春を詠じながら單に艶麗なるものに終らずしてよく幽趣を藏するはこれが爲なり。

一、この詩は七言絶句仄起にして、一東の韻なる・紅・風・中を蹈めり。八十寺の十は仄字なれども、平字のあるべき場所を塡めたり、夜航詩話に、十字作ニ忱音一、吳越方音、蓋語急、故以ニ平音一呼レ之、とあり。この詩の平仄次の如し。

千里鶯啼綠映江
水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺
多少樓臺煙雨中

一、この詩及第四課の詩の如く五言又は七言四句にして一定の平仄法によれる詩を絶句といふ。その平仄法式左の如し。

五言絶句（平起式）

起 ◑○○◑●
承 ◑◑●○◎
轉 ◑●○○●
結 ◑○○◑◎

同上（仄起式）

起 ◑●○○●
承 ◑○◑●◎
轉 ◑○○●●
結 ◑●◑○◎

七言絶句（平起式）

起 ◑○◑●●○◎
承 ◑●◑○◑●◎
轉 ◑●◑○○●●
結 ◑○◑●●○◎

同上（仄起式）

起 ◑●◑○◑●◎
承 ◑○◑●●○◎
轉 ◑○◑●○○●
結 ◑●◑○◑●◎

（○は平字●は仄字◑は平仄何れにても可◎は韻字を示す）

（第一句第二字目が平字なるを平起式といひ、仄字なるを仄起式といふなり）

一、絶句の起源に就いては明徐師曾の文體明辨に

唐初穩順聲勢一定爲ニ絶句一、絶之爲レ言截也、卽律詩一而截レ之也、故凡後兩句對者、是截ニ前四句一、前兩句對者是截ニ後四句一、全篇皆對者是截ニ中四句一、皆不レ對者、是截ニ首尾四句一

卽ちこれは絶句を以て律詩を截ちきりしものとなすなり、（律詩に就いては九課教授上の注意の條參照）然れども律詩の形式未だ整はざる六朝の頃既に唐の五言絶句に近き形式の詩數多あれば徐氏の說是に非ず。蓋し絶句の體たる六朝の頃より次第に發達し來り唐に至りてその形式固定せるものならん。而も絶句の名の何の意たるかに至りては古來定說なし。

絶句と律詩とを近體詩といふ。これ唐以前よりある、句數、平仄に一定の制限なき詩を古體詩（古詩）といへるに對するの稱なり。

四絶句

作者

杜甫、は子美、少陵と號す。唐襄陽の人、後、河南鞏縣に徙る。年廿四、進士に擧られしも第せず、天寶の末、三大禮賦を獻ず、玄宗之を奇とし集賢院に待制せしむ。會〻安祿山の亂あり京師陷るに及び、彼は三川に亂を避く、肅宗の時、官右拾遺に至る。後劍南の嚴武に依りしが、大曆中、瞿塘に出で、江陵を下り、沅湘を泝りて衡山に登り、因て來陽に客たり、大曆五年五十九歲を以て坎軻沈淪の間に卒せり。彼は李白と親交あり、共に詩を以て名あり。然れども二人その性行同じからず、詩風亦異る。李は才を以て勝り、杜は情に篤く、李は奇想逸興、神を以て運び、杜は苦心經營、研鍊によりて成る。李は天空海闊、自然を樂しみ、杜は一飯君を忘れず、慷慨淋漓常に時事に熱中す、而も齊しく絶大の大詩たり。

出所

唐詩選は明の李攀龍の撰と稱せらる。攀龍字は于鱗、滄溟と號す。明七才子の魁なり。唐詩選はその選擇盡くは善ならざれども、攀龍の盛名によりて廣く行はれたり。我國に於ても物徂徠一派が李攀龍・王世貞を推重したるによりてこの書亦貴ばれ大に世に行はれたり。この書全八卷、五言古、七言古、五言律、五言排律、七言律、五言絶句、七言絶句に分ち、唐作家百二十八人に就きて詩四百六十五首を收む。邦人の注解は服部南郭の國字解（漢籍國字解全書に收めらる）を初とし江忠囿の唐詩句解、宇士新の唐詩註、竺顯常の唐詩解頤等數種あり、漢文大系には戸崎允明の箋註本を取れり。

題名

この「絶句」の題に就いては或は絶妙の意なりとし、或は未だ題せず、姑く、絶句と題せしのみといふも未だ定說なし。蓋しもと、前に題を附したる律詩か歌行かを書し、その次に「絶句」と書きおきたるを、後、その詩は五言絶句。下平一先韻。然・年が韻字なり。

解釋

〔江碧鳥逾白〕 碧水たゝへた江上に白鳥飛べるが、水の碧なるが故に鳥は一層白く見える。

この句は春の水を詠す。

逾はいよいよと訓す。

〔山青花欲〻然〕 春も闌で山は綠を添へたが故に、花が一層ひきたつて眞紅に見える

この句は春の山を詠す、然は燃と同じ。欲然とは今にも燃え出さんとするが如く眞紅なりとの意。

梁の元帝の詩に「林間花欲〻然」の句あり。

以上二句暮春の樣子をいふ以下二句感慨に入る。碧と白と、青と紅(欲然)とを巧に相映ぜしめたる技巧に注意せられたし。

〔今春看又過何日是歸年〕 このやうな長閑な春景色も、もはやすぐ過ぎ去るのだが、今年の春も旅にありて他郷の春を見てたつた、一體何時になつたら歸つて故郷の春を眺めることが出來るだらう。

看はみすみすと訓す、みてゐる間に、すぐに、又過の又字にて、去年歸るを得ずして今春又過ぎ、さて來年は何如か、それもあてにならずといふ深き意味含まる。

教授上の注意

前課參照

尙この詩の平仄を示さん。

江碧鳥逾白　山青花欲然

今春看又過　何日是歸年

五　大學鈔

要旨

王道の宣揚・儒學の闡明の必要なる今日より急なるはなし。本課及第六課に於て儒學の特質の一斑を知らしめ以て生徒修養の資となさしめんとす。

出所

大學は中庸と共に、禮記の篇章なるが、宋、司馬光に至り、はじめて大學廣義を作りて之を單行せしめ、後、朱熹、大學章句、中庸章句論語集註・孟子集註を作り、合せて一部の書として公にせしより所謂四書の內に入れらるゝことゝなれり。

その著者の何人なるかに就いては、古來諸說あり、或は孔氏の遺書となし、或は七十子の徒聞ける所を撰せりとなし、或は子思の作となせども、亦臆斷たるを免れず。朱熹は之を經一章、傳十章に分ち、經は孔子の言にして曾子之を記し、傳は曾子の意にして門人之を述ぶといへども、亦臆斷たるを免れず。

この書、朱熹は以て初學、德に入るの門となせども、その論ずる所經綸的道德の大綱を平面的に擧げたるものにして、中庸の書のその內容を立體的に明にせると相表裏して儒學の寶典なりといふべし。

この書が所謂四書の內に在りて、古來我國の教育學術と密接不離の關係ありしのみならず、頃來儒教道德・王道政治の再び世人の注意を惹かんとするの時、苟くも我が國民精神の指導にたづさはる者、必ずこれらの書を熟讀せざるべからず。

この書の註釋としては漢鄭玄の註、宋朱熹の章句をはじめ、我國にても中江藤樹の大學解、伊藤仁齋の大學定本、物徂徠の大學解、太田錦城の大學原解、安井息軒の大學說等あり、皆參考すべし。然れども註釋家、或は徒に己の意を以て之を說き、或は徒に字句の末に拘泥して、勤もすればその眞意を逸せるものなきに非ず、編者嚢に鞏か感ずる所あり、務めて古來註家の堆積せし迷霧を排除し、大學本來の眞意を闡明せんと企て、旣にその幾分を、その著儒學要義中に收めたり。以て參考に供せらるゝを得ば幸甚なり。

解釋

一　三綱領八條目

〔三綱領八條目〕　綱は、網の目をすべる大つな。領は衣服のえり。綱領はおほもと、おほくくりの意。朱熹、大學内の明明德・親民・止至善を以て三綱領となし、格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下を以て八條目となせり。蓋し綱領は條目によりて行はるゝなり。この三綱領八條目は唯にこの書の大體を表はせるのみならず、亦以て儒學全體の組織、精神の大要を示せるものと見るべし。

〔大學之道〕　古の大學にて教へたる要旨は、

大學は大人の學にて、國都に在り、十五歳以上の學生を教ふ。

道は要旨、目的、趣旨の意。

〔在明明德〕　明德を天下に明かに顯はすにある。

明德とは明かに認識し得べき德。換言せば成就せし德。更に詳言せば善言善行に現はれて我も人も共に分明に認識し得る德を謂ふ。之を譬へば日月燈火の、それ自身光を發して諸物を分明に照らすことにより他からも分明に認識せらるゝが如きをいふ。

上の明の字は實現すること、顯現することなり。故に明明德とはその明德を成就することにして、對他的に言へば之を現實界に顯現して人々をして認識させることなり朱熹は明德を以て人の天より稟けたる虛靈不昧なる德となし、その明德が人欲の爲に蔽はるゝを以て、その人欲を拭ひ除きて明德本來の光を放たしむるが明明德なりとなせり。然れどもかゝる消極的の見方は後世小乘佛教等の影響を受けたるものに過ぎずして儒學本來の考へ方に非ず。加之、若し朱熹の如く消極的に見ば、大學本文の後に於て古之欲明明德於天下者と明に天下に明にすといへるを餘程曲解せずばならぬこと、なり極めて不合理なり。又、周易・左傳等にある明明德の用語例に徵しても、朱熹の說の非なるを知る。

〔在親民〕　人民が互に親愛せしめるにある。

親は親愛・親密なり。故に「在親民」又は「在親民」と讀むべし。この親字を朱熹は程子に從ひて新字に改め、民をして其の舊染の汚を去らしめる意となせども、こゝもかゝる消極的意義にあらず。こは明明德と一體に行はるべき一方面をいへるものなれば原文のまゝとせずば、意義却つて不明となる。況や古典を讀むに徒にその文字を改むるは、古典の眞意を知る所以に非ずや。

〔在止於至善〕　意志を以て至善の地に踏みとゞまり動かぬにある。

止は動き遷らずしてふみとゞまること。至善とは抽象的の最高善を指すに非ずしてその人の時・處・位に相應しての最上の善を謂ふ。中庸の中と同義なり。

以上三綱領は一體にして分つべからざるものなればその一が十分に行はれば、他の二も自ら行はるべき筈なり。この一體たるべきものを三つの方面より觀たるが故に、別々に「在」字を用ひたるなり。この一にして三なる三綱領を心理學的に觀ば、

明明德――知
親　民――情
止於至善――意

となり、又夫々孔子の所謂智・仁・勇・にも相當し相關係せるものなり。

〔知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得〕

「知止」とは當に止るべき至善の目的地（至善の意は前條參照）を認知すること。「有定」とは活動の方向定まるをいふ。卽目的が認知されてこそ活動の方向定まるなり。

「能靜」とは意識が動搖せぬこと。

「能慮」とは思慮判斷の出來ること。

「能得」とはその意識活動が、よくその至善を體得するをいふ。

五つの「而后」は何れもその前後の事件の相關的條件を示せるものにて、唯だ手の着け方についていふ。時間的間隔あることを意味するにあらず。

この一節は「止於至善」の說明にして、意識活動上の工夫をあげたるなり。

吾々の意思を以て踏み止るべき目的地を認知することによつて、意識活動が一點に集中統一されて有往左往せぬ。志向が定立してぐらつかぬと、意識は隨つて靜かとなり、安らかとなつて思慮判斷が十分出來る。思慮判斷が十分出來る狀態となつて、至善と認知せし其の物を固く執つて之を體得體行、卽ち實踐躬行する事が出來る。

〔物有本末、事有終始、知所先後、則近道矣〕　事物には本末終始あり、本始を先と一末終を後にすべきを知れば、已に道に近づいて居る。

こは次に述ぶる八條目に本末終始あることを言へるなり。

〔古之欲明明德於天下者〕　古の、明德を天下に明にせんと欲した人は。

「者」は人を謂ふ。卽ち明德を天下に明にすることを理想とし、その理想實現を欲求し活動せし人はといふ意なり。以下「致知在格物」まで、この理想實現を欲求する人の活動について述ぶ。六の「欲者」十一の「其」皆人格を表はす。輕々に看過する勿れ天下とは、天子の治下をいふ。諸侯の治むる所を國といふに對す。之を今の時勢に當つれば天下は世界にして、國は列國となる以下主として明明德に就いていへども親民止於至善のこと自らその内に含まゝなり。

〔誠其意〕　意とは心の動きにて情意をいふ、意がその中樞故「意」といひしのみ。この情意は自然のまゝでは盲動するを以て之を知を以て統一し合理想的のものとせざるべからず、誠其意とはかゝる意味なり。故に「誠」とは「意」の代りに「誠」を持ち來るといふことに非ずして「意」そのものを眞の意、合理的の意とするといふことなり而してこの「意」を完全ならしめんとせば、完全なる「知」を要す。

〔致其知〕　「致」とは努力してひきよせその身につけること。「知」とは先天的、後天的の知を合せいふ。故に「致知」とは理想的に完全なる知を得ること。

〔格物〕　格は後漢鄭玄の註によれば來也とあるのみならず、格を來の義に用ふるは

六經の通例なれば當に來の意となすべし。物は具體的事物、抽象的事理を兼れていふ故に格物とは自我人格の活動によつて一切の事物又は事物の道理を自我の方へ來らしめて自我と一體ならしむるをいふ。

格物の解には古來諸說あり。

朱晦庵は、格を「至」と訓じ格物とは我が身より事物の方へ行き一々その物に就いてその理を窮め盡す義となせど、この讀法は下文の「物格而后知至」の物格に至りて讀法合せず。即ち「格物」を「物にいたる」と讀めば「物格」も「物にいたる」と讀むべく物いたると讀むべからず。かくせすば、前後に於て、自我と物との關係主客顚倒す、然るに此の讀法は文義上無理なり。

王陽明は格を「正」と訓じて、內部の良知を以て外部の事物を正し以て事物をして眞の事物たらしめる事と解せるも「致レ知在レ格物」とせる大學の原文より見ば、順序顚倒すること、なるのみならず、上文已に正二其心一とあるに重複す。

〔物格而后天下平〕　この文は上文を逆に、格物より天下平までの次第を說けるなり。前文に於てはその始を本づくるが故に毎句「先」字を用ひしが、本文に於ては終を推せしが後に「而后」を用ふ。

「知至」の「至」は我に至るに盡さゞるなきなり。

「天下平」とは明德を天下に明にし、世界よく調和せるをいふ。

以上八條目の內、「修身」が本となる。何となれば身を修むるがために、道德を內部に養ひ得て、然る後それを外部の家・國・天下に顯現するを以てなり。即ち修身が內部と外部との境目にあたるなり。かく修身が大切故次の文あるなり。

〔自二天子一以至二於庶人一壹是皆以二修身一爲レ本〕　庶人は無位無官の人、平民なり。穀梁傳范甯注に壹壹はもつぱらと訓す、專也。

終身を以て根本的起發點となすなり。

〔其本亂云々〕　「本」は上文「以二修身一爲レ本」の本にて終身をいふ。

「末」は終身に對して末となること、即ち外部に於ては齊家、治國等、內部に於ては正心、誠意等是なり。

修身をなさずして齊家、治國を望みても不可なり、修身をなさずして正心、誠意にのみ工夫するも不可なり。

〔其所レ厚者薄云々〕　前句の「修身」を本とせしより一歩を進めて、すべて厚くすべき基本に薄くして、薄かるべき枝末が厚くせられて、しかもよく天下を平にしたる者は未だない。

即、其本亂云々は基本を確立すべきことを言ひ、其所厚云々は遠近親疎の次第によりて之を實行すべきことを言へるなり。

二　君子愼獨

〔所謂誠二其意一者、毋二自欺一也〕

前文に誠其意といつたそれは、自分を欺かざることである。

八條目は修身を以て本となし、修身の首は誠意にあり、故に特に之を論ぜしなり。

自欺とは自分で自分を欺き內外表裏あるなり。即ち情意が完全知を以て統一されずして育動し、或はかくすべきを知ると雖も、

情意がその知に統制せられざるなり。毋は無なり、こゝは禁止に非ず。

〔如二惡二惡臭一、如二好二好色一〕　上の惡の字は去聲、烏故切、音ヲ、にくむと訓す。下の惡の字は入聲、烏各切音アク、あしと訓す。上の好の字は去聲、呼到切、このむと訓す、下の好の字は上聲許皓切、よしと訓す、好色は美色なり。

惡臭を惡み、美色を好むは人の內心より然り。詐欺に出でず。未だ外面のみ、惡臭を惡みて內心は然らず、外面のみ好色を好みて內心は然らざる者あらざるなり、人の惡を惡み善を好むこと恰も好色惡臭を好惡するが如くするに至ればこれ其意を誠にせるものなり。

この文は譬を以て毋二自欺一ことを說けるなり。

〔此之謂二自謙一〕　此は上の如レ惡二惡臭一、如レ好二好色一くするをいふ。謙は慊に同じく苦劫切、音カフ。あきたるこゝろよしと訓す。自謙とは自ら心に厭き足り、滿足すること。

其の意を誠にし情意の動く所必ず完全知に統制せらるれば、自分の心中何の疚しさもなくよく自慊の狀態にあるなり。自謙は毋二自欺一き心中の主觀的狀態をいへるものなり。

〔故君子必愼二其獨一也〕　かく情意が常に合理的に發動するのが誠意だから、修身に志せる君子は必ず絕えず自己を合理想的のものたらしめんと工夫する。

「獨」は獨立の自我をいふ。荀子、不苟篇、「爲」善之道者、不レ誠則不レ獨、不レ獨則不レ形」等は同一用語例なり。慊は自欺の反對、自分自身を理想的のものたらしめんと努力すること。即ち誠ならんとする內面的工夫をいふなり。この努力は飽く迄もその性を本としてなさるべきにて、性を除いて他を以て補ふには非ず。

〔小人閒居爲二不善一、無レ所レ不レ至〕

閒居は獨處なり（閒は俗字）、無レ所レ不レ至とは何如なる不善をもなさゞる無きをいふ。この「閒居」ほ次の「見二君子一」に對す小人と雖も不善の爲すべからざるを知らざるに非れどもその知不完全なるが故に完全に情意を統制し得ず、獨居せばその育動にまかすこれ自欺くなり。

〔厭然揜二其不善一、而著二其善一〕　君子に面會してその德に感化せられ、急その不善をおほひすて、善をあらはす。

厭然は閉藏の貌、（厭は一說に於琰切音エンに讀む）。揜は掩に同じ、おほひ消すこと。著は新に善を發揮する。揜の反對なり。

〔人之視レ己如見二其肺肝一然云々〕

他人が己を見透す（視）こと、內臟までも見破るがやうであるから自分は前から善を行うてゐたといつても、何の役にもたゝない如見其肺肝然の讀法に二あり、一は肺肝にて切り「然」字を下句につけるもの。他の一は「然」字を上句につけて如レ然と讀むもの一體、「如一然」は「如一爲」と同じく、この二字にて、何々のやうだの意となる形式なれば、後說に從ふを可とす。こゝは次句に「則」字あるを以て上の「然」を如レ然と訓ぜしなり。

〔此謂誠二於中一云々〕　この事實ー君子を

見て始めて人格一新して善を著すといふ事實を「此」にて指す。—は心中誠ならば、それが自然、外面にあらはれるものだといふ意味である。

誠=於中=の中は心なり。誠=於中=とは不=自欺=こと、即誠意なり。「形」は自然外面に出ること、「謂」は意味すること。「誠=於中=形=於外=」とは蓋し古語をひけるならん。中庸に「誠則形」といひ孟子告子篇に「有=諸内=必形=諸外=」とあるも同意義なり。

〔曾子〕 名は參、字は子輿、魯の子、父子共に孔子の門人なり。參、性至孝にして質魯、よく一貫の旨を悟りて孔子の道を傳へ孔門七十二子中の第一の功勞者なり。その學、子思に傳はりて孟子に及ぶ。

〔十目所視云々〕 曾子の言を引きて他の欺くべからざることを更に明にするなり即ち人を見て己の不善を隠さんとすとも、衆の視る所嚴正にして終に欺くべからずとの意なり。十目、十手は衆を謂ふ。嚴は嚴正・嚴肅の嚴なり。「手」はかなと訓す。

〔富潤屋、德潤身〕 人富めばその家に華飾等ありて自然外に見はれるが如く、内に德を修得せば、心の持ち方や身體の外貌動作にも自然見はるといふ意なり。潤は潤澤の潤、自然にしみ出て、つやのあることの意。體は五體の體、肉體をいふ。身は精神肉體を兼ねていひ、體は肉體のみをいふ。胖は大なり。ゆたかと訓す。

荀子、勸學篇に「玉在レ山而木潤」とあり。上句は下句をおこす譬なり。

〔心廣體胖〕 精神はひろびろとして穩やかに肉體はのびのびとしてやすらかなりとの意。

この句は德潤レ身ぜる狀態。即ち中に誠なれば外に形はるゝことをいふ。

教授上の注意

一、第五課第六課の解釋は普通行はれ居る說に從はざる點甚だ多し、教授者、幸に編者意のある所を十分了解して實際教授に當られたし。

一、尙、編者の手に成れる儒學要義（特にその第二、第三篇）及び儒學概論（特にその第四篇）を精讀せらるれば參考となること尠なからざるべしと信ず。

一、右二書は唯に本課教授の直接參考となるのみならず、ひいては漢文科教師としての態度、否教育者として、日本國民としての覺悟、信念を養ふに尠なからざる益あるべしと確信す。之を國内に見るも之を對外關係に見るも王道の宣揚、儒學の闡明、今日より必要なるは莫し、請ふ篤學熱誠の士は就いて讀まれんことを。

一、支那の現狀を見て直ちに以てその過去に發達せる最も優れたる思想迄も排斥し侮蔑すべからず。彼が如く優れたる思想を過去に有しながら、彼が如く混沌たる現狀を爲せるは自ら他に複雜なる原因あるべし。

六　中庸鈔

要旨

前課參照。

出所

中庸亦禮記の篇章なるが南朝宋の戴顒なる者、中庸傳二卷を撰し、梁の武帝、中庸講疏一卷、私記制旨中庸義五卷を撰したること隋書經籍志に見ゆれば、その早くより別行せしを知る。その著書は魯の孔伋なりと稱せらる。伋字は子思、孔子の孫、學を曾參に受け、特に精微を極む。周易十翼亦その編著せる所なるに似たり。儒學が略その體系をなし獨立の學となれるは、主として子思の力によるもの、如し中庸の書は儒道の本質内容を揚げ出せるものにして、我が荻生徂徠等の說によれば、當時老子の學盛にして儒家の徒之と對抗し難きにより子思この書を著はして、形而上に立脚して天人一貫の眞理を說き、以て孔子の意を發揮し、且つその淺薄ならざるを辨ぜるなりと云ふその註釋は鄭玄の註、朱熹の章句をはじめ、我が國に於ても中江藤樹の中庸解、伊藤仁齋の中庸發揮、荻生徂徠の中庸解、太田錦城の中庸原解、安井息軒の中庸說等甚だ多し、編者の「儒學要義」中亦その一部分の解釋あり、以て參考となさるれば幸甚なり。

解釋

一　天命之謂性

〔天命之謂性〕 天が授けてくれたもの、性といふ。

天は單なる物理的の天に非ず。物理的の天に地をかれ、且つ之に人格的意味を含ませたるものなり。命は賦命することなり。「これだけ有つてなれ」と命じ與へるなり。性は性質・性格・性情などいはんが如し。情意を兼ねいふ。

「之謂」の上に來る文字は動詞なるを以て原則とす故にこゝも天命と讀むべし。天命そのものを性といふに非ず、天の命ぜるものを性といふなり。即ち天の命じたところのものを性といふなり。天命謂之性とあらば性は天命の別名の意となる。

〔率性之謂道〕 固有の本性に規律的に從ひ進む間に生ずるものを道といふ。

率に二義あり(1)はたゞ自然に循ひ由ること、孟子、梁惠王篇の、率=西水滸=(2)は理想を以て規律的に循ひ由ること、左傳、哀公十六年、率レ義之謂レ勇、こゝは(2)の

意味なり。即ち人の本性に循ひながらも、一方理想を按じつゝ活動して行く間に道が建立せらるゝなり。

〔修道之謂教〕　性に率して出來た道を修理、修繕してゆく所のものを教といふ。教は教化・教育なり。蓋し道は人間内部の性を本とするも、必ず外部の教化修治の力をまちてはじめて之をよくし、又一旦成立せる道も、時に衰頽敗壊するを免れず、必ず教化の力によりて之を修繕せらるゝなり。以上、性・道・教は皆天より出でたるものなることを言ふ。

〔道也者不可須臾離也可離非道也〕　前に言つた道なる者は、人が存在する間、一寸も離れることが出來ない、離れることが出來るやうなものは道ではない。道也者と「也者」を添へたるは、前出の道を緩やかに十分明かに指し表はすなり。この時の「也」は斷定に非ずして、形態の指定を主とすといふべし「ナルモノ」と讀みにてあるそのものといふ義なり。

須臾は禮記學記や、孟子告子にある斯須と同じく、しばらく、寸時のこと。不可離、可離の可は可能の可、できると譯す。離は去聲に讀む、ある者からたちさることこは道から人がはなれるなり。離字平聲に讀まば一のものが幾つかに分散すること。

此節以下、前節より「道」の字を特に引き出して、實地の工夫に就いて說けるなり。

〔戒愼乎其所不睹、恐懼乎其所不聞〕　君子は目に見えない所、耳に聞えない所に對して、恒に内部の心中から戒愼恐懼して、道より離れないやうにする。

戒は升（敬と同じ兩手を竦げたる貌）と戈とを會はせた文字にて、不虞に對し警戒すること。愼は自ら欺かず己を合理想的ならしめんと努力すること。睹は見に同じ。恐懼はこゝでは戒愼と同義なり。二「其」字は君子をうく。

〔莫見乎隱、莫顯乎微〕　普通は見えない者なれば隱れてゐるといひ微なりといへど、實は一方から見れば十分見れてゐるので、それ以上見れるといふことは無い。隱れたるそのまゝで十分あらはれてゐる。

この句は、上の「所不睹所不聞」を承けて、苟くもこの世に實在せる者はたとへ目に見えずとも必ず或る現象となることないへるなり。前課の「誠」於中形於外」もこの意なり。又中庸に「子曰鬼神之爲德、其盛矣乎、視之而弗見、聽之而弗聞、……夫微之顯誠之不可揜如此夫」とあるもこゝと同樣の趣意なり。此文莫見於一の形式をとれるは、隱微は見・顯に異ること無きを甚だしく言はんが爲なり。

〔故君子愼其獨也〕　かく苟くも實在あれば必ず現象となるものなれば、君子は恒に自己を合理想的のものにせんと努力し一刻の油斷もしない。

獨、前課「君子必愼其獨」條の註を參照せられたし。

〔喜怒哀樂未發謂之中〕　喜怒哀樂等の性情がよく合理想的に調和してゐれどまだ動作となりて外に出ない狀態を中といふ。

喜怒哀樂は、意識活動の内容全體をいへるにて、文字通りの四つのみを表はせるに非

す。「中」は發すれば必ず目的にあたるといふ意味と、内部にあるといふ意味とを兼ねていへるなり。

この句は、上をうけて愼獨の君子の意識狀態、内面的生活を言へるものにて一般的の論にあらず。

〔發而皆中節謂之和〕　内面的に調和せる性情が外部に發して動作となつて、夫々節々の目的に中るを和といふ。

中と和とは同一の狀態を假に内外に分けてみて名づけしのみ。内部的に考察するも、亦よく調和を保ち居るを以て、實は中にして和なり。外部的に考察するも、よく節々に中るを以て、實は和にして中なり。即ちこの文は、上の「中」に下の「和」を兼ねしめ下の「和」には上の「中」を兼ねしめたる書き方にて、之を互文法といふ。先秦の文にはかゝる書き方多し。

この句は愼獨の君子の意識狀態の外に發したる方面に就いて言へるなり。

〔中也者天下之大本也、和也者天下之達道也〕　この中なるものは、天下すべての合理想的活動の生ずる根本で、和なる者は、天下すべての事物に展開する大道である。

大本とは、すべての合理想活動（即ち和）の動機の存する所なるが故にいへるなり。

達道とは何如なる所にも通ぜざるなき道德の意にて、「和」が外界の萬種萬樣の事物の上に行はるゝ點よりいへるなり。

此の二句は上をうけて、君子の中和が、外界のあらゆる道德的活動の根源にして又全體たることをいふ。

〔致中和、天地位焉、萬物育焉〕　この中和を完全に體得し實行して、そこで唯に己ひとりが完全なる自我となるのみならず、天地は天地として正當の位置を得、萬物は萬物としての性を盡し得るのであること。「位」とは「致」は、率引して體得すること。「位」とは正當の位置を保つてその本分をつくすこと「育」とは正當に成育してその本性を發揮すること。焉は、こゝは「於是」と同じ、そこでと譯す。

此文は中和の極は自我が天地萬物と相關連し一となりて完成することをいへるなり。

以上中和を以て道を說きしなり。

二　君子居易

〔君子素其位而行、不願乎其外〕　君子は現在の位置に於て爲すべきをなし、決して他を願はない。素は傃なり、傃は嚮（向）なり。目を己の居る位置に向けて行ふなり。即ちその位置に於て當然あるべき自我そのものとなるなり。換言せば誠のものたるなり誠のものたりといひ、當然あるべき自我たりといふも、抽象的のことにてはあるべからず、ある位置に於てのみ誠のものたり得るなり。其の位に誠のものたれば當然他を願ふ暇もなく又願ふこと能はざるなり。論語に「曾子曰、君子思不出其位」とあるも同じ意味なり。

この二句がこの章の綱にて以下細目なり。

〔素富貴行乎富貴云々〕　たゞ富貴に居て驕らず淫せずとか、貧賤に居て諂はず懼れずとかいふ末節の意味に非ず、富貴に居ても貧賤に居ても、その位置に即して誠のものたらば驕・淫・諂・懼等は當然問題

となならぬなり。

〔無入而不自得焉〕　何如なる境遇に在りても必ずそこに泰然として居る。自得とは泰然、平然としてその境遇のまゝに誠たること。こゝは自分で得意となり滿足するといふ意にあらず。「焉」は何處でもその入れるその所を指す。

この句は上を統べて、最初の二句に應ず。

〔在上位不陵下、在下位不援上〕　陵はしのぐと訓す、輕んじ侮ること。援は攀援、ひきすがることなり。この上位下位は後天的の社會的地位のみならず先天的の人倫的地位をも含む。

〔正己而不求於人則無怨〕　君子は自己の完全ならんことを工夫して決して他に求めないから他を怨むこともない。「正己」は前章の「慎獨」と同意にて、本章最初の「素其位」に應ず。「在上位不陵下」の二句は「正己」の消極的一斷面を示ぜしなり。「不求於人」は「不願乎其外」に應ず。

「無怨」の「怨」は、人から怨まるゝことに非ず、己が他を怨むことをいふ。

さればこそ下に怨を詳說して「上不怨天、下不尤人」と言へるなり。不一則一は、こゝでは求めないならばと假定條件を示すに非ずして、求めないからと既定條件を示すなり。

〔居易以俟命〕　「易」は平地なり、險に對す。「居易」は「正己」なり「素其位」なり。これ皆自己の性を本として行ふものなれば、「易」といへるなり。「命」は天命、「俟」は來るにまかすなり。「俟命」は「不求於人」なり、「不願乎其外」なり。

〔行險以徼幸〕　「險」は險阻なり。「行」は當に平聲庚韻に讀み、ゆくと訓すべし、「居」と對す。「行險」は「求於人」なり「在上位陵下、在下位援上」なり、「願乎其外」なり。これ皆己の性を忘れてなす所なれば「險」といへるなり。

「徼」は必ず得んとむかひもとむるなり「幸」は僥倖なり。

この一句を挿入して君子の行と對照せしめしなり。

〔射有似乎君子〕　弓射る者の心持は君子に似た點がある。

「射」は射者なり。「有似」とは全く似てゐるに非ず或る點が似て居るなり。

〔正鵠〕　二字共にまとなり。周禮司裘の後漢、鄭衆の註には、「方十尺曰侯、四尺曰鵠、二尺曰正、四寸曰質」とありて、大きさの差となし、中庸鄭玄の註には「畫布曰正、棲皮曰鵠」とありて、質の差となせり。

〔反求諸其身〕　中らない原因をば反省して自身に求める。

「反」は反省なり。矢中らずば己の進退周旋禮に合せざりしか。內心正しからざりしかと反省して他を怨まず、更に自ら之を正さんとす。その狀態君子の己を正して他に求めざるに似たりといふなり。

この孔子の言をひきしは射を本體とせんが爲に非ず、假りて以て君子の態度を明說せんとせしなり。

三　天下之達道五

〔達道〕　何如なる所にも通ぜざるなき道、卽ち何の時、何の所にもありて、何人も由らざるべからざる所の道なり。凡そ道といひ德といふものに偏狹にして局部的なるは無き筈なり。「達」の字はたゞ道の本性を明にせんが爲に添へられたるなり。

〔所以行之者三〕　五達道を實行する原動力(所以)となるものが三ある。

「所以…者」とはそれによつて行ふそのもの卽ちそれによらずば五達道を實行し得ざるものといふ意味なり。所謂手段とか方法とかいふ如き輕き意味に非ず。凡そ何の時何の所に於ても人相生くる所必ず君臣父子夫婦等の五道成立す。人にしてこの五道を避けんとするも能はず。然れども之を完全に合理想的に履み行ふには實に知仁勇の三德によらざるべからず。換言せば三德を行ふによりて五道行はれ、五道を履むによりて三德行はるゝなり。

〔曰君臣也父子也云々〕　「天下之達道五」の說明なり。

「昆弟」は兄弟なり、兄を昆といふ。詩經、王風葛藟、「終遠兄弟」謂他人昆」の毛傳に「昆兄也」とあり。

「朋友之交」の「交」は關係なり、「之交」の字君臣・父子・夫婦・昆弟にもかゝる。

〔知仁勇云々〕　「所以行之者三」の說明なり。

達德とは何の時、何の所に於ても何人も有すべき德なり。

知仁勇は、中庸本文、この文の直後に「好學近乎知、力行近乎仁、知恥近乎勇、知斯三者、則知所以修身云々」とあり、又稍後に「成己仁也、成物知也」とあるにてもその意義を察知すべく、事物の特殊性を區別し、而も之を全體的に統一完成せしむる作用が知。萬物一體の理を體得し、やむにやまれぬ情を以て特殊の完成(卽全體の完成)に努力する作用が仁。知・仁を不斷に努力するその作用自體が勇なり。而してこの三者はもと一體不分のものを便宜上分ちて說きしまでにて、之を誠身といふも修身といふも同一のことなり。次に五達道と三達德との關係は、先づ三達德を抽象的に體得して然る後五達道を行ひ得といふにはあらず、實は三達德、五達道そのものも同一作用の兩方面にすぎず、之を內部的に見れば心內に得たもの卽ち德となり、之を對他的に見れば人の由るべきもの卽ち道となるまでなり。從つて德と道とは相關的にして三德を行ふによりて五道成り、五道行はるゝによりて三德成る。かゝる關係なればこそ中庸本文に「知斯三者、則知所以修身、知所以修身、則知所以治人」といひ又、「誠身有道、不明乎善、不誠乎身矣」とも言へるなり。

〔所以行之者也〕　上文の「所以行之者三」に應ず。そは、「五者天下之達道也」が上文の「天下之達道五」に應ずると同じことなり。然るに通行本は、この「者」の下に、「一」字あり。是れ全く中庸下文に「凡爲天下國家有九經、所以行之者一也」とあるに因りて誤り衍ぜるなり。この所に「一」字ありては文意却つて支離となる。加之、史記平津侯傳・漢書公孫弘傳に引用されたるこの文、明に「一」字なく、又、この文の鄭注を玩味するに亦もと「一」字なきを知る。是れ古本「一」字無かりし確證なり。

〔或生而知之……及其知之一也〕

三の「或」は、ある者は、ある人はなり。

四の「知」之」の「之」は、前文「所以行之」の「之」と同じく五達道をうく。何處迄も五達道を中心として說けるなり。

「知」とは客觀的形式的に認識するといふことに非ず、之を體得し體認することなり。必ず實行が伴ふ。

「困而知之」の「困」は論語季氏篇の「困而學之」の困と同意にて、苦心勉强して之を知るなり。

「及其知之一也」の「及」は至りては、後はの意、「其」は「或」をうく。「一」は同一なり何の差異もなく上下もなきなり。

天の賦與せし人の性に差あるにより、その性に率せる「道」を體認するにも遲速難易あれど、一旦體認せばそこに何の差もなしといふなり。若しその道に差異あるものならば結局、道は生知者の專有物となる。

この說を生徒の實際問題にあてはむれば、秀才といひ鈍才といふも、そは大した問題に非ず、たゞ己を磨いて明日の吾を何如にするかといふことが重要問題たるなり。卽ち「及其知之一也」といふことが重要問題たるなり。

論語季氏篇に、「子曰、生而知之者上也、學而知之者次也、困而學之、又其次也、困而不學、民斯爲下矣」とあるは中庸この文の本とせる所なるべし。

〔或安而行之……及其成功一也〕

「安而行之」とは殆んど無意識狀態に動作して悉く道に合するなり。

「利而行之」は利を貪るが如く好みて行ふなり。

「成功」の「功」は功名てがらの意に非ず、寧ろ禮記・儒行篇の「先功後祿」孟子、滕文公篇の「通功易事」の功と同じく、仕事、骨折の意なり。こゝは道の修行をいふ。成功とは道の修行を成就するなり。最初道を行ふ時は、人の性の差によりて難易の差もあれど、一旦體得體行するに至れば、その間に差なしといふなり。

「或生而知之…困而知之」と「或安而行之…勉强而行之」とは、達道を體行することを、兩方面より說きたるまでにて二つのことに非ず、卽ち前者は主として「知」の方面より、後者は主として「仁」の方面より見たるなり。故にその差等も互に相一致す。

生知—安行
學知—利行
困知—勉行

四　學・問・思・辨・行

此章は中庸本文の上章に「誠」之者、擇」善而固執」之者也」とあるを承け、天の道たる者を現實界に實現する實地の工夫につき詳說せるなり。博學、審問、愼思、明辨、篤行は工夫の目なり。五の「之」字は上章の「善」をうく。但その善たるや抽象的概念的の善に非ずして、具體的の善言善行についていふなり。

博學、審問、愼思、明辨は中庸本文上章の「擇」善」にあたる。かく種々の工夫により善を判斷するなり。これらの判斷も、たゞ形式的知識に終るに非ず必ず實行を伴ふものなり。故に次に「篤行」之」の語あるなり。

「篤行」之」は上文の「固執」之」にあたる。

「有」弗」學……弗」篤」弗」措也」は上舉の目につき之を實行する努力、意氣込を說けるなり。十五の「弗」字は「不」字と異り、努力、能力、欲求の否定にて、不」得、不」能、不」欲の意あり。「有」弗」學、學」之弗」能弗」措也。」とは尋常人には學ばんとするも學ばれないといふ程であるのに、之をそのまゝすてす、徹底的に學び、體得せられる迄やられば決してやめられぬといふ意なり。以下之に準ず。「措」は廢止すること。朱熹はこの文に「君子之學不」爲則已、爲則必要」其成」」と註せるが、句法上より見ても意義上より見ても、彼の註甚だ非なり。

「人一能」之、……己千」之」の「之」は學・問・思等をうく。

「果能」此道」」の「此道」は上述の努力のやりかた。

「雖」愚必明、雖」柔必强」の「愚・明」は「善を擇ぶ」上、卽ち知の方面より見た性の差。「柔・强」は「固く執る」上、卽ち行の方面より見たる性の差をいふ。かく實地に工夫することによりて天性愚柔の者も明强者となるといふなり。

教授上の注意

前課參照。

七　岳陽樓記

要旨

文の布置、風景の描敍に妙を得たる記の文を讀解鑑賞せしむると共に范文正公の抱負を知らしめ以て感奮せしむ。

作者

范仲淹字は希文、宋の吳縣の人。少時より慨然として當世に志あり。刻苦して書を讀み、大に六經の旨に通ず。大中祥符の間進士に第す。仁宗の時に右司諫と爲り時政を極論す。州官に歷任し。至る所惠政有り。龍圖の學士を以て延州に知たる時、西賊大いに懼る。召して樞密副使に拜す。參知政事に進む。未だ施す所を竟へずして皇祐四年歿す。文正と謚し、楚國公に追封せらる。仲淹、外剛內和にして性至孝なり。政を爲すに寬厚を尙び、至る所著聞あり。尙その爲人は本書一〇范文正公文集序によりても知るべし。著す所、文集二十卷、別集五卷、政府論事三卷、奏議十七卷等あり。

出所

范文正公集、文章軌範、古文眞寶後集等に出づ、今便讀、文章軌範に據れり。

文章軌範七卷は宋の謝枋得(字は君直、疊山と號す)が科擧に應ずる者の爲に軌範とすべき文章六十九篇を選輯せるものにして、魏の諸葛孔明の出師表、晉の陶淵明の歸去來辭以外はすべて唐宋名家の文なり、分ちて放膽文(卷一、二)小心文(卷三以下)の二種となす、その排列韓退之の與于襄陽書にはじまりて陶淵明の歸去來辭に終る蓋し仕官より隱遁に至る過程を寫せるものなり。

この書元より明に至りて大に行はれ李廷機之に評訓を附し王陽明、序文を作る。その我國に傳はれるは足利氏の末葉に在るが如く德川時代に至り伊東龜年(字は金藏、藍田と號す江戸の人、享保十九―文化六)文章軌範評林を作れる頃より大に流行し、苟くも文を學ばんとする者先づ文章軌範より入るを常とするに至れり、かくて評註を作る者亦多く出で、山陽の如きはその遺を補ひて謝選拾遺六卷を作れり。

漢文大系には海保漁村(名は元備字は卿元、上總の人、寬政十―嘉應二)の文章軌範補注を收めたり。

因に續文章軌範は明の[illegible]校檜なる書肆が、名を鄒東郭(名は守益、字は謙之、正德の進士)に假りて、文章軌範の體裁に倣ひ、先秦より明初に至る諸家の文を選輯せしものなり。蓋し文章軌範の盛行に鑑み以て利を博せんとせしものなるべし。

題名

記の文たる、敍事を以て主となす。その間議論を以て挾むも亦可なり、然れども議論のみ多くして敍事少きは既に記の域を脫せるものともいふべし。その題は或は集記といひ又記ノ某といふ何れにても可なり、この體は漢魏以前は少く唐以後盛なり就中唐柳子厚(宗元)を以てその第一人者となす。范仲淹の岳陽樓記亦宋代第一の記文にして古來人口に膾炙せるものなり。この記亦聊〻議論を挾めり。

尙、記の體に就いて文體明辯に曰く「金石例云、記者紀ノ事之文也、禹貢・顧命、乃記之祖、而記之名則昉ニ於戴記・學記諸篇一厥後揚雄作ニ蜀王本紀一、班固作ニ西都賓戲一、蔡邕作ニ朔方箴一、而文選不レ列ニ其類一、劉勰不レ著ニ其說一、則知漢魏以前、作者尙少、其盛自レ唐始也、其文以ニ敍事一爲レ主、後人不レ知ニ其體一、顧以ニ議論一雜レ之、故陳師道云、韓退之作レ記、記ニ其事一耳、今之記乃論也、蓋亦有レ感ニ於此一矣、然觀ニ燕喜亭記一已涉ニ議論一、而歐・蘇以下議論浸多、則記體之變、豈一朝一夕之故哉、至ニ其題一、或曰ニ某記一、或曰ノ記ノ某、則惟作者之所レ命焉。」

分段

第一大段　作レ文以記レ之まで。」此の記の由來を敍す。

第一小段　郡政を敍す。

第二小段　樓を修むることを敍す。

第二大段　得レ無レ異乎まで。」樓の大觀を敍す。

第一小段　氣象千變萬化すること。

第二小段　人によりて萬千の氣象を覽るの情異ること。

第三大段　洋洋者矣まで。」景象により喜悲の異ある細敍。

第一小段　人をして悲ましむるの景象。

第二小段　人をして喜ばしむるの景象。

第四大段　仁人は天下を以て憂樂を爲すことを敍す。

解釋

〔慶曆〕 北宋第四代の主、仁宗の年號、八年間續く。その四年は西紀一〇四四年にして我が後朱雀天皇の寛德元年（一〇四七）に當る。

〔滕子京〕 名は宗諒、子京はその字、河南の人なり。范仲淹と同年の進士。人と爲り氣を尙び、側儻自ら任じ、施與を好む。是を以て卒するに及び家餘財無し。その涇州に在りし時、公錢十六萬貫を費して彈劾せられしが范仲淹力めて之を救ひ、たゞ一官を降されて巢州に知たり、後岳州に徙さる。本文に謫守巴陵郡とあるは右の事實あるが爲なり。

尙、子京の傳記は宋史卷三百三にあり。

〔謫〕 知厄切、罰也、罰する意味で職官を降され、又は遠方へ遣らるゝを皆謫といふなれど普通は後者の意味にのみ用ふ。我が國のながされゝことにあたる。

〔守巴陵郡〕 今の湖南省岳陽縣なり。宋此に岳陽軍を置く、その一帶の地を隋の時は岳州府といへり。

守は太守なり、郡の長官をいふ。

〔越明年〕 巴陵郡の守となりたる翌年となつて。卽ち一年經つて。

可、意義は同じ越はオヨンデと訓讀するも事なり。尙越は學、日・非等と同樣に「コトニオイテ」と訓讀し調子を整へる助字として用ひらるゝ場合あれども、そは此處の用法と自ら別なり。世往々この文のこの處を解するに助字の意を以てせんとする者あるも是ならず、我國にては普通明年は今年の次の年のみをいひ過去の或年の次の年をば翌年といへども漢文は必ずしも然らず。

〔政通人和、百廢具興〕 政治がよくゆきとどいて人心が和合し、今迄廢れてゐた多くのことが皆再び盛となつた。

具は、古文眞寶には、俱に作れり。具は俱と通ずるなり。かく政治がゆきとゞき百廢興るに至れるは皆子京の功績なり。

〔增其舊制〕 樓の舊の規模を增した。制は制法。

〔刻唐賢今人詩賦于其上〕 唐時代の詩人や宋（今）朝の文人の詩や賦をこの樓の木や石に刻した。詩・賦共に韻文の一體。岳陽風土記に「唐刺張說、常興才士登此樓、有詩百餘篇、列于樓壁、宋郡守滕宗諒重建、取古今賦詠、刻石。」

〔屬予作文以記之〕 記之を記セシムと便役に訓ずるは、上に屬の字あればなり、屬・命・敎等はその文字の性質上、人を使役する意味を含有するを以て、その下に來る動詞は、使・令等の助動詞を用ひずして、使役に訓ずるなり。

〔予觀夫巴陵勝狀、在洞庭一湖〕 予、あの巴陵郡の勝景を觀るにそは全く洞庭湖あるに因る。卽ち巴陵郡の勝景は全く洞庭湖の美景に負うてゐるといふなり。以下六句は洞庭湖上の美景を描寫す。

〔銜遠山、呑長江〕 遙か彼方の山々をくはへ、揚子江の水を呑み込み、實に渺漠なる大湖で、

銜遠山とは、遙か彼方の山が渺々たる水中に突出せる樣をいふなり。水が山に近圍まれしに非ずして、水が山を銜むといへる所に大湖の樣を想像すべし。呑は吐の反對にしてまるのみにすること、揚子江の大流をまるのみにすといへる所に湖水の大を想

ふべし。

〔浩浩蕩蕩〕 浩は大也、廣也、浩々は水の廣々した貌、書經舜典に「浩浩滔天」蕩は式羊切音シヤウ、波の動く貌、詩經江漢篇に「江漢蕩蕩」。タウと發音する時は、ゆのことゝなる。

〔橫無際涯〕 橫さまにはてしなく廣い。廣韻に「東西曰縱、南北曰橫」

上の三句はこの句を修飾す。

〔朝暉夕陰、氣象萬千〕 日の出の時、日の入りの時と一日の中にてもその景色が千變萬化する。

暉は一に煇に作る、同じ。說文に光也とあり、陰は夕日沒の陰翳、氣象は氣中の現象のこと卽湖上の樣子をいふ。

〔此則岳陽樓之大觀也〕 これが樓上より見ゆる大きな景色である。

此は「衡邃山」以下を承く、「此則」と則を添へたるは、コレガ、コレコソと此を明確に提示するなり。大觀は大きな有樣、大きなながめ（大觀の樣子と解するは不可なり）。

〔前人之述備矣〕 この景を詳敍することに至つては、古人の作が十分あるからはや予之を敍する必要なかるべし、となり前人は古人のことにてこの前人之述とは唐に「刻唐賢今人詩賦于其上」の唐賢今人之詩賦を指す。

因に方今、前人と先人とを混用するは不可なり。先人とは父祖又は亡父のことなり。

注意せらるべし。

〔然則〕 この「然」字、上述の洞庭湖の廣大なることをうく。かく廣大なる湖なれば北は巫峽に通じ南は瀟湘までも續きまるとなり。

〔巫峽〕 巫は山名なり。峽は俠夾切、音カフ（ケフは慣用音なり）兩山の一水を挾むをいふ。蜀楚の間に三峽あり。西陵・巫山・瞿塘と名づく。其の水至險なり。荊州記に「信陵縣西二十里有巫峽。峽長七百里、兩岸連山、略無絕處。重巖疊嶂、隱天蔽日、常有高猿長嘯、屬引淸遠。」古歌漁者歌に曰「巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳」と

〔瀟湘〕 湖南省にある二水の名。瀟水は湖南永州府を過ぎて後湘水（湘江）に合し終に洞庭湖に注ぐ。

〔遷客〕 遷されし人、卽ち流されし人。

〔騷人〕 玉篇に「騷、愁也」とあり愁多き人卽多感の人の意、詩人をいふ。

〔多會於此〕 此は岳陽樓を指す。

〔覽物之情得無異乎〕 物は外物卽風景をいふ。同一の風景に對しても觀る人の主觀的立場の異るに從つてその感ずる所異るをいふ。（樓の大觀は前人之を述べつくせば、予はこの觀る人の情異ることにつき述べんとなり）以下その差について細敍す。

〔若夫〕 次の「至若」と相對し、文を改め起す。夫は虎嘯猿啼までかけて見るべし。

〔霪雨〕 霪一に淫に作る。相通ず。ながあめなり。爾雅に「久雨謂之淫」

〔霏霏〕 雪雨の盛に降る貌、詩經、小雅采薇篇に「今我來思、雨雪霏霏。」

〔連月不開〕 幾月も霽れない。開は雪雨やみて空のあかるくなるをいふ。

〔陰風怒號〕 陰風は陰氣な風、卽ち雲陰

くして風吹くをいふ、怒號はいかりさけぶなり、風激しく吹くをいふ。

陰風は冬の冷い風にいふ。次に春の景色を寫せるに對し、こゝは冬の景色を寫せるものとみるべし。

〔濁浪排空〕 排はおしのけること。空をおしのけるが如く濁浪高きなり。前句の「陰風怒號する」により濁浪高く起つて空を排するなり。

〔日星隱曜〕 こゝは星の字は添へたるのみ。意味は日字にあり。曜は、燿又は燿と同じ、光なり。

〔商旅不行〕 商旅は行商人のこと。易の復卦の象傳に「先王以至日閉關、商旅不行」とあり。ふだんは商旅の船が盛に湖上を往來せるなり。

〔檣傾櫪摧〕 商旅の乘れる船に就いていふ、大しけにて難澁せるなり。かく難澁せるが故に不行なり。林西仲この句を解して「排抑也、倒其檣抑其櫪、久泊不行之舟也」とせしは不可なり。櫪は又枻に作る。

この邊の描寫實に力あり、雄渾なる墨繪を見るが如し。

〔薄暮冥冥〕 「薄」は迫なり、日の晩に迫るを薄暮といふ。「冥冥」は暗き貌。廣雅に「日將落曰薄暮」。詩經小雅の「無將大車、維塵冥冥」の朱子集傳に「冥冥昏晦也」とあり。

〔虎嘯猿啼〕 虎嘯は物凄さをいはんが爲に用ひし語ならん。猿啼については、前に引けるに「巴峽三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳」など思ひ合はすべし。

「薄暮冥々」の二句は、「殊に夕暮薄暗くなれる時……」と、霪雨霏々、連月不開る時の物凄き一場面を擧げてこの邊の文に一層の凄慘味を加へしものにして、商旅不行云々と必然的關係あるに非ず、讀者十分玩味せらるべし。

〔登斯樓也則〕 かゝる場合に若しこの樓に登りてその景色に對しなば、なり。

この「也」は上を提示し、下を起す作用をなす。登斯樓乎、と同意。

〔去國懷鄉〕 遷客の身の上についていふ。

〔滿目蕭然而感極而悲者〕 心に上の憂愁を懷きて、この凄涼の景を見れば、目に入るもの皆實にものさびしく(蕭然)て、とてもたまらず、自ら泣き悲しむ者もあらうとなり。「者」は人を指す、去國以下にかゝる。

因に蕭然と蕭然との差について注意を與へられたし。

以上凄慘の極を寫し以下溫和の極を敍し、兩々相まちて文の效果を大ならしむる筆法に注意せらるべし。

〔至若〕 敍述を全く轉換する用をなす。「漁歌互答」までかゝる。

〔春和景明……郁郁青青〕 穩やかな春の頃の晝の景色を寫す。

春和景明は春光溫和にして景色明麗なることにて春景色を一般的に敍し、次に波瀾不驚の句にて湖上の穩やかさを敍し、次の上下天光、一碧萬頃は天空(上)も湖面(下)も陽光みちわたり、一樣の碧色がはてしなくひろがれること(頃は百畝の廣さ)にて水や

空、空や水なる大觀を敍し以下湖岸の景色を細敍す。

沙鷗、砂洲に居るかもめ。(沙は砂と同じ、一說に沙が俗字なりといふ)

翔集、飛び來りて集ること。

錦鱗、日光透徹せる水中に見ゆる魚を印象的にいひたる語。

游泳、共におよぐことなれど區別すれば、泳は水中をもぐりおよぐなり。

沙鷗翔集、錦鱗游泳の二句、その樣見るが如し。

岸芷汀蘭、水岸にある、香草(芷はヨロヒガサ蘭はランと訓すれども我が國のそれらと必ずしも同一物に非るべし。)

郁郁は香氣の發散する貌、ブン〳〵。

青々はあをあをと茂れること。この四字は岸芷汀蘭の樣をいふ。

〔而或〕 文を少し轉じ以下月夜を寫す。

〔長烟一空〕 一空は全空なり、廣々した天をいふ、そこへ一條の靈烟長く橫はるなり。一空は次の千里に對して技巧を弄せる語なり。この句を「長烟一に空しく」と訓み夕靄の一掃せることゝ解するものあり、こは次に「皓月千里」とあれば烟ありては都合惡しと考へしなるべけれど、尤も拙なる訓み方なり。況や一條の長烟を添景として却つて皓々たる月光がひきたつをや。又この句を天の川が長く天空にたなびくと解せる者あり、最も非なり。凡そ漢文には漢文のよみ方あり、そを無視してたゞ意味の上から無理にこじつけんとするが如きは極めて不可なり。漢文はよく形式に注意してはじめて眞の意味をとり得べし。さなくば、判じ畫、謎を解くが如きことゝなるべし。注意せられたし。

〔皓月千里〕 皓々たる明月千里を照らすなり、皓は廣雅に明也とあり、又、小爾雅に白也とあり。詩經豳風、月出篇に「月出皓兮」、文選月賦に「魄皓月而長歌」の句あり。

〔浮光躍金〕 浮光は水面に映ぜる月光をいふ。水動いて浮光亦漾ふを躍金といへるなり。

〔靜影沈璧〕 靜影生水底に靜かに寫れる月影なり。そが恰も璧を沈めたるが如く見ゆるなり。前句は動搖せる水に寫る月をいひこの句は靜澄なる水に寫る月をいふ。

〔心曠神怡寵辱皆忘〕 「曠」は「ヒロシ」と訓す、大也、豁也。「怡」は爾雅釋言に「悅也」、とあり。心の廣廣として悅ばしく榮譽(官進すること)も恥辱(遷謫せらるゝこと)も悉く打ち忘るなり。

〔把酒臨風〕 手に酒杯を把りて清風に臨みながら酌むなり。

〔洋洋〕 盛大なる貌、論語に「洋洋乎盈耳哉」中庸に「洋洋乎發育萬物」とあり。

〔或異二者之爲〕 上に求古仁人之心といひたれば(求は推測するなり)こゝに或といひて蓋然的に表はせしなり。二者とは前の「感極而悲者」と、「其喜洋々者」とをいふ。爲は行爲、所爲なり。卽景色により境遇によりて悲喜することをいふ。

〔何哉〕 何故ぞや、以下にその理由を說く。

〔不以物喜不以己悲〕 「古之仁人」は外物(景色など)や、己の境遇(榮進、貶謫等の)によつて心を動かし喜悲せずとな

り、上句の喜と下句の悲とは各々相兼ぬ。

〔居二廟堂之高一則憂二其民一、處二江湖之遠一則憂二其君一〕　物・己を以て喜悲せざることの具體的事實をあげしなり。「廟堂之高」は廟堂での高位にあらず、「高き廟堂」の意なり、「江湖之遠」も同句法なり。其民。其君の其は古之仁人をうく。

〔江湖〕　世間・地方のこと、官を去つて遠く江湖の上に隱居することなり。江は三江、湖は五湖をいふ。轉じて世間の義となす。三江は、松江・婁江・東江をいひ、五湖は、大湖をいふ。又鼂陽湖・青草湖・丹陽湖・洞庭湖・太湖をいふ。

以上が「何哉」をうくるなり。

〔是進亦憂、退亦憂〕　「是」は、居二廟堂之高一云々をうく。かくてはと譯すべし、「進」は居二廟堂之高一をうけ、「退」は「處二江湖之遠一」をうく。

〔然則何時而樂耶〕　これ以下作者の精神の集注せる處、一篇の重心なり。「而」にハウメテの語氣あり。

〔其必曰——歟〕　古之仁人はきつと……といふであらうよ。

〔先二天下之憂一憂云云〕　大戴禮曾子立事篇に「先二憂事一者後二樂事一、先二樂事一者後二憂事一」とあり、これ恐らく范文正公の不と せし所なるべし。

序を以て先憂後樂の語を敷ふべし、岡山後樂園の名もこの語によれるか。

〔微二斯人一〕　微はナカリセバと訓じ、若し無かつたならば（あるからよいやうなものの）の意、論語、憲問篇に「微二管仲一、其被髮左衽矣」とあるもこの用法なり。「斯人」は古之仁人を指し、暗に滕子京のかくあらんことを期せるなり。

〔吾誰與歸〕　自分は誰に從ひよりて事をなさうやとなり。與は歟に同じ。歸は歸從の意。「吾歸レ誰歟」の倒裝法なり。禮記、檀弓下に「文子曰、死者如可レ作也、吾誰與歸」とあり。

教授上の注意

一、本集にはこの文の終に「時六年九月十五日」の八字あり卽ち慶曆六年なり。

一、この文の如きは暗誦せしむるを可とす。

一、この文はその裏面に滕子京に對する諷勉の意あるを忘るべからず。

一、文中よく范文正公の人格躍動す就中先憂後樂の一語その抱負を見るべし、教授者宜しく適宜敷衍して生徒の心情を養はれたし。

練習

小學（小學書、善行第六實敬身の條に出づ。小學書六卷は宋朱熹の編といはれ居れど實はその門人劉子澄の編して朱子の校閲せしものなり、この書内外二篇に分れ更に内篇は立敎・明倫・敬身・稽古の四目に分れ外篇は嘉言・善行の二目に分る。灑掃・應對・進退より修身・道德の格言、忠臣・孝子の事蹟を集め學童課程の書となせるものなり。因にいふ、支那では文字に關する學問を小學といふ。この書名と自ら別なり。

〔大節〕　大主義大理想など譯すべし。

〔一以二自信一〕　一は全くなり。自信は自ら信ずる所。信念なり。上に事へ人を遇す

るに常に自己の信念を以て行動し、

〔不二擇二利害一爲二趨舍一〕　利害關係を打算して進退することをしない。

趨はおもむく、舍はとどまるなり。

〔其方〕　方は方法。

〔爲二之自一我〕　自分が率先してやる。

〔雖二聖賢一不レ能レ必〕　たとへ聖賢でも必ず成功するとはきまらない。雖はたとへと譯す。生徒は往々言つてもと譯し勝なり。

それでは意義明瞭ならず。

〔有二不レ在一我者一〕　人間の力では何如ともしがたい點がある。

〔豈苟哉〕　成否を度外視して、なすべきことに全力をつくすなり。

老樂心ながら全文に送假名を施さん

范文正公少有二大節一、其於二富貴貧賤毀譽歡戚一、不二一動二其心一、而慨然有レ志二於天下一、嘗自誦曰、「士當二先二天下之憂一而憂、後二天下之樂一而樂一也。」其事レ上遇レ人、一以二自信一、不レ擇二利害一爲二趨舍一、其有レ所レ爲、必盡二其力一、旦爲レ之自レ我者當レ如レ是、其成與レ否、有二不レ在一我者一、雖二聖賢一不レ能レ必、吾豈苟哉。」

備考　この練習文は小學に據りたれども、元來この文は朱熹が、歐陽脩の作なる「賞政殿學士戸部侍郎文正范公神道碑銘」の一節を採りて小學に載せたるなり。

八　遊洞庭湖

要旨

前課に關聯して、大詩人の洞庭の游を敍したる詩を授け、諷誦の資たらしむ。

作者

李太白、二課作者の條參看。

出所

唐詩選　四課參看。

題名

遊洞庭湖、唐詩選には、「陪二旅叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至一游二洞庭湖一」とあるを、こゝには略言せるなり。

押韻

平聲十二文韻、分・雲・君。

解釋

〔洞庭西望楚江分〕　洞庭湖に舟を浮べて西望すれば、楚江の湖に注ぎ入るを見る。「楚江」は、又岷江ともいふ。西より來りて岳陽樓前に至り、洞庭の水と合して東流す。

「分」、實は水江悉く分るるなり、水分れて川をなし湖に注ぐなり。特に「楚江」を出すは結句の湘君を對照させんためなり。

〔水盡南天不見雲〕　湖水の盡くるあたり南天には雲の影だになしとなり。南は水天髣髴、汪洋として湛へたるなり。「不見雲」は天の清澄なるをいふ。「南天」は楚江の西と對照す。

〔日落長沙秋色遠〕　日落ちて遠く三百里も隔つといふ長沙の方も秋色一面蕭條たるものあり。

「長沙」は郡名、洞庭の東三百里に在り。

〔不知何處弔二湘君一〕　四周は秋色一樣、何れの處に彼の湘君か弔うてよきや知らざるなり。

「湘君」、堯帝に娥皇と女英との二女あり、以て舜に妻あはす。然るに舜は南巡して蒼梧卽ち今日の廣西省梧州府蒼梧縣治に崩じたり。二妃之を追うて及ばず、沅湘の間に溺死す。後之を祠りて黃陵廟と稱し、湘水を守る神とし、世に湘君と云ふ。現に湖南の岳州府黃陵山上に黃陵廟あり。

此の詩一篇は、洞庭の秋色を敍し、ひそかに湘君を弔するなり。

教授上の參考

賈至（題名の項參看）の詩に、

楓岸紛紛多二落葉一。
洞庭秋水晚來波。
乘レ興輕舟無二近遠一。
白雲明月弔二湘娥一。

九　登岳陽樓

要旨

七課と連絡して、大詩人杜甫の樓上にての感慨を味はしむると共に、五言律の形式の大體を知らしむ。

作者　**出所**

第四課參照。

體裁

五言律詩。（平起）下平十一尤の韻、「樓」「浮」「舟」「流」が韻字なり。

解釋

【昔聞洞庭水、今上岳陽樓】　嘗て洞庭湖の壯觀な話に聞き、久しく憧れて居たが今はじめて岳陽樓に登つて之を見おろすに二句對起、身、漂泊によつて偶〻ここの大觀を爲すを得たるを喜ぶ意を含む。

【吳楚東南坼、乾坤日夜浮】　なる程聞きしが如き壯觀で、東の吳と南の楚とはこの湖によりて裂け開けて遙々と連り、海の如く濶き湖水は、日に夜に天地を浮べてゐるやうである。

洞庭湖は吳楚の分境故、吳楚東南坼といふ。坼（聆格切）は裂なり、字又坼に作る、同じ。この二句樓下水面空濶の樣をいふ。天地間の湖と見ず、天地を浮ぶる大海とみなしたるなり。

坼・浮の二字、字眼なり。

【親朋無一字、老病有孤舟】　天涯に飄浪してこの景色を見るにつけ思ひ出さるるのは故郷であるが、故郷の親戚・朋友（親朋）からは一字の消息もなく、（亂の爲音信通ずる能はざるなり）、孤獨にして老い且つ病める我身にとつては住むに家なく、たゞ一隻の小舟に身を托して、さすらひの旅をつゞけるのみである。「舟」の字必ずしも拘泥せざれ。漂泊の感を托したるまでなり。二句忽ち感慨に入り孤寂の情を歌ふ。「無」字と「有」字と相對して用ふ。

【戎馬關山北、憑軒涕泗流】　今や吐蕃が國中に浸入して戰亂絶えざれば故郷へ歸ることも見込たゝず、樓上の欄干に憑りて身を傷み時を哀しみ涙がとめどなく流れ落ちることである。

之より先杜甫、蜀の草堂に在りしが、嚴武卒してより之を去りて雲南・夔州に遊び、蜀亂しにより又岳陽に流落す。時に陽中亦亂離やまざるあり、彼をして愈〻時を傷むの情に堪へざらしめしなり。その爲人尤も表はる。

戎馬は兵馬なり、こゝは吐蕃の侵入をいふ。憑軒。憑は倚と同じ、身をもたせかけるなり、軒は欄檻の上の板をいふ（漢書音義）なれど、こゝは直に欄檻（テスリ）と解すべしノキバに非ず。

涕泗。目より出づるを涕といひ鼻より出づるを泗といふ。

備考

一、この詩は大歴三年、杜甫五十七歳（歿する二年前）の作なりといはる。

一、この詩は古來評家の激賞する所なるがその二三を左に擧ぐべし。

唐子西曰、觀子美詩、不過四十字耳、其氣象閎放、涵蓄深遠、殆與洞庭爭雄、所謂富哉言乎者、太白・退之輩、率爲太篇、極其筆力、終不逮也、杜詩雖小而大、餘詩雖大而小。

黄鶴曰、一詩之中、如吳楚東南坼乾坤日夜浮一聯、尤爲雄偉、雖不到洞庭者、讀之、可使胸次豁達。

一、古來この詩と並稱せらるゝものに孟浩然が洞庭に臨みて作れる詩あり、左の如し。

八月湖水平。涵虛混太清。氣蒸雲夢澤、波撼岳陽城。欲濟無舟楫。端居聆聖明。坐觀垂釣者、徒有羨魚情。

一、この詩は魏の王粲（字仲宣）の登樓賦（文選卷十一に收めらる）とその詩趣に於て相似たるものあるのみならず、その語句亦相通ずるものあるのみならず、その語句亦相似たるあり、即ち登樓賦の「憑軒檻以遠望兮、向北風而開襟……悲舊鄉之壅隔兮、涕橫墜而弗禁」の如きは「憑軒涕泗流」の據れる所なるべし。

一、律詩の規則は唐に至つて成立せしものにて五言律、七言律の二種なり。勿論、五言律に近きものは齊・梁の頃すでにありたり。律詩の第一句第二字目仄聲なるを仄起と稱し、第二字目平聲なるを平起と稱す。而して五言律詩に在りては仄起を正格平起を偏格とし、七言律は之に反して平起を正格、仄起を偏格とす、左に律詩の圖式を示さん。

平起七言律

○○●●○●●　首聯（起聯）
●●○○●●○韻
●●○○○●●
○○●●○○●　頷聯（前聯）…對句
○○●●○○●韻
●●○○●●●　頸聯（後聯）…自由
●●○○○●●
○○●●●○○韻　尾聯

○平聲　●仄聲　◐平仄何れにても可

右の點線以上を除けば「仄起五言律」となる。

仄起七言律

○○●●○●●韻
●●○○○●●
○○●●○○●
●●○○●●●韻
●●○○○●●
○○●●●○○韻
●●○○○●●
○○●●●○●韻
●●○○○●●
○○●●●○○韻

右の點線以上を除けば「平起五言律」となる。

この「登岳陽樓」詩の平仄を示せば左の如し

昔聞洞庭水　吳楚東南坼
今上岳陽樓　乾坤日夜浮

親朋無一字　戎馬關山北
老病有孤舟　憑軒涕泗流

一、詩を讀むにあたつて句の構成に注意すること最も肝要なり。即ち詩の各句は一字づつ七つ(七言)或は五つ(五言)羅列せられしものに非ずして二字、二字、三字(七言)若しくは二字、三字(五言)より成るを以て原則とするなり。この點を無視せば意義滅裂となる。十分意を用ひられたし。試に實例をあげんに

又は　昔聞洞庭水、今上岳陽樓
　　丞相祠堂何處尋　錦官城外柏森森

となるなり。

一〇　黃鶴樓

要旨

前課と連絡して樓上の感慨を賦したる七言律詩を讀解せしむ。

作者

崔顥、唐盛の詩人(盛唐に就いては本書第二課作者の條を參照されたし)、詩に巧なれども行修らず、賭博、飲酒を好み妻を娶るに唯ゝ美なる者を擇び俄にして之を棄て、凡そ四五回娶る。是を以て位顯れず、司勳員外郎に終る。かくその人物感心せざれども嘗て黃鶴樓に過りて作れる詩は李白見て大に賞しこれより人口に膾炙せらる。

出所

この詩は唐詩選卷五、三體詩卷十、及び全唐詩に收められたるが、唐詩選のものは他と文字に異同あり。三體詩、全唐詩は相同じ。今、全唐詩に據れり。

全唐詩、九百卷目錄十二卷、は淸の康熙四十二年、彭定求等勅を奉じて編せしものにて作者二千二百餘人の詩四萬八千九百餘首を錄す。唐一代の詩略此に集れりといふべし。

體裁・題名

七言律詩(平起、下平十一尤の韻、「樓」「悠」「洲」「愁」が韻字なり。)黃鶴樓は今の湖北省江夏縣の西南に在りし樓にて、楊子江に臨み、眺望絕佳、その樓の構造亦奇にして、唐代岳陽樓と並稱せられし名勝なりしが後廢れたり。明に至り舊制によりて作られしも淸の咸豐中兵火に遭ひ、その後、更に再建せしも民國九年八月火災に罹れり。

この樓の起源に就いては面白き傳說あり、種々の書物に見え異同あれど、今報應錄に據りて之を記せん。

江夏郡、辛氏者、沽酒爲業、一先生來、魁偉藍縷、從容謂辛氏曰、許飲酒否、辛氏不敢辭、飲以巨杯、如此半歲、辛氏少無倦色、一日先生謂辛曰、多負酒債、無可酬汝、遂取小籍橘皮畫鶴於壁、乃爲黃色、而坐者拍手歌之、黃鶴蹁躚而舞、合律應節、故衆人費錢觀、

之、十年許而辛氏累巨萬、後先生飄然至、辛氏謝曰、願爲先生供給如意、先生笑曰、吾豈爲此、忽取笛吹數弄、須臾白雲自空下、畫鶴飛來先生前、遂跨鶴乘雲而去、於此辛氏建樓、名曰黃鶴。

解釋

〔昔人已乘黃鶴去、此地空餘黃鶴樓〕 昔、仙人が此處へ來て遊んだといふが、その人はもう黃鶴に乘つて去つてしまつて、今は此地に唯黃鶴樓が殘つてゐるばかりである。

「空」とは人去りて樓のみ殘れる故にいへるなり。

唐詩選通行本には「昔人已乘白雲去」に作る。

〔黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠〕 仙人を乘せた黃鶴は一度去りてもはや來らず、白雲のみが昔ながらにゆらりゆらりとしてゐる。

白雲の語にて前に引けり、「須臾白雲自空下、……遂跨鶴乘雲而去」を想ひ合はすべし。

「千載」は、仙人の時から今迄、永き年月を經たればいへるなり。

「悠悠」は閑暇の貌。こゝは眇邈として限り無きの意と解すべからず。

以上四句は樓によりて聯想せし故事を主として詠ず。

〔晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲〕 樓上より見渡せば川の面はきら〳〵として、彼方漢陽邊の樹木もはつきりと數へられるやうに見え江中の鸚鵡洲には綠草が茂つてゐる。

晴川は雨あがりのはれたる川。

歷歷は一一分明なる貌。

芳草、は香草のことなれども、こゝは、唯綠草の意に用ひしのみ。

鸚鵡洲、教科書の頭註參照。

この二句は樓上より見たる實景を寫せるなり。

〔日暮鄉關何處是、煙波江上使人愁〕 樓上で景色を賞で居る間に早や暮方となつたのでそゞろ旅愁を覺え、さて我が故鄉は何れの方向ぞと見やれども、それともわかず、たゞ夕靄たゞよふ江上のみが目にふれて、一層哀愁を感ぜしめる。

何處是の「是」は、何處か是れ鄉關なるの意なれば、「コレナル」と訓ずべし。

煙波はもやかすみのかゝれる水面。

この二句は感慨を敍す。

備考

一、崔顥の人物は善からざれども、この詩は古來有名なるものなれば之を採りたり、請ふ人を以て作を斥くるなく、十分諷誦せしめられんことを。

一、卷三、李白の黃鶴樓送孟浩然之廣陵」と連絡して授けらるれば一層興味あるべし。

一、漢詩の如き短き形の詩は、なるべく一篇中同字を再び出さゞるを以て原則とすべきなれど、この詩の如く「黃鶴」の字を三度續け用ひ「空」字を復び出したるも亦却つて妙味あり。李白の登金陵鳳凰臺」詩の「鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流。」はこれに倣ひたるものなり。

一、この詩と前課の詩とは作者の立場略ゝ似たれども、その作より受くる印象は大に異れり。前課の詩は涙を流すにしても、世を憂へ時を傷む氣分含まれて、讀者に迫る强さを感ぜしむれども、本課の詩は餘程感傷的なる所あり、纖細なる感じをおこさしむるのみにて强さを感ぜしめず、是れ一は五言體と七言體との差に因ると雖も亦作者の個性の差に本づかずんばあらず。十分熟讀玩味して兩者の差を了解せられたし。

一、この詩の平仄左の如し。

昔人已乘黃鶴一去、此地空餘黃鶴樓
黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠
晴川歷歷漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲、
日暮鄉關何處是、煙波江上使人愁。

平仄の配置七言律詩正式の規則に合せざる點多し、かゝる類の詩を拗體といふ。

一、歸田詩話(明の瞿祐撰)に左の記事あり

崔顥題黃鶴樓、太白過之、不更作、時人有眼前有景道不得、崔顥題詩在上頭之讖。

一一　苑文正公文集序

要旨

七課岳陽樓記と關聯してこの文を授け以て范文正公の學問施設の由りて來る所あるを知らしむると共に、序の文の一體を理解せしむ。

作者

蘇東坡（西紀一〇三六―一一〇一）名は軾、字は子瞻、東坡はその號、洵の長子、轍の兄、宋の眉山の人なり。幼にして頴悟、少くして博く經史に通ず、嘉祐中歐陽脩考官たる時禮部の試に第す、神宗の時王安石と議合はずして黄州に貶せられ、室を東坡に築いて東坡居士と號す、哲宗の時召し還され翰林學士兵部尚書に累官す。作る所の詞命忌諱に觸れ寧遠軍節度副使に貶せられ、更に瓊州別駕に降さる。後、三大赦を經て朝奉郎に任ぜられしが未だ幾くならずして常州に卒す、時に徽宗の建中靖國元年なり、高宗の世、文忠と諡せらる。父洵、弟轍と共に文章に巧に、三蘇と稱せらるゝ中、東坡その冠たるのみならず、その縱横奔放の文、實に百世に雄視す。その詩亦飄逸不羣、書畫亦名あり、著す所、易傳、書傳、論語說の外、東坡集四十卷、後集二十卷、奏議十五卷、内外制十三卷、和陶詩四卷あり。

出所

東坡集、唐宋八大家讀本に收めらる。今後者より採る。

唐宋八大家文讀本三十卷は淸の沈德潛（字は確士、歸愚と號す）撰す。之より先、明の茅坤（實は唐順之に出づともいふ）、唐宋の文人八人（唐の韓・柳・宋の三蘇・曾鞏・王安石）の文を選びて唐宋八大家文鈔一百六十四卷を編せしも、淸の儒同人その疎漏を病み增補して八大家類選を編す、沈德潛乃ち是等を參考して八大家文讀本を作れるなり。

この書我國に傳來せしは寛政の頃なるべく、文化十一年はじめて官にて之を刊行す、これより大に行はれ各所の藩校、私塾用ひて教科書となせり。

題名

范文正公は范仲淹なり文正は其諡。

范文正公文集は本集二十卷、別集四卷、附錄一卷より成る。もと丹陽集といふ。詩賦五卷二百六十八首、雜文十五卷一百六十五首を收むこの外に詩文の補編五卷あり。東坡の序は元祐四年の筆になる。

「序」に就いては二春夜宴桃李園序の題名の條を見られたし。

分段

第一段　幼時より范公の名を知れること。

第二段、序を囑せらるゝに至りし經緯。

第三段、序を作ることを受諾せし理由。

第四段、古の君子、その功業、前に定まれること。

第五段、范公の功業亦素定に出で、その文章誠に出づること。

解釋

慶曆三年は北宋第四代仁宗の世にして我が後朱雀天皇の寛德二年、西紀一〇四三年にあたる。東坡時に八歲。

〔總角〕　幼稚なること。アゲマキと訓ず、男女未だ冠簪せず、髮を結びて飾とせしをいふ。その髮を總束して兩角とするによる詩經齊風甫田篇に「婉兮孌兮、總角丱兮、未見幾兮、突而弁兮」とあり。三國誌に「孫策曰、公瑾（周瑜の字）與吾孤有二總角之好一」とあり。

〔鄉校〕　鄉黨の學校、卽ち村の學校なり。軾の鄉里は四川省眉州眉山縣なり。

〔士有自京師來者〕　「士」には（1）大夫の次の官、（2）武士（3）學問ある人等の意あり、こゝは（3）の意に屬す。今の知識階級のもた指して一般に「士」といへるなり。京師、宋の都は汴京、今の河南省開封縣。「自京師來」が「者」を修飾して、「士」を說明す。

〔魯人石守道〕　石守道は、名は介、守道はその字、徂徠先生と稱せらる。今の山東省兗州の人、その邊は古の魯の國の地なる故魯人といへるなり。守道は天聖中の進士慶曆中、擢でられて太子中允となる。時に韓琦・范仲淹、富弼・歐陽脩・余靖等皆、朝に在り、守道乃ち慶曆聖德詩（或は頌ともいふ）を作りて之を頌す。

〔鄉先生〕　鄉校の先生卽ち村の先生をいふ。古は鄉に鄉學あり、中大夫の致仕して鄉に在る者を以て太師とし、士の致仕して鄉にある者を以て少師とし、共に教授の任に當らしめ、名けて鄉先生といへるにもとづく。儀禮、士冠禮に「冠者見二于鄉大夫、鄉先生一」とあり。

〔誦習其詞〕　誦習はそらよみし習ふこと。卽ちこゝは寫覩た詩を覺えて居りたれ

ば則は後程之を暗誦して先生に問ひしなり竊觀てその場に向ひしに非す誤解せされ。

【從旁竊觀】 旁はかたはら、そば、傍字を通じ用ふるも可なり。竊はこつそりなり許可を得すに。

【以所頌十一人者何人也】 その詩の中に頌したゝへてある十一人はどんな人かと問ひたるなり。何といふ名かと問ひたるに非す。「也」は「何人」にかゝる、卽ち「何人也」を問ひしなり故に極嚴密に讀まば以——何人也一と返點すべきなれど、今姑く普通に從ひおけり。

十一人の名頭註に見ゆ、當時これらの人材を用ひて弊政を改めしかば、石守道、喜んで、之を頌せる慶曆聖德詩を作れるなり。

【此天人也耶、……若亦人耳、何爲其不可】 此らの人が天上界の人でもあるなら強いて承り度もないが、若し吾々並の(亦)人間にすぎぬ(耳)ならば之を知ることが何で惡るからう。

此天人也耶は直譯せば「此レ天人ナリトセンカ」なり。耶こゝでは、もしと假定の如く譯せばよくわかる。

「則不敢知」の「則」の上に「然」を補ひ見ば一層明瞭とならん。不敢知、強いて知らうとはしない。なり。

【奇軾言】 奇は奇拔の意、「言」は此天人云云を指す。八歳にしてこの言ある實に奇拔なりといふべし。

【韓・范・富・歐】 「韓」は韓琦、字は稚圭、相州の人、年二十進士に登り、第一たり。五代以來學校久しく廢す。琦、舍を葺き儒生に絃誦を課す。仁宗の朝累進して相となり、英宗の時魏國公に封ぜらる。神宗熙寧八年薨す。年六十八。忠獻と謚せらる。

「范」は范仲淹なり。傳は七岳陽樓記に出づ。

「富」は富弼なり、字は彥國、河南の人、篤學にして大度あり。仁宗の朝、累進して樞密使となる。文彥博と共に相たり。天下富・文と稱す。後、王安石と合はず、出でて汝州に判し、尋で洛に歸りて老を養ふ。司空に加拜し韓國公に封ぜらる。家居十餘年にして卒す、年八十。文忠と謚せらる。

歐は歐陽脩、字は永叔、吉州廬陵の人、仁宗の時諫官となり、事を論ずること切直、後、參知政事に拜せられ、心を匡輔に盡し韓琦と共に英宗を擁立す。熙寧の初青州に徙されしが、青苗錢のことにより王安石と合はず、太子少師を以て致仕し、熙寧四年六十六歳を以て卒す、文忠と謚せらる。脩廣く群籍を極め骨て唐韓退之の遺稿を得るや、苦心探索遂に文章を以て天下に冠たり常に後進の誘掖に力め宋代有名の文人は殆んど皆その推轂によりて世に出でたるなり宋一代の文風彼によりて振作せられたるものといふべし。

【末盡了】 まだ十分にはわからなかつたが、(人傑であるといはれた意味が)。了は了解、了得の了、さとると訓す。

【已私識之矣】 もうその頃からおぼえて(識)ゐた。

之は四人をうく、已——矣の形式に注意、

過去のある時よりの繼續を表はす。

【嘉祐二年】 仁宗の卽位三十五年にあたる。

【舉進士】 官吏登用試驗を受けしなり進士の名は禮記王制篇に大樂正論二造士之秀者一以告二於王一而升二之司馬一曰二進士一とあるに本づけるものにして、唐代士を採るに詩賦を以て試みるものを進士といひ、經義を以てせるを明經といふ。宋代この制による。されば禮部に試驗を受くる者が進士にして、この舉に應ずることを舉二進士一とはいふなり。未だ及第せしにはあらず、注意せられたし。

【范公歿】 范文正公は仁宗の皇祐四年、(一〇五二)に歿したれば嘉祐二年(一〇五七)に先だつこと五年なり。

十一人より四人となり、四人中より范公一人を摘出し、題目に適合せしむる文脈に注意せられたし。

【既葬而墓碑出】 葬式もすんでしまつた後で墓碑文が出てゐた。

「既」は過去完了。

【是歲登第】 是歲は嘉祐二年か指す、登第は試驗に合格せしなり。卽ち前述の舉二進士一ときの試驗に合格せしなり。第は科第なり、甲乙の次第あるによりていふ。

【以國士待軾】 第一流の士として待遇した。

國士は國中最もすぐれたる人士、史記刺客傳に「至二於智伯一國士遇レ我一、故國士報レ之」とあり。

【見知於歐陽公】 歐陽脩この時試驗官たりしなり。從來の駢儷文を斥けて古文を主とし、試驗の態度を變革す、これに因て宋の古文興る。「見」は受身を示す。

【因公識韓・富】 因はつてと譯す、識はお目にかゝること。

【其後三年】 嘉祐二年よりの後三年なり

【過許】 許は今の河南省許昌縣なり、そこを通りしなり。

【仲子】 兄弟の順序をいふに、最長を伯、次を仲、次を叔、末を季といふ。

【范堯夫】 名は純仁、仲淹の次子、皇祐の進士たり。哲宗の時累官して尙書僕射、中書侍郎となる。章惇に逆ひて永州に貶せらる。徽宗立つや、觀文殿大學士に任ず、目疾を以て辭して歸る。卒して忠宣と謚せらる文集あり。

【范彝叟】 名は純禮。仲淹の第三子。徽宗の時、尙書右丞に擢んでらる。王該のために誣ひられ、罷めて端明殿學士となり、左朝議大夫に終る。卒して恭獻と謚す。

【范德瑞】 名は純粹、仲淹の第四子。沈毅にして幹略あり。徽宗の時、徽猷閣待制を以て致仕し、年七十二にて卒す。

【同僚於徐】 同僚は同役、同じ役所につとむる者、詩經大雅 及二爾同僚一。又同寮とかくも同じ、左傳文公七年に、「荀林父曰、同官爲レ昵、吾嘗同寮、敢不レ盡二心乎一。」徐は徐州にて今の江蘇省銅山縣なり。

【且以公遺藁見屬爲序】 一見舊識の如く待遇せられしのみならず、その上に(且)遺藁の序文をたのまれた、となり、「見」は受身なり、敬語にあらず。

【乃克】 十三年たつてはじめて(乃)やつと

作りおほせた。

この「乃」はそこでと譯しては十分ならず、はじめて、と譯すべし。尚普通、乃なば何時でも、そこでと譯する傾向あれど大に不可なり。大體左の場合あることを心得おかれたし。

(1)そこで、こゝに。

史記、高祖本紀、高祖爲二亭長一、乃以二竹皮一爲レ冠、所謂劉氏冠乃是也。

(2)やうやく、やつと、はじめて。

史記、淮陰侯傳、將軍將二數萬兵一、歲餘乃下二趙五十餘城一。

(3)しかるに、しかも。

書經、五子之歌、乃盤遊無レ度

(4)かへつて。

史記、項羽本紀、軍無レ糧、乃飲酒高會。

(5)意外にも、豈圖らんや。

書經、盤庚、女乃不レ憝二朕心之攸一困、

(6)これ、これこそ。

戰國策、魏策、嗟手、政乃市井人、鼓刀以屠要ずるに「乃」は說文に曳レ詞之辭也、象二氣之出難一とある如く、上を顧調に承くるにあらで、撰つて承くるを以てその本義とす故にその本義を心得て、臨機に適切なる譯を附すべきなり。

〔公之功德蓋不二待レ文而顯一其文亦不二待一序傳〕　公の功德(功績と仁德)は甚だ著しく、その文を發することによつてはじめて(而)顯はれるのではなく、その文も極めて立派で、自分の序文によつてはじめて(而)世に傳はるのではないと思ふ。即ち功德は文によらずとも顯れ、文は序によらずとも傳はるといふなり、さればこゝを不レ待レ文而顯、不レ待レ序而傳とよむも可なり但この場合「而」はそれでもと譯すべし蓋は推測を表はす、思ふに、であらう。「其文」の下にも「蓋」あるものとして解せよ。

〔不二敢辭一者〕　上に「所以」を略したるものとして解せられよ。序を作ることを敢て辭退しないわけは。「自以」より「豈非疇昔之願也」までは、「不敢辭者」の理由を說明せるなり。

〔自以〕　自分で思ふのに、ひそかに考へるに。「以」は「以爲」又は「謂」と書けるに同じ

〔三傑〕　韓琦・富弼・歐陽修をいふ。

〔而公獨不レ識〕　「而」はしかるにの意なり「公」は主語の位置にあれど、意義の上では不識の目的語として解すべし。(「識」の意は既に前に述べたり)

〔以爲〕　「以」は「公獨不識」をうく。

〔挂名〕　挂、古賣切音クワイ、泪畦切、音ケイ。掛と同じ、懸なり、掛名は姓名を載せるなり、こゝでは序文を書くことないふ。

〔以自託二於門下士之末一〕　自分の名を公の文集中に載せて、それで自分も門人の末に附する。門下士は門人のこと。

〔豈非二疇昔之願一也哉〕　なんと平生からの希望ではないか。

疇は發語の辭一說に蠢也、疇昔は前日なり疇昔之願とは前日からの願なり。尙疇昔は昨夜の意にも用ひらる、本書廿課後赤壁賦疇昔之夜、飛鳴而過レ我者、非レ子也耶。は是なり。

〔伊尹・太公・管仲・樂毅之流〕　伊尹、名は摯、殷の處士。湯王人をして之を聘せ

しに五反して乃ち往く。湯王を佐けて海內を平定し、湯王崩じて後その子太甲を立て、之を輔けよく殷の基を築く。

太公は周初の賢人呂尙をいふ。東海の人、渭水の陽に釣せしに、周の文王出で、獵して之に遇ひ、曰く吾太公望レ子久矣と、故に太公望と稱し、武王の師となす。文王崩じて後武王を輔けて殷に克ち、功を以て齊に封ぜらる。

管仲、春秋時代齊桓公の賢相、名は夷吾、桓公を相けて霸業をなさしめ仲父と稱ぜらる。

樂毅、戰國時代燕の昭王之聘、趙・楚・韓・魏燕の五國の兵を率ゐて齊を伐ち齊の七十餘城を下し昌國君に封ぜらる。

「滋」は滋罪の滋にて、なかま。連中の意。

〔王伯之略〕　王者たると霸者たるとの策略。伯は(一)補赫切音ハク、長也、五等僧の第三等。(二)布亞切音ハ、霸(霸は俗字)と通ず、諸侯の盟主、はたがしら。こゝは(二)の意義なり。己、德を修め以て民を化するを王といひ、武力を以て他を征服し仁義を假りて治むるを霸といふ。孟子公孫丑上篇に以レ力假レ仁者霸、霸必有二大國一、以レ德行レ仁者王、王不レ待レ大とあり。略は策略・計略の略にして、はかりごとなり。前文の伊尹・太公は王者の略を行へるもの、管仲・樂毅は霸者の略を行へるものなり。

〔畎畝之中〕　田舍又は民間をいふ。畎は田畦、あぜ、うねなり畝は莫厚切、音ボウなれども、慣用音はボなり。

これらの人は民間に埋れてゐる頃から既に夫々王霸の略を胸に定めゐて仕へて後はそれを實現せしまでにて、仕へてから俄造りに學んだのではないといふなり。

〔淮陰侯〕　漢の高祖の功臣韓信をいふ淮陰侯に封ぜられたればなり。

〔高帝〕　漢の高祖、姓は劉、名は邦。

〔漢中〕　秦が置きたる郡名、今の陝西省一帶の地。

〔論二劉項短長一〕　劉は劉邦、項は項羽、劉邦と項羽との長所短所に就いて論ぜしなり。この事實に就いては、史記、淮陰侯列傳に、韓信曰大王自料、勇悍仁彊、孰二與項王一、漢王默然良久、曰、不レ如也、惟信亦爲二大王不レ如也、然臣嘗事レ之、請言二項王之爲レ人也、項王喑噁叱咤、千人皆廢、然不レ能二任一屬賢將一、此特匹夫之勇耳、項王見レ人、恭敬慈愛言語嗚咽、人有二疾病一、涕泣分二食飲一、至レ使レ人有レ功當二封爵一者、印刻弊、忍不レ能レ予、此所謂婦人之仁也、項王雖レ霸二天下一、而臣二諸侯一、不レ居二關中一、而都二彭城一、有背二義帝之約一、而以二親愛一王二諸侯一、不レ平、諸侯之見レ項王遷二逐義帝一、流二江南一、亦皆歸逐、其主、而自王二善地一、項王所レ過、無不二殘滅一者、天下多怨、百姓不二親附一、特劫二於威彊一耳、名雖レ爲レ霸、實失二天下心一、……(中略)大王之入二武關一、秋毫無所レ害、除二秦苛法一、與二秦民一約、法三章一耳、秦民無不レ欲レ得二大王王一秦者、於二諸侯之約一、大王當レ王二關中一、關中民虞知之、大王失レ職入二漢中一、秦民無不レ恨者、今大王舉而東、三秦可二傳檄而定一也、於レ是漢王大喜云々とあり。

〔三秦〕　秦の亡後、項羽その降將三人(雍王章邯、塞王司馬欣、翟王董翳)を關中に分

封す、之を三秦と云ふ。尙頭註參照

〔如レ指ニ諸掌一〕　掌を指す如く、極むざうさに計畫した。

諸は之於(乎)、「之」は畫レ取ニ三秦一をうく。又、諸は於(乎)と同樣に用ひらるる字なればこゝを如レ指ニ諸掌一と訓するも可なり。禮記・仲尼燕居篇に治レ國其如レ指ニ諸掌一而已乎とあり。

〔無ニ一不一斷者〕　全く漢中で計畫した通りになつた。

この形式は「無ニ物不ニ長一」(孟子)と同じ、一無不酬者、物無不長、と同意なれども、「無」を首におくことによりて意味を強くするなり。

〔諸葛孔明〕　三國蜀の相、名は亮、孔明はその字、隆中に隱る、先主(劉備)、三顧乃ち之を見る、先主を佐けて功あり遂に蜀をして重からしむ、尙詳細は十七課前出師表作者の條を見られたし。

〔臥ニ草廬中一〕　隆中(今の江北省襄陽縣の西二十里の所に在る山名)の山畔に草廬(いほり)を作りて塵逅生活をせしをいふ。

そこへ劉備が訪れて次のことを會談せしなり。

〔曹操・孫權〕　曹操字は孟德、後漢の獻帝を迎へて許に都せしめ大將軍となり、後魏王に封ぜらる、子の丕・漢を纂ひて後、追尊して武帝となす。

孫權、字は仲謀、江東に據りて曹操を赤壁に破り、西、蜀と和して遙に三分の業を成し建業に都して帝を稱し國を吳と號す。

〔規レ取ニ劉璋一…〕　規は規策・規略の規にて計畫することなり。

劉璋字は季玉、益州刺史たり、曹操、之に振威將軍を加ふ、劉備の成都を圖むや璋出でゝ降る。

〔此豈口傳耳受云云〕　「此」は伊尹・太公以下諸葛孔明までを指す。これらの人々は、その計畫を、たゞ人から聞いて、ひよつとしたらうまくゆくかも知れぬとためしに實行したのではない。皆仕官する前から十分計畫してをつたことを實行したのだの意なり。

「嘗試」は二字一意なり、漢文にはかゝる用法あるなり。「將又」「盍何」「既已」等の如きも是なり。

豈―者設反語なり。

以上、古之君子より德倖其成者設までは、古の君子の功を成す、必すその素定に出づることを述ぶるの序論となす。

〔天聖〕　仁宗の年號九年間つゞく。

文范公、天聖六年母を喪ひ、同六年萬言書を上る。

〔居ニ太夫人憂一〕　母の喪に服するをいふ。

太夫人とは、もと、諸侯の家に於て、父死してその後を襲げる子が其母を稱する語なり、漢書文帝紀の註に列侯妻稱ニ夫人一、列侯死、子復爲ニ列侯一、稱ニ太夫人一とあり、然るに後には官僚あるの人、その母、又は祖母に封贈せらるれば之を太夫人といへり。范公位賞きに及びその母謝氏、吳國夫人を贈られたり故にかくいへるなり。勿論こゝは蘇東坡が范公の立場から范公の母をかくいひしなり。

居喪の喪は喪なり。

〔執政〕　政柄を執持する人。

〔無ニ出ニ此書者一〕　將となり執政となりて後行ひし所皆、此書(萬言書)の範圍に出でず。即ち後に行ひし所は皆、萬言書を上りし頃より既に胸中に藏せるなりとの意。

〔其於ニ――一〕　「其」は范公を指す。

〔雖ニ弄翰戲語一率然而作一〕　慰み半分の語を不用意に作つても。

弄翰の翰は筆なり。筆を弄びたる作、戲語はたはむれのことば。

「弄翰の戲語」に非ず。率然は、にはかなる貌、不用意の貌、又あわてる貌、こゝは別に想を練つたわけではなく、ふと不用意に作つたものでもの惡なり。尙、率は朔律切音ソツなれども慣用音はソツなり。

〔必歸ニ於此一〕　きつと仁義樂禮忠信孝弟等の道德的のことに歸著する。

〔有レ德者必有レ言〕　德の備はれる者必ず善言あるをいふ。

論語、憲問篇に「子曰有レ德者必有レ言、有レ言者不ニ必有ニ德一」とあつて、朱熹は「有レ德者和順積レ中、英華發レ外」と註し、安井息軒の集說には「有レ言與レ有レ德對、謂レ有ニ善言一也。有ニ善言一而直云レ有レ言者猶、謂レ有ニ賢子一爲レ有レ子稱レ有ニ人才一云。有レ人耳」と說けり。

〔非レ有レ言也、德之發ニ於口一者也〕

故意に善言をなすのではなく、內にある德が口から發したものが自然善言となるのだ。これは東坡が孔子の言を解釋して范公の場合即ち是なりといへるなり。

〔我戰則克〕　禮記、禮器篇に「孔子曰、我戰則克、祭則受ニ福一、蓋得ニ其道一矣」とあり。「祭則受ニ福一」の句はこゝでは副貳的に出されしのみ、直接の關係なし。

〔非ニ能戰一也、德之見ニ於怒一者也〕

この句も東坡が孔子の言を解釋せしなり。見は現と同じ。范公嘗て將となりて西夏を討ちし時、邊人の畏れ服する所となりしことあればいふ。

教授上の注意

一、この文中に現れたる范公の事蹟によりて、人はすべて平素より絕えず己を修め己を養ふべきものなることを十分感得せしめられたし。

一、方今動もすれば感覺的描寫のみが文學にして仁義道德を扱へるもの文學に非ずと思惟する者あれども、そは皮相の見のみ、最も偉大なる文學は最も深き人間の精神生活を本とすべきものなり。仁義道德のこと固より人の精神生活の根柢より芽生えたるものなればその文學に取扱はるべきこと當然なりといふべし。但しこゝに所謂仁義道德を以て形骸化せる一の形式的行動のみと解すべからず。本課末段の「雖弄翰戲語、率然而作、必歸於此」の解にあたり、必ずや文藝熱に浮かれる生徒の質問あるべきを慮りこゝに一言以て、教授者各位の注意を喚起しおく次第なり。

一、豈非嘗試之細也哉。此豈口傳耳受……者哉。の用法により豈を用ひたる反語の形式を復習せしむべし。

一二　送溫處士赴河陽軍序

要旨

古來送序中の名篇として人口に膾炙せる此の文を授け篇法の妙味を覺らしむ。

作者

韓退之名は愈、退之はその字、世に昌黎と稱するは、其先世昌黎に居りしと、宋の元豐中昌黎伯に追封せられしとに因る。退之人となり明敏果毅、言を發するに畏避する所なく、慨然として名教を興起し節義を弘奬するを以て己が任となせり。その學六經百家通せざるなく、その文潔く本始を探り、六經史子に根本し、聖人の道を以て宗となす。かの六朝四六の弊習を一掃して所謂文八代の衰を興せる功決して沒すべからず。卒して文と謚せらる。

出所

文章軌範、唐宋八大家文讀本に出づ、これらの解說は第七課第十一課出所の條參照。

解釋

〔伯樂〕　古のよく馬を相せし人。

秦の穆公の時、孫陽なる者あり、善く馬を相す。天上に伯樂星あり、天馬を主典するにちなみて、人、彼を稱して伯樂といへり。戰國策に「楚客謂春申君曰、背者臨鑿駕鹽車上吳坂遷延負轅而不能進、見伯樂仰而鳴之、知其知己也」とあり。韓退之の雜說にも「世有伯樂、然後有千里馬」とあり。

〔冀北〕　冀州の北部なり、冀州は古の九州の一、今の河北、山西の二省及び河南省と滿洲との一部分にあたる。この地方古、良馬の產地として名あり。左傳昭公四年に「冀之北土、馬之所生」とあり。冀北良馬を產するが故に良馬を產といふなりとの說ある位なり。

〔多於天下〕　天下中の馬より多い。

一說、多於天下と讀みて天下中に在りて最も多いと解す。後說是なり。

〔安〕　焉、惡、烏と同じ、どうして、いかにして、何ぞやとて。「焉能」はどうして出來ようぞ。

〔解之者〕　解は解釋なり「之」は「伯樂一過…馬群遂空」の語をうく。

『伯樂一過……馬群遂空』……提案。

『夫冀北……空其群耶』……反駁。

『解之者曰……不爲虛語矣』…解釋。

此皆作者の自問自答なり。

〔過其良輒取之〕　良馬にゆきあひさへすれば、ちきに取去るので。

「過」はふと折よくあふ、（又、折あしくあふ）こと。輒（輙は俗字）ははやすぐ、とりあへず、ちきに、そのたびごとにの意。その時間に關係せることは「卽」と近くして而もその間自ら差あり。「卽」は、卽時に、そのまいすぐする意にて或一回の動作に就いて言ふも本體とすれど、「輒」は動作の起る度に毎回無造作にする意あり。又「卽」は時處位を通じて不轉動を示し得れど、「輒」は時の關係に於てのみ用ひらる。

〔群無留良焉〕　「焉」は上の「群」をはねかへして受け、句の末にありて調子を整へる作用を有す。必ず生かして見るべし。「群」といひ、又「焉」といひて之を受くといはゞ、重複の如けんも、英語の There の用法と考へ合はさば疑念忽ち氷解すべし。この句「群無留良焉」と訓讀せば右の意を十分あらはし得ん。

〔不爲虛語矣〕　うそではあるまい。

以上第一大段。譬喩を以て文を起す。伯樂は烏公の影子、冀北は東都の影子、良馬は人材の影子なり。その突兀なる起筆に十分注意せられよ。

〔東都固士大夫之冀北也〕　東都は河南省洛陽なり。唐高宗顯慶二年十二月丁卯洛陽を以て東都と爲す。士大夫は人材をいふ周代官吏に公・卿・大夫・士の階級ありしにより、一般官吏のことを士大夫といへり考工記に「作而行之、謂之士大夫」とある如き是なり。それより更に轉じて人材の意となる此の用例是なり。

この一句は譬喩と正文とを連繫す。

〔恃才能深藏而不市者〕　自分の才能に自信ある爲、自重して、容易に職を求めない者。

「深藏」は深くしまつておくこと史記老子傳に「良賈深藏如虛、君子盛德、容貌如愚」とあり。

「市」は寶品となすなり。現今の所謂就職運動と併せ考へなば興味あらん。

〔石生〕　名は洪、字は濟川、洛陽の人、明經科に擧げられ黃州錄參軍と爲りしが、罷めて後東都に歸り、隱居して出でざること十餘年、烏重胤、河陽の節度使となるや賢者を求め石洪を得たり、乃ち之を以て參謀となす。生は先生の略。韓退之に「送石處士序」あり、この序と併せ讀まば一層得る所あらん。

〔溫生〕　名は造、字は簡典、父佶、安祿山の亂の時、平原太守顏眞卿を助けて功あり造、委表魁傑、性詩書を嗜み、盛氣陣屈せず、東たるを喜まず、東都の王屋山に隱れ慨然として高世の志あり。河陽節度使烏重胤、禮を以て聘してその幕下に致す。この文はその幕下に就かんとせし時の送序なり

〔大夫烏公〕　烏公、名は重胤、字は保君元和五年、河陽郡節度使御史大夫となる。

彼はよく赤心上に奉じ、下と甘苦を同じうし、至る所功を立て、未だ嘗て矜伐せず、賓僚を待つに禮を以てせしかば、名士之に依る者多かりき。

御史大夫たりし故に大夫烏公といひしなり。唐の御史大夫は御史臺の長官にして專ら彈劾のことを掌れり。

〔以鈇鉞鎮河陽之三月〕　河陽軍の節度使となつてから三月程して、

鈇鉞はをの、まさかりの類、鈇は斧なり、鉞は大斧なり。禮記、王制篇に「諸侯賜弓矢、然後征、賜鈇鉞、然後殺」とあり。賜鈇鉞とは天子から生殺の全權を與へらるゝなり。こゝは節度使となりて一軍の全權を握れるにいへるなり。之三月の之はより、から等譯して可なるべし。

〔以石生爲才〕　石生をば才士であると思つて、才士だと認めて。

〔以禮爲羅〕　禮を厚くして招聘した。

羅はあみ、鳥を網で捕るやうにひきよせるなり。一説に野馬を捕る時網を被せ取るに喩ふと。前段馬の喩に緣故ありて面白けれど、果して實際にかゝること行はれしや否や詳らなす。この以―爲―は手段とする意なり。前句の用法と異り、注意せられたし。

〔羅而致之幕下〕　この羅は動詞、致はひきよせるなり。之は石生、幕下は幕府と言はんがごとし、將軍の帷幕の下。「羅致」の熟語を併せ授けられよ。

〔未數月也〕　この一句、今假に普通に從ひ、下方につけて讀み置きたれども、實は石生を羅致してからまだ數ヶ月にもならないのだ。と一度斷定して、それだのに早やや又溫生に目をつけてと、何如にも烏公の人材を求むるに急なる意を表はせるなり。「也」の一字をよく玩味せられよ。

〔於是〕　この二字を加へて溫生がこの文の主にして石生が客たるの輕重の區別を明にせり。試に「於是」の二字を省いてみられよ、主客の別つかざるべし。

〔朝取一人焉〕　焉は東都をうく。朝といひ暮といへるはその頻繁なるをいふ。

〔拔其尤〕　拔は拔擢。尤は最なり。最もめだつもの。第一等の者。莊子、徐无鬼篇に「夫子物之尤也」爾、尤にとがむの訓あり六課中庸鈔に出づ。

二の拔其尤の句は第一大段の遇其良輒取之に應ず。尤を拔きとられし故に次の種種の不都合を出來す。

〔居守河南尹〕　居守は留守居役、天子西都に在る故東都にこの役を置く。もと天子巡幸中、重臣を以て居りて留守せしむる意なりしに唐には官名となれり。尹は道の長官、こゝは「居守」といふ官と「河南尹」と兼官なり。元和三年、河南尹鄭餘慶を以て東都留守となす。

〔百司之執事〕　百司は諸官署、執事は屬官、役人。

〔吾輩二縣之大夫〕　二縣は河南縣・洛陽縣、大夫はこゝは行政官の意、時に韓退之河南の縣令たり。

〔政有所不通、事有所可疑〕　所不通はわからぬこと。所可疑は疑はしいことなり。

〔奚所諸而處焉〕　何處へいつてそれらの事を相談して處置しようぞ、相談相手

がなくなる。諸は相談すること。處は處置焉は上の不通ること可疑きこと。

〔士大夫之…巷處者〕　退職官吏。

この士大夫は役人。巷處は巷に處ること、役所にあらで、町に居るなり。

〔誰與嬉遊〕　誰與は「與誰」と書かざるを原則とす。與はトなり、トモニに非ず。

〔小子後生〕　小年、後進。

〔於何考德而問業焉〕　何人の所へ行つて道德を研究し、學業を質問しようか。

於何は何於とかゝざるを原則とす。但、何以、何爲等は以何、爲何とはならず。而は又・且と同じ。焉は何なうく。

〔縉紳〕　朝臣、身分高き官吏。縉は搢と同じ、挿なり。紳は大帶。晉書輿服志に「笏、古者貴賤皆執笏、其有事則搢之於腰帶、所謂縉紳之士者、搢笏而垂紳帶也。」

〔無所禮於其廬〕　東都處士の處に敬意を表する家もなからう。

自居守河南尹云々以下こゝ迄は、溫生、石生（溫生が主）があらゆる階級にとりて不可缺の重要人物なりしことを言ひ、次の東都處士之廬無人焉の語を下す準備をなすと共に第三大段其何能無介然於懷耶の伏線をなす。

〔大夫烏公一鎮…無人焉〕　この一句

この篇冒頭の伯樂一過冀北二面馬群遂空に應す。

〔南面聽天下〕　天子となつて天下を治める。

南面は陽に向ふの義、天子の位をいふ。聽天下は天下の政を聽くなり。易、繫辭下に「聖人南面而聽天下、嚮明而治。」

〔其所託重而恃力者〕　其は南面而聽天下人。託重は重任を託すること即ち下の相に當る、恃力は武力を信賴することと。即ち下の將に當る。

〔得人於朝廷〕　人物を朝廷に集める。

〔求內外無治〕　內は相にかゝり朝廷。外は將にかゝり地方。內外の治る無きを欲するものなり。內外求無治と混同すべからず。

〔縻於茲〕　この場所にくくりつけられてゐて。

縻は、牛馬をひくきづななり。第一段の馬の喩を想起せられよ。

茲はこの場所、即河南令たるをいふ。

〔自引去〕　自分勝手に自分の身體を引き去るなり。

〔資二生以待老〕　資はたすけとして賴むこと、たよりとするなり。以は二生をたよりとすることそれによつてなり、待老は月日を送ること。

〔介然於懷乎〕　心中怨めしく思ふ。

介は介在の介、介然は物のはさまる貌、懷は心中。

〔以前所稱〕　夫南面……求內外無治不可得也。

〔以後所稱〕　愈縻於茲……無介然於懷耶。

〔致私怨於盡取也〕　たよりにして居た人材をすつかりとりあげたについての不平を其非傳へてくれよ。

致は己の方へひきよせることにも用ひ、こちらから他人の方へひきよせることにも用

ふ。

〔四韻詩〕　律詩をいふ。四ヶ所に押韻するを以てなり。第九課登二岳陽樓一の教授上の注意參照。

教授上の注意

一、譬喩あり、議論あり、叙事あり、變化曲折、而も決してその本旨を逸せざる篇法の妙を了解せしめ、生徒作文の參考とせしめられたし。

一、本篇の如きは暗誦せしむるをよしとす。

一三　送二安井仲平東游一序

要旨

前課と關聯して送序の一體を讀解せしむると共に安井仲平の災患に遭ひて屈せず、困苦に處して撓まず、明敏の質を以て孜々勉學せし事實により、生徒をして深く反省せしむ。

作者

鹽谷世弘、字は毅侯、宕陰と號す、江戸愛宕山下に生る、十六歲にして昌平黌に入り嶄然頭角を現はす、後、濱松侯の文學となり、晩年徵されて幕府の儒官となる、慶應三年疾を以て卒す、年五十有九。其學は經を經とし史を緯とし以て實用を主とす、又、文を以て名あり一篇出づる毎に人爭うて之を傳誦せり、著す所甚だ多し。

出所

宕陰存稿十三卷、あり、この文は卷三に出づ。

解釋

〔安井仲平〕　名は衡、仲平はその字、息軒と號す。日向國飫肥の人、壯にして江戸に出で、昌平黌に學び、又松崎慊堂に從ふ後、昌平黌の教官となりしが、辭してその徒に授く。明治九年歿す。年七十八。著す所多く、「論語集說」・「管子纂詁」・「左傳輯釋」・「息軒遺稿」等有名なり。

〔嘗觀二於當今之學徒一〕　觀は觀察なり　遂二一患一嬰二一災一則捏焉に至る迄の文、すべてこの「觀」の一字より生ず。

〔庠校〕　說文に、「禮官養二老、夏曰レ校、殷曰レ庠、周曰レ序」とあり、孟子、滕文公篇に「設二爲庠序學校一以教レ之」とあり。庠校共に古の地方の學校なり。こゝはたゞ學校の意に用ふ。庠は似陽切音シヤウ。

〔孜孜〕　勤勉なるさま。せつせと。孳々と同じ。書經、益稷篇に、「予思二日孜孜一」

〔倦焉〕　焉は於是なり。そこで、さうなると。

〔畜二妻子一〕

寄〔許六切キク……やしなふ、かふ　丑六切チク……たくはふ（蓄と同じ）　許救切キウ……家畜〕

〔獲祿位〕　出世するなり。祿は俸給、位は官位。獲は物を手に入れること。「得」は獲と同様の意味に用ひらるゝ外、抽象的得失の得、精神的内部的にうること及び可能の意味に用ひらる。

〔嬰一災〕　嬰（エイ）はめぐる、まとふとも訓ぜらるゝにて知らるゝ如く、ひきまとはつてはなれぬなり。

〔挫焉〕　挫は挫折・頓挫の挫なり。すつかりへこむこと。倦―衰―廢―挫と次第にその程度を増せる字法に注意。

以上第一段學生の四階級を提示し中道にして學を廢する者多きないふ。…「親」の一字より派生す。）

〔蓋其退座云云〕　以下第一段の四階級に就き自己の考を以て解剖を加へるなり。故に蓋の字を以てはじむ。蓋はおもふに、…ならん、の意、この「蓋」の字「其氣不剛者也」までかゝる。「蓋」字と四「也」字との呼應に注意。

〔其志小者也〕　志は理想のこと。

〔其器狹者也〕　器は器量、器分の器にて才能のこと、器小者といひてもよきなれど上に志小といひし故文字を變へて狹字を使ひしなり。

〔氣不剛〕　氣は意氣、活動力。剛は柔の反對、勁く壯なること。

以上四種の人々は多少程度の差こそあれ、要するに凡人なるを免れず。

〔吾觀於當今之學徒衆矣〕　冒頭の句と應ず。而も「衆矣」の二字を加添し出して、衆多の學徒悉く凡俗の域を脱せざる意を含ましめ、その中に獨り安井仲平のみは非凡なりとの意を強調せんとす。この作者の用意を十分玩味せらるべし。衆矣の矣はナリ、ニテアル、デアル、の意にて「也」のヤ、ダとあつさり斷定を下してかたつけゆく氣味あるに對し、感慨の意を寓し反覆確認する氣味あり。矣・也の差十分玩索せられよ。

〔其志小者也〕　志は理想のこと。

〔其器狹者也〕　器は器量、器分の器にて才能のこと、器小者といひてもよきなれど上に志小といひし故文字を變へて狹字を使ひしなり。

〔氣不剛〕　氣は意氣、活動力。剛は柔の反對、勁く壯なること。

以上四種の人々は多少程度の差こそあれ、要するに凡人なるを免れず。

〔吾觀於當今之學徒衆矣〕　冒頭の句と應ず。而も「衆矣」の二字を加添し出して、衆多の學徒悉く凡俗の域を脱せざる意を含ましめ、その中に獨り安井仲平のみは非凡なりとの意を強調せんとす。この作者の用意を十分玩味せらるべし。衆矣の矣はナリ、ニテアル、デアル、の意にて「也」のヤ、ダとあつさり斷定を下してかたつけゆく氣味あるに對し、感慨の意を寓し反覆確認する氣味あり。矣・也の差十分玩索せられよ。

〔未多觀也〕　觀（コウ）はみる、あふと訓ず、見つけあふこと。希觀の語あるにても知らるゝが如く容易にみつからない場合に用ひらる。

こゝに至りはじめて安井仲平を提げ來り本題に入る。

以上第二段、四階級の學生は何れも平凡の域を脱せざることを論斷す。

第一段と第二段とに於ては同樣の文字を巧にあしらひ、互に相呼應せしめつゝ層を追うて、論旨を發展せしむ。句法篇法に十分注意あれ。

〔眇（ビウ）然小丈夫〕　貧弱な小男。

眇然は小さいさま。史記、孟嘗君傳に「今視（シ）之乃眇小丈夫耳」

〔寢陋（シンロウ）〕　寢は風采の揚らざること、陋は品なきこと。

〔歳之甲申〕　きのえ　さるの年に。こゝは文政七年に當る。時に仲平二十六歳。因に十干十二支を記さん。

十干	甲	木兄（エ）……キノエ	
	乙	木弟（ト）……キノト	
	丙	火兄……ヒノエ	
	丁	火弟……ヒノト	
	戊	土兄……ツチノエ	
	己	土弟……ツチノト	
	庚	金兄……カノエ	
	辛	金弟……カノト	
	壬	水兄……ミヅノエ	
	癸	水弟……ミヅノト	
十二支	子		
	丑		
	寅		
	卯		
	辰		
	巳		
	午		
	未		
	申		
	酉		
	戌		
	亥		

干支相配して各年に配當す十と十二の最小公倍數は六十なるが故に六十一年目にはもとの干支にかへる、之を還暦といふ。

〔居三年〕　普通、漢文では「居何年」といへば何年經過することを意味すれど、こゝの用法は、居は昌平黌に居ることを意味す

〔矻矻（コツコツ）不少懈〕　矻矻は孜孜と同意、勤勉の貌、懈（解）は勤の反對、精を出さぬこと、油斷すること。

〔眼透紙背〕　視力が紙のうらまで透る讀書の理解力の鋭いこと。眼光徹紙背ともいふ。

〔識慮高卓〕　見識思慮がとびぬけてすぐれて居る。

〔出人意表〕　議論する時、とても他人の思ひつかぬすぐれた意見を出す。意表は意外なり。

〔畏事之〕　うやまひつきあふ。畏は畏敬、畏友等の畏にて敬意を拂ふこと。事は兄事の事、事の字を使ひたるは作者が謙遜したるなり。

〔歳數次必有書至〕　數次は數回。書は書翰、書牘の書、手紙。生徒は書といへば必ず書物のことと解する傾向あり、明瞭に區別して授けらるべし。

〔僻（ヘキ）壤〕　邊鄙な土地、片田舎、僻、芳辟切偏すること。匹智切、音ヒの時は避と通じさくること。壤は土地。

以上第三段、仲平學に在りて勤著し、庠を退きて倦ざるをいふ。

〔僉云〕　僉は皆なり、主として古代に用ひられたり。

〔少時孤介短於容人〕　孤介は孤特狷介（介も特なり）、ひとりぼつちで心の狹きこと。短於容人は孤介の性質の外に表はれたるものなり。短は短所の短、かけて居ること。

〔直而平・方而恕〕　正直にして公平、方正にして寛恕。

〔接衆諧和〕　皆の衆とつきあつてなりあひがよい。

〔闔藩（カフ）〕　闔は全なり、闔家、闔國の闔。

〔所建白切時務〕　申し上げることがその時の急務に適切なことばかり。

〔而講學則益勤矣〕　講は研究。藩に仕官して著績あることを推賞し、而も最後に「而講學則益勤矣」の一句を加ふ。以て獲祿位而不廢を明にす。この一段は藩士の言を藉りて仲平の鄕に仕官して而も學に勤むることを述ぶ。益勤矣。」とカギ二つなかるべからず、教科

書本文」を脱せり、補はれたし。

【間從其君】　間は、このごろと訓す間者も同じ、近頃は。

【祇役江戸】　祇は祇敬の祇つゝしむこと、祇役はつゝしんで君命を奉じ他所へ赴くこと。こゝは江戸勤番にあたりしことをいふ。祇と祇(くにつかみ)と混ぜざる様注意。

【湫隘樸陋】　低く狹くそまつできたない湫は土地の低くくぼめるに言ふ。左傳、昭公三年「湫隘嚣塵、不可以居」とあり。湫隘は主として屋敷に就いていひ、樸陋は主として建物についていふ。

【烱烱】　烱はあきらか、耿と同じ、烱々はきらきら、かつかつと光る貌。

【時從師友出其新得】　時に師友の所でその新得の意見を披露する。從は就なり、その許に就くこと卽ち訪れること。

【輒卽】　二字にてすなはちと訓す、輒一字なるも同意、「既已」と同構成の複合語、輒に就いては第十二課輒取之の條參照。以上五段、江戸に祇役して獨學に勤むるをいふ。

【戊戌歲】　つちのえいぬ、天保九年に當る。戌の字戌(人が戈を持つにて、まもる意となる)、と混ぜざる様注意。

【辭官挈家】　藩の役目を辭職し、家族をつれて。

挈は(1)苦結切、ケツ、ひつさゞ。禮記、王制篇、「斑白者不提挈。」

(2)諸計切ケイの時は契に同じ意となるなれど、(1)の意の時も普通ケイと發音す。

【貧財蕩盡】　きのみきのまゝとなる。蕩はほらふと訓す、すつかりなくすること蕩盡はすつかりつかひはたすことなれど、こゝは火事にあひたるなれば右の如く譯せり。

【季女又病痘夭】　末の娘が天然痘(はうさう)にかゝつて早死した。又はかていくはいへてなり、火事にあうて一年もたゝぬに、又その上にの意なり。

【離桑梓】　桑梓は故郷のこと、詩經小雅小弁篇に「維桑與梓、必恭敬止。」とあり、古、五畝の宅墻下に桑梓を植ゑて子女に遺す、今、父の植ゑし所の桑梓を見て、子必ず恭敬すといふ意なり、是より轉じて故郷の意となる。

【孑然僑居乎三千里外】　孑然は獨立の貌、こゝは親戚故舊を離れたるにいへり。僑はかりずまひ。

【竈突未黔】　居を定めてまだ十分おちつかないうちに。

竈突はかまどの煙突、黔はすゝける。韓退之の諍臣論に「孔席不暇暖、而墨突不得黔。」(孔席は孔子の席、墨突は墨子の家の煙突)

【累逢不虞之難、人倫之變】　累はつづけざまに。不虞はおもひがけなきこと、(虞は度なり、)前文の逢火をさす。人倫は五倫のことなれどこゝは五倫の關係にある者卽密接の關係に在る者の意にて、人倫之變は、近い關係の者の變化、卽ち前文の季女の夭をさす。

【讀書日必盈一寸】　盈寸とは一寸位の厚さとなること。毎日必ず一寸位の枚數を讀みしとなり。今の小說雜誌を讀むと同一視すべからず。

【俛焉刻厲】　俛焉は勉焉と同じ、勉める貌、刻厲は刻苦勉勵なり、厲は勵に同じ。

【不知頭之將蒼】　年とるのにも氣がつかない。

蒼は白髮まじりの色、(少し青色がゝりて見えるを以てなり。)この邊の文は論語子罕篇の「其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至」に倣へるものならん。

【此豈今世之士哉】　今頃珍らしい人ぢやわい。

今世は今の世、こんなゑらい人はとても今の世の人ではない。古の人だ。(尙古的な考へ方から言へるなり)

以上第六段、仲平の職を獲て學を廢せぬどころか、學の爲に職を辭し、しかも常人の忍ぶべからざる患に打克ちて愈學に勵むことを述ぶ。

【心計】　心中にて計算すること、暗算。

【古人云性敏者云々】　宋の朱熹の言なり。論語公冶長篇「子貢問曰、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也」の朱註に「凡人性敏者多不好學、位高者多恥下問、故謚法有以勤學好問爲文者、蓋亦人所難也」とあり。

【格致日新】　知識が日に日に進む。

格致は格物致知の略、第五課參照。日新は日に進歩すること、大學に「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」

【識度日躋】　見識が日に日に高くなる。

識度は見識度量。躋はのぼる。

【待之有備】　待は備へること用意すること、備は準備せる物をいふ、不虞之變に備へて貯蓄などあるをいふ。

【確有成算】　たしかな見込を立てる。

成算は豫めたてたはかりごと。胸中に計算が出來上ること。

【謂非今世士非譽也】　前段末の此豈今世之士哉と呼應す。

以上第七段、仲平性敏にしてよく學を好むことをいふ。

【於算最賸】　賸は當の或體なり。當は盲なり。

【治產無檢】　財產を處分するにしまりがない。

檢は孟子の「狗彘食人食、而不知檢」の檢と同用法にて、しめくくる、とりしまること。

【栖栖】　いそがしき貌、猶皇皇のごとし、論語憲問篇に「丘何爲是栖栖者與」

【殆乎耗】　殆はほとんどと訓ぜられあやふしと訓ぜらるゝにても知らるゝ如く、すんでのことで、今すこしで惡しき結果を來す場合に用ふ。耗は(1)虛到切、カウ、へること。(2)莫報切、バウ、モウ、みだること、こゝは(1)の意なり。

【妻孥】　妻子なり。孥は又帑に作る妻子のこと。

【無狀】　功狀の無きこと、又亡狀に作る。史記、夏本紀に「縣鯀之治水無狀」

【汨埃】　汨は一滴の水、埃は一筋の塵。

以上八段作者の仲平に及ぶ能はざることを言ひて益〻仲平の非凡なることを稱揚す。

〔季夏〕 晩夏と同じ陰暦六月頃。夏を孟夏仲夏、季夏に分つ。春、秋、冬も推して知るべし。

〔刀禰河〕 利根川。

〔軼北總〕 軼は夷質切、イツ。すぐと調す、車で走りすぎる、すぎこす、通りぬけること。北總は下總のこと、上總を南總といふに對す。

〔水府〕 水戸の雅稱、府は都なり。

〔松洲〕 松島、洲は島なり。

〔衣川〕 岩手縣膽澤郡にあり、後三年の役に安倍輒時・貞任等の據りし所、その後藤原秀衡・泰衡・此に據り源義經の來り投ぜし所。

〔高館〕 岩手縣西磐井郡にあり。泰衡、義經の古蹟。

〔陳蹟〕 古跡のこと、陳は古なり、蹟は跡と同じ。

以上第九段、仲平の壯遊を記し、それにより學の益〻進まんことを期待す。

教授上の注意

一、前課の送序が直接當人の事を記さず始終副貳者と共に記されしに對し、本課はその記述を常に當人に集注す。その結構根本より異れることに注意せしめられたし。

一、生徒をして、仲平の勉學の態度を觀て深く反省せしむべし。

練習

予接於天下之士多矣、獲友二人曰濱松鹽谷毅侯、曰熊本木下士勤。自予之友是二人也、日日加レ明、耳日加レ聰、而二人者亦不予鄙棄也。每暇日一相聚、談レ經論文、究其底蘊醉レ焉則盤礴於一室、善謔互發、歌呼嗚嗚。自謂天下之樂、莫以加焉。既歸、家人輩必逆謂曰「君亦自鹽木二子來耶、何其喜氣之多也。」其親好蓋如此。

木下士勤、名は業廣、子勤はその字、通稱字太郎後眞太郎と改む、犀潭と號す、熊本の儒者、慶應三年歿す、年六十三。

盤礴、又槃礴に作る、箕踞と同義、兩足を前に投げ出し箕の如くに坐すること、莊子、田子方篇、「公使人視之、則解衣槃礴」

息軒遺稿、四卷あり、この文は卷二、送木下士勤序より採る。

一四　永州游記

要旨

柳宗元獨擅の游記文を讀解せしめて、勁拔の文氣渾然天工の如き描寫の妙を覺らしむ。

作者

柳宗元字は子厚、唐の河東の人、少くして精敏絶倫、最も詩文に長ず、進士に第し貞元十五年監察御史となる。後、王叔文の事に坐し永州司馬に貶せられ、元和十年柳州刺史となり、同十四年卒す、年四十七。その文は古來韓退之と並稱せらるもその間自ら差あり、韓は儒教に專にして、柳は佛を雜へ、韓は經に本づく所多く、柳は尤も史子に力を得たり、而して韓の得意とするは主として論說にあり、柳の長ずる所は記にあり。就中その游記はたゞに唐代に冠絶するのみならず。古今未だその比を見ざるなり。

出所

柳河東集、唐宋八大家文讀本。

題名

柳宗元永州に在りて作りし游記に有名なるもの八つあり、世に之を永州八記と稱す。今その中より三篇を選び、假に永州游記と題す。

「記」に就いては七課岳陽樓記 題名 の條參照。

解釋

一　始得西山宴游記

〔西山〕 今の湖南省、零陵縣（昔の永州府治）の西、清水・湘水合流の畔に在り。

〔僇人〕 僇は戮に同じく辱なり、僇人は罪人をいふ。柳宗元時に罪を獲て永州司馬に貶せられ居たればいふ。

〔是州〕 永州をいふ。永州は府の名にして長沙の西南六百六十支那里に位し、南は九疑山及び都龐・萌渚の二嶺に據り、湘・瀟の二水、府城の西北に合流す。湖南・廣東の兩省、水陸交通の門戸に當り、要害の地を占む。漢の時、零陵郡を置き、隋、唐、宋

時代には永州府といへり。元、路となせしも、明、復び府となし、清之に因て湖南省に屬せしむ、民國廢す、今の零陵縣は其舊治なり。

〔懼惴〕 一本懼慄に作る。惴々はびくびくする貌、こゝは識を憂へ識を畏れるなり、詩經、秦風黄鳥篇「臨二其穴一惴惴其慄」

〔其隳也〕 其は吾を客觀的に稱せしなり隳は陸(隋は俗字)の古文、間暇なり。管子七臣七主篇「故上帷則隳不」計」

〔施施〕 徐行の貌、そろ〳〵と歩く。詩經王風、丘中有麻篇、「將二其來施施一」又喜悅の貌、孟子、離婁下「施施自外來」。こゝは前者の意。

〔漫漫〕 緩漫の貌、ぶらぶらと

〔窮二廻溪一〕 まがりくねつた谷川を探檢する。

〔無二遠不一到〕 どんな遠い所でも到らぬ所はない。遠いからやめる、といふことはない。

〔披二草而坐一〕 草をかきわけて坐る。

〔意有所極夢亦同趣〕 自分の意に極めて滿足する所あつて睡れば、同じく滿足した夢をみる。本集にはこの句の上に「臥而夢」の三字あり意一層明なり。

〔更相枕〕 更はたがひに、又はこもごもと訓ずべし。張衡の賦に「祕舞更奏」とあり。

〔覺而起〕 目が覺めてたちあがる。

〔起而歸〕 「其隳也」はこゝ迄かゝる。かく常に遊びに遊びける故、自分勝手に次の如くきめこんでゐたといふのが次の自以爲云々なり。

〔怪特〕 奇怪特異、形がめづらしくてすつくととびでてゐること。

以上第一段 西山の怪特を記ぜんとして、先づ從前遊びたる山水も決して普通のものならざりしことを叙す。是れ西山をして愈愈ひきたゝしむる所以なり。

第二段は「怪特」の二字より生る。

〔今年〕 憲宗の元和四年、宗元三十七歳の時なり。

〔法華西亭〕 法華寺の西にある小建築物宗元に「法華寺新作二西亭一記」の文あり。

〔湘江〕 湘水なり。廣西省興安縣の南、海陽山より發し、東北流して縣の境を貫いて湖南省に入り、零陵城の西に至りて、東南より來れる瀟水を納れ東北に曲折して洞庭湖に注ぐ。

〔緣二染溪一〕 染溪をつたひ。染溪は永州府城の西南に在り、冉溪とも書く、宗元之に愚溪と命ぜし事、その愚溪詩序に見ゆ。

〔斫二榛莽一〕 斫はきり倒すこと、榛莽は雜草雜木の生ひ茂りたるをいふ。唐書馬燧傳に「乃令二士無一動、命除二榛莽一。廣百步爲一場。募二勇士五千人一陣而待。」

〔茅茷〕 茷は草の茂れること。茅茷はかやのしげり、かやぶなり。

〔窮二山之高一而止〕 山の絶頂まで雜木雜草を掃つた。

〔攀援而登〕 岩角木の根などを手寄りによぢ登る。

〔箕踞而遨〕 箕踞は兩足を伸して坐し、其形箕の如くにするをいふ。漢書、陳餘傳「高祖箕踞罵詈、甚慢一之。」の註に「箕踞者、謂二伸一兩足一而坐、其形如一箕。」

尙、箕踞は兩膝を抱いて坐するをいふことあり。高市謐の高士傳に「箕踞抱一膝」唐子西の箕踞軒記に「箕踞者山間之容也。拳一膝一屑抱一膝而危坐。佩僅蹲跗、其圓如一箕。故古人謂二之箕踞一。」とあり。前說普通に行はる。遨は遊なり。

〔在二衽席之下一〕 衽は衽と同じ、しとね即敷物のこと。衽席もしきものこと。禮記、坊記篇に「衽席之上、讓而坐」とあり。こゝは眼下に見ゆるをいへるなり。

〔其高下之勢……外與一天際一、四望如一一〕 この文字は衽席之下に在る數州の土壤を細叙するなり。輕山陽はこの數句を評して、「高下之勢以下九句、古今詩文叙二遠望臨瞰之狀一者、莫レ盡二於此一、莫レ妙二於此一。」といへり。

〔岈然〕 山の深き貌。こゝには山高き貌に見るべし。

〔洼然〕 水深き貌。くぼみたる處をいふ。洼は窪に同じ。莊子齊物論に「似一注者、似一汙者。」福子方言に「洼、洽也、自一關東或曰一洼、或曰一氾。」岈然は上の「高下之勢」の高を受けて、山の聳立せるをあらはし、下の「若一坪一」に應じ、洼然は上の「高下之勢」の下を受けて、下の「若一穴一」に應じ、山谷起伏の狀を形容せり。

〔坪〕 ありづか、土地の小高きをいふ。孟子、公孫丑上「泰山之於二丘垤一」

〔尺二寸千里一〕 千里もある廣さの所を一尺一寸位に縮めて見せる。

〔攢蹙累積〕 あつまりかさなること。攢は集、蹙は縮。廣く遠い山々も一眸の下に集まり縮まつて、近いのは低く、遠いのは高く、山の積み累ねられたやうに近く見えること。

〔莫一得二遯隱一〕 眼界を遮れ隱るゝを得るものなき意、卽ち、これらの景があつまりかさなりて見えぬ所とてもないとなり。

〔縈青繚一白〕 山は青をめぐらし、川は白なまとふ。縈はめぐらしと訓じ、繚はまとふと訓ず。

〔外與一天際一〕 そのほては天と接して居る外は景色のはてをいふ。際はまじはるにて接觸するをいふ。

〔四望如一一〕 どちらをながめても右述べたやうな見はらしだ。

〔是山之特出〕 「特」の字は前段末の「怪特」の「特」と呼應す。

〔培塿〕 小さき阜。左傳襄公二十四年に「培塿無二松柏一」。今本部婁に作る。亦通ず。

〔悠々乎與二灝氣一俱云云〕 氣が廣々として大空と交り、其のはてが分らず、となり。我が氣分は無形のものなれば、廣しと思へば、限りなく廣く思はれて、大空と共に際涯なきやうに感ずるなり。

灝は廣なり、大なり、揚子の法言に「商書灝々」灝氣は大氣なり。

以下この景色に對する己の情を叙す。

〔洋々乎與二造物者一游云々〕 前の句と異辭同義なり。心が廣々として、彼の大

自然、卽ち宇宙と交遊して、局限せらるゝ所なし、となり。

かゝるよき氣持故酒もすゝむなり、これ次の記述ある所以なり。

〔引觴滿酌〕　引はひきよせるなり、卽盃をもつなり。觴は盃、盃をとつてなみなみとつぐ。

〔頹然就醉〕　頹然は醉うて體がぐつたりする貌、就はすなはちと訓ず、卽と同じ、晉書、景帝紀、「就加詔許之」

〔蒼然暮色自遠而至〕　薄暗い暮合の色が遠方から段々と近つき。

暮方は遠方から段々と暮れてくる故かく言へるなり。

〔心凝形釋與萬化冥合〕　心神凝固し肉體解散して、造化と一になつたが如く我を忘れる。

萬化は萬物の變化、卽ち天然。冥合は區別なく一となること。

〔吾嚮之未始游游於是乎始〕

今迄にはまだ游らしい遊はしないので、眞の遊は今回からはじまる。

この句は第一段の末なる未始知西山之怪特一の句と照應す。

〔志〕　誌・識と同じ、しるすと訓ず。

二　鈷鉧潭記

解釋

〔鈷鉧潭〕　潭の名なり。鈷鉧はひのし。潭は(1)他含切、音タン、ふかし(2)徐心切、音シン、ふちにてこゝはシンと發音すべきなれど、今、慣用音に從ふ。

〔其始蓋冉水云々〕　この潭のはじまりは、おそらく冉水が南から流れ來て、山石に打當りて東に折れ、末流は勢が鋭く突擊が益〻荒くて涯なかんだ結果出來たものであらう。

其始とは潭のはじまり、卽ち出來はじめなり。抵はいたると訓ず。いたり觸れるなり

其典委の其は冉水、典委は物の重り合ふことないふ、王融の閣賜裘啓に「雲衣降授、仙褐典委」又壤委に作る、舊唐書、「使務壤委、胥吏盈庭」こゝは水の重り合ふにて、末流の意となる。柳河東集には頽委に作る。

盪擊の盪は突なり。

〔故旁廣而中深云々〕　以上の如くして出來た淵故、四邊は廣く中は深く、土は皆流されて石が出てゐる。

これは淵の樣子を叙せるなり。

〔流沫成輪〕　急流の泡がぐるぐる渦を卷いて。

急流が淵へ入りこむ所を叙す。この句極めて巧妙なり。

〔然後徐行〕　それから穩かに流れる。

これは淵の稍〻中の方を叙す。

〔其清而平者〕　その水が澄んで靜な處、者は事物すべてを形式的にあらはす字なり形式的なるが故にその上に必ず內容を供給する語を要す、こゝは處をあらはせり。

〔且十畝〕　且は推量をあらはす、十畝ぐらゐ。もう少しで十畝といふ意に非す。

この邊がひのしの胴體にあたるなり。

〔有樹環焉…懸焉〕　この焉は十畝の所をうく。

以上淵に就いて記す。以下作者の情を叙す

〔其上有居者〕　上はほとり

〔一旦款門〕　一旦は一日と同じ、ある日款は叩くなり、晏子、雜篇「前驅款門」

〔官租私券〕　公の稅金と私の借金、券は證文なり。

〔委積〕　積り重なること。延滯するをいふ少きを委といひ、多きを積といふ。皆聚むるなり。積は(1)子昔切セキーつむ、つもる、(2)資智切シーたくはへ、たくはふ。周禮地官に「遺人掌邦之委積以待施惠」

〔芟山而更居〕　山をきりひらいて住居をうつす。更はあらたむ。

〔貿財以緩禍〕　金にかへてそれで厄拂したい。

貿は交易。かへてと訓む。（卽ち田を買つてくれといふなり）

〔樂而如其言〕　樂は心よく、よろこんで、

〔崇丘臺〕　臺を高く築き、棚干なのぼし、泉を高處へ持ちゆきて鈷鉧潭へ落すやうにした。

欄は柵欄なり、てすり。三の其字は直下の字を指す。

〔渌然〕　渌は淥と同じ、水の音なり。

〔與〕　爲と同じ。ためにと訓すべし。古くは、爲に通じて用ひたり。孟子、離婁「所欲與之聚之」

〔於〕　於是の意。

〔廻〕　戸頃切ケイーはるか、

〔夷〕　未開の地、こゝは永州をいふ。

〔故土〕　故郷なり、陳高、遙懷詩「故土多薇蕨」

三　鈷鉧潭西小邱記

注意

又得以下十五字當に左の如く訓讀すべし。得西山後八日……又得鈷鉧潭潭西二十五步、當淵而浚者爲魚梁

この部分は從來の教科書中未だ正讀せる者あるを見ず。よつて茲に之を訂正す。願はくば教授者生徒をして訂正せしめられんこと。

鈷鉧潭の下の潭字は八家文讀本には無きも柳河東集にはあり。八家文は誤脫せるなり

解釋

〔又得鈷鉧潭潭西二十五步云々〕

又得の又は西山を得た上にまたの意、又は常に加添を示す。

淵は他官切、タン、—はやせ。淺は私閑切シユン—深なり。底なさらはれて深くなれる意なり。者は處をあらはす。

〔魚梁〕　やな。笭ともいふ、水中に竹木等を並べ立て、水を塞ぎ魚を捕へる仕掛をなせるもの。

〔有邱焉〕　焉は梁之上をうく。邱は元來地名なれど丘（をか、小山）に通用せしなり。

〔其石之突怒偃蹇…爲奇狀者〕

面白き石が澤山あることを概括していふ。

爲奇狀まで全部「者」にかゝる。

突怒は怒ること、偃蹇はおごり、ねばること、左傳哀公六年に「彼皆偃蹇驕恣子之命」石の奇異な形を人間に喩へて形容せし

なり。

〔其嶽然相累而下者〕　嶽は桂音切キン又嶽に作る、山のけはしき貌。

〔衝然角列〕　衝然は突き出づる貌。角列は並び競ひ立つ貌。角はくらぶ、きそふ。この二の「者」は殆不レ可レ數者の中より特に目立ちたる石をあげて記せるなり。我が齋藤拙堂の下ニ岐蘇川一記（卷二、十三課參照）に「石皆奇狀、羅ニ列兩岸一、或特立若レ柱、或坼裂若レ門、或若ニ渴驥飲ニ澗一、或若ニ臥牛橫ニ道一」と言へるは、蓋しこの文の此邊に倣へるものならん。

以上奇石に就いて叙し次に邱全體のことを記す、記述の順序に注意して讀まれよ。

〔不レ能二畝一〕　一畝に足ざらる程。能は能力を表はす字なれども、不能と連用してその下に數詞の來る時は、不レ及、不レ到不レ足の意となる。「於レ是不レ能ニ非年一千里之馬至者三」（戰國策）「不レ能ニ五十里一者、不レ合ニ於天子一」（禮記、王制）等皆是なり。

〔可ニ以籠而有レ之〕　小邱故籠に容れて所有出來る。「籠シテ」と音讀するをよしとす。こめてとよみても、勿論、籠にこめてなり。こめてと讀み、鈷鉧潭と一まるめにしてと解き或は一山全部など解くは大なる誤なり。

〔貨而不レ售〕　賣らんと欲したれども、賣り得ざるをいふ。貨はたからを賣る、售は賣る、又買ふ意。こゝは寶の意に用ひ、後の「售レ之」は買ふ意に用ひたり。

〔止〕　たゞと訓す。わづかにの意。わづか……にとゞまるなり。莊子天運篇に「止可ニ以一宿一、以不レ可ニ久處一」

〔李深源・元克己〕　共に傳未詳

〔皆大喜、出自ニ意外一〕　皆大に喜びて、思ひがけないとした。卽ち思ひがけない獲物だと喜んだ。

〔劇ニ刈穢草一〕　劇は楚簡切サン、剗に同じ、―けづる。刈は魚肺切ガイ、借用音カイ、莉は俗字、穢は於廢切アイ、烏廢切ヲイ、二音あり又、エ、エの二慣用音あり。ヲイ音普通に行はる。穢草は雜草なり。

〔烈火〕　烈はもやす、やくと訓す、孟子、滕文公「益烈ニ山澤一」

以上、小邱を得たることを記す。

〔遨遊〕　遨も遊なり。

〔擧〕　みなと訓す。

〔熙々然〕　和樂の貌、左傳、襄公廿九年「廣哉熙々乎」

〔廼巧獻技〕　お得意な所をやつてみせる。巧と技とは互文なり。

〔效ニ茲邱之下一〕　效はいたすと訓す、さしだすなり。この邱の下で、巧技をさしだして人に見せるなり。左傳、文公八年「效ニ節於府人一」

〔清冷之狀〕　清く冷やかなすがた、冷―ひや、か、冷―水の聲。二字混ずべからず

〔與目謀〕　謀、猶交のごとし、一致するなり。

〔瀯瀯〕　水の渦まくさま、又水の聲。

〔悠然而虛者〕　高空について言ふ。

〔淵然而靜者〕　ふかくて、じつとしてゐる狀態、深潭に就いて言へるなり。

〔不ニ匝旬一〕　匝はめぐること。十日を一めぐりせぬこと。卽ち八日の間にとの意。

〔得ニ異地一者二〕　珍らしき土地二ヶ所を得たりとなり。二とは西山と鈷鉧潭となりこの小邱は鈷鉧潭の一部分と見るなり。誤解せざれ。

〔好事〕　俗にいふ「ものずき」なり。孟子萬章上篇に「好事者爲レ之。」好事は、善事の意味の時は好事とよみ、ものずきの意味の時は好事とよむ習慣なり。

〔未レ能レ至レ焉〕　焉は「不ニ匝旬一得ニ異地一者二」をうく。

以上、小邱上の樂しみを叙す。

〔灃鎬〕　豐水は終南山に出でゝ渭水に入る。鎬水は太乙西谷に出づ、何れも長安の附近にある川。灃は澧と混ずべからず、澧は湖南省に在り洞庭湖に入る川なり。

〔鄠・杜〕　鄠は縣名。杜は京兆郡をいふ。杜氏なる豪族の有なりし故なり。何れも長安附近の地。

〔貴游之士〕　王侯貴人の子弟にして官職なき者、周禮、師氏「凡國之貴遊子弟學焉」

〔日增ニ千金一〕　我こそ得んと日に千金を增して競爭するなり。

〔農夫漁父〕　貴游子弟は勿論農夫漁父までも之をいやしむとなり。

〔賈〕　(1)公戶切、コーかふ、うる、あきうど、(2)居亞切、カ―價に通用す。

〔是其果有ニ遭乎一〕　かく吾等に買はれたのは、この邱が知己に遭うたといふものであらうか。

果の一字、玩索すべし。この句には己の不遇を悲しむ意を寓せるなり。されば次の邱の知己に遭ひたるを賀すといふも實はその反面に己の不遇を悲しむの意を託せるなり。

一五　漁　翁

要旨

前課と連絡して柳子厚の詩を掲げ、閑寂なる自然美を味はしめんとす。

出所

第二課參照。

體裁

七言古詩。一韻なる宿・竹・逐と二沃の韻なる綠とを押せり、一韻と二沃とは通韻なり。

解釋

〔漁翁夜傍二西巖一宿〕　一人の漁翁が湘川の西岸巖下に舟を泊めて一夜をあかした。（卽ち昨夜から泊つてゐた）

〔曉汲二清湘一燃二楚竹一〕　明け方に湘水の清流を汲み楚竹を燃やして朝餉の用意をして居る。

清湘は清き湘水（湖南省にあり）これにて第一句の西巖は湘水の西巖なるを知る。楚竹は楚の地方の竹湘水のある所が楚の地に屬する故いへるなり。（湖南・湖北・浙江地方一帶が古の楚なり）

この二句は漁舟を客觀的に描寫す、閑寂なる自然の一物として見たるなり。第一句と第二句と對立の意味をなせるに非ず、第二句が主なり。卽ち曉に朝餉の煙をたてゝなる舟を見て、その昨夜そこに泊れるを知りしなり。

〔煙消日出不レ見レ人〕　楚竹に湘水を煮る間に江上の朝もやも次第に消えて朝日が出たが舟は早や何時の間にやら動き出して漁翁の姿も見えずこの不レ見レ人は意味の上に於ては、直に次の句に連接するなり。

〔欸乃一聲山水綠〕　たゞ彼方から漁翁の船歌が永く聲を曳いて綠の山水の間に聞えて來る。

かゝる境地は水邊にてよく見る所なり、この二句の如き最もよくその趣を寫せり。欸乃はアイタイ、アイナイ、アウナイ等讀まる。今最普通と思はるゝアイナイに從ひおけり。船歌の聲なり。欸に作るは俗字なり。

この二句も客觀的描寫なり。

〔回二看天際一下二中流一〕　中流を下りながら首を回らして天際を見れば。

天際とは天が地又は水に接する邊をいふ。天の一方などの意。中流とは河流の中程。（流の幅の中程なり）

この句と次の句とは漁翁の身の上となりて詠ぜるなり。

〔巖上無レ心雲相逐〕　昨夜泊つた巖の上には雲がふわり〳〵と浮遊してゐる。

陶淵明の歸去來辭に「雲無心以出レ岫」

教授上の注意

一、かゝる詩は生徒の眷て見たる實際の境地を追想せしむる樣注意しつゝ說明せられたし。

一、この詩は暗誦せしむべし。

一、欸乃一聲の句の如き最も妙趣に富む。

一、滄浪詩話に「柳子厚漁翁夜傍二西巖一宿之詩、東坡刪二去後二句一、使二子厚復生一、亦必心服」とあり。若し後の二句を刪去せば意味の纏り方に於ては都合宜しけれども、末の二句も奇趣寡つべからず。

一六　鬻蕎麺者傳

要旨

友愛の尊ぶべきことを痛感せしむ。

作者

中井履軒、名は積德、字は處叔、履軒は其號、大阪の人、甃庵の次子、竹山の弟、父子共に有名なる儒者なり。文化十四年、八十五歳にて歿す。履軒姿貌魁秀、器宇曠邁、一世を睨視す、人と語りて、民間の孝子順孫善人の事狀に及べば容を動して稱贊し、藉々としてやまず。この文の如きは蓋しその性格の一表現とみるべし。

出所

履軒弊帚一卷、續編一卷。履軒の文集なり。本課は正篇に出づ。

題名

傳は文體の名なり。傳とは傳(ツタフ)なり、事迹を紀載して以て後世に傳ふるなり、漢の司馬遷、史記を作り創めて列傳を作りて一人の始終を紀してより後世の史家之を易ふるなし。これより山林里巷、或は隱德ありて彰れず、或は細人にして法る可き有らば亦皆之が爲に傳を作り以て其事を傳へ其意を寓すること行はる。而して文筆を馳騁する者間〻滑稽の術を以て之に雜ふるあるも亦傳の體たるを失はず。凡そ傳に四品あり、史傳、家傳、托傳、假傳(擬人法を用ひたる傳、韓退之の毛穎傳の如き是なり)是なり。本課は托傳に屬す。

解釋

〔城西沙場〕　城西は町の西部なり、こゝは大阪の西部なり。支那にて、市街村落皆城壁を繞らしたれば之を城と稱するに倣へるなり。沙場(スナバ)は船場(センバ)、雜喉場(ザコバ)、馬場(ババ)等と同樣、大阪市内に於ける或部分の呼名なり。沙場は西區立賣堀南通三丁目、新町北通二丁目、新町通二丁目、新町南通三丁目、西長堀北通二丁目を南北に連れたる場所の總稱。

〔蕎麺(ケウメン)〕　蕎麥(ソバ)にて作れる麺、(麪が正字、なれど、今、俗字を用ふ)所謂そばなり。

〔婢僮(シ)〕　下女下男。

〔粗而磨〕　粗はほゝだぬぐなり、磨は磨碎するなり、すりうすにて蕎麥を粉にするなり。

〔巾(キン)而篩(シ)〕　巾は頭巾、篩はふるひにてふるふなり。粉にせしものを更に篩にかけて精粗を分つなり。巾とは粉飛び散る故手拭など冠れるをいふなり。

〔溲〕　所九切シウ。水にて粉をこねること。禮記、內則篇「糵溲之以爲餌」(餌は黍が

〔棍(コン)〕　ゆ)ゝぼうなり。こねたものを丸き棒にておして廣くするなり。

〔縷(ル)〕　いとすぢなり。廣くおしのべたものを細く切るなり。

粗而以下こゝ迄は、多數の婢僮が夫々分擔して、そばの製造に從へるをいふ。

〔瀹(ヤク)〕　弋灼切、ヤク、ゆでる、ゆがく。こゝは細く切りたるものを、小ざるに入れ熱湯に浸けてゆがくなり。

〔陳器〕　陳は陳列、ならべるなり。

〔置漿〕　漿はすべて飲料、しる、の類をいふ。こゝはそばの汁なり。置漿とはしるをかけるなり。

〔日出而作云々〕　朝早くから夜晩く迄、以上の仕事を夫々する。擊壤歌に「日出而作、日入而息」

〔喜啖者〕　啖は徒覽切、タン、噉・啗と同じ、くらふ。

〔不耐百錢〕　耐は古、能に通用せり、禮記、禮運篇「故聖人耐以天下爲一家」の如き是なり。不耐百錢は不至百錢なり。この句法に就いては第十四課三の「不能一歇」の條參照。

〔數十百緡〕　緡は武巾切、ビン、ぜにさしなり。穴のある錢を貫くなは。明治末頃迄一厘錢百を一條の緡に通すこと行はれたり。

〔踵門〕　訪問すること。踵は至なり、いたると訓す。

〔我與汝同業乎〕　我、汝と同業である以上、と譯すべし。

〔恐不繼〕　不繼は不能繼なり。商賣をつゞけてゆくことが出來ぬとなり。

〔還命輸之錢〕　還は行き先より、くるりと引きかへし來ることなり。歸は、自分の家へかへりつく。おちつくべき所へゆきつくこと。返はもどつて再び本の通りとなること。命は家人或は召使などにいひつけしなり。「之」は北の泉氏。上に「命」の字ある故、「輸」を使役に讀む。輸は送なり。

戌音ジュツ。いぬ

子時(夜十二時)
丑時(午前二時)
寅時(午前四時)
午後…(正午十二時)
戌時(午後八時)

〔收鋪〕　店をしまふ。鋪はみせなり俗に舗に作る。

〔輒〕　音テフ。すぐもう、そのたびになり輙は俗字。

〔之乎北泉氏〕　之は目的地へゆくなり指す所ありてゆくなり。行は止の反對あるいくこと。

〔市井賤人〕　仕へざる身分なき人なり。市井はまち、一般人民の居る所、市井とはもと市をなす所をいふ。而してその解は古來數說あり。(1)白虎通に、井田に因りて市をなすが故にいふと(2)風俗通に、人先づ寶品を井にて洗ひ然る後市にゆくが爲なりと、(3)留青日札に、市中の道四達して井の如きが故なりと何れが是なるかを知らず。

〔己欲達云々〕　論語、雍也篇の語なり。夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人、とよむ。立は位に立つなり。達は通顯なり。

〔有以也〕　以は所以の以に當り、由なり由緣なり、元來、由と以とは一聲の轉にて意義同じき故所以を所由に作ることあり孝經の「夫孝、教之所由生也」の如き是なり

〔曾寇讎之不若〕　曾は說文に詞之舒也とあり、乃と同用法なり。論語八佾篇「嗚呼曾謂泰山不如林放乎」

寇讎之不若の之を今普通に從ひて「コレ」或は單に「ニ」と讀むべし。上の寇讎をうけ、不若の目的となる。かゝる形式は句のはじめに唯・曾等の助字ある時の常とす。

〔愧於泉氏〕　愧は己の見苦しき行爲を人に對してはづるなり。

〔練習〕

讓利於人、受害於己、是讓也、推美於人、取醜於己、是謙也、謙之反爲驕、讓之反爲爭、驕爭是亡身之始也、可不戒乎、「讓之反爲爭」と讀むも亦通す。

反爲爭、讓之反爲爭」と讀むべし。

(言志耋錄)は佐藤一齋の著なり。一齋、名は坦、字は大道、通稱は捨藏、一齋は其號又、愛日樓主人と號す。幕府に仕へ、林述齋に繼ぎ、七十歲を以て昌平黌儒員となる安政六年八十八歲を以て歿す。一齋精力絕倫、氣象老いて益々壯、五十二歲にて言志錄を作りてより次で言志後錄を成し、七十八に至りて言志晩錄を成し八十四歲以後に記すものを言志耋錄となす、併せて言志四錄とふい、皆主として修養に關する隨筆なり。

〔教授上の注意〕

一、人動もすれば己をはかるに急にして友人を顧みるに遑あらず、甚だしきは友人を蔑視、排擠して以て私利を貪る者すらなきにあらず、かゝる風、近來殊に甚だしき觀あり。教授者深く世相の缺陷を看取し、巧にこの教材を運用せられたし。

一、本課は形式上餘り雜しき點なし、要所々々の說明のみにとゞめて可なるべし。

一七　前出師表

〔要旨〕

言々すべて血、句々みな淚より成れるこの表の讀解によりて、諸葛孔明の至誠忠節に感激せしむると共に、表の一體を知らしむ。

〔作者〕

諸葛亮、字は孔明、瑯琊陽都の人。蜀主劉備の三顧を受け、終に廬を出でゝ丞相となり、君臣水魚の交をなす。備の崩後、その委託によりて忠貞の節を後主に效しゝも、事成らずして陣中に病歿す。年五十四。謚して忠武侯といふ。

〔出所〕

文選卷十七、古文眞寶後集、表類、文章軌範卷六、等に出づ、夫々文字に異同あり、今便讀古文眞寶に據れり。

〔題名〕

建興五年、孔明、兵を出して魏を伐たんとし、發するに臨み、この表を後主に上りて政治の要を述ぶ、時に孔明年四十七。後復び上表せり、故に前者を前出師表といふ。出字、いだす(他動詞)の意の時は尺類切、音スヰ。表は下より上に奉る文體の名、文選の唐、李善の注に「表者明也、標也、標=著事序=使=之明白=以曉=主上=得=盡=其忠=日レ表、三王以前、謂=之敷奏=…至=秦并=天下=改爲レ表」とあり。

〔解釋〕

〔臣亮言〕　言はまうすと讀む、「臣聞」「臣某言」「陪臣某言」等の句を冒頭に用ふるは上表文の特徵なり。

〔先帝〕　蜀漢の昭烈帝、(卽ち劉備)なり。章武元年位に卽き、成都に都す。吳將陸遜と戰ひて敗績し、痛恨病を發して崩ぜり。

〔創業〕　事業を創めること、こゝは王業を創め天下統一に志せしをいふ。孟子、梁惠王上篇「君子創=業垂=統」

〔中道崩殂〕　中道は半途なり、論語、雍也篇「力不=足者、中道而廢」、崩は天子の死をいふ、禮記、曲禮篇「天子死曰=崩」、殂は徂なり、死んで徂くこと。昭烈帝、漢の統を承け、祖業を恢復せんと志せしに、在位三年未だ之を遂げずして崩ぜるなり。

〔天下三分〕　蜀漢と吳と魏とに分れしなり。

〔益州疲弊〕 益州は漢の時設きたる州の名、即ち蜀の地なり、今の四川省。疲は疲なり（やむの時の音は、正しくは薄蟹切、ハイ）

〔危急存亡之秋〕 危急はあやふくさしせまれること、存亡は存と亡となり、秋は重要なる時、秋は最功勞り收穫する大切なる期節なればなり。危急存亡之秋とは、非常にさしせまつて、のるかそるかといふ大切な時の意。

〔侍衛之臣〕 君側に侍して護衛する臣。

〔不懈於内〕 怠慢におりて精勤せざるなり、懈、カイ又はケ、一おこたる。心ゆるみて精を出さざること。

〔忘身於外〕 戰場に一身を抛つてかくりみず。

この邊の文の構造は

（侍衛之臣、不懈於内）者、蓋一也。

者は侍衛以下をうけ、の、は、そ、の、わ、け、は、の意。蓋は、それらの人々の心中を孔明が推量するなり。

〔追先帝之殊遇〕 追は追念なり、前の「こと」ふ思ひ出すなり。殊遇は殊々ならぬ待遇、この句、文選は「追先帝之遇」に作る諸註は皆に上述の如き意味で思詠せるを以て、之に對し、陛下は下の如き意味をとらるべしといふのが諸註以下の文なり。

〔開張聖聽〕 聖聽は天子の御耳、開き張るは、耳を開けて、諫言を納受すること漢書、谷永傳「主法納言手聖聽」

〔光先帝之遺德〕 光はあきらかにし、と訓ず、ひからせかがやかすこと、顯著にすること。

〔恢弘忠士之氣〕 恢は大なり。弘は廣なり。天子よく諫言を聞入して忠士之氣を廣大にせしむるなり。

「以」は、この句まで かゝる。

〔妄自菲薄〕 妄はわけもなく、菲は薄なり。自菲薄とは自ら卑薄くして爲すあるに足らずとして己を輕んずるなり。

〔引喻失義〕 臣下の諫ふ道むる時、譬にもとれる喩を引きて之を拒絶するなり、この邊の文の構造は

宜開張聖聽以光先帝遺德恢弘忠士之氣不宜妄自菲薄引喻失義以塞忠諫之路也

〔宮中府中〕 宮中は禁中即ち御延、即ち前文、侍衛之臣不懈於内之内に當る。府中は禁府、即ち前文、忠志之士忘身於外の外に當る。この句、文、下文の内外異法の内外、及び宮中之事、府中之事と天々諸諸あり。されば宮中は後宮女子の居る所、府中は大臣等相の居る所と解する說の誤れること疑ひなくして明なるべし。

〔俱爲一體〕 爲はなりと讀む、宮中と府中とは元來一體たるが故に、陟罰臧否、に異同あるべからずといふなり。「一體トナリ」上二讀むは不可なり。

〔陟罰臧否〕 陟は竹力切、音チヨクの、ぼせて賞する こと。罰は罰なり、官位をおとして罰すること。臧は善なり、下文の爲忠善に應ず、否は惡ならざること、と即ち惡、下文の「作」惡犯科に應ず。陟罰臧否は賞行あるべき人をのぼせ懲行あるべき人をしりぞくるなり。

〔不宜異同〕 異同の同には意なし、殺

怠の殺、多少の多の如し。宮中の者だから大目に見るとか、府中のものだから特にひきたてるとか物の、ことがあつてはいけないといふなり。

〔作姦犯科〕 科は非科なり、とが。姦惡を爲し、法律を犯すといふ。

〔付有司〕 役人にひきわたす。付は委なり託なり。有司は官吏、

〔平明之治〕 公平正明の政治なり。治一に理に作る。

〔不宜偏私使内外異法〕 「偏私」は、えこひいき、「内外」の「内」は「宮中」に應じ「外」は「府中」に應ず。この句は前文の不宜異同と同意なり。

〔侍中〕 天子の左右に侍して顧問應對を掌り、政事を輔導する官。後漢書、百官志「侍中、比二千石、掌侍左右、禁闥衆事、顧問應對、法駕出則參乘」

〔侍郎〕 黄門侍郎をいふ。後漢書、百官志「黄門侍郎、六百石、掌宣達中外、及諸主朝、見於殿中、引上奏事、

急の殺、多少の多の如し。宮中の者だから大目に見るとか、府中のものだから特にひきたてるとかの、ことがあつてはいけないといふなり。

〔作姦犯科〕 科は非科なり、とが。姦惡を爲し、法律を犯すといふ。

〔付有司〕 役人にひきわたす。付は委なり託なり。有司は官吏、

〔平明之治〕 公平正明の政治なり。治一に理に作る。

〔不宜偏私使内外異法〕 「偏私」は、えこひいき、「内外」の「内」は「宮中」に應じ「外」は「府中」に應ず。この句は前文の不宜異同と同意なり。

〔侍中〕 天子の左右に侍して顧問應對を掌り、政事を輔導する官。後漢書、百官志「侍中、比二千石、掌侍左右、禁闥衆事、顧問應對、法駕出則參乘」

〔侍郎〕 黄門侍郎をいふ。後漢書、百官志「黄門侍郎、六百石、掌給事中、關通中外、及諸主朝、見於殿中、引上奏事、

〔郭攸之〕 文選の李善註に「蜀國先賢傳曰、郭攸之、南陽人、以謹業、知名」

〔費禕〕 文選の李善註に「蜀志曰、費禕字文偉、江夏人也、後主時、位至尚書令、侍中郭攸之費禕、終時攸之禕信公、侍中、即ち郭攸之と費禕とは侍中、非先帝の黄門侍郎とは異なり。

〔董允〕 蜀志董允傳に「董允字、休昭、後主襲位、遷黄門侍郎」又、その注に「時蜀人以諸葛亮・蔣琬・費禕及允、爲四相、一號四英、也」

〔良實〕 善良善實なり。

〔志慮忠純〕 かんがへが忠誠なり。

〔簡拔〕 「簡」は選なり。「拔」は拔なり。選拔に同じ。

〔裨補闕漏〕 「裨補」はたすけおぎなふこと。裨は益也。補は助也。「漏」は脱は缺こと。裨の知きなり。

〔向寵〕 向は姓又は地名の時は式亮切音シヤウ。人の名の時は許亮切、音キヤウ。

蜀志に「向寵蜀人也、先主時爲中部督、建興元年封都亭侯、後爲中部督、典宿衛兵」

〔寂均〕 「寂」は靜なり。「均」は平なり。善良公平なるといふ。

〔曉暢〕 通曉し暢達するなり。

〔舉寵爲督〕 督は大將の、こと、後漢書郭躬傳「軍征督將、一統手督」

〔行陣〕 軍隊のこと。行は隊列なり。

〔優劣得所〕 能不能各その力相應の位置を得しむるなり。

〔先漢所以興隆〕 先漢は前漢なり、又西漢ともいふ、高祖、よく三傑其他の賢能を用ひて天下を統一せしをいふ。

〔後漢所以傾頹〕 頽は壞なり。後漢末桓帝、靈帝不德にして宦官を用ひ、天下の名士を殺戮し遂に滅亡を招く。後主亦、黄皓なる者を重任し相國の敬を踏まんとす故に之をいふ。

〔侍中尚書〕 侍中は前に註せり。尚書は殿中に在りて奏事を主る官なり。この侍

中尚書は陳震を斥す。

〔長史〕 邊隆地方の郡主を佐くる官にして兵馬を掌る。こゝは張裔を斥す。

〔參軍〕 軍事に參し、府を統べる官。こゝは蔣琬を斥す。蜀志に「蔣琬字公琰、零陵湘鄉人也。遷參軍、統留府事。」又、文選の注に「此二人皆亮所進用、出師後恐帝不能用、故屬之」

〔貞亮〕 正しく誠なること。

〔則漢室之隆、可計日而待也〕 この「則」は一字にて上述の如くすればといふ意を表はす。この「則」の如く句の次に用ひらるゝ古人は「サスレバスナハチ」と訓じたり。漢室は蜀漢の帝室なり。可計日而待とは遠からず實現せらるゝといふ意なり。

〔布衣〕 庶人の服、轉じて庶人をいふ。卽ち無位無官の人、史記、蘇秦傳に「蘇秦謂趙肅侯曰、天下卿相及布衣之士、皆高賢君之行義。」

〔躬耕南陽〕 南陽は郡名、孔明の居は

文選の李善注によれば南陽郡鄧縣にして襄陽の近くなり。南陽郡鄧縣は今の湖北省襄陽縣なり。尙、この南陽は郡名に非ずして襄陽城のことなりといふ說あり。（困學紀聞）

〔性命〕 生命といふに同じ。易乾卦彖辭に「乾道變化、各正性命。」の注に「所受爲性、天所賦爲命」とあり因て人の生命を性命といふなり。

〔不求聞達於諸侯〕 諸侯に仕へて立身しようとしない。論語、顏淵篇に「在邦必聞、在家必聞。」とあり。聞達とは名聞榮達にて名譽と地位となり。

〔不以臣卑鄙〕 不以は、…にもかゝはらず。

〔猥自枉屈〕 猥はかろがろしくなり。枉屈はその尊を枉げ、貴を屈するなり。

〔三顧臣於草廬之中〕 三度まで臣を茅屋に訪れられしとなり。蜀志諸葛亮傳「亮遭漢末擾亂、隨叔父玄、避難荊州、躬耕于野、不求聞達。劉備以亮有殊量、乃三顧亮於草廬之中。亮深謂備雄姿傑出、遂解帶寫誠、厚相結納。」

〔許以驅馳〕 戰爭に從事することを承諾せしなり。

〔後値傾覆〕 傾覆とは國家の衰亂せるをいふ。こゝは後漢の末天下亂れて漢室危くなれるを指す。諸說、この句を以て長阪の敗戰となすは誤れり。長阪敗戰のことは次句、受任於敗軍之際なり。

〔受任於敗軍之際〕 建安十三年、魏の曹操と戰ひ當陽の長阪に敗れしをいふ。

〔奉命於危難之間〕 その時、亮、命を奉じて救を吳の孫權に求めしなり。

〔臨崩寄臣以大事〕 大事とは、討賊興復の事を謂ふ。寄は寄託するなり。蜀志諸葛亮傳、「先主於永安病篤、召亮於成都、屬以後事、謂亮曰、君才十倍曹丕、必能安國家、終定大事、嗣子可輔輔之、如其不才、君可自取、亮涕泣曰、臣敢竭股肱之力、效忠貞之節、繼之以死也。先主勅後主曰、汝與丞相從事、事之如父。」

〔付託不效〕 先主の寄託を受けたものの少しの效果もあげ得ないこと。

〔傷先帝之明〕 明とは人の賢愚を鑑別する眼識をいふ。

〔五月渡瀘〕 後主の建興三年五月、瀘水を渡つて南蠻を征したるをいふ。蜀志「建興元年、南中諸郡、並皆叛亂。三年春、亮率衆征之。其秋悉平」とあり。瀘は水の名水經註に「瀘爲朱提縣西八十里有瀘津、水廣六七百步、深十數丈、多瘴氣、鮮有行者。」とあり。

〔不毛〕 草木を生じない地をいふ。文選の註に「不毛謂不生草木也」とあり。又公羊傳宣公十二年の註に「何休曰、墝埆不生五穀曰不毛。」とあり。

〔今南方已定、甲兵已足〕 南方平定したれば、そちらへ氣をくばる必要もなく、又兵力も十分充實したから、今こそ北方へ進出すべきだとの意味なり。この二句を本として次の句の「當」の字用ひらるゝなり。

〔當奬率三軍北定中原〕 奬はすゝめはげます。率はひきゐる。三軍は上軍、中軍、下軍のことなれど、こゝは大軍の意なり。奬率の二字は、文選は師將に作り、文章軌範は奬師に作れり。中原は中國、國の眞中、こゝは魏を指す。こゝに至りてはじめて、今回の出師のことに及ぼす。

〔竭駑鈍〕 鈍才の全力をそゝぐなり。駑は下等の馬、鈍はなまくら刀。

〔攘姦凶〕 攘は刈なり、はらひのけることゝ。姦凶はわるもの、魏の文帝（曹丕）をさす。

〔興復漢室〕 劉備は漢の中山王靖の後裔なる故、かくいへるなり。

〔舊都〕 後漢の都洛陽なり。

〔斟酌損益〕 政治の可否を考へて取舍することゝ。國語、周語に「審艾修之、而後王斟酌焉。」註に「斟、取、酌、用也」損益も取舍なり。論語、爲政に「所損益可知也」文選の一本には損益を規益に作れり。

〔若無興德之言則〕 この七字は古文眞寶には無く、意味に於て缺くる所あるを以て、今文選に據りて補へり。興德之言とは德行を盛にせしむる言なり。

〔諮諏善道〕 善き政道を人々に相談するなり。詩經小雅の「周爰咨諏」の毛傳に、「訪問於善爲咨」と、又左傳襄公四年に「咨事爲諏」とあり。咨は諮に同じ。

〔察納雅言〕 雅言は正言なり。正言をよく察して之を聽きいるゝなり。

〔追先帝遺詔〕 追は追念、先帝遺詔は「寄臣以大事」條の注參照。

〔不知所云〕 泣けて來て、何とも申上げる言葉がない。

練習

讀孔明出師表而不墮淚者、其人必不忠。讀令伯陳情表而不墮淚者、其人必不孝。讀退之祭十二郎文而不墮淚者、其人必不友。

一八　蜀相（シヤウ）

作者

第四課絶句參照

出所

杜工部集二十卷は杜甫（工部員外郎となりし爲、杜工部といふなり）の全集なり。注釋書は、古來甚だ多けれど、淸の錢謙益の箋注、仇兆鰲の詳注、沈德潛の偶評、等有名なり。

體制

七言律詩、下平十二侵の韻、尋・森・音・心・襟が韻字なり。尚、律詩に就いては第九課登岳陽樓の備考欄參照。

解釋

〔丞相（ジヤウシヤウ）祠堂何處尋〕　蜀漢の丞相諸葛孔明の祠堂は何處に尋ね求めて詣でんか、といへばとなり。

孔明昭烈帝に仕へて蜀の丞相たり、故にいふ。題名の蜀相も蜀の丞相の意なり。

寰宇記に、「先主廟在ニ成都府西八里一」また成都記に、「先主廟西院卽武侯廟、前有ニ雙大柏一、古柏可レ愛（シス）」とあり。武侯とは、孔明、建興元年、武鄕侯に封ぜられたればいふなり。

〔錦官城外柏森森（ハクシン）〕　そは錦官城外、老柏森々と茂れる處にあり、となり。

最初の二句は自問自答の形にて、先づ祠堂の所在處を概觀的に詠す。從つて第一句を丞相の祠堂、何處にか尋ねん、今は尋ぬるに由なしと解するは誤れり。尋ぬるに由なきものならば、何を以て第三句に映階云々と言ひ得んや。

錦官城は成都府城の異名。昔時、この地に錦官を置きて產錦を管理せしめし爲、錦官城又は錦城と稱す。

森森は鬱茂の貌、しげりあふこと。柏は扁柏・側柏等、松柏科の柏類植物の總稱なり日本の、かしはに非す。栢は柏の俗字。

〔映レ階碧草自春色、隔レ葉黃鸝空好音〕　さて、祠廟は荒れはてゝ階段には蒼蒼たる雜草映じて、草は自ら春色を呈し、森々たる柏樹の葉がくれには黃鸝が空しく好音を弄してゐるが、而も侯の音容は聞見するを得ず、となり。

この二句は祠堂に入りたる時の景色を細叙せしものなるが、「自」「空」の二字に作者の感慨表はるゝを見る。

何れ階段のてすりなど朱塗なりしならんかそれに繁茂せる綠草が映ぜしならん。黃鸝は我國の鶯よりも形大きくて聲はよくなし俗に「朝鮮うぐひす」「からうぐひす」「なんばんうぐひす」などいふ類なり。

殘りの四句は孔明に對する感慨を詠す。

〔三顧頻繁天下計兩朝開濟老臣心〕　さて丞相の隆中に在つた時先主は三度までも頻繁に之を訪問して天下を定める計を問うた。丞相は其の情誼に感じ、遂に出で仕へ、兩朝の間に至誠を盡し政事軍務を開き濟したのである。

頻繁は一本、煩繁に作るも、意は同じ。開濟は開物成務の意。晉書の劉琨の傳に「琨忠亮開濟」とあり。

尙この頻繁の二字を、孔明にかけて「三顧の誼に感じて天下の計をなすに頻繁なり」と說く者あれども、今、採らず。

老臣の二字、無限の篤實さを表はす。

三顧・兩朝と對せしめし技巧にも注意。

〔出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟〕　然るに敵を伐つ軍を出して、まだ中原を回復する功が成らぬのに身は早くも死んで偉業は空しくなり、長く後世の英雄をして彼の心中を思うて淚をしぼらしぼらせることである。

後世の英雄をして淚をしぼらしむとは實は主として作者自身が、孔明の心中に萬斛の同情を灑ぐことをいへるなり。

一九　前赤壁賦

要旨

古來人口に膾炙せるこの賦を授けて諷誦せしめ以て超俗的氣分を味はしむ。

題名

赤壁は山の名にして二あり一は湖北省嘉魚縣の東北にあり、周瑜・劉備大に曹操を破りし所。一は湖北省黄岡城外にあり、赤、赤鼻磯ともいふ。東坡の遊びしはこれなり。然るに東坡はこれを以て曹操の敗れし赤壁と混ぜしなり。

賦とは韻文の一體なり。賦は敷なり、其事を敷陳するを以て本質とす、又形式に於ては韻を押す、但、詩の押韻の如く嚴密なる規則に拘束されず。賦の形式内容共に時代により變遷あり、宋代のものは散文と大差なく、たゞ韻を押せるによりて賦に入れらるゝが如き狀態のもの多し、赤壁賦の如きも押韻せりといふまでにてその内容形式共に散文と著しき差なし。

前赤壁賦は十三回韻を易ふ左の如し。

一、望(漾)　興(蒸)　章(陽)。
二、閒(刪)　天・然・仙(先)
三、漿・光・方(陽)
四、嘉・訴(遇)　樓(麌)　歸(有)
五、稀・飛(微)　詩(支)
六、昌・蒼・郎(陽)
七、東・空・雄(東)
八、鹿(屋)　屬・粟(沃)
九、窮・終・風(東)
十、往・長(養)

十一、瞬(震)　盡(軫)　褻(霽)
十二、主・取(麌)
十三、月(月)　色(職)　竭(屑)　適(陌)　酌(藥)　藉・白(陌)

解釋

〔壬戌〕　宋の仁宗の元豐五年なり。東坡此の時年四十七、貶せられて黄州に在りたるなり。

〔既望〕　陰曆の十六日なり。十五日を望と云ひ、日東に在り月西に在りて遙に相望むの意なり。既望とは望を既りたる意なり。書經召誥に「惟二月既望」、注に「十六日也」とあり。因に十四日を幾望といふは望に幾き意なり。

〔客〕　道士楊世昌を指して言ふ。下の洞簫の注參照。

〔舉酒〕　酒もりをはじむること。儀禮、鄉飲酒禮「主人獻賓、舉一人洗升舉解于賓。」注云、「一人主人之吏。發酒端曰舉。此一人舉酒。爲旅酬始也」

〔屬客〕　酒を注いで客にすゝむること。屬は注なり、酒を「つぐこと」。儀禮士昏禮の「酌元酒三屬於尊」の註に「屬注也」とあり。

〔明月之詩〕　詩經陳風月出篇を指す。その詩は「月出皎兮、佼人僚兮、舒窈糾兮、勞心悄兮。月出皓兮、佼人懰兮、舒優受兮、勞心慅兮。月出照兮、佼人燎兮、舒夭紹兮、勞心慘兮。」此の詩は在位者德を好まずして美色を悅ぶを刺りたるものにて、東坡の意も亦當時の在位者を諷したるなりとの說あれども必ずしも拘すべからず。

又、明月之詩とは必ずしも月出篇と見ず、たゞ明月に關する詩と解するも可なり。

〔窈窕之章〕　或はいふ、詩經、關雎篇を指す、篇中「窈窕淑女、君子好逑」の句あればなりと、然れどもこの詩を果して窈窕之章と稱し得るや頗る疑はし。何れにしても窈窕とは婦人のしとやかなる貌なり。この語、下の「望美人兮天一方」に對す。

〔斗牛〕　斗は北斗星、牛は索牛星なりといふが普通の說なり（頭注は之に從へるなり）然れども兩星の間甚だ遠くして事實に合せざる嫌あり。されば斗は斗宿（或は南斗ともいふ）牛は牛宿にて何れも廿八宿の一と見る方可ならん。斗牛は吳越の分野に當る宿なればその間も遠からず事實に合す。

〔白露横江〕　月光に照らされて白く煙の如きもやが江上に棚びけるをいふ。

〔水光接天〕　月光に照らされたる水面のはてが天に連れるをいふ。

〔縱一葦之所如〕　小舟のゆくがまゝにまかせるをいふ。一葦は小舟なり、葦の葉にたとへしなり。詩經衞風河廣篇に「誰謂河廣一葦抗之。」（抗は航なり）

〔凌萬頃之茫然〕　小舟にまかせて廣廣とした水面をわたりゆくなり。茫然は廣漠たる貌。凌は陵に通ず。

〔浩浩乎〕　羽化而登仙までは一葦の如く所にまかせて萬頃の茫然たるをわたる時の心持を言ひしなり。
浩々乎は廣大の貌、ここは心情の上に就いていふ。心が大きくなつて卽ち小さい我といふものが無くなつて宇宙と融合した心持となるなり。

〔馮虛御風而不知其所止〕　浩々乎たる心情を譬喩を以て表はせるなり。馮は憑と同じ、據るなり、乘りかゝるなり。虛は虛空、卽ち大氣なり、御は馭と同じ、御風とは風にのつて風をあしらふなり。陸雲の句に、「雷馮虛以振庭」。莊子、逍遙遊に、「列子御風冷然善也」

〔飄飄乎〕　ひら〳〵と飄るさま、飄に作るも音義同じ。

〔遺世獨立羽化而登仙〕　俗世をすてて獨りとなり羽が生えて天上の仙人となる。遺は忘なり、寫なり、圖係が絕つこと。莊子、田子方篇「似遺物離人而立於獨」。羽化は羽がはえること、晉書、許邁傳「好道者、皆謂之羽化」矣。」

〔桂棹兮蘭槳〕　桂も蘭も香木なり。「棹」は櫂に同じ。說文に「所以進船也」とあり釋名には「在旁撥水曰櫂」と見ゆ。「槳」は通俗文に「前推曰槳、後曳曰櫂、縱曰櫓、橫曰槳」とあり。
棹も槳も舟も進むる道具にてかゝるかぢの類の稱なり、古來この文を桂棹兮蘭槳と調じならはせり。楚辭九歌に「桂櫂兮蘭槳」李白の江上吟に「木蘭之櫂沙棠舟」兮は音を曳く符號の文字。

〔擊空明兮泝流光〕　すきとほる樣な水中に溜れる月かげの上にさかさし、月光の波とともにきらきらとひかる月光の上を漕ぎのぼる。擊はさかさすと調じ、泝は流に逆ひ舟を行るを云ふ。空明とは水清くして透明なるに月の寫れるをいふ。流光は月の波にうつりてちら〳〵すること。謝靈山云く「秋水淸而見底、月在水中謂之空明、月光與波俱動謂之流光」。擽曰擊、逆水而上曰泝」と。

〔渺々兮予懷、望美人兮天一方〕　渺々は遠かなる貌。美人は美德の人にて賢人君子を指す。或は天子を指し、天之一方は朝廷を斥すなりといふ。文章軌範の謝靈山注に「謂望同朝之君子、在天之一方」詩經鄭風簡兮篇に「云誰之思、西方之美人。彼美人兮、西方之人兮。」楚辭九歌に「望美人兮未來。」以上四句楚辭より脫化し來れるならん。

〔客有吹洞簫者〕　この客が何人なりしかに就いて縷々說く人あれど、かゝることは無用の詮議だてなり。洞簫は樂器の名我が尺八の類と解せば十分なり。

〔倚歌而和之〕　倚は調子を合せること。漢書、張釋之傳「愼夫人倚琴而歌」

〔嗚嗚然〕　大小高低の音の斷續する樣、史記、李斯傳に「歌呼嗚嗚快耳目者、眞秦之聲也」

〔嫋嫋〕　聲の細くして絕えざる貌。音聲の長く響く貌。

〔如縷〕　糸のやうに細長く續く、縷は說文に「綾也」漢書、五行志「文武之道廢、中國不絕如縷」

〔舞幽壑之潛蛟、泣孤舟之嫠婦〕　物さびしき谷に棲める蛟も、笛の音に浮かれ出でて舞ひ、孤舟に住める寡婦も一層孤獨の感に打たれて、涙を流す、となり。蛟はみづち、龍の一種にて角無きもの、孤は寡婦なり。左傳、昭公十九年、孤婦の注に「寡婦曰孤」文章軌範注に「吹笛而潛蛟亦舞、喻己潛伏于謫所也。寡婦則此亦泣。喻己孤立不得于君也。」

〔愀然〕　容色の變ずる貌。まじめになるなり。愀は音セウ。禮記に「愀然作色」。「愀然作色」。「愀然悚動之貌、作色變色也。」

〔正襟危坐〕　襟をかきあはせてきちんと坐る。史記、日者傳に「聽繇正襟危坐」宋隱に、「正其衣襟謂變而自飭也」。辭源に危坐は端坐なりとあり。

〔何爲其然乎〕　何如なれば、かく悲しき音の出づるや、となり。何爲は正しくはナンノタメと讀むべきなれど普通はナンスレゾと讀む。

〔月明星稀云云〕　魏の曹操が劉備を追擊せんとして、江陵より江流を下る舟中の作なり。文選、魏ノ武帝(曹操)短歌行に、「月明星稀、烏鵲南飛。繞ル樹三匝、無枝可依」とあり。李善の注に「喻客子無所依託也」とあり。烏鵲はかささぎ。左に短歌行全首を錄して參考に供す。
對酒當歌　人生幾何　譬如朝露　去日苦多　慨當以慷　憂思難忘　何以解憂　唯有杜康　青々子衿　悠々我心　但爲君故　沈吟至今　呦々鹿鳴　食野之苹　我有嘉賓　鼓瑟吹笙　明々如月　何時可掇　憂從中來　不可斷絕　越陌度阡　枉用相存　契闊談讌　心念舊恩　月明星稀　烏鵲南飛　繞樹三匝　何枝可依　山不厭高　海不厭深　周公吐哺　天下歸心

〔孟德〕　曹操(魏武帝)の字。

〔夏口〕　湖北省夏口縣なり。大江を隔てゝ武昌に對し、漢江を隔てゝ漢陽に對して形勝の地なり。

〔武昌〕　今の湖北省武昌縣なり。

〔山川相繆鬱乎蒼々〕　山と川とが相交はりて、鬱然として茂れりの意。繆はからむ、まとふ。蒼々はうすくろいさま。

〔孟德之困於周郎者〕　曹操(孟德)八十萬の大軍が周瑜三萬の兵に破られし處。「——於——」は受身を示す。この句は「此非所孟德之困於周郎者」の所を略せる形なり。この「所——者」は場所を表はすなればその略形の「者」も場所の意に解すべきなり周郎とは周瑜のことなり、吳志周瑜傳に「建安三年孫策授建威中郎將、卽興兵二千人騎五十匹、瑜時年二十四、吳中皆呼爲周郎」郎とは年少くして才ありしを以ていふ。

〔破荊州〕　荊州の劉琮を破り之を降せしを云ふ。

〔下江陵〕　孟德が劉琮を破りて後、江陵より、舟を泛べて長江を下り、吳をせめんとしたるを斥す。江陵は今の湖北省に屬す。

〔舳艫千里〕　舟の首尾相接し長く千里も連綴すること。舳は船首。艫は船尾なり。漢書武帝記「舳艫千里」の註に、「李斐曰、舳船後持レ柁處也。艫、船頭刺レ櫂處也。言其船多、前後相銜、千里不レ絕也」

〔旌旗蔽レ空〕　旌は鈴を附したる旗、又、旄（カラウシ）の尾を竿につけたるものをいふことあれど、ここは旌旗の二字にて、はたのぼりの類をすべて指すなり、蔽空は空も見えぬ位はたが多きなり。

〔醪酒〕　詩経伐木篇の字面　註に「以レ筐曰レ醪」とあり。醪は酒を漉す義、ここは酌む義とす。酒を酌みながら揚子江に臨むをいふ。文章軌範の注に「醪酒卽酌レ酒也、今臨安人、酌レ酒亦曰レ醪レ酒」

〔横レ槊賦レ詩〕　軍中にありて詩を作ること、槊は矛なり。長さ一丈八尺もあるほこのこと。舊唐書杜甫傳「元和中、詞人元稹、時論二李杜之優劣一曰、曹子建之文、鮑照之賦、庾信之詩、至レ於レ橫レ槊賦レ詩、」

〔固一世之雄也〕　曹操が謂ふなり。文章軌範の注に「曹氏父子聲二勢一時一、今惟空江夕流而已。所二以思一レ昔而悲一今也」といへるを是とす。謝靈山の「言二當時周郎固爲一盛世之雄才一」といふは非なり。

〔而今安在哉〕　かかる一代の英雄も、今は何處に居るか。疾く死して影もなきにあらずや。まことに人生は果敢なきものなりとの意。而はしかるにとよむ。

〔漁二樵於江渚之上一〕　「漁」は「スナドリ」、「樵」は「キコリ」、「渚」は「ほとり」と訓す。「友二麋鹿一」に對す。江渚は江の岸なり。上はほとりは「ナギサ」、水涯なり。

〔侶二魚鰕一云々〕　「鰕」は蝦と同じ、「エビ」なり。「麋」「ビ」は鹿に似て大なるもの。

〔一葉之扁舟〕　扁舟は小舟なり。舟を木の葉に喩へて一葉といへるなり。

〔舉二匏樽一以相屬〕　酒を酌んで互に獻酬すること。「匏」は「フクベ」匏にて作れる酒樽を匏樽といふ。

〔寄二蜉蝣一於天地〕　蜉蝣の如き短き命を悠久の天地に寄託すとなり。蜉蝣はかげろふ、はかなき人生に喩ふ。寄は寄託。

〔渺二滄海一之一粟〕　大海原に浮ぶ一粒の粟。渺は水の廣くつゞくこと。滄海を形容す。滄海は青海原、蒼海と書くも意同じ。粟は穀物。莊子、秋水篇に「計二中國之在一海內一、不レ似二稊米之在一太倉一乎」とあり。此の意に本づけるならん。一本渺を眇に作る。眇は微少の意なれば粟にかかることとなる「況吾與レ子」の況は、こゝ迄かゝる。

〔哀二吾生之須臾一〕　上句の蜉蝣と應ず。

〔長二江之無一窮〕　長江は揚子江、無一窮一とは永久に流れて止まざるをいふなり。上句の天地に應ず。

〔挾二飛仙一以遨遊〕　仙人と抱き合つて一緒に遊ぶなり。仙人は飛行の術あるによりて飛仙といふ、遨も亦遊なり。詩經鄭風柏舟篇に「微二我無一酒一、以敖以遊一」

〔抱二明月一而長終〕　明月と共にいつまでも生きてゐたい長終とは終ること無きなり。

〔知レ不レ可二乎驟一得〕　到底不可能なことを知る前の二句の如くするのは、驟に得ること能はざるを知る。

〔託二遺響一於悲風一〕　遺響は餘音なり。前の「餘音嫋嫋」に應ず。悲風は秋風なり。秋風は人の心を悲しましむるを以て云ふ。嫋々たる洞簫の餘音を秋風に寄せて淋しき心を歌ひたるなりとの意。

月明星稀以下ここまでが「何爲其然也」の答にして、その中心は終の方に在り。

〔知二夫水與一月乎〕　あの水と月とを御承知の筈、まあその水と月とを御覽などの意なり、質問に非ず。下の句を言はんとして對者の注意を水と月とにむけしむるなり前文、「美長江之無窮、挾二飛仙一以遨遊、抱二明月一而長終」を承けていへるなり。

〔逝者如斯而未二嘗往一也〕　凡そ世の中で逝くものは水流の如きもので一見逝きて無くなるけれど實は少しも無くならないのだ。

斯は此と同じ水を指す。この句は論語子罕篇に「子在二川上一、曰、逝者如レ斯夫、不レ舍二晝夜一」とあるを本とす。

〔蓋虛者如彼而卒莫二消長一也〕　凡そ世の中の滿ち缺けする者は月のやうなもので一見增減あるやうだが實はつまる所少しも增減はしてゐないのだ。

盈は滿なり、消長は減增なり。彼は月を指す。

〔蓋將〕　思ふに一體。

〔自二其變者一而觀之一云々〕　變化する點から觀察すれば、天地だつて一瞬間といへどもとのまゝではゐない。

其は特定のものを指すに非ず、何でもその其なり、者は點、方面など譯す。曾は乃と同意、天地だつての意（反對・意外の意を表はす）この逸は莊子、德充篇の「自二其異者一視之、萬物皆一也。」を本とす。

〔而又何羨乎〕　何は「ナニッカ」とよむ長江之無窮などは勿論、この世に羨むべきものの何ものかあらんやとなり、「ナンゾ」と讀むべからず。

以上は莊子の思想を本とせる東坡の人生觀なり。蓋し物消長變化すとは、相對的の觀察にて、本體から觀れば、常住不滅なりとの思想なり。

〔且夫天地之間〕　且は又なり。前文にては吾も亦不滅なれば悲しむ必要なきことをいひ、以下悲しむどころか大いに造物者の無盡藏なを樂しめといふなり。

〔造物者〕　天地の森羅萬象を造りたる者。

〔無盡藏〕　盡きることなきもの。大藏法數に、「藏者含攝也。乃功德林菩薩於二華嚴會上一、爲二諸菩薩一演說、欲レ令二其普入一一切佛法之門一、成二就無上菩提一、饒二益一切衆生一、以二其各能含一攝無盡法海一、故皆名爲二無盡藏一」とあり、

〔肴核〕　御馳走のこと。魚肉を肴と云ひ、菓實を核と云ふ。

〔所二共適一〕　「適」は自適の意にて心なやること。氣にいること。この清風と明月とは、吾と子と共に心なやりて樂む所のものなりとの意。

〔杯盤狼藉〕　杯、鉢、などの散亂したこと。史記、滑稽傳に「杯盤狼藉、堂燭滅。」

〔枕藉〕 相重つて臥する狀にいふ。漢書、酷吏傳に「一發視、皆相枕藉死」枕は正しくは音シンなれど今慣用音に從ふ。

教授上の注意

一、本課を徹底的に理解せしむることは困難なれば、よく諷誦せしめて超世的なる氣分を大體味はしむれば可なり。

二、對句に注意して授くべし。

二〇 後赤壁賦

解釋

〔是歲〕 前赤壁の壬戌之秋をうけていふ。その歲といふ意なり。中井履軒曰、「附=題前賦=言也、近世文士、謬=解是歲=爲=今年=者多、往往無=前事=而直題=是歲某月=可=笑之甚=。」

〔步自雪堂〕 雪堂は東坡が別莊の名なりその振科川詩叙に曰「元豐壬戌之春、予躬耕=於東坡=、築=雪堂=居=之=。」又、方輿勝覽卷五十、黃州雪堂註に、在=州治東百步=。獨人子瞻謫=居黃=三年。故舊正卿爲=守=。以=故營地數十步=與=之=。是爲=東坡=。以=大雪中築=室=、名曰=雪堂=。繪=雪于堂之壁=。西有=小橋=。穴下有=暗井=。云々。

〔臨皋〕 臨皋(皋は俗字)は亭の名なり、東坡はじめ黃州に至るや定惠院に寓せしが後臨皋亭に遷れり。

〔二客〕 郭遹、古耕道といふ二人なりと。

〔黃泥之阪〕 坂の名なり、東坡の黃泥坂詞に、出=臨皋=而東鶩、並=醉翁=而北轉、走=雪堂之坡陀=。岸=黃泥之長坂=。

〔人影在地〕 前句の木葉盡脫せるにより人の影が地に印せらるるなり。「人影在地、仰見明月」の句絕妙なり。

〔願而樂之〕 二客を顧みながらこの景色を樂しむなり。「願」の字及び次句の「相答」の字は前句「二客從予」に應ず。

〔行歌相答〕 この一句、前句の「樂」の字より生ず。

〔如=此良夜=何〕 この良夜を何としよう良夜を空しく過すことの遺憾なるをいふ。如—何は目的語をその中間にはさむた原則とす。

〔今者薄暮〕 けふの夕方。今者は「ケフ」と讀む「者」は昔者、頃者などの者と同じく助字なり。

〔松江之鱸〕 松江は又、吳淞江といふ。江蘇省にある川の名なり、鱸はすゝき、松江の鱸は古より有名なり。後漢書、左慈傳に「曹操顧=衆賓=曰、今日高會、羞珍略備、所=少松江鱸魚耳=。」註に「松江出=好鱸魚=、味異=他處=。」

〔願安所得酒乎〕 (殺は既にある)酒が何とかならぬかなあ。

〔歸而謀=諸婦=〕 婦は妻、東坡の妻に相談せしなり。史記滑稽傳に「請歸與=婦計=之」とあるに本づく。東坡の留=別王十立=詩にも「歸=舍聊須=與=婦謀=」の句あり。

〔不時之需〕 臨時の要求。

〔復遊=於赤壁之下=〕 「復」は七月の避に對していふ。この句は前文「如此良夜何」に應ず。

〔江流有=聲=〕 具下舟中にて見たる景色なり。

〔山高月小水落石出〕　この二句、描寫極めて妙。山高くして澄みわたれる月は愈小さく見え、水減じたれば、所々に岩石が露れ出で、居るなり。七月既望、舟を浮べし時の樣子は全く見るべからず。故に次の句を記す。水落の落は水が低き方へ落つるといふ意なり、下流へ落ちてゆきたる故減するなり。落そのものに減の意あるに非す。

〔曾日月之幾何〕　前遊より曾て幾何の日月を經たぞ。纔か三月だのにの意。

〔而江山不可復識〕　纔かの間だのにしかも江山の樣子は全く變つて、前の樣子はもう認められない全く別の所のやうだとなり。識はみとめしること。この一句ありて、以下の記述が出來るわけなり。若し七月遊びし時と全く同じ景色ならば別に後遊の賦を作る程の感興も沸かざりしなるべし。尙、前賦の「白雲横江、水光接天」「山川相繆鬱乎蒼蒼」等とこの賦の江流有聲以下四句等と比較してみるべし。

〔予乃攝衣而上〕　「予」は下文の二客不能從焉の「二客」と應ず。

攝はかいぐと訓ず、攝衣は上衣のすそをまくるなり。上は舟より岸に上るなり。前遊は專ら舟中に在りしもこの遊は舟を舍て、岸に上る、蓋し江山の景既に同じから予遊も亦從つて異るなり。

〔巉巖〕　けはしいいは、文選、高唐賦に「登巉巖而下望兮。」李善の註に「巉巖、石勞不生草木。」

〔披蒙茸〕　しげつた草木をかきわけてすゝむ。茸は音「ジヤウ」草木の繁茂してゐること。

〔踞虎豹登虬龍〕　虎豹の如き形したる石に腰かけ、虬龍の形したる老木に登るなり、踞はうづくまること。又こしかけること。虬は又虬とも書く、龍の子の角あるもの。

〔攀栖鶻之危巢〕　たかの巢のあるやうな高い所にのぼる。鶻は鷹の屬。「くまたか」又は「はやぶさ」。復齋漫錄に「東坡謫居黄二五年、赤壁有巨鶻、栖于喬木之上、後賦所謂攀栖鶻之危巢、俯馮夷之幽宮、是也」とあり。

〔俯馮夷之幽宮〕　馮夷は、水の神、河伯なり。馮は「フ」とも「ヒヨウ」とも讀む。幽宮は幽深なる水神の居る所を云ふ。鶻の巢のある高所に上りたる故に、俯して下を見れば水神の住所とおぼしき深き所まで見ゆるなり、蓋し水邊の絶壁に上れるならん。

〔蓋二客不能從焉〕　「蓋」は「不能從」を修飾す。二客、予のゆく所について來ざるを見れば蓋し從ふことが出來ないのであらう。

〔劃然長嘯〕　突然大聲でうなる。劃然は突然物を裂くやうに夜の靜けさを破つて響き渡る聲を形容す、嘯は「ウソブク」と訓ず總べて長い音調を以て聲を發するに云ふ。

〔予亦悄然〕　「予亦」は二客に對す。悄然は憂ひ悲しむさま。說文に、悄憂也。詩經鄘風に「憂心悄々。」

〔肅然〕　つつしみ畏るるさま。禮記、祭義篇に、「肅然必有聞乎其容聲。」陳皓の註に、肅然儆惕之貌。

〔凜然〕　肅然と混ぜざるやう注意。

〔凜乎〕　ぞつとして身のひきしまる貌。書經に「凜乎若朽索之馭六馬。」

己の發ぜる長嘯により草木震動し山鳴り谷應へし爲に自分ながらぞつとして來たるなり。悄然—肅然—凜乎と次第に程度の深まれるに注意。

〔反而登舟〕　以下、掠舟而西也まで、再び舟中にての樣子を記す。

〔聽其所止〕　聽はまかすと訓ず。もと對手の言ふことをきいて、そのまゝゆるしそのなすがまゝにまかす意より來れるなり

〔玄裳縞衣〕　「玄」は黑なり、「縞」は素なり、腰より上を「衣」といひ、腰より下を「裳」といふ。鶴は腰部及び尾に黑き毛ありの餘は皆白毛なるが故にいふ。

〔憂然〕　憂は玉の鳴る聲、又篁竹相擊つ聲此處は鶴の鳴き聲の形容なり。憂正しくは戛と書すべし、今、俗字に從へり。

〔掠舟〕　かすむと訓む。すりきつて過ぎること。

〔須臾客去〕　以下、臨皐の居に歸りて後のことを記す。

〔道士〕　道教を奉じて長生不死などの術を修むる人、仙人など譯して可なるべし。

〔蹁躚〕　ひらひらとめぐりあるく貌。又舞ふ貌。

〔揖〕　一入切、音イフ—ふしやくすること側入切、音シフ—あつむ(輯に通ず)

〔噫嘻〕　驚きて發する歎聲。宋景文筆記に「蜀人見物驚異、曰噫嘻嘘、李白作蜀道難、因用之。」とあり。

〔疇昔之夜〕　昨夜といふに同じ。

〔不見其處〕　處はありか、あまりにありノ〳〵と見えしゆゑ、實事にあらざるかと戸を開きて見しに、道士の居らざりしなり。

教授上の注意

一、前課とその結構を比較して了解せしむべし

一、本課は都合によりては省略に從ふも可なり。

二一　孟子論

要旨

孟子の他の戰國諸士と大にその撰を異にする所以を知らしむると共に私利をのみ護ることは決して永遠の平和を得る所以にあらざることを覺らしむ。

作者

頭注參照。

出所

山陽文稿卷上に出づ、山陽文稿は山陽の少青年の頃の文五十九篇を集めて、上下二卷となせしものなり。山陽自らこの書に就いて「蠹時作ノ文之體、二變矣、始務暢達、後從事於深、今知其兩失也、故兩存之、以驗文藝之升降云」と言へるが、本課の如きは、蓋しその暢達を務めし部に屬せん。

分段

第一段　四十七頁一行目、是七國所以不定於一也まで。
　七國一に定まらざりし所以を論ず。
第二段　四十七頁五行目、何孟子之迂闊也まで。
　孟子のなす所、他の戰國の諸士と大に異り、一見迂闊に思はるゝことを論ず。
第三段　四十九頁一行目、孟子所謂王道蓋此方已まで。
　孟子の衆流に卓越する所以を論ず、この段が中心なり。
第四段　終まで
　他の諸士の言ふ所一も孟子の範圍を出でたるものなきことを論ず。

解釋

〔智勇可以定天下…常由用智勇〕　一見矛盾せるが如き言を以て書き出せる筆法甚だ奇なり。

〔我以智加…我以勇施…是七國所以不定於一也〕　上文の智勇を分ちうけて、天下之所以不定、常由用智勇ことを論ずるなり。

〔紛錯〕（フンサク）　入りみだれること。紛はみだる、錯はまじはる。

〔挈擢〕（ジツタク）　挈は互にひつぱりあふこと。擢はつかむこと。紛錯挈擢にて入りみだれて爭ふことなり。又、「紛挈」といふ熟語あり同意なり。

〔不知其所底〕　爭亂がいつ迄もつゞいてはてしがないとなり底はとどまると訓ず。

〔是七國所以不定於一也〕　「天下之所以不定、常由用智勇」に應ず。七國は戰國時代の齊・楚・燕・韓・魏・趙・秦の七をいふ、これらの國は或は武力を用ひ或は術策を用ひて常に相爭ひ互に天下を統一せんとせしも能はざりしなり。

〔長槍大劍旁午天下〕　絕えず到る所に戰爭がありしこと。旁午（ボウゴ）は縱橫に交り橫はること、又縱橫にゆきかふこと。ここは後の意。漢書霍光傳「使者旁午」

〔如雲而起〕　盛に起るをいふ。

〔以其所能〕　各々の得意とするやりかたで、（或は武力を以てし、或は辯舌を以てし）利を爭ひしなり。

〔爲未〕　足らないとする。

〔唐虞三代衣裳之治〕　唐は陶唐氏帝堯、虞は有虞氏帝舜、三代は夏・殷・周。衣裳之治とは爲政者衣裳を垂れたまゝ坐しなるも下自らその德に化して天下太平となる政治をいふ。

〔何孟子之迂闊（ウクワツ）也〕　この一句、大に孟子を抑ふ、これやがて大に揚ぐる素地。迂闊とは、まはり遠くて（迂）世事にうとい（闊）こと、卽ち實地の役に立たぬこと。闊は俗字。

〔戰國諸策〕　戰國策をいふ、漢の劉向、先秦諸人記する所の戰國の時の事を集め、併せて一編の書となす。周策・秦策・齊策・楚策・趙策・魏策・韓策・燕策・宋策・中山策に分ち、を以て諸策と言ひしなり。皆遊說の士の策謀を記す。

〔參諸孟子〕　徒に己が國を利せんとする策謀を記せる戰國策を、仁義を說ける孟子にくらべてみしなり。參はまじふと訓す。まじへ考へ比べてみるなり。

〔嗤其迂〕　嗤は音シ、わらふと訓す、あざわらふ。冷笑すること。

〔捷利（セツリ）〕　捷はすばやいこと、利はするどいこと、捷利は迂闊の反對なり。

〔有如孟子哉〕　前に迂闊なりと落しおきし孟子を是に至りて大に推稱す。

〔何以言之〕　何を根據にして戰國の士を迂闊なりといふか、となり。以下その理由を論ず。

〔謀人國者必曰富之〕　戰國の時所謂遊說の士あり、その輔くる所の國君に向つて「きつとあなたの國を富强にしませう」と言

ふとなり、遊說の士は必ずしも己の生國に仕へず、他國の爲に謀ることありしが故に「謀人國」といひしなり。

〔今我萬乘之國也彼亦萬乘之國也〕 今、齊士が利を謀るといふ甲國が大國なら對手の乙國も大國であり同等の力を有す。甲國が富强をはかる時、乙國が默して之を眺めて居らんやとなり。

この逸の文は、第一段の「我以智加、彼將以智對焉云々」以下と應す。

〔而謂我獨能之〕 この謂は「以爲」と同じ、おもふなり。

〔可謂闕於事情〕 上文「昔迂圓之甚者也」に應す。

〔一萬乘當六萬乘〕 七國について言へるなり。

〔夷也〕 夷は說文に「从大弓」とあり、他を滅して平ぐること。たひらぐと訓す。

〔非迂而何〕 上文「昔迂圓之甚者也」に應す。

〔隨亡〕 隨はそれによりそひついてゆくこと。ここは七世(頭註參照)かゝつて、やうやく平げたものの、まもなく己も亡びたるなり、これ全く「迂圓の法」を以て夷げしによるなり。

〔然則奚爲〕 ではどうしたらよいか(孟子の說ける王道を行ふが最もよしとなり)

奚は何なり、何爲に二種あり(1)何爲(善通、何爲と訓する者、實はこの類に入るべきものなり)(2)何爲(ナニヲスル)、ここは(2)の何爲の用法なり。

〔奕者〕 奕は碁を圍むこと。元來、奕は大也、美也と註せらるゝ文字にて圍碁の意は無きなり。圍碁の意を有する文字は「弈」なり。然るに二字形似るにより相混じて、奕を以て弈の意に用ふるに至れるなり。

〔角其技無相上下〕 その腕なみが同等位といふ意なり。角はくらぶること、技は技術。

〔國工〕 一國中ですぐれたる名人。國士・國色・國良等と同構成の熟語なり。

〔下子〕 碁石をうつこと。子は碁子なり、ごいし。

〔大人君子〕 大人は大德ある人、君子は君をそなへた人。二語同意に用ひしなり。前文「國工」に應す。

〔規略〕 規畫に同じく、はかりごとなり。

〔必有衆人不及知者〕 前文「必有出人意表者」に應す。

〔譬之嬰兒〕 嬰兒は赤子なり、孺子と同じ、蒼頡篇「女曰嬰、男曰兒」、譬は、似た點を比べてたとへるなり。例は具體的實例を示すことなり、混すべからず。

〔彼……以求其所欲〕 其は彼をうく、求其所欲は搾取するなり。全體の意味は民を驅うちおひまはして自己の利益をはかるとなり。

〔施之飴蔗〕 あめや砂糖を與へるとは民の幸福を本位として治めることをいふ。

〔孟子所謂王道蓋此方已〕 孟子が主張した王道といふのはこの民の幸福を本位とするやりかたなんだ。王道は霸道の反對にて、德を以て人民に君臨する政治なり。方は方法。

〔太史公傳孟子〕 忘友公の太史は太史令にて歷史記錄を司る漢の官名、公は尊稱。漢の司馬談及その子遷相繼いで太史令たりしが故に昔太史公と稱するも、ここは遷を指す。司馬遷、史記卷七十四に孟子荀卿列傳を立て、孟子の傳を書けり。

〔方是時……闕事情〕 史記、孟子荀卿列傳中の文より採れるなれど、可なり改めてあり。

〔商鞅〕 本姓は公孫氏、鞅はその名、商の地に封ぜられし故、商鞅、又は商君といふ。秦の孝公に事へて國を富ませ兵を强くし、諸侯を震恐せしめたり、孝公薨後讒に遭ひ一旦逃走せしが、復秦に返り、遂に車裂の刑に處せられたり。その思想は信賞必罰、厚祿嚴刑、游食の民を驅りて耕戰の務に納れ、浮華無用を去りて富强を來させんとするを主とす。

〔吳起・孫子・田忌〕 皆古のすぐれたる兵法家なり。

〔吳起〕 衞の人なり、好みて兵を用ふ、曾參に從學し魯に事ふ。齊を破りて功ありしも讒せられて魏に行く、魏の文侯以て西河の守となし、武侯も亦善く之を遇す、後疑はれて去り楚に行く、楚以て相となし大に諸侯を震驚す。又宗室に斬まれ遂に殺さる。

〔孫子〕 孫臏なり、孫臏は孫武の子孫にして、嘗て龐涓なる者とともに兵法を學ぶ、既にして龐涓は魏に事へて惠王の將軍となりしが、孫臏の己に優れるを嫉み、策を以て罪に陷れ其兩足を斷て之に黥す、偶〻齊の使者、孫臏を知り救せて歸る、齊の將田忌善く臏を遇す是より齊に於て大に重んぜらる。

〔田忌〕 齊の將なり、孫子と力を合せ大に魏軍を破る。

〔視孟子爲……〕 この文に於ては「視……爲……」の主語は秦・楚・魏・齊と解せざるべからず。史記の原文にては梁の惠王が主語となる書きぶりなり。山陽、意を以て改めしなり。

〔商鞅之務農〕 商鞅は大に農織を重んじたり。史記、商君傳にそのやりかたを記したる内に「本業農耕織、致粟帛多者復其身」とあり。

〔深耕易耨〕 易は簡易なり、草をぬき間をすかすをいふ、耨は音ドウ、又はヂョクくさぎること。一說に易は治なり、をさむと訓す、今前說をとる。孟子梁惠王上に孟子の言として「王如施仁政於民、省刑罰、薄稅斂、深耕易耨、壯者以暇日、脩其孝悌忠信、入以事其父兄、出以事其長上、可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵矣」とあり。

〔佞私鬪勇公戰〕 私に爭ふことをせず君の爲に戰ふ時は勇敢になすこと、商鞅はかゝる方針で秦の民を導きたり、史記・商君傳「行之(商君の方針)十年…民勇於公戰、怯於私鬪」

〔孝悌忠信、親其上、死其長〕 深耕易耨の條に引ける孟子の文參照。

〔無不本此〕 此は前文、孝悌忠信云々をうく。

〔孟子之範〕 範は範圍なり。

教授上の注意

一、第二十五課に於て孟子の思想に關して幾分の知識を授けたるを以て、本課は容易に了解せしめらるべし。本課を了解することによりて孟子思想の大體と、當時に於ける孟子の立場とを知るべく、之を知りて二十二課以下の拔萃を十分理解し得ん。

一、本課は難解の語句、殆んどなきを以て文の構造を了解せしむることに力を注がるべし。

一、山陽は方正學の文を學びし時代あるものの如し、この文の論調は明に方正學に得たるものなり。

一、孟子と他の戰國諸士と異る根本的相違點は、孟子は天下萬民の福利幸福を主眼とし、決して己又は己の事ふる君の私利を謀らざるに、他の諸士は、己の事ふる君の私利を謀ることに汲々たりしこと是なり、山陽のこの論文はこの根本點を十分論じ盡さゞる憾あり。教授者宜しく適當敷衍して授けられたし。

三 何必曰利（一）

要旨

功利の念のみ強くして道德を顧みる暇なきは却つて自から滅す所以なることを知らしむ。

解釋

〔見梁惠王〕 見は(1)音ケン―みる(2)音ゲン(現)―まみゆ（禮を備へて、目通りをする）なり、ここはまみゆと訓ずるを可とす。（朱注はケンと讀めり）

梁惠王とは魏侯罃なり。魏、大梁に都し僭して王と稱す。惠は其の諡なり。故に梁惠王といふ。史記魏世家に「惠王數敗ニ於軍旅一、卑レ禮厚レ幣以招ニ賢者一、鄒衍・淳于髡・孟軻皆至レ梁」とあり。

〔叟〕 長老を呼ぶ稱なり。ここは尊びて叟といひしのみ、年老いたるが故に言へるに非ず、翁は先生といはんがごとし。この稱を用ひしことによりて、惠王の孟子を尊禮せしことを知るべく、從つてその期待の大なりしことも知るべきなり。

〔亦將有以利吾國乎〕 亦とは、他の遊說の士のなせるが如く叟も亦の意なり。有以の以の目的語は省略せられたるなり。あることなど補ひて見るべし。

史記、魏世家には「將ニ何以利ニ吾國一」に作り、論衡刺孟篇には「將ニ何以利ニ吾國一乎」に作れり。

利とは富國強兵の策によりて得る惠王の私利なり。

〔孟子對曰〕 對とは長者に應對するの辭なり。

〔王何必曰利〕 王には利と標榜さるゝ必要はありますまい。

王何ゾ必シモ利ト。曰ハンと讀むべし、「何必」の必は「不必」の必と共に必ズシモと讀む、曰は、ある事を標榜するなり。

曰は言と異なれり。曰利とは利を以て標榜とするなり。王、利を標榜せば下皆之に倣ふを以て、孟子、之を不可とするなり、（標榜とは主義・主張とするゝかんばんとすることなり）

王、開口第一に「利」と曰ひしを以て、孟子先づ之を破る。

〔亦有仁義而已矣〕 王も亦たゞ仁義を以て標榜せらるゝべきです。

亦とは古の聖王仁義を以て標榜せられし如く、王も亦なり。矣は上の語を確認するなり。

〔何以利吾國〕 以下、王が利を標榜するより生ずる惡結果を言ふなり。何以はどんな手段で、なんとかして、なり。

〔大夫〕　諸侯(當時僭稱して王といふ)に仕ふる家老なり。

〔士庶人〕　士は大夫につぐ身分の者、庶人は平民なり。

〔上下交征利而國危矣〕　かく王は己の國を、大夫は己の家を、士庶人は己の身を利することのみに熱中して、上は下を損しても己を利せんとし、下は上を損しても己を利せんとせば結局國そのものが危くなりませう。

交はこもごも、征は取なり。交征とは上は下より利をとり、下は上より利をとること一説、交を俱と訓じ、上下俱に惟〻利を取ることにつとむと解す。亦通ず。

この両句則と同用なり、上の條件より下の結果を生ずることを示す。「國危矣」の國の字、「亦將有以利吾國乎」の國の字と對照して見れば意味甚だ深長なるを覺ゆ。

この「危」下文の「弑」「奪」「遺」皆、「利」より生ずるなり。

〔萬乘之國弑其君者云々〕　上の「國危矣」をうけて更に詳說せるなり、上下交〻利を取るが爲に發る「國」の危害に就いて、特に力說せる點に注意せられよ。

萬乘之國とは兵車一萬乘を出す國の意にて、もと王(天子)の國をいひしなれども、ここは諸侯の大國をいふなり。千乘之家とは大國(萬乘之國)に事へ兵車千乘を出す采地を賈つる大夫をいふ。(古は戰に兵車を用ひたれば、その出し得る兵車の數を以て國の大小を示せしなり)人々唯己の利を取りて飽くことを知らずば、萬乘の大國に於ては必ずその下に事へる千乘の大夫が、その君を弑して國を奪はずんば飽かざらんとなり、千乘之國は大國に次ぐ諸侯の國、百乘之家とは千乘の國に次ぐる大夫なり。

〔萬取千焉云々〕　萬乘の領地の内から千乘だけの領地を賈ひ、千乘の領地の内から百乘だけの領地を賈つて居れば、決して不足とはなすまいに、

「萬取千焉」の焉は萬をうく。「萬乘の國に於て千乘をその萬乘から得る」なり。

「不爲」「不多矣」の「不爲」は「ナサザラン」と訓み不足とはすまいの意なり、多からずとすまいのに苟に義を後にせば……とつゞくなり。

〔苟爲後義而先利〕　苟は誠なり、通行本苟に作るは非なり。(委しくは二五課苟不充之の條參照)「後義」とは義を無視するなり、この義は仁を兼ぬれども、功利主義の念を制するは主として義の觀念による故特に義一字を用ひしなり。義とは人として當然履むべき正しき路なり。ここでは主として尊を尊ぶ意味なり。

〔不奪不饜〕　君の所領をも皆取つてしまはれば滿足しますまい。

饜は飽なり、滿足すること、あくと訓ず、以上利を標榜することの却つて王の不利となることを正面より說く。「不奪不饜」の四字その極點なり。

以上は皆「王何必曰利」の五字より生ず。以下「亦有仁義而已矣」に就いて說く。

此の一句、宋に助辭なく、語勢の急迫なること斷岸絕壁のごとし。以て王の心膂を寒からしむるなり。

〔未有仁而遺其親者也〕　仁は親を親しむ心、遺は棄なり、すつと訓ず。

〔未有義而後其君者也〕　後は「後義」の後と同じく無視するなり。この句が主なり。仁義を標榜してこそ却つて王の位置も保ち得るなりとなり。

唯私利を貪つて己の位置を保ち己の慾望を滿足させることにのみ汲々たる惠王に對しては、仁義を說くにも、かく功利的に說かでは效果無きなり。

〔王亦曰仁義云々〕　重ねて此を言ひ深く利を標榜するの禍を知らしめんとせしなり。先には「何必曰利」を先にし「亦有仁義而已矣」を後にせしが、ここに至りてその順序を轉倒して、仁義を先に言へり。孟子の意のある所を見るべし。

教授上の注意

一、この章は孟子開卷第一にあり、蓋し仁義を尊んで功利主義を抑へるは孟子一生の大抱負なれば特にこの章を第一に置けるならん。

一、近代人漸くその個性に目覺むると共に利あるを知りて仁義あるを忘れ、徒に利害關係を打算して行動するはその通弊と謂ひても過言に非らん。身教育の任にある者、豈に「これ時勢なり、已むを得ず」とて傍觀すべけんや。

二三　仁者無敵

要旨

眞に仁德ある者には敵無きことを知らしむ。

解釋

〔晉國天下莫強焉〕　晉國は天下第一の強國であることは……

魏（卽ち梁、委しきことは、二十五課梁惠王の條參照）は本、韓・趙と共に晉の大夫なりしが、後晉の地を分ちて三晉と號せり、故に惠王猶ほ自ら晉國と謂へるなり。焉は晉國をうく。

史記・楚世家に「楚宣王六年、三晉益大、魏惠王尤强」

〔及寡人之身〕　孤者の代になつてから

寡人は寡德の人の義にて王侯自稱の謙辭。

〔東敗於齊長子死焉〕　敗於齊は齊から敗らるなり、死焉はその戰に死ぜるなり。長子は申といふ名なりき、委細は史記魏世家に見ゆ。

〔西喪地於秦〕　西の方では土地を秦の方へとられしなり。

〔寡人恥之〕　之は上の事柄。

〔比死者壹洒之〕　比はためにと訓す。比の原義はならぶことなるが、他の人にならびてその人のためにするより轉じてためにの意となれるなり。

一說、比をまでに（又はころまでに）と訓じ「比死者」を死ぬ時までにと解す。この說は「者」をば來者、今者、昔者などの者と同樣時を示す助字と見るなり、公孫丑下に「比ヱ化者ニ」の用法あるを併せ考へば、この說も亦通ず。洒は洗と古通用せり。こゝは恥を洗ひすゝぐなり。

〔如之何則可〕　どうしたら恥がすゝがれようかと孟子に策を求むるなり。

〔地方百里而可以王〕　百里四方位の小土地でも王道を行ふことが出來る樣の大國を以てして怨を報じ得ずとは何事ぞ、そはやり方が惡さなり、故に王も先づ王道を行ひ給へとなり。地方百里は「地、方百里」の氣味に讀むべし「地方、百里」に非ず。王は動詞、王道を行ふこと、王の位に卽くことに非ず。可以の「以」は方百里を以てなり。而は百里位でもそれでも、なほの意なり。地方百里は、天下莫强焉に應ず。次に王道を行ふについて具體的の說明をなす。王の字は帝王の王では平聲、動詞となれば去聲、日本書紀の天照大神の勅語の吾子孫可王之地也の王は此の後者の用法に屬す。君の字と同視するは非なり。

〔王如施仁政於民〕　仁政を行ふことが卽王道なり。故に先づこの一句あり、省刑

罰以下は仁政の要目なり。

如は「以事其長上」までかゝる。

〔省刑罰、薄稅斂〕　この二句は君の事、深耕以下は民の事なり、両して民然るを得るは君の政によるなり。

〔稅斂〕　年貢をうけいれること、租稅をとりたてること。斂は、ゐさむと訓じあつめること。斂は譌字なり。

〔深耕易耨〕　易は簡易の易なり、禾中雜草混ぜるを除いて簡易にするなり、すかすと訓す、耨はくさぎると訓す、すきて雜草を除くなり。易は深と對す。一說、易を治と訓す。

〔壯者以暇日〕　刑罰を省き稅斂を薄くし又深耕易耨せしめて豐年とならば、自然暇日多きわけなり。その暇日を以て……となり。

〔脩其孝悌忠信〕　其とは壯者の自ら固有するをいふ。

〔入以…出以…〕　以は上の孝悌忠信を以てなり。

〔可使制梃…利兵矣〕　上述の如き王道を施すことによりて生ずる結果をいふ。而して之が卽ち恥を洒ぐ最良の方法なりといふなり。

制梃とは杖をおつとつて（武器など遣る必要もなく）なり。制は掣なり、自由に使ふこと。梃は杖なり。

堅甲利兵とは堅き甲、利き武器なり、大變强い秦楚（二國を擧げしは字句の關係によれるのみ、意味の上では楚をも兼ねたるなりゞ）なもの意なり。

〔彼奪其民時〕　其は彼をうく、彼は秦楚齊を指す。民を絕えず追ひ使ひなどしてその農に從事する暇なからしむるを、奪其民時といへるなり。

〔不得耕耨以養其父母…離散〕　民の時を奪ひて、民をして農に從事し以て其父母を養ふを得ざらしむるなり。その結果父母凍餓し兄弟離散するなり。

暇日を以て孝悌忠信を脩めしむると雲泥の差なり。

〔彼陷溺其民〕　陷はおとし穴に入れること、溺は水中におぼらすこと。民を非常に苦しむるをいふ。かく彼はその民を苦しめ居るを以て彼の方では從を制して敵を撫たしむるなどは勿論、たとへ堅甲利兵ありとも何の用にもたつまじ。

〔王往而征之、夫誰與王敵〕　故に王その事父兄事長上ふる民を率ゐて往きて之を征せば、彼の民樂しんで我に歸すべく、誰か王と敵對せんや、となり。

征は正なり、罪を正すこと。こゝは其民を陷溺する罪を正すなり。

〔故曰仁者無敵〕　故曰云々は（1）他人の言をひいて己の主張の助とする場合と、（2）己の平素の主張をひいて、今の意見と結びつくる場合とあり。こゝは（1）の場合にておそらく古人の語をひけるものなるべし。

〔王請勿疑〕　請はどうぞ、何とぞ、なり惠王は怨に報ゆる手段を問ひしに對し、孟子は仁政を行ひ民を救はゞ敵無しと對ふ。この答へは一見迂闊なるが如くにて、王その效無きを懸はんことを恐る、故に「請勿

疑といひしなり。

【備考】

惠王の主とする所は隣國と角力して怨を報ずることにあり。孟子の主とする所は王道を行ふことに在り。内自ら王道を行はゞその結果隣國の民自ら梁に歸し、怨は自然に報ぜらるゝことゝなるといふなり。孟子の如きは造次顚沛必ず王道を忘れざるの士と謂ふべし。

二四　以五十步笑百步

【要旨】

ある程度迄經濟的安定を得させて然る後德教を興すべしといふ孟子の經世策を知らしむ。

【解釋】

〔於國也〕　國に對しては

〔盡心焉耳矣〕　盡は用ひつくすこと。焉は國をうく、矣は、也のあつさり斷定すると異り、自分はたしかに全心を國事に用ひ盡して居る次第ぢやなどの語氣なり、自分で自分の行爲を確認して表はすなり。

〔河内凶……亦然〕　「盡心焉」ことを具體的にいふなり。

〔河内凶則移其民於河東〕　河内は黃河の北方。黃河の南方を河外といふに對す其民は河内の民なり。河東は黃河の東方。河西に對していふ。黃河は、山西省陝西省の境の邊を北より南に流れ、河南省に出でて西より東に流る。故に河内・河外の稱は東流せる邊についていひ、河東・河西の稱は南流せる邊についていふなり。魏はもと河東に興りしがこの頃は河内をも兼有せしなり。

凶則は凶スレバと讀む、凶作の時はの意なり。

〔移其粟於河内〕　其粟は河東の粟なり粟は穀物。河内の民にして移す能はざる者の爲に食物を運び給するなり。

〔河東凶亦然〕　然はしかすと讀む。その通りするなり、卽ち民を移して食に就かしめ、老穉など移す能はざる者の爲には食を移して之を給するなり。

〔無如寡人之用心者〕　用心は前文の盡心と同意なり。隣國には自分程熱心に民の爲に心を盡し用ふる者無しとなり。これ惠王の自ら得意とする所なり。

〔隣國之民不加少…何也〕　加少は少き程度を增すこと、卽ち減ずること・なれば、不加少は減ぜざる意なり。不加多も之に準じて知るべし。何也は、どうしたわけぢや、といふ意なり。こゝに惠王の不平、不審あるなり。（我かく心を盡せば、隣國の民我が方へ歸附すべきに、さうならないのは、何故ならんと自ら怪しむなり）

〔請以戰喻〕　喻はたとへて事理を明にするなり。こゝは戰爭の事をひきあひに出してそのわけを明にしようとなり。（巧に譬喻を用ひて論ずるは、孟子の最も得意とする所なり）

〔塡然鼓之〕　塡然は太鼓の音の響く貌、どんどんなどいはんが如し。「之」は焉と同じく其の場を指す。古の戰爭は鼓聲を聞いて進み、金聲を聞いて退く。

〔兵刃既接〕　鼓聲により進軍して、もう敵兵と兵刃を交へながら、兵は武器。接は交なり。

〔棄甲曳兵而走〕　敗れて逃ぐるなり。而はながら、と譯す。甲を棄つるは、身を輕くして走るに便にするなり。

〔以五十步笑百步則何如〕　自分は五十步しか逃げないといふ理由で(以)百步逃げたものを卑怯だと笑つたとしたら、それはどんなだ、(可か不可か)この何如と前課の如之何とを比較してその差を明瞭にせしめられたし。何如―どんなだ、狀態の疑問如何―どうするか、方法の疑問。

〔不可直不百步耳是亦走也〕　笑つては不可ぬ、笑ふ人も百步行かなかつた迄で、逃げたといふ點は同一ではないか直はたゞと訓す、古は直と特と同音なりき。

〔王如知此則……隣國也〕　王もしこの道理がわかるならば、自國の民が隣國より多きを望むこと無き筈なり。王の政を以て隣國より優ると思ふは恰も五十步を以て百步を笑ふが如きなり。王も隣國も王道を

距ること遠さは何れも同一なり。民之多於鄰國、の於は比較を示す。ヨリと譯む。

以下王の爲に王道に就いて說くなり。

〔數罟不入洿池〕　數は趨玉切、音ソク―はそい、こまかい。罟はあみ、數罟は目の細かい網。洿は哀都切、音ヲ、くぼち。洿池は水だまりなり。

〔斧斤以時入山林〕　斧斤は木を伐る道具、大なるを斧といひ、小なるを斤といふ。適當なる時に於てなり。適當の時を以て伐るとは濫伐せざるなり。濫伐せずば、よく大材を得て、宮室棺槨の用となすべし。

〔養生喪死〕　生きて居る者のために事へて十分之を養ひ、死ぜる者のために喪に居り十分祭る。(これ民の生活に於て最も急にする所)

〔無憾〕　憾は遺憾、心殘り。生死給せざるの憾なり。

〔王道之始也〕　民をして先づ物質生活の安定を得しむるが王道の第一步なりとなり。(この王道を行はゞ自然、その民、多くなるべしと、暗に篇首に應す)

以上、王道の始(根本)を論す。主として在位者の用を節して民を安定せしむる方面について論す。

以下、「然而不王者、未之有也」までは王道の要點を論す。主として民の養、教について論す。

〔五畝之宅、樹之以桑〕　五畝之宅に就いては古人の諸說一致せず、今、正確なることは詳にし難きを以て、この本文に卽して、當時農民の屋數は五畝の廣さありしものと解しおきて可なり。(安井息軒に從へば、五畝は我が廿二步餘に當る)その屋數に桑を植ゑて養蠶の用に供するなり。

〔五十者可以衣帛矣〕　この句の上に「則」字ある心持で、解せよ(以下之に準ず)桑を植ゑば、五十の老人はそれによつて帛か着ることが出來ようとなり。帛はねりぎぬ、輕くして暖なれば老人に適す。

〔鷄豚狗彘之畜〕　彘はゐのこ、畜は許

六切音キク、又は許救切音キウ。養なり、

〔無失其時〕　孕めるものを殺さゞるないふ、時は大切な事なり。

〔百畝之田勿奪其時〕　百畝之田は一夫の受くる所。其時は農繁期、お上の仕事の爲に農繁期を費させるやうのことなくば、

〔數口之家〕　家族數人の家、普通の家、

〔謹庠序之敎〕　敎化を盛にするなり。謹は嚴なり、嚴重に行ふなり、庠序、共に學校のこと、殷に庠といひ周に序といふ。こゝはそれを併せ稱せしのみ。

〔申之以孝悌之義〕　申はのべると訓す伸と通ず、此處では、敷衍するなり、孝悌の義理を以て庠序の敎を廣く世に敷衍するなり。布きのべるなり。

〔頒白者不負戴於道路矣〕　頒白は白髮交りの者卽ちごまじほ頭。頒は斑なり。頭に白髮交りて斑々たるなり。負は荷物を背に負ふなり、戴は頭上に戴くなり。肚者が老に代りて勞に當り老年者をして重き物を運ばせなどさせざるに至らんとなり。

〔黎民〕　(1)黎は黎に同じく黑色なり、庶民は冠を著けず、黑髮を現はすを以て黎民といふ。(2)黎は旅なり旅は衆なり。黎民とは衆民のことなり。(1)の說普通に行はれ居れど寧ろ(2)說の妥當なるに如かず。

〔然而不王者未之有也〕　然はしかあり、しかなり、如是といはんが如し、かくありて、それでの意なり。上の七十者衣帛食肉以下二句をうく。而はしかもなり、王は動詞、王道を行ふことなり、かく經濟上の安定を得させて、而も王道を行ひ得ざる者は無きなり、となり。(かくなれば、民自ら多きを加へんと暗に篇首に應す)

〔狗彘食人食而不知檢〕　これは豐年の時についていふ。而はしかも、檢は斂と通ず、收めること、漢書食貨志にこの文をひき斂に作れり。豐年には粒米狼戾、犬彘も人の食を食ふ有樣なればこのときとりたてても(斂)人民には苦痛を與へぬなり、然るにそれをせず、といふなり。

一說、檢は檢束の檢にてとりしまること、人食を食ふ狗彘をとりしまると解す。

〔塗有餓莩而不知發〕　これは凶年の時についていふ。塗は途なり。莩は零落なり(卽ち死なり)餓莩は餓死なり。發はひらくこゝは倉庫をひらくなり。凶年に道路に餓死者横はる狀態となりても王の倉庫をひらいて民を救ふことを知らずとなり。

〔人死則曰非我也歲也〕　餓死する者が出ても是は凶歲の爲やむをえない、別に自分の罪ではない、といふなり。(實は王の政治のやり方が惡い故餓死者を出したのだのに)

〔是何異於刺人而殺之曰非我兵也〕　王の腳脚を刺すが如き銳き譬喩なり。「刺人而殺」の而は別の手段ではない現に人を刺してそして殺しておきながらの氣味を表はす、「刺殺人」と比較して味ひみられよ。兵は武器。

〔王無罪歲斯天下之民至焉〕　無罪歲とは、卽ち己を責めるなり、心を用ひ心を盡すはこの點に於てすべきなり。斯はそこで、焉はそこに卽ち他處へはゆかずに王の國に、天下之民といへるは、隣國の民どころか、天下の民皆至らんとの意なり。(篇首の民加多に應す)

練習

宋有ニ狙公者一、愛レ狙、養レ之成レ群、能解ニ狙之意一。狙亦得ニ公之意一。損ニ其家口一、充ニ狙之欲一。俄而匱レ焉、將レ限ニ其食一。恐ニ衆狙之不レ馴ニ於己一也。先誑レ之曰、「與ニ若茅一、朝三暮四、足乎。」衆狙皆起而怒。俄而曰、「與ニ若茅一、朝四暮三、足乎。」狙皆伏而喜。

損其家口―家内の人数を減らしてまで。

茅―チョーどんぐり、くぬぎ。

朝三暮四―人をごまかすことの意に用ゐらるゝは此の故事による。

列子―黄帝篇に據る。（莊子齊物論篇にも出づ）

二五　四端

要旨

人皆その本然の性中に道德の萌芽を有するを以て、大に之を擴充すべきことを知らしむ。

作者・出所

孟子、名は軻、字は子輿、或は、云ふ子車と、又云ふ子居と、鄒（今の山東省に屬す）の人なり、その生年に關しては異說多きも、卒年は均しく周の赧王二十六年（皇紀三七二、西紀前二八九）とし、壽八十四となす。孔子より百餘年後の人なり。幼にして慈母三遷の敎を受け長じて業を子思の門人に受く。（或は子思に師事せりともいふ）道既に通じ、諸侯の間に往來して、仁義王道を說きしも、當時諸國徒に相戮ひて富國强兵の道に汲々たりしかは、その說を以て迂遠にして事功に切ならずとして用ひず。孟子終に意を當世に絶ち弟子萬章の徒と孟子七篇を作る。その說、性善を本とし堯舜を以て理想となし、仁義王道を行ひて當世を治めんとするにあり。孟子の長ずる所は雄偉明快なる辯論にありて、冷靜なる思索家には非れども、よく孔子の道をつぎ儒敎を闡明せる功績甚だ大なりと謂ふべし。唐の韓愈大に之を推稱してその功禹の下に在らずとなせり、後、宋の朱熹は孟子の書を以て四書に入れしにより廣く世に行はるゝに至れり。孟子の注釋書としては左の數種夫々特色あり。參考とすべし。

漢趙岐注孟子
宋蘇洵　蘇評孟子
宋朱熹　孟子集注
清焦循　孟子正義　（皇清經解）
伊藤維楨　孟子古義　（四書注釋全書）
中井積德　孟子逢原　（同）
竹添光鴻　孟子論文
安井衡　孟子定本　（漢文大系）

解釋

〔孟子曰〕　この曰の字は本課の終迄かゝる。曰の字を以てはじまる引用句は最後にトと結ぶ振習慣づけさせおくこと肝要なれども、本課の如く長文にわたる時は拘泥せざるをよしとす。但その旨趣に注意を興へおかれたし。

これ孟子の獨語に非ず、必ず對者（おそらく在位者）に向つての言なることを忘るべからず。

〔人皆有不忍人之心〕　苟くも人たる者は皆他人に對してじつと傍觀して居られぬ心をもつてゐる。

忍に二義あり(1)こらへる、がまんする。卽ち含忍、堪忍の忍なり(2)むごいことをして平氣でゐる、卽ち殘忍の忍なり。こゝは(2)の意。不忍とは不能忍なり〻不忍人とは他人に對して害を加へるに忍びぬ又他人が困難にかゝれるを平氣で見てゐるに忍びぬといふ意味なり。

この一句、人たる者皆固有の善心の萌芽あることを冒頭し次の先王云々の準備となす

「人皆」の二字注意すべし。この不忍人の心なき者は人に非ざるの意、自らその内に含まる。

〔先王……斯有不忍人之政矣〕　先王とは古の聖王をいふ。堯・舜・禹・湯等是なり。斯はこゝにと訓す、その用法「則」と似たれども斯は何處迄もこの、これなるその字の本義を失はず、上の名詞をうけて下をおこすなり。こゝは上の先王をうく。先王人に忍びざるの心ありて、その人に人に忍びざる政ありきとなり。

有――奕は過去、ありきと讀む。

この句、先王の政といふも、別段神祕不可思議のものに非ず、誰でも固有せる不忍人の心を内に有して、之を外に擴充したるものの是なりといふなり。

〔以不忍人之心…治天下可運之掌上〕　先王のなせる如く人に忍びざる政をなさば天下を治むることは極容易である。

運は運轉の運にて、丸などをぐる〳〵と自由にまはすこと。可運之掌上とは、掌上に玉でもまはすやうに、天下をば容易に思ふ通りに用柔るとなり。

治天下云々は、當時の人々、自ら内に省みることを知らず、徒に武力權謀を以て天下を取らんとあせる者のみ多きに對しその非を指摘せるなり。

〔所以謂人皆……者〕　自分が人皆有不忍人之心と謂つたわけ、それは、……と以下そのわけを說くなり。

こゝの所以は何以の意と泄明するもよし。何を以て人皆有…と謂へるかとならばそれは…。

〔今人乍見孺子將入於井〕　今假りに或人がちらと乳呑子がもう井へはいつて行かうとするのを見れば、

今は、今假りにの意、今人と連れ讀むべからず。乍は鋤駕切、音サ。ひよいと、ちらと、なり。忽、のにはかに、おもひがけなくなどの意を主とせると稍異り、この文、忽を使はず乍を使ひし所に妙味あり、ひよいとちらと見ただけでも……の意なり。

孺子は物心のつかぬ子供、やうやく歩きはじめた乳呑子。釋名に「兒始能行曰孺子」とあり。

〔皆有怵惕惻隱之心〕　どんな人間でも皆はつとおそれいたむ心がおこる。

皆とは苟くも人ならば誰でも。怵は敕律切ヂュツ、ーおそる。惕は他歷切、テキ――うれふ。おそる。惻はいたむ、隱はいたむあはれむ。怵惕惻隱之心は卽ち不忍人之心なり。

〔非所以內交於孺子之父母也〕　それによつて孺子の父母と交際を結ばうといふのではないのだ。

內は納と同じ、內交とは交際を申込なり。かゝる所以は、それによつてと上から譯するも可。……するがためと下から譯するも可なり。元來「所以」の「所」字は、なに若しくは、それの何れかを表はす。從つて所以はなにかもつてか、それかもつてかの何れかなり。而してなに若しくはそれはその內容として原因、理由、方法、手段等種々の意義をとる故、この根本原理を心得た上前後の關係により適宜譯すべきなり。何時もゆゑの一義を以て一貫すべきに非ず。

〔要譽於鄉黨朋友〕　要はもとむと訓す告子篇にも以要人爵と用ひらる。要譽はよき評判をとらうとするなり。

〔非惡其聲而然〕　聲は聲譽なり、ここは孺子を救はざる爲おこる惡評を意味す惡其聲とは惡評のたつのをいやがつてなり然はさうする、あのやうにする、なり。ここは怵惕惻隱の心をおこすことをいふ。

三つの非也は、怵惕惻隱の心は他人の爲に起るに非ずして、何人もその心中より自然に涌出する者なることを言ひて、所以謂人皆有不忍人之心者に對する說明となす。

〔由是觀之〕　このことから考へてみるに。「是」は今人乍見…非惡其聲而然也の內容をうく。

〔無惻隱之心非人也〕　惻隱の二字、前の怵惕惻隱より來る。非人とは、人間以外の者、卽ち禽獸なりといふなり。苟くも人たらば皆この心ありとなり。

〔無羞惡之心非人也〕　上に最も主要なる惻隱の心に就き實例を擧げて詳に說き人をして自省し、納得せしめたれば、これ以下は類推して自省せしめ得るを以て、一一實例を擧げず、省略に從へるなり。是れ古文の法なり、徒に論理の不備を以て難ずること勿れ。

羞は己の不善をはづるなり、惡は人の不善をにくむなり。又、帆足萬里は羞惡を解して自らその不善を羞ぢて之を惡む意となせり。

〔辭讓〕　辭はことわる、讓はゆづるなり。

〔是非〕　善を是として肯定し惡を非として否定するなり。

人の心萬端なりといへども以上の四者にて之を概言せしなり。

〔惻隱之心仁之端也〕　端は本なり、首なり。人の固有せる惻隱の心をよく擴充せば仁德を完成すべきが故に之を端といへるなり。

朱熹は端は緒なりとし、人の先天的に有する完全なる仁が惻隱の情の發動によりて外に見はるゝなりと解せるも、かくては次の

「擴而充之」の語通ぜず。朱説大に孟子の本旨に悖れり。

〔人之有是四端也、猶其有四體也〕　人が誰でも生れながらに前述の惻隱羞惡、辭讓、是非の心を有するは、人たる者誰でも生れながらに手足を有すると同樣だ。

是は前述のの意。也は上を提示し確認す、その作用「者」と似たり。其は人をうく。四體は四肢なり、人にして生れながら四肢を有せざるは無し、故に必ず四端を固有することに比べしなり。

〔有是四端而自謂不能者、自賊者也〕　四端を固有しながら、しかも(而)自分は之をおしひろめゆくことをよくしないなど思ふ者は自分で自分の手足を切り賊ふ者だ。

謂はおもふ、考へると譯す。能は下文の擴而充にあたるこの句は上の四體有るに喩へたる句の連續なれば、賊の字も四體を賊害する意に解すべし。抽象的にその本性を賊ふなど解するは非なり。賊其君も亦同じ。

〔謂其君不能者、賊其君者也〕　この句が主なり、在位者に對して諧責せしなり。

〔知皆擴而充之矣〕　四端を有せる人が、四端皆を擴め大きくすることを自覺した狀態とならば、知は覺知なり、自覺なり皆は四端全部。擴は廣なり、充は大なり。本能的の四端を完全なる道德に迄發展さすなり。矣は推想を表はす、下文につゞく關係上ランニハと讀みたるなり。完全なる仁義禮智の德も、もともと四端を發展させて完成するものなりと自覺したならば、となり。

〔若火之始然泉之始達〕　火が燃え出し泉が流れ出したやうなものだ。(これは自ら反みて四端を自覺せし狀態をいへるなり)然は犬肉の火上にあるにて燃の本字なり。「然」を助字に使ふに至り、區別する必要生じて燃の字作られたるなり。達は通なり。始は時間の上につきていふ、…しだい意なり。火水はじめは小なりしも之を廣大にすれば至らざる所なし。四端亦此の如し之を擴充して足以保四海に至るなり。

〔苟能充之〕　苟は己力切音キヨク、まこと、と訓す、羊(羊)の上部と勹(包の省形)と口とを合せたる字なり。苟と音、義俱に別なり。通行本苟を苟に混ぜるは非なり。「充之」は上の「擴而充之」を略して書けるなり。まことに實にその自覺せる四端を外に擴充して行かばとなり。

〔足以保四海〕　保は滕文公篇の「古之人若保赤子」の保と同じく、やすんずと訓じ撫育することなり。保四海は前文の平天下に應ず。これは四端を擴充せし結果についていへるなり。

〔苟不充之云々〕　これは四端を擴充すべきことを自覺しながら、而も外に擴充せずば、毫も道德を行ひ得ざるをいふ。

備考

一、孟子のこの章は普通、孟子の性善説として知られをれど、この章の論旨は寧ろ天下を平げ四海を保つことに在り四端の説は四海を保つ所以の根源として述べられたるなり。

一、孟子の性善説は人生れながらにして其性全體完全なる善なるものたりといふに非ず、「有」の字は其性中にかゝる道德性もあるといふことにて、道德の根本の萌芽が本然の性能に發起するをいふなり。

二六　保民而王

要旨

王道の根本義を知らしむると共に巧に譬喩を設けて論旨を發展せしむる孟子論法の妙を覺らしむ。

解釋

〔齊宣王〕　姓は田氏、名は辟疆、宣は諡なり、亦借して王と稱す。

〔齊桓晉文之事〕　齊の桓公、晉の文公の事、卽ち覇業なり。事は事業、齊桓公、晉文公は春秋五覇の内。

〔可得聞乎〕　お聞きしたいものだ。宣王・齊桓晉文の如き覇業を成さんとする欲望あり、故に開口第一その事を聞きたしといへるなり。宣王のこの欲望に注意せでは、孟子の應對も十分了解し難からん。可得聞乎の四字、輕々に看過する勿れ。

〔仲尼之徒無道桓文之事者〕　仲尼之徒は孔子の門人。道はいふと訓するも言と異り、己の道としていふなり、卽ち主張するなり。孔子の門人、桓文の覇業を主張するなしとなり。桓文に就いて言はずの意に非ず。

荀子、仲尼篇「仲尼之門人、五尺之豎子、言羞稱三手五伯」

〔是以後世無傳焉臣未之聞也〕　從つて後世そんなことについて傳へず、私も聞いて居らぬとなり。焉は桓文之事なり。孟子開口第一に宣王の要求を斥け、次に己の主張を說かんとす。

〔無以則王乎〕　是非何とかいはねばならぬなら、王道を行ふことを申上げませうか、以は己と音通、無以とはやむを得ずば是非言へとならばの意、これを宣王是非問ひたいならば王道に就いて問ひ給へと解する說あり、これは次に宣王問うて「德何如則可以王矣」とあるにひかれたるにて、文の脈絡を得たる解に非ず。

王は去聲、活字として、王すると讀む方寧ろ適切なり。王道を行ふこと、以下之に倣へ。（日本書紀天照大神の神勅に可王之地也とあり）この意味ありげな一句にて、宣王の話題を、知らず識らず、王たることに向けしむ。

〔德何如則可以王矣〕　この一句にて、宣王が、王道を行ふことの極めて困難にして、己などのなし得る所に非ずと考へ居る樣子を見るべし。

可矣はべけんと讀む、王は矢張去聲にて活字キミと名詞にて訓ずるは宜しからず。

〔保民而王莫之能禦也〕　孟子のこの答は、王道を行ふことの決して難事に非ざることをいふ。

保は安なり、保民とは民を安んずること、卽ち民を惠んでその生活を安定せしむることなり。

保民の二字が王道の根本なり、故に孟子先づこの二字を言ふ。

禦はふせぐと訓ず、又、とどむと訓ずるも可。之は王たること、民を安んぜしめて王道を行はゞ、之を邪魔し止めるものなけんとなり、卽ち王道を行ふとは別段困難なることに非ず、民を安んずることにはじまるといふなり。

莫之能禦の語法に注意、「否定詞＋代名詞＋動詞」（莫之禦）の形に於て、その動詞を修飾する副詞を要する時は、副詞は動詞の直上に置かる、故に「否定詞＋代名詞＋副詞＋動詞」（莫之能禦）の形となるなり。莫は無と少し異り、推想の辭にて「なからむ」なり。

〔若寡人者可以保民乎哉〕　以下「保民」が問答の中心となる。乎哉と疑問詞を重用せしは、宣王の胸中、己の保民、民んずるに足らざるを恐れ、深く疑ふなり。

〔曰可〕　宣王の深き疑問に對し、孟子は、輕く「可」の一字を以て答ふ。故に可也と也の字も着けず。是に於て宣王愈乘り出して更に問はざるを得ず。可は可以保民の省略なり。

〔曰何由知吾可也〕　何を證據に、自分が民を安んじ得ることを知るゝかと、宣王聊、せきこんで問へるなり。孟子より極めて容易に「可」と答へられしにより、幾分自信を得たるなり。也は耶と通用。

何由は何以と同意なり「吾可」の可は前文の可をうく。

〔曰臣聞之胡齕〕　之は以下述べんとする胡齕の話をさす。胡齕は宣王の近臣の名。教科書に『　』を以て示せる部分が、胡齕より聞きたる話なり。

〔王坐於堂上〕　堂は離宮の堂なるべし。廟堂なりと解する說あれども恐らくは非ならん。

〔牛何之〕　王が牛を牽ける者に問ひしなり。之は目的地へゆくことにて、行と異へゆくこと、又ある出發點より歩行することなり。行は歩行すること。「之」は北京官話の去（チイ）に當り「行」は走（ツオウ）にあたる。

〔對曰將以釁鐘〕　牛を牽ける者王に對へしなり。以は「以牛」なり、釁は虛振切音キン、ちぬると訓ず、新に鐘を鑄て成れる時或は宮室の成れる時など牲を殺してその血を塗り之を神聖にする一種の儀式なり。

〔舍之〕　王が牽牛者に言へるなり。舍はおくと訓ず、捨と同じ、牛をつれてゆくことをやめよとなり。

〔吾不忍其觳觫若無罪而就死地〕　牛のおづおづしてゐるさまが、あたかも人の罪無くして死刑の場所に就くが如くなるを見ては實にたまらぬとなり。

不忍は二五課參照。觳觫は恐懼の貌、おづおづ、びくびく、こそこそなどいはんがごとし、踟躕、郭宗等と同語源ならん。

〔曰何可廢也以羊易之〕　王の言、何可也は反語、「易之」の之は牛。

以上が胡齕より聞きたる話。

〔不識有諸〕　孟子が宣王に對して、そのことありしやと更に念をおしたゞすなり。諸＝之乎。

〔曰有之〕　宣王が孟子に對し、そのこと

ありきと答へしなり。

〔曰是心足以王矣〕　是心は牛を憐れみし心即ち不忍の心を指す。不忍の心が即ち保民の原動力となるなり。〔不忍之心＝保民＝王道〕なり。換言せば、不忍の心（即惻隱の心）は仁の端なり。この心を擴充せば仁政（保民）となる、王道は是のみ。宣王その端を有して自ら擴充するを知らず故に孟子之を指摘せしなり。

この文が、前文、宣王の「何由知吾可也」問へるに對する直接の答なり。是心はその心と譯すべし。邦人「是」字を一概にこれこのとのみ譯するは誤れり。

〔百姓以王爲愛也云々〕　百姓は庶民をいふ。又百官の意に用ふることあれど、この用法と別なり。この王は平聲、名詞、宣王を指す。愛は惜なり、啬なり。俗語の「捨てるのがおしい」などのおしいなり。こゝは宣王が牛を殺すのをおしんだと百姓が思へるなり。

孟子、この言を加へて、宣王をして是心足＝以王＝る所以を求めしめんとせしなり。

〔然誠有百姓者〕　然は上の「百姓以王爲愛」を一應肯定せしなり。然はさうぢや、眞ほんたうになり。有百姓者は有＝如百姓所言者＝にて百姓たちの非難するやうなことにも見えるが、實はそんなつもりに非ずとなり。

一說、「有百姓者」は無智淺識な百姓といふ者があつて、自分の行つたことを皮相的に判斷するが、と解す。

〔齊國雖褊小〕　褊は補典切、音ヘン狹なり。齊國雖褊小とは齊國は褊小ではあるがなり。若し雖＝齊國褊小＝の形式ならば、かりに齊國が褊小であるにしても（實は褊小ではないが）の意となる。但この區別は必ずしも嚴重に使ひわけられず。

〔卽不忍其……故以羊易之也〕　卽はとりもなほさず。それ以外に何もないの意なり。羊を以て牛に易へよといつたのはとりもなほさず牛を憐れに思つただけのことで、その外に何の考もなしとなり。宣王孟子が百姓之非難を引きし眞意を悟らず、從つて答は百姓の非難に對する辯解にとゞまる。

〔曰王無異於百姓之以王爲愛也〕　孟子の語なり。異は奇異の異なり、不思議とするなりあやしむと訓す。以下進ぶることに對して無異といへる。理由なり。

〔以小易大〕　羊の小を以て牛の大に易ふ。

〔彼惡知之〕　彼は複數を示し百姓を指す。之はその理由、卽ち王の不忍の心。惡は安、焉、烏と音通。

〔若隱其……牛羊何擇焉〕　隱其無罪而就死地の無罪の上に若の字を略せり。擇は差別をたてること。焉は牛羊の二に於てなり。牛も羊も違ひなきわけではないか。然るに羊を以て易へし所を見れば、牛の大を惜しめるに似たり。故に百姓が王を以て惜しめりと思ふも尤もだとなり。隱と哀とは同語源の語なり、故に隱をいたむ、あはれむと訓するなり。孟子更にこの難を設けて王の自ら反みてその本心を求めんことを欲せしなり。

〔王笑曰〕　笑曰は宣王自分の心中を顧みてその矛盾に氣づき、自分ながら可笑しくなれるなり。而も未だその本心を得ず。この笑曰は下の說曰に對す。

〔是誠何心也〕　それは實際どんな心持であつたらう。羊を以て牛に易へた心持は自分ながらわからない。自ら怪しみ自ら責むるなり。

〔我非愛其財〕　財は財物、品物こゝは牛に就いていふ。

〔而易之以羊也〕　自分は確に牛を惜しんだわけではない。しかるに事實は羊を以て之に易へたのは、どんな心持だらう。自分ながらわからぬとなり。この句までが、「是誠何心也」にかゝるなり。

孟子から「牛羊何擇焉」といはれたにより、王やうやく自ら反みて考へたれど自分ながらわからざりしなり。故に次に於て「宜乎百姓之謂我愛也」といひて、百姓の非難を肯定せざるを得ず。

〔宜乎百姓之謂我愛也〕　乎カナと讀む。乎――也と呼應して詠歎を裝はす。謂は前文の百姓之以王爲愛の以――爲の二字と同じ、おもふなり、見なすなり。

〔曰無傷也〕　傷は心を傷める、或は心に傷むなり。無傷とは氣にかけるな、大事ないといふ意味なり。宣王のしよげ居るを慰めひきたつるなり。この無傷が「仁を行ふに害なし」と解するは非なり。

〔是乃仁術也見牛未見羊也〕　それでこそかへつて仁を實行する一方法なり。現に牛のそのおづおづした樣を見たから牛に對して不忍る心がおきたるによるなり。是はコレゾとゾを返り讀までは語義あらはれず。

無傷以下、三の「也」字が連用して、先に「牛羊何擇焉」と疑じたるを解けるなり。

〔見其生不忍見其死聞其聲不忍食其肉〕　其聲は禽獸の生時の聲なり。死に臨んでの哀鳴をいふに非ず。

〔遠庖廚(ハウチウ)也〕　料理場を目に觸れない所に設くるなり。

見其＝不忍見其死以下ここ迄は、即前に見た者に先づ不忍之人をおこすのが仁術なることを補說せるなり。

〔王說曰〕　說は悅か通用、よろこぶと訓す。說（悅）は心中によろこぶなり、うれしく思ふなり。

前文の王笑曰と對照す。宣王自分の行爲を反みて怪しみ責め居りしに、孟子よりそれこそ却つて仁の術なりと說明せられしによりほつとして嬉しく思ひしなり。

〔詩云他人有心予忖度之〕　詩は詩經、小雅、巧言篇。云は多くは引用語句の終に添へて、言ふ所かくの如しの意に用ひらるゝが、この場合の如く、引用句の上に用ひらるゝ時は、間接引用を示すなり。卽ち曰「　」の內に更に古書の語を引用する時にこの云を用ふるなり。

忖は倉本切、音ソン。はかると訓す。心中にておしはかること。度もはかるなり。はかるの意の動詞の時は音タク、徒落切。この詩の意味は「他人にある考があるのを自分がおしはかる」となり。

〔夫子之謂也〕　この詩の意味は、あなたのことを言つたのだとなり。「夫子」を「謂」

の目的語の如く説明せば明瞭に了解せしめ得べし。

宣王、孟子の説く所を了解して、説び、説びたるが故にこの詩を引きて孟子のよく己が心を知れるを賞美せるなり。

〔夫我乃行之反而求之、不得吾心〕 夫は話頭を轉ずるなり、一體と訳すべし。乃はかへつてなり、他人に非ず、自分がかへつて行ひながらなり。反は反省すること。求之は行ひたる事の意味をその心中に求めしなり。不得吾心とは自分ながら自分の心に合點がゆかぬなり。

〔夫子言之於我心有戚戚焉〕 「夫子」は先生といはんがごとし、孟子を尊べるなり。「言之」とは説明してくれてなり。戚戚は動く貌。こゝは、なるほどと合點して何か思ひあたるなり。「焉」は「於我心」をうく。尙、戚戚はうれひかなしむ貌にも用ふ、それは心が憂の爲に動くなり。この用法とは異れど、その心の動く貌なるに於ては相通ず。なるほどと思ひあたるものの、未だそれが王道に合する所以を覺らず、故に次の質問を發す。

〔此心之所以合於王者何也〕 此を以て牛に易へたる心を謂ふ。上文の孟子の言へる、「是心足以王矣」の句と比較して見れば、その証明跡となるべし。即ち前文に於ては、孟子が、王の心を指したる故、是心（その心）といひ、この文に於ては、王が自ら己の心を指す故「此心」といへるなり。

王は去聲、王する事、王道を行ふこと。

〔曰有復於王者〕 復は白（敬白、白狀等の白）なり、事を奏すること、まうすと訓す。有――者は或人が申上げたと假定せよ、となり。以下、孟子は譬喩を設けて、宣王、牛を愛しむことを知りて、百姓を保んずるを知らざることの不可を指摘し、進んで保民の本義即ち王道を行ふ所以を説くなり。

〔明足以察秋毫而不見輿薪〕 明は視力なり、上文「吾力」の「吾」はこの「明」にも かゝる。察は、念をいれて視るなり吟味するなり。秋毫とは極微細なる毛をいふ。鳥獸の毛は夏時脱落し、秋新しく細毛を生ずるが故にいふと。輿薪とは粗雜なる薪なり。輿は車に載せる薪なり。

〔王許之乎〕 許は猶ほ可のごとし、肯定するなり。ほんとうにするなど訳すべし。

〔曰否〕 宣王の答なり。否の一字にてあしらひし所に、「勿論信じない」、「馬鹿なそんなことが」、などの氣味あるなり。

〔今恩足以……功不至於百姓〕 孟子の言なり。宣王「否」と答へ、孟子の思ふつぼにはまりたる故、こゝぞとばかり宣王の急所を突くなり。

功は民を安んずる功績なり、ほどこしなど譯すべし。功不至於百姓とは戰爭を事として、民を安んずる事に手がとどかぬなり。足と至と相對して用ひらる。

〔獨何與〕 獨はそればかりなり、功不至於百姓、そのことばかりは何故ぞとなり。一體全體など、意譯するも可なり。

功百姓に至らざるは、一羽を舉げ得ずといひ輿薪が目にいらずといふの類なりとなり。

〔然則一羽之不舉云々〕 然則と前文「獨何與」との間には時間の經過あり。「獨何與」と詰りし孟子は暫時話を止めて宣王の顏を注視し、宣王弗答ふる所を知らずして默然たりしならん。その沈默が爾て、孟子更に語をつぎ然則といひしなり。現代の文ならば「……」など挾む所なり。十分玩味せられよ。十分玩味せば宣王、孟子の呼吸ずかひ盜視面に聞ゆる感あらん。

〔爲不用力焉〕 焉は一羽になり。「力」、「明」は生れながら固有して居れども、之を用ひざれば、一羽も舉げ得ず、輿薪も見えず。

〔百姓之不見保爲不用恩焉〕 焉は百姓になり。百姓の安んぜられざるは、王、不忍心を固有して居りながら之を百姓に推及ぼさざるが爲なり。

この邊、三「爲」字を連用し下に「也」字を用ひざるは、孟子がたゝみかけて宣王を詰れるなり。

〔王之不王不爲也、非不能也〕 故に（宣）王が王道を行はないのは、出來ないのではない。ふ氣がないのだ、やらうといふ氣がないのだ、出來ないのではない。

〔曰不爲者與不能者之形何以異〕 宣王の問なり。上文、孟子の言をそのまゝ用ひて質問す。爲す氣がないそのことと、出來ないそのことと、の樣子は、どんな點で異るか。

何以はどんな點で、どんな風になり、具體的の樣子を問へるなり。何以に何故に、どんなわけでの用法あれどこゝとは別なり。

〔挾泰山以超北海〕 挾は脇にかゝへるなり、泰山、北海（今の渤海灣）共に齊に在り、故に以て譬とはなせるなり、以は而と同用、泰山を挾みながらなり。

〔爲長者折枝〕 長年者の按摩をするなり、折枝の解に三説あり。(1)枝は肢にて四肢の節々を折り按摩するなり。(2)長者の命に從ひて木の枝を折るなり。(3)己の肢を折り行儀よくして長者に禮をなすなり。(1)の説從ふべし。

〔語人曰〕 先に「有ゝ復ニ於王ニ者ト」（五十八頁二行）と言ひし故、こゝでは、文に變化あらしめて、「語人曰」とせしなり。

〔王之不王非……也、王之不王是……也〕 前文「王之不王不爲也、非不能也」の「不爲」に易ふるに「折枝之類」を以てし「不能」の代りに挾泰山云々を用ふ。而して此文に於て王之不王を二度繰り返へし用ひたるに注意せられよ。王之不王の上の王は平聲、下は去聲。

以上「何以異」に對する直接の答。以下更に王たることに就いて説く。

〔老吾老以及人之老〕 自分の家の老人を老人として敬い、その心を他人の家の老人に迄推し及ぼす。

上の老の字は動詞、老人として對すること、即ち尊敬すること。及は推及なり、擴充なり。

〔幼吾幼以及人之幼〕 上の幼は動詞、幼者として取扱ふこと、即ち愛すること。

吾老を老とし、吾幼を幼とするは卽ち不忍心なり、換言せば惻隱の心なり。及ぶ擴充するなり。

〔天下可運於掌〕　二五頁參照

〔詩云刑于寡妻至于兄弟以御于家邦〕　詩は詩經、大雅、思齊篇、刑は法なり、規範法則を示すなり。寡妻は一人の妻、卽ち妾に對する愼妻をいふ。御は治なり。この詩の意は、よく不忍心を以て己の妻に接對して之に規範を示し、兄弟に及ぼし、次第に外へ及ぼして一族一國を治むとなり。

寡妻を寡德の妻と解し、己の妻の謙辭となす說あるも、今採らず。

〔言舉斯心加諸彼而已〕　言はこの詩の言ふ心なり、意味はなり。斯心とは己の有する不忍心。加諸彼とは、その心を他に施し及ぼすなり。

〔故推恩足以保四海云云〕　推は上の「及」「加」と照應す、推及ぼすこと、擴充すること。恩は上文の老吾老とし幼吾幼とする心、寡妻に刑する心なり。

〔古之人所以大過人者〕　大過人とは天下を保んぜしことをいふ。所以は方法、やりかた。古の聖王が天下を保ぜしやりかたは、なり。

〔無他焉善推其所爲而已矣〕　その爲す所の恩をよく他に推及ぼす以外には何もないとなり。

焉はこれよりなり、善推其所爲とは善推其所爲の爲すことを指す。焉にかく下文を指す用法あるは、前文「聞之胡齕」の「之」に於けるがごとし。

其所爲とは老吾老・幼吾幼にすることなり。かく古の王はよくその爲す所を他に推し及ぼしたり、然るに今、宣王は之を知らずとて、次に「今恩足以及禽獸……獨何與」の語を繰り返へし述べしなり。

說苑貴德篇に孟子の此文を引きて「推其所有」に作るその他「意」と「有」と相通用する例、古書に多くあり。されば孟子の此の「推其所爲」を「推其所有」と同意に解せば、「其所有」とは固有する不忍人之心のことなる。この說亦通ず。

〔權然後知輕重,度然後知長短〕　權は秤のおもりなり、權然後とはおもりをかけてはじめてなり、卽ち秤にかけてみてはじめてなり。度はものさし、度然後とはものさしをあてはじめてなり。權、度の二字、動詞として讀む。

〔物皆然〕　萬物皆はかつてみなくては輕重長短がわからぬ。

〔心爲甚〕　就中、心をはかることが最も大切なのだ。宣王は物をはかることは知つて居るが、最も大切な心をはかることを忘れて居られるやうだ、となり。

〔王請度之〕　王よ自分の心に就いてはかつてみられよ。と王の反省を促がすなり。

五六頁三行よりここ迄は、本課初三行目の「無以則王乎」の細說にあたる。

以下、急轉して宣王の野心を正面より攻擊す。

〔抑〕　上を抑へて下を起す辭なり。それはさておき、それともなど譯すべし。

〔王興甲兵云々〕　甲兵は、よろひ（甲は鎧なり、かぶとに非ず）と武器となり、轉じて戰爭、興甲兵とは戰爭をおこすこと。士臣の士は戰士にて軍人。臣は役人、構怨は怨を結ぶこと、不和となること。王は恩を民に及ぼすことなく、常に戰爭をおこして、內は士臣を危くし外は列國と不和となつてゐるが、そんなことをして、それで平氣なのですか。

「興甲兵危士臣構怨於諸侯」ことは卽ち「功不至於百姓」ことの他の一面なり。

「快於心」は「不忍」の反對なり。積極的に愉快とするといふ意に非ず。

〔曰,否,吾何快於是將以求吾所大欲也〕　宣王の答なり。いや、どうして、どうして、そんなことをやるのは決して氣持のよいものではないが、實はそれによつて大理想を實現しようとするのだ。（やむを得ずやつて居るのだと辯解するなり）以は「興甲兵」以下三句をうける。三つのことなり。

孟子に詰問せられ、宣王そろ〳〵本音を吐かんとす。

〔曰王之所大欲可得聞與〕　王様のその大に欲する所とは何か、お聞きしたいものです。

「所大欲」の三字は、宣王の語をそのまゝ鸚鵡返へしに用ひしなり。

〔王笑而不言〕　笑にまぎらして返答をせざるなり。

〔曰爲肥甘不足於口與〕　孟子の問なり。領土から出る御馳走だけでは不足である爲に大に欲する所あるのかとなり。肥甘は肥えて甘い肉、御馳走。

〔輕煖不足於體〕　上句の「爲」はこの句にもかゝる。（この句の上に爲を略せり、と說くも可）輕煖は輕くて煖い衣服、絹帛の類。

〔抑爲采色不足視於目與〕　采は彩に通ず、采色は美しき色彩の物。

上の肥甘、輕煖は食衣の必要物にして、この采色以下は娛樂なれば、こゝに「抑」字を添へたり。

この爲の字下の二句にもかゝる。

〔便嬖不足使令於前與〕　便はこちらに便利なやうにへつらふこと。嬖は博計切、音ヘイ。寵愛すること、父、愛ぜらるる者。便嬖は側近く侍りて愛ぜらるゝ者。使令は言ひつけ、さしづすること。御前に侍つて御用をたすお氣にいりが、足らない爲ですかとなり。

孟子は宣王の大に欲する所は何なりやと推知しながら、故意に五つの興を連用して質問し、宣王を掌中に翻弄せしなり。

〔王之諸臣,皆足以供之,而王豈爲是哉〕　王の諸臣が皆これらの要求を供給してくれるからよささうなものだがそれでも王はなんとそれらの爲ですか。

而は則と通用。……する以上は、……であるのだが。この豈――哉は質問なり、反語に非ず。それらの爲に大に欲望をおこすのかと質問するなり。故に王は之に答へて曰否と言ひしなり。

「王之諸臣皆足以供之」の語にて、「齊の臣はそれ位の事が出來るだけで、宣王を輔けて王道を行はしむるを知らず」と齊の臣を暗に罵る意を含む。

〔曰然則王之所大欲可知已〕　この句、前文、宣王の「將以求吾所大欲也」に直

接す。
孟子こゝに宣王の所「大欲」を發いて、その必ず得べからざる事なるを明に說かんと欲するなり。

〔欲辟土地朝秦楚莅中國而撫四夷也〕　この「欲」は卽ち王の「所大欲」の「欲」なり。辟は必益切、音ヘキ、闢と通ず、ひらくと訓ず。辟土地は領地を廣げること。朝とはもと諸侯親ら他の諸侯を訪問すること。なれども、こゝは朝貢の意なり。朝秦楚とは秦楚の大國（秦楚は當時の大國なり）をも齊に服せしむること。莅は力地切、音リ、臨なり、莅中國とは中國に君臨して四方を己が領とするなり。撫は安なり。

〔以若所爲求若所欲〕　そんな手段でそんな欲望を遂ぜんとするのは。
若はかくのごとき、と訓ずれども、そんな、そのやうなと譯すべし、こんな、このやうなと譯すべきに非ず。以若所爲とは興甲兵危士構怨於諸侯ことを指す。若所欲とは辟土地……撫四夷なり。

〔猶緣木而求魚也〕　それは木に登つて魚を捕らうとするやうなものだ。
緣はよりそうてゆくこと。緣木とは木に攀ぢのぼることなり。魚は水中に在るに之を捕らんとして木にのぼる、目的と全然反する手段をとることゝなる。

〔王曰若是其甚與〕　そんなにひどいか。
（目的と手段とのくひちがひが）若是の是は緣木而求魚をさす。其は王の爲すこと。
宣王自らの爲す所の甚だ非なるを指摘せられ、且つ驚き且つ怪しみてこの質問をなす。その所大欲についての孟子の推測を、不言の裡に肯定せるなり。

〔曰殆有甚焉〕　それよりももつとひどいかも知れぬ。
殆は近なり。殆（ヤカ）ク有――なり。ほとんどと訓ずるも同意なり。……かもしれぬの意。焉は緣木而求魚を指す。
宣王自ら其の甚だしきを怪しめるに乘じ、孟子更に語を進めて、それよりも甚だしと言ひ、以て、宣王の雄圖を、粉碎せんとす。

〔曰可得聞與〕　そのわけが聞かれませうかとなり。

〔曰鄒人與楚人戰〕　鄒は小國、楚は大國なり。小國の鄒と大國の楚と戰爭せばとなり。火、譬喩を設けしなり。

〔曰楚人勝〕　王の答なり、勿論のこと楚が勝つさ。
わかりきつたことだ、論ずる迄もないことだの語氣なり。
孟子はこの答を豫期して質問せしなり。宣王のこの答を本として宣王自らの行の非を覺らしめんとす。

〔然則……不可以敵强〕　こゝは、弱小の國、因より强大の國に敵すべからざることを一般的に言ひ、次の豫備となす。

〔齊集有其一〕　齊はその領地をとりあつめれば、方千里者九の內の一を有することとなる。
有其一とは次の必有後災のことなり。一を以て八を服せんとせば唯に勝つ能はざるのみならず、その國必ず滅亡するをいふなり。

〔何以異鄒敵楚哉〕　なんで鄒が楚と戰ふのと異ならうぞ。こゝにて譬喩に歸着せしむ。宣王の答「楚人勝」の語と對照して見るべし。

〔蓋亦反其本矣〕　とても成功の見込の無い、武力で他を併せることなどは考へず、その根本に立ちかへりなさい。
蓋は古、盍と通用せり。この蓋は盍なり。（何不）、其本は卽ち王道なり、下文に之を說くなり。盍（何不）……矣は、なぜに……しないだらうと推して言ふなり。
五十九頁七行よりここ迄は、宣王の理想とせる霸業の決して實現し能はざるものなることを正面より論難せるなり。
以下再び王道の實行に就いて說く。

〔今王發政施仁〕　さて今もし王が政をなして仁德を施し布かば、（卽ち本に反らば、なり）。次の結果を生ぜん。

〔使天下仕者……皆欲趍愬於王〕
これが結果なり。
「使」の字は全部にかゝる。天下仕者の天下の二字は耕者、商賈、行旅にもかゝる。立於王之朝とは宣王の朝廷に仕ふること。賈於之市とは宣王治下の市場に商品を積み置くことなり。――王の治下で商賣をすることなり。欲忌とは腹いせをしようとするなり。愬は蘇故切、音ソ、うつたふと訓ず。

〔其若是孰能禦之〕　五六頁三行の保民而王之、莫之能禦と應ず。

〔王曰吾昏不能進於是矣〕　我愚にして、そのやうな仁政を行ふに至ること能はざらんとなり。昏は惛又、昏と通ず。音コン、心の不明ないふ。不能――矣は推量、なり能フマジと讀む。宣王をしてこの言をなさしめしは孟子歸舌の大成功なり。

〔輔吾志明以敎我〕　志は目的なり、天下統一の目的なり。以ほ仁政（王道）を行ふことの委細をばなり。明は明瞭に、わかるやうになり。

〔雖不敏請嘗試之〕　不敏は上文の惛と同意、嘗試は二字にて一意なること猶尙、且又、將又、幾希等に於けるが如し。之は仁政なり。

〔曰無恒產而有恒心者惟士爲能〕
以下孟子が王に敎ふるなり。
恒產とは恒定の產業、卽ち生活して行ける一定の生業なり。恒心とは人として常に有する善に志す心（良心）なり。士とは敎養ある人。
恒產なく飢寒に迫られても、その善心を失はざることは士のみ之を能くすとなり。

〔苟無恒心放辟邪侈無不爲己〕　放はほしいまゝと訓じ際限の無きこと、辟は僻に通ず、よこしま、不正なり。邪も不正なり、侈は度を過すこと。放辟と邪侈とは略同意にて共に惡を行うて際限無きをいふなり。皆飢寒に迫られて善心を失ひその惡とゞまる所を知らざるをいふ。

〔及陷於罪然後從而刑之是罔民也〕
罪を犯してから、かたつぱしから之を刑に處するやうでは、是は網を張つておいて、ひつかけるやうなものだ。（刑罰といふ網を張つておいて、民のかゝるのを待つやうなものだ）及……然後とは躁め罪に陷らせぬやうにせずして、民が生活苦の爲罪を犯すだんにおいてからの意なり。從は陷於

罪る者を、次から次からと、かたつぱしから。罔は網の本字なり。

〔焉有仁人在位罔民而可爲也〕 焉有――也は反語なり。どうして……のことがあらうぞ。

仁德ある人、君の位に在りて、政を行はんとするに、民を罔するやうなことをやつていつて、それでもやつてゆくことができるといふことがあられようか。

〔制民之產〕 制は制定なり。民の生產の制度を立てるなり。――先づ經濟生活の安定を得しむるやうに制定すとなり。（是れ先王明君の本に反れる政治なり。）以下之を說く。

〔必使仰足以事父母俯足以畜妻子〕 仰俯は、上は、下はといはんがごとし。二「以」字は以レ產なり。

使仰足以事父母、俯足以畜妻子は卽ち前文の老吾老以及人之老、幼吾幼以及人之幼、となり。

〔樂歲終身飽、凶年免於死亡〕 樂歲は豐年なり。終身は年中なり。詩經して言ひしのみ。

この二句は經濟生活の安定を得しむるをいふ。

〔然後驅而之善〕 驅はおひたてゝなり。善は道德的生活なり。先づ經濟生活の安定を得しめてから、指圖して道德生活へと進ましむとなり。

〔民之從之也輕〕 從之の之は上文の「善」なり、輕は容易なり。

〔救死而恐不贍〕 己の死を救ふことにのみ努力して、その努力の足らざるを恐れる贍は音セン、たる（足）なり。

一說、恐レ不レ贍レ救レ死到置ぜられしものと見て、己を死より救ふに不足なることを（食物が）、恐れると解す。

〔王欲行之則盍反其本矣〕 之は六十一頁の講霄試之の之なり。王欲行之は講霄試之に應ず。盍反其本矣は六十頁の養亦反其本矣を繰返して言ひたるなり。

〔五畝之宅以下〕 梁惠王に對して說きし事と（第二十四課）同樣なり。かく同樣のことを說きたるは、孟子は王政の根本は經濟生活と道德生活とが兩つながら相交錯補行するに在ることを堅く信じたればなり。

〔黎民不飢不寒然而不王者未之有也〕 五十六頁三行目の保民而王、莫之能禦也と應じ。一篇の結末をなす。

備考

一、孟子の說を聞くに從ひ宣王の態度・心情の次第に變りゆくことに注意ぜられよ。

○曰吾何快於是、將以求吾所大欲也。（五十九頁）

○王笑而不言。（五十九頁）

○曰、否、吾不爲之也。（六十頁）

宣王なほ覇業をなさんとする野心を捨てず。

○曰、若是其甚與。（六十頁）

○曰、可得聞與。（同）

○曰、楚人勝。（同）

己

の考の誤れることに氣づきかけたり。

○曰、吾惛不能進於是矣。……我雖不敏請嘗試之。（六十一頁）

己

の野心を捨てゝ王道を行はんと欲す。

二、この一篇を熟讀せば王道の本義を明に知り得べく、從つて王覇の別亦自ら判然たらん。

三、離婁上篇に孟子曰道在レ邇、而求ニ諸遠一、事在レ易、而求ニ之難一、人人親ニ其親一、長ニ其長一、而天下平とあり本課と併せ味ふべし。

二七　靜夜思

要旨

堅苦しき教材が數課續きし故、本課及び次課に於て諷誦に資する材料を配置し、以て心機の一轉をはからんとす。

解釋

〔牀前看月光疑是地上霜〕　眠られぬまゝにふと牀前を見れば霜かと思はるゝばかり地上一面眞白く月光が照つてゐる。牀は牀蓆なり、しとね、ねどこのこと。「疑」は意輕し、眞に疑ふには非ず、「疑是」は……であるかと思はるばかりの意なり。

〔舉頭望山月低頭思故鄕〕　地上一面に眞白き月光を見て、思はず頭をあげて上空の月を望めば、月は山上にかゝりて皓々と光つてゐる。その月を見てはそゞろ故鄕が思ひ出され、頭をたれて故鄕の思出に耽ることとなり。
低はたると讀む。

教授上の注意

一、この詩は旅にありての作なり、一見甚だ平凡なるが如くにして、味へば味ふ程、無限の情趣を藏す。之を諷誦せしめば生徒の心中涌然として、共鳴の情生ぜん。

一、この詩は五言絶句にして、光・霜・鄕が韻字なり、（下平七陽の韻）（絶句に就いては本書十六頁參照）。

一、この詩に於て月が複字となれり、後世の詩に於てはかゝる用法を忌む。

二八　磧中作

作者

岑參（シンシン）は盛唐、（本書八頁、作者の條參照）の詩人、その壯年時代、天山北路の邊塞出征せしが爲に尤も邊塞征戍の事を詠ずるに長ず。高適と名を齊しうし世に高岑と稱せられる。

解釋

〔磧（セキ）〕　沙漠なり、甘肅省より新疆省にかけて長さ五百里廣さ五十里の大沙漠ありといふ。

〔走馬西來欲到天〕　自分は出征して、馬を馳せて西方この沙漠に來り、走り走つてもう茫々たる沙漠の果までも來てゐる。欲到天の欲は將と同じ、天にもゆきつかうとして居るとなり。沙漠の果が天と接して見えた（卽ち地平線）その邊まで來たるをいふなり。

〔辭家見月兩回圓〕　その筈だ、數へて見れば家を出てからもう二度も滿月にあうて居るのだもの。

〔今夜不知何處宿〕　さあ今夜も何處に寢ることやら。
今夜不知何處宿は不レ知ニ今夜何處宿一の意なり。

〔平沙萬里絕人烟〕　見わたす限り茫々たる沙漠で宿を乞ふべき人家とてはない、今夜もまたこの沙漠の上に假寢をせねばなるまい心細いことぢやとなり。
平沙とは沙漠が一面に續いて平に見ゆるをいふ。絕人烟とは人家の烟が全く無いことなり。

教授上の注意

一、作者が沙漠の地方へ出征しての實感なり。支那に於てはかゝる邊塞に關する作多くありて支那文學の一分野を占む。而して邊塞出征の作には勇壯なるもの極めて少くして、哀愁の情を詠へるもの多し。この詩もその一なり。荒涼漠々たる邊塞に於ける戰士の心情を味ふべし。

一、この詩は七言絶句にして、天、圓、烟が韻字なり、下平一先の韻に屬す。

二九　胡笳歌送顔眞卿使赴河隴

要旨

胡笳の歌に托して遠く異郷に使する顔眞卿を送る惜別の情と、艱難の道中を思ひやる詩人の感懷を詠じたるものなり。

作者

岑參　前課參看。

出所

唐詩選　四課參看。

題名

胡笳歌　笳は元來胡人の製する所なれば胡笳といふ。蘆葉を卷きて製す、一種悲哀の音を發す。

顔眞卿　字は清臣、唐の瑯琊臨沂の人、少くして博學、辭章に工なり。又草・楷を善くし、筆力遒勁秀拔なり。玄宗の天寶十四年、安祿山の反するや、眞卿時に平原の太守たり、顔杲卿と共に義を倡へて之を討つ。德宗の朝、李希烈反するに及び、敕を奉じ往きて之を諭し、節を持して屈せず、爲めに殺さる。（卷二、四十五課參看）

河隴、西河隴右道の略。

押韻

五言古詩、平聲四支韻、悲・吹・兒、上聲十九皓韻、道・草、平聲六麻韻、斜・笳、平聲十二文韻、君・雲・聞。

解釋

〔君不聞胡歌聲最悲〕　君（顔眞卿を指す）よ、聞かずや、かの悲調を帶びたる胡笳の聲を。己が悲しみを胡笳の悲哀の調に寓したるなり。

〔紫髯綠眼胡人吹〕　かの笳は紫髯綠眼の胡人の吹くところ。胡人は中國の人とは其の狀貌を異にし、髯は紫色、眼は綠色。

〔吹之一曲猶未了。愁殺樓蘭征戍兒〕　笳を吹くこと一曲未だをはらざる中に、樓蘭にある守備兵の之を聞くものをして悲愁胸をうたしむるなり。

「愁殺」の「殺」は去聲、「サイ」と訓む。笑殺・忙殺・醉殺の殺は皆同じ、「殺」の字に義なし。

「樓蘭」は、西域三十六國の一、一名鄯善國といふ。今の甘肅省燉煌縣の西に在り。

「征戍兒」は守備兵のこと。「戍」は音「ジュ」、守るなり。遠く出で、異國に守る者一度此の胡笳の聲を聞かんか、轉た鄕愁の情に堪へざるなり。

〔涼秋八月蕭關道。北風吹斷天山草〕　君が使する、正に涼秋八月、かの長安より千里といふ蕭關を過ぎざるべからざるなり。而して蕭關を出づれば天山山脈、北風しきりに吹きて草をたふさんばかりなり。二句は、荒涼たる情景を敍するなり。

「蕭關」秦の北關、甘肅省固原縣の東南に在り。河隴への通路に當る。長安より千里と稱す。

「天山」、天山山脈は伊黎（イリ）の地を南北に區分し、支那より中央亞細亞（西域諸國）に出でんと欲せば、必ず沙漠の西端を横ぎり、乃ち天山の南路又は北路に出づるなり。

〔崑崙山南月欲斜。胡人向月吹胡笳〕　崑崙山南に月將に落ちんとする頃、胡人月を眺めつゝ胡笳を吹けば、凄氣あたりをおほふなり。

「崑崙山」は西藏（チベット）と伊黎とを界する山脈なり。「欲」は「將」に同じ。

〔胡笳怨兮將送君〕　己が悲怨の情をこめたる此の胡笳の歌もて君を送らんとするなり。蓋し此の一篇の詩は、すべて胡笳の悲調に托して己が心情を述ぶるなり。「兮」は助辭なり。楚辭にこの用法多し。

〔秦山遙望隴山雲〕　今君を送らんとする此處秦地の山よりは遙かに君が行く河隴の山雲が望まるゝなり。

「隴山」は隴州の西北にありといふ。

〔邊城夜夜多愁夢〕　國境城塞の夜々必ずや愁夢多からんとなり。邊地は人の厭ふ所、又愁ふる所、笳を聞き月を見る、寒床に就きて後、豈愁夢無かるべけんや。

〔向月胡笳誰喜聞〕　月に向つて胡人笳を吹く、吹者或は興を以てするならんも、聞く者をして愁に沈ましむるなり、誰か聞くを喜ばんや、さなきだに鄕愁の情に堪へざるをとなり。

教授上の參考

一、同語を疊用して、雄渾悲壯の情餘すところなし。

一、明の王堯衢の評に、「詞采音律、俱入妙境、感慨悲歌、尤多懇懇之意。」清の沈歸愚の評に、「只言笳聲之悲、而惜別在言外矣。」と。

三〇 予豈好辯哉

〔要旨〕

孟子已むを得ずして辯ぜし所以を明かにし、以て世道人心の指導に任ずる者の覺悟を知らしむ。

〔解釋〕

〔公都子〕 公都は複姓なり、孟子の弟子。

〔外人〕 自分等以外の人の意にて、世間の人々をいふ。

〔夫子好辯〕 先生は人と辯爭することを好むと世人がいひます。）。辯は辯に爭ふなり。孟子、好んで楊墨の徒と辯爭し、王道の宣揚につとめたればこの評ありしなり。

〔敢問何也〕 失禮ながらお尋ねしますが、辯を好まれるのは何故ですか。公都子自身も孟子の辯爭に對して疑念を懷き居たるなり。故に外人の評を以て孟子にたゞせしなり。

〔曰吾豈好辯哉予不得已也〕 外人の評を否定し、辯を好むに非ず、正道を救はんと欲してやむを得ず。辯爭するなりとなり、以下その不得已辯爭する所以を述ぶ。

〔天下之生久矣一治一亂〕 天下之生は天下の生民なり。この世に生民（人類）ありて久しきを經たり。その間、或は治世あり、或は亂世ありとなり。以下、一治一亂に就いて說く。

〔水逆行氾濫於中國〕 下流塞がれる故、水が却つて逆に流れ、中國一體に溢れ出たとなり。

〔蛇龍居之民無所定〕 水氾濫せし故、中國は蛇龍の棲所となり、民は水を避けて轉々し定居なしとなり。定は定居なり。

〔下者爲巢上者爲營窟〕 低地に居る者は樹上に棲み、高地に在る者は穴居せりとなり。何れも水を避けんが爲なり。營窟は山腹などを穿れる窟をいふ。營とは物を以て圍繞せることなり。この二句は民の定居なき有樣をいふ。

〔書曰洚水警余〕 書經逸篇の句なり、洚は洪と同じく、大なり、この句の意は、余（堯自らいふ）不德なるが故に天、洪水を以て余を警戒せりとなり。今、虞書大禹謨に「帝曰、來禹、降水儆予」の語あれども、大禹謨は僞古文なり。

〔洚水者洪水也〕 孟子が書經の語を說明せしなり。以上一亂なり。

〔放之菹〕 菹は側魚切音ソ――草の茂れる澤。之は蛇龍をうく。

〔水由地中行〕 水が氾濫せず川となりて兩岸の間を流れ去れりとなり。この句は、上の禹掘地而注之海をうけたるなり。地を掘りて作れる川筋が、一般地面より低きが故に地中といひしなり。

〔江淮河漢是也〕 これ挿入句なり。禹が地を掘りて水をやれるあとが、今の江淮河漢だと說明を挾みたるなり。

〔險阻既遠〕 險阻とは水の氾濫をいへるなり。

〔鳥獸之害人者消〕 上文蛇龍の類之に屬す。消は盡なり、消え無くなるなり。水去れるが故これらのものも居らなくなれるなり。

〔人得平土而居之〕 上文、「民無所定、下者爲巢、上者爲營窟」に應ず。以上、一治なり。

〔壞宮室以爲汙池〕 宮室は民の屋室なり。汙は洿と通じ、水だまりなり。暴君が民の住家を壞ちて以てそのあとに池を作りて、己が娛樂の用にし、民をして安息の所無からしめしとなり。

〔棄田以爲園囿〕 田は耕地なり、園は垣の無い庭、囿は垣のある庭、又、園は植物園、囿は禽獸を放てる庭なりともいふ。暴君が民の耕地を廢棄して以て己が園囿となし、民をして衣食の料を得る道なからしめしとなり。

〔邪說暴行又作〕 一般の民は既に衣食住の安定を失ひて困める上に、かゝいくはへて（又）邪說暴行が作りその害をうけしとなり。

〔園囿汙池沛澤多而禽獸至〕 沛は草の繁茂せることなり。沛澤は水中に草が繁茂せるなり。園囿汙池沛澤は禽獸の棲み易き所なれば、それら多くして、自然、禽獸至り、それが又民に害を加へしとなり。

〔奄〕 東方にありし無道の國。

〔世衰道微〕 周衰へし時をいふ。道は前文聖人之道なり。

〔邪說暴行有作〕 有は又と音通、故にこの有はマタと讀む。

〔孔子懼作春秋〕 懼とは亂臣賊子の行おこり、道の天下に絕えんことを懼れしなり。故に已むを得ずして春秋を作れるなり。

春秋は魯の隱公より哀公に至る紀十二公二百四十二年間の記錄を本として孔子が世道人心を正さんとする意を寓せるものなり。

〔春秋天子之事也〕 春秋の書に載する所、名分を明かにし、褒貶を嚴にし、皆天子の行ふべき事なるを謂ふ。

〔知我者其惟春秋乎〕 春秋は名分を正し道義を明にせる書なれば、世人をして眞に我が亂賊を遏げる功を知らしむるは惟この春秋以外にあるまいとなり。

〔罪我者其惟春秋乎〕 春秋はもと天子の行ふ所を孔子が記せる者なれば、若し其の判斷に誤謬があらば、我の責任となるをいふ。

〔聖王不作云々〕 かくばかり孔子が精神を打ち込んで作りし春秋なれどもその後よくその法を行ふ聖王作らず、諸侯は放恣にして處士は橫議すとなり。處士とは、官位無くして野に居り、兩もその意見社會の風

潮に影響を與ふる人をいふ。横議とはほしいまゝに(横)議論するなり。

〔楊朱墨翟之言盈天下〕　これ卽ち處士横議なり。

〔楊朱〕　字子居、戰國初期の人、孔子、墨翟よりは後の人なり。極端なる個人主義を唱ふ。

〔墨翟〕　戰國宋の大夫、孔子よりは後、孟子よりは前の人、極端なる兼愛說を唱ふ。

〔楊氏爲我是無君也〕　我が爲にすることのみを知りて他人や國家社會全體のことを考へず、是れは君を無視することゝなる。

無はナミスと讀む。有れども無きが如くす。卽ち無視するなり。

列子楊朱篇に「楊子曰伯成子高不拔一毫一利物、舍之國而隱耕。大禹不以一身自利、一體偏枯、古之人損一毫利天下不與也、悉天下奉一身不取也、人人不損一毫、人人不利天下、天下治矣」

〔墨子兼愛是無父也〕　兼愛とはすべての者を一樣に愛すること。我が父も他の人も同樣に見做し特定の父はなきこととなる。故に無父といへるなり墨子兼愛篇に「若使天下兼相愛、國與國不相攻、家與家不相亂、盜賊無有、君臣父子皆孝慈、若此則天下治。」

孟子盡心上「楊子取爲我、拔一毛而利天下不爲也、墨子兼愛、摩頂放踵利天下爲之。」

〔公明儀〕　魯の賢人。

〔庖有肥肉云々〕　これ上文の諸侯放恣なり。

〔邪說誣民〕　邪說は楊墨の說を指していふ。誣は欺なり。

〔充塞仁義也〕　充塞とはふさぐこと、邪說が盛行して仁義の道をふさいでしまふなり。

〔仁義充塞、則率獸食人、人將相食〕　仁義が邪說に塞がれて行はれなくなれば、獸を率ゐつれて來て人を食はしむる（己は肥肉肥馬ありて、路の餓死するを恤まざるは、恰も獸をして人を食はしむるが如きをいふ）ことゝなり。獸を率ゐて人を食はしむれば、民益々困窮して遂には人と人と相食むに至らんとなり。

〔吾爲此懼閑先聖之道〕　この懼の字は、孔子懼作春秋の懼と應す。

閑は衛なり、まもると訓す、その字、門中木有るに從ふ、故に防ぎ衛るの意となるなり。

一說、閑は習なり、よく先聖の道を講習すすと解す。亦通ず。

〔距楊墨放淫辭〕　距は拒に通ず、ふせぐ。放は放逐なり。淫辭は邪說なり。淫は正しからざること。

〔作於其心害於其事、作於其事害於其政〕　其心、其事の「其」はある人なり、「作」は楊墨の邪說がおこるなり。

楊墨の邪說、或人の心中におこれば、自然それが行爲に現はれて、事を害するに至る。かゝる邪說が事に現はるれば從つて一國の政治に害を及ぼす。（故に我は先聖の道を閑りて邪說の徒も作るを得ざらしむとなり）

〔聖人復起不易吾言矣〕　古の聖人復び生ぜば必ずや吾がこの言を是認するならん。（吾言とは楊墨の非を辯する言をいふ）

〔昔者禹抑洪水〕　抑はおさへるなり、こゝは、汎濫をおさへて處分するなり、故に治と訓す。

これ以下一篇の總束なり、六五、六六頁に於て述べたる禹、周公、孔子の功を再び此に擧げて、その已むを得ざるに出でたることを明にし、以て己の辯も亦その類なることをいふ。

〔兼夷狄〕　兼は包容するなり、夷狄も中國なみに、なづけるなり。

〔詩云戎狄是膺荆舒是懲則莫我敢承〕　詩は毛詩魯頌閟宮篇なり、膺は擊なり、荆は楚の別號、舒はその興國、共に南方の野蠻國なり、承は當なり、敵對すること。

〔無父無君是周公所膺也〕　父君を無視する楊墨の徒は、夷狄、荆舒と同じければ、亦周公の擊つ所なり。

〔欲正人心息邪說云々〕　息邪說、距說行、放淫辭は正人心の具體的手段、說行はれぢけた行、正しからざる行。

〔承三聖〕　承は當なり、對立すること、三聖は上述の禹、周公、孔子なり。この三聖と對立し並ばんとするなり。

この承をうく又はつぐと訓じ、三聖の後をつぐと解する說あり、亦通ず。

孟子この大抱負ありて辯す、故に更に「豈好辯哉予不得已也」の語をくりかへして篇首に應じ以てその旨を明にせり。

三一　物之不齊物之情也

要旨

量の問題にのみ終始して質の問題を忘るゝの非なることを知らしむ。

解釋

〔有爲神農之言者許行〕　神農の教を治めたる者に許行といふ人あり。神皇は三皇の一、木を斲りて耜と爲し、木を揉めて耒と爲し、始めて民に農を敎ふ。よつて後、君民共に農桑に從事してその衣食を足らすことを主義とする徒（所謂農家者流）神農を以てその派の祖となせり。この爲神農之言者とは神農の道（言）を治めたる者にて卽ち農家者流なり。許行は姓は許、名は行、滕の文公古代の井田法を行ふと聞きて、楚より滕に行きたるなり。

〔踵門〕　文公の宮門に至れるなり。踵は至なり、踵かそこへ至るなり。いたると讀む。

〔遠方之人〕　許行自らいへるなり。

〔仁政〕　仁德を以てなす政、こゝは井田法の實行を斥して言へるなり。

〔受一廛〕　居所をもらつて、廛は詩の毛傳に一夫之居曰廛とあり、卽ち民の邑住居の小舍をいふなり。

〔爲氓〕　氓は甿に通ず、田地を有せざる民なり。但し一般の庶民といふ意にも用ひらる。

〔衣褐〕　褐は粗い毛で造れる衣、賤者の服なり。衣と褐とは粗服をまとへるなり。

〔捆屨織席以爲食〕　くつをあみつくり、むしろを織り、それらを賣つて生活する。

捆はうちかためること、屨を作るには、麻藁等を編み、緊密にうちかためる故にいふ。席は蓆で作つたくつなり。

席は蓆なり、むしろ。

以爲食の「以」は捆織織席の四字をうく。これは自ら其の力で食ふことをいへるなり。

〔陳良之徒〕　陳良は楚の儒者なり。本課下文にその傳あり。それ以外は明ならず。徒は門人なり。

〔負耒耜〕　耜は土をおこす道具卽ちすき、耒は耜の柄をいふ。耒耜二字にて、すきと解すべし。一說、曲れるを耒となし、直なるを耜となす、共に土を起す道具。耒耜を負ひて行きしは以て農耕に從事せんと欲せしなり。

〔盡棄其學而學焉〕　其學は陳良の修得せる儒學なり、焉は許行をうく。陳良許行の說く神農の道が非常に氣に入りたるなり。故に孟子を見て直に之を道へるなり。

〔道許行之言〕　道はいふと訓す。道とし主義として主張するなり。言の字と異なり。

〔滕君則誠賢君也、雖然未聞道也〕　文公は井田制を行ひなどして實に賢君であるが（先づ之を揚ぐ）しかし、まだ至道を知らない。

この道は陳良の最上と信ずる、神農の道をさしていへるなり。神農の道から言へば、眞の賢君は民と共に耕作し自ら衣食すべき者ならざるべからず。

〔與民並耕而食〕　人民と並んで耕作に從事し、自ら其の力にて食ひ、人民より租稅を徵收せぬなり。今の勞農主義の徒の如し。

〔饔飧而治〕　自ら炊爨しながら人民を治むとなり朝食を「饔」と云ひ、夕食を「飧」と云ふ。飧は俗字。

與民並耕……饔飧而治のが眞の賢君なり。然るに文公は然らずとなり。

〔今也滕有倉廩府庫〕　倉廩府庫は民より取りたてたものを入れおくくらなり。倉は雜穀、廩は米、府は財寶、庫は武器をいれるくらなり。

〔是厲民而以自養也〕　厲は害なり。文公のやり方は人民よりとりたて民を害うて自ら養ふにて、神農の道の賢君とする所と大に異なりといふなり。

〔粢〕　「モミ」なり。說文に「嘉穀實也」とあり。

〔許子必識布而後衣乎〕　上に「日」の字なけれども、孟子の問なり。

〔許子冠乎〕　上に「日」の字なけれども、孟子の問なり。

〔曰奚冠〕　これ孟子の問なり。奚は何なり。

〔曰冠素〕　陳相の答なり。素は白布なり、飾なき質素な布なり。

〔曰許子奚爲不自織〕　孟子の問なり。奚爲は何爲なり。許子はなぜ、その素を自分で織らぬのかとなり。

〔曰害於耕〕　陳相の答なり。自分で素を織つたりなどして居ては耕作の邪魔となるなり。

〔曰許子以釜甑爨以鐵耕乎〕　孟子の問なり。「釜」は物を煮るかま、「甑」は音シヨウ又はソウ、食物を蒸す土製のこしき。「鐵」は耜等の農具をいふ。

〔自爲之與〕　孟子の問なり、釜甑農具を許子自ら作るかとなり。

〔以粟易械器者……何許子之不憚煩〕　孟子の言なり。械器は道具、こゝは釜甑・農具をさす。陶は甑等の土器を作る者、冶は鐵冶工、釜鐵等を作る者なり。

「以粟易械器者不爲厲民」とは、穀物を作つてそれを道具と交換する者は、道具を作る人に迷惑をかけることにならないとなり。

「陶冶亦以其械器易粟者豈爲厲農夫哉」とは、農夫が陶冶に迷惑をかけぬと同樣に、陶冶の方でも亦、自分の作つた道具を穀物と交換する者は農夫に迷惑をかけることにはならないではないかとなり。二つの厲字は前の厲民の厲に應ず。

且許子何不……は、且又、許子は、なぜ自分で陶冶の仕事かして、一切の道具を自分の家にばかり作つて之を使はないのか、なぜごたごたと面倒くさく、他の種々の職人と交換などするのか、許子は面倒なことを平氣でやる男だな！　となり。

何不は「用之」までかゝる。何不――、何爲――とたゝみかけて詰れるなり。舍は止なり、止は只なり、その宮中にばかり取るなり。宮中とは家中なり取宮中とは自分の家で作ることなり。紛紛然はわづらはしき貌。

〔曰百工之事固不可耕且爲也〕　陳相の答なり。百工の仕事は、耕作しながら出來ない故に交易するとなり。（孟子はこの答を尊き出さんが爲に、前文の質問をせしなり）

〔然則治天下獨可耕且爲與〕　陳相の答を捕へて直に陳相の非を說破す。獨は、天下を治むることだけがあり。

以下、七十三頁「亦爲不善變矣」まで孟子の言なり。

〔有大人之事有小人之事〕　一體世の中には夫々の仕事があり分擔すべきだとなり。

大人は人君をいふ。大人之事とは人君としての仕事。小人は人民、小人之事とは農工商の事なり。

〔且一人之身而百工之所爲備云々〕　且は假設の辭なり、かりに。

〔率天下而路也〕　天下の人々をして疲勞困憊せしむとあり。

路は道路に奔走して休息する無きを謂ふ。一說、路は露に通じ、露は羸にてつかれること、解す。亦通ず。

〔故曰或勞心或勞力〕　或人は精神を勞し、或人は肉體を勞すとなり。此の二句は蓋し古語ならん。左傳襄公九年、「知武子云、君子勞心、小人勞力、先王之制也。」國語、「公父文伯之母云、君子勞心、小人勞力、先王之制也。」

〔勞心者治人云々〕　以下孟子が上の古語に對する解釋なり。「勞心者」とは君なり。「勞力者」とは民なり。君は民なければ養ふ、民は君なければ亂る。故に一方は治め（勞心）一方は養ふ（勞力）。この理は農夫と陶冶とが、粟と械器とを相互に交易するに同じく、各々其の能を以て相濟すものにして、決して相害ふものにあらずとの意を含むなり。

〔天下之通義也〕　こは自分の臆斷に非ず天下萬人の通じ認むる道理なり。

〔堯之時云々〕　以下古の實例を擧げて上述の理論を證明するなり。

〔五穀不登〕　登は成熟なり、みのると訓ず。

〔偪人〕　偪は逼なり、猛獸人に迫近して害するなり。

〔舉舜而敷焉〕　敷は治なり、焉は中國をうく。通行本「敷治焉」となれるは、敷の注なる治の字が誤り入れるなり。

〔烈山澤〕　烈は熾なり火の盛なること、もやすと訓ず。

〔疏九河〕　疏は通なり。九河を流通せしめて氾濫の勢を殺ぎしなり。

九河は朱註に「曰徒駭、曰太史、曰馬頰、曰覆釜、曰胡蘇、曰簡、曰潔、曰鉤盤、曰鬲津」とあり。鄒京山は曰く「九河は黃河海に入るの支派、禹之を疏して以て橫流の勢を殺ぐ者、今皆考ふべからず、大抵河に九河あるは、猶ほ江に九江あるが如し、古者數の多きは輒ち九と稱す、後世附會して名を爲す。盡く据り難き也」と。

〔淪濟漯〕　淪は音ヤク、通なり。濟音セイ、漯、音タフ。川の名。

〔決汝漢〕　東南に於ては汝・漢の二水を決してその壅塞を除き去りたり。

〔排淮泗〕　淮・泗の二水を排して其の壅塞を去りたり。

〔禹八年於外〕　史記夏本紀には「禹居外十三年、過家門不敢入。」とあり。

〔中國可得而食也〕　耕作して食ふことを得たりの意。

〔雖欲耕得乎〕　本課七〇頁四行の「治天下獨可耕且爲與」に應ず。

〔后稷〕　虞舜の際の農官の名なりしが、周の始祖棄が其の事を掌りしより、後、棄を稱して后稷となすに至れるなり。「后」は后土、或は曰く美稱と、「稷」は、我がきびの類にて五穀の長、よつて農官の名とせしなり。

書經舜典「帝曰、棄、黎民阻飢、汝后稷、播時百穀。」

〔稼穡〕　稼は穀物を種うるなり。穡は之を收むるなり。因て農業の意となる。

〔樹藝〕　草木を植ゑつけること、樹も藝も共に植なり。

〔人之有道也〕　人もと道德性を固有すれども。

〔逸居〕　逸は放逸の逸、逸居はわがまゝに暮すこと。

〔契〕　母簡狄、玄鳥の卵を墮すを見て之を呑み契を生む。舜に仕へて司徒となり。商に封ぜられしがその後湯王に至りて天下を有つ。

〔司徒〕　敎育を掌る官なり。

書經舜典「帝曰、契、百姓不親、五品不遜、汝作司徒、敬敷五敎、在寬」

〔人倫〕　倫は序なり、人倫とは、人と人との關係に秩序あらしむる道なり。下文、父子有親より朋友有序までが人倫の細目なり。

契を司徒となし民に人倫を敎へて父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り朋友信有らしめしなり。

〔放勳〕　堯の號なり。

〔日勞之來之匡之直之輔之翼之〕　日は毎日、勞は慰勉するなり。ねぎらふなり。來は勅（卽ち勅の字）と通用し、恥力切音チョク、又、落代切、音ライ、訓叛するなり。匡は邪を匡正なり。直は曲を正すなり。輔は志弱きを輔けて立たしむるなり。翼は翼けて行かしむるなり。

使自得之とは、民をして道を行はしめて自ら心中に得る所有らしむるなり。（得る所卽德なり）

自得せしめし上によく民德を鼓舞振作して怠らざらしむるなり。

八つの「之」字は皆、人民を指す。來・直・翼・得・德と入聲押韻となれり。「日」といへ

るにて、堯が不斷如何に努力せしかを知るべし。
此日の字を今日の通行本には曰と作れるも、其誤なること、焦循の孟子正義を參考すべし。
〔而暇耕乎〕 本課七一頁一行「雖欲耕得乎」と應す。
〔堯以不得舜爲己憂舜以不得禹皐陶爲己憂〕 この文、大人には大人之事あるをいふ。
〔皐陶〕（カウエウ） 舜の臣、命ぜられて士となる。士とは獄官の長なり。父大業、陶を生み、皐に封ず。故に皐陶と云ふ。
〔夫以百畝之不易爲己憂者農夫也〕 小人には小人之事あるをいふ。
〔分人以財〕 前文の禹、后稷を承く。
〔敎人以善〕 前文の契を承く。
〔爲天下得人者〕 堯舜を承けて云ふ。即ち堯は舜を得、舜は禹・皐陶を得しことを斥す。「者」はことなり。分人以財も、敎人以善も、其人を得ざれば行ふ能はず、故に爲天下得人こと最も大切にして最も難し。
〔爲天下得人難〕 天下を以て人に與ふるは容易に爲し難きことなれども、爲天下得人ことに比すれば何でもなき事なり。それ程、人を得るは困難なる事にて、堯舜等の大人は此事に大に骨折りしなり。
〔孔子曰云々〕 論語泰伯篇に出づ。但し多少の相異あり。
〔大哉堯之爲君也〕 堯の君德は實に高大なりとの意。
〔惟天爲大云々〕 宇宙間に於ては天の德最も高大なり。四時行はれ、百物生ず。而して獨り帝堯この天の高大なる德に準則して其の化を行へりとの意。
〔蕩々乎〕 廣遠の稱。
〔民無能名〕 其の德を布くこと廣遠なるため、民其の中にありて其の德を蒙れるを知らず。知らざるが故に、之を指して名づくる能はざるなり。彼の康衢の歌に「日出而作。日入而息。鑿井而飮。耕田而食。帝力何有於我哉。」といへるが如きは、即ち是なり。
〔君哉舜也〕 舜は實に人君の道を得たりと、之を歎稱したるなり。
〔巍々乎〕 山の高大なるを形容する語なれども、これを以て德の高大なるを形容せるなり。
〔有天下而不與〕 「不與」とは與り關せざる意。己れ天子となれども、自ら其の智能を用ひず、天下の爲に人を得て之に己れ與り關せざるが如くなるを云ふ。
孔子の言を引きたるは、以て天下の爲に人を得たる堯舜の大德を證明せんが爲なり。
〔豈無所用其心哉亦不用於耕耳〕 本課七十一頁五行、「憂民如此而暇耕乎」に應す。
七十頁四行目「然則治天下獨可耕且爲與」よりここ迄は陳相の所謂「賢者與民並耕而食云云」を駁せしなり。
以下陳相の、その師に背きて異端を學べる事の非を難ずるなり。
〔用夏變夷〕 文明人の敎化を以て野蠻人

を變じて文明ならしむること。
夏は大なり中國をいふ。
〔變於夷〕 文明人が却つて野蠻人の爲に變化せらるること。
〔北學於中國〕 中國は楚の北にあたる故「北學」といひしなり。
〔未能或之先也〕 陳良にまさることが出來なかつた。
〔倍之〕 倍は背と通ず、陳良、盡く其學を棄て、許行に學びしことをいふ。
〔三年之外〕 三年の後なり。
〔治任〕 荷造りすること、任は擔なり。荷物をいふ。
〔失聲〕 聲をば哭きからせしなり。
〔子貢反築室於場〕 反とは、子貢他の門人を見送つてかへりしなり。場とは冢の傍にある祭祀の壇場なり。今も孔子の墓の前の右の方に遺蹟を存せり。一說、子貢亦一度は歸りしが、復至りし故、反といふ。
〔似聖人〕 聖人は孔子を謂ふ。
〔江漢以濯之〕 以下三句は曾子の言にて孔子の人格の高潔なることを譬へしなり。孔子の人格は布を江漢の水に洗ひて、之を盛夏の日に曝せるが如くにて、その潔白なること他に比なしとなり。
「江漢」は二川の名、揚子江と漢水となり。水多きをいふ。
秋陽は趙注によれば、周の秋は夏正の五六月に當る。
皜々乎は潔白の貌。
不可尙とは之に過ぐるものなしとの意。「尙」は加なり。
〔南蠻鴃舌之人〕 南蠻は楚を指す。鴃は音ケキ、慣用音ゲキ、鵙に同じ百舌なり。鴃舌は百舌のさへずり。南蠻鴃舌之人とは許行を指すなり。
〔出於幽谷遷於喬木〕 鳥が深谷を出て、高き木に遷るなり。幽は深なり、喬は高なり。詩經小雅伐木の篇に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷于喬木。」とあり。
〔魯頌曰〕 「頌」は詩體の一、風・雅と並べ稱す。詩序によれば、「頌者美盛德之形容、以其成功告於神明者也。」とあり。詩經には周頌・魯頌・商頌あり。この詩は詩經魯頌閟宮の篇なり。
その解釋は三十課參照。
〔子是之學〕 周公の擊てる人をば己の師として學んでゐる。
〔亦爲不善變矣〕 「變於夷者」（七一頁末行）に應す。
〔從許子之道〕 以下「屨大小同則賈相若」までは陳相の言なり。
〔市價不貳〕 市場に賣買する物品のねだんにかけねなしとなり。賈は價に同じ。不貳は價を飾らざるを謂ふ。
〔五尺之童〕 幼にして無知なるを云ふ。
〔布帛〕 麻布と絹帛。
〔麻縷絲絮〕（マルシジョ） 麻は麻の纖維、縷は既につむぎを經たる者、絲は生絲なり、絮は纊（ワタ）の麤なるものなり。
〔賈相若〕 價相同じきこと。許子の主義は物の量同じきものは其の價を等しくせんとするものにして、物の質を無視す。故に

以下孟子の一擊に遂ひて忽ち粉碎せられしなり。

〔物之不齊物之情也〕　以下孟子の言。物にはその質に差等ありて一樣ならぬのが物の實情である。

〔或相倍蓰、或相什伯〕　「倍」は二倍なり。「蓰」は音「シ」、五倍なり。「什伯」は十倍百倍なり。物品は質の差によりてその價に差あるをいふ。

〔比而同之〕　質を無視して、大小長短等によりておしなべて其の價を同じうすとなり。

〔巨屨小屨……人豈爲之哉〕　巨屨は粗なるくつ、小屨は密なるくつ（質に就いていふ）、粗精同價ならば精なるくつを作る者無からんとなり。一說に、若し大屨と小屨と其の價を同じうせば、大屨を作るものはなからん。それと同じく、精なるものと粗なるものと價を等しうせば、何人も敢て精なるものを作らざるべしとの意と解す。

〔相率而爲僞〕　人々競うて欺くことをなすとなり。

率天下而路也（七〇頁六行）に應ず。

三二　正氣歌並序

要旨

文天祥の凛然たる義烈に感起せしめ以て士氣の涵養に資す。

作者

文天祥字は宋瑞、一の字は履善、文山と號す、宋の吉州廬陵の人、忠義慷慨、文章世に名あり、宋末江廣の間に轉戰し大に敗れ、妻子皆執へらる。帝昺卽位するや、自ら上表して敗職の罪を劾す。後俄にして元將張弘範の兵至る、衆皆戰ふに及ばずして頓首す。天祥屈せず、遂に執へられ燕京に送らる、一土室に幽囚せらるゝや正氣歌を作りて以て志を見す、遂に殺さる、刑に臨み、從容として南向再拜し而して死す。年四十七。

解釋

〔北庭〕　北のかた元の朝廷なり。庭は廷に同じ。

〔可四尋〕　四尋位なり、尋は八尺。

〔白間〕　窓なり。何晏の賦に「皎々白間、微々列錢。」杜甫の詩に「白間剝畫蟲」とあり。

〔短窄〕　小さくて狹いこと。窄は狹なり。

〔諸氣萃然〕　諸氣は下文の水氣・土氣・日氣・火氣・來氣・人氣・穢氣をいふ、萃然はあつまる貌。

〔雨潦四集〕　雨潦は雨のたまり、四集は四方より集ること。

〔牀几〕　牀は床と同じ。寢臺。几は腰掛。

〔塗泥半乾〕　塗泥は濕潤の土地をいふ。雨潦の四集せし水氣が日を經て乾きかけ、蒸漏歷澗せられて土臭き氣を感ずるなり。

〔蒸漏〕　蒸され泡たつこと。「蒸」はむすこと。漏は泡なり。

〔歷澗〕　歷は亂なり、澗は爛なりみだれたこと。

〔鬱陰薪爨〕　軒下の焚火なり。薪は檜と同じ薪爨は薪にて物を煮るなり。

〔倉腐寄頓〕　倉中の腐敗物がたまること、頓は留ること。

〔陳々逼人〕　古米が重り合うてその臭が鼻をつく。陳々は積みかさなること。

〔雜遝〕　雜沓に同じ、こみあふこと。遝は積なり。

〔腥臊汙垢〕　腥も臊もなまぐさきこと、汙垢はきたなく垢くさきなり。皆、眉を聯

べて雑書せる人に就いていふ。

〔閭溷〕 二字共にかはやなり。

〔惡氣雜出〕 惡氣は閭溷・死屍・腐鼠より發する惡氣なり。

〔是數氣〕 水氣以下をいふ。

〔癘〕 瘴癘なり、毒氣に中てられたる病。

〔孱弱〕 かよわきこと。

〔俯仰其間〕 諸氣の間に起臥するなり。

〔有養致然爾〕 修養する所ありて、上述の如き生活にも無事なるを得たるのみとなり。

〔安知所養何哉〕 養つたのは何であるかはわからない。

〔浩然之氣〕 天地間に流行せる元氣にして、人に宿りては道德的活動力となるもの。浩然は盛大流行の貌。この孟子の言は公孫丑上にあり、三十七課參照。

〔天地有正氣〕 天地間に、正氣と稱する浩大純粹なる氣流行しつゝありとの意。

（この正氣は孟子の所謂浩然之氣なり）

〔雜然賦流形〕 賦は配なり、流は布なり流形とは天地間に布きある萬象なり。正氣が天地間の萬象に配賦せられ之を形成すとなり。雜然とは雜れる貌、正氣の流行配賦により生成せる萬象雜多にして入雜れるをいふ。卽ち流形に賦したるその姿が雜然としてゐるなり。正氣が雜然たるに非ず。

〔下則爲河嶽上則爲日星〕 下土にあつては河や嶽となり、天上にては日や星となつた。

河は黃河、嶽は五嶽。一本に嶽を渎に作る渎は四渎で江・河・淮・濟の四水をいふ。河嶽・日星は正氣の現はれたる最も著しきものなり。

〔於人曰浩然沛乎塞蒼溟〕 この正氣の人に配賦せられたものを浩然といひ、それは天地の間にみちふさがつてゐる。浩然は浩然の氣のこと。

沛乎は盛大の貌。蒼は深青色、天をいふ、溟は暗なり、地をいふ。塞蒼溟は孟子の所謂「浩然之氣塞于天地間」に本づく。

〔皇路當淸夷、含和吐明廷〕 太平の世に於ては、正氣は和氣を含みて穩やかに朝廷の言語のうちに表はされる。

皇は大なり、皇路は大道、（一說、君道）。夷は平なり淸夷は昇平をいふ。明廷は明なる朝廷。

〔時窮節乃見、一一垂丹青〕 上句の如く太平無事の世には、正氣はその儘に穩かに流行するによりて認め易からざれども、一旦世が亂れて道義地を拂ふ時に及んではじめて、この正氣が人の節操となりて明白に現れ出で一一歷史に殘る。

丹青は繪畫をいふ。古來忠孝節義の人は多くこれを畫きて不朽に傳ふ。漢書蘇武傳に「雖古竹帛所載丹青所畫何以過子卿」とあり。この垂丹青とは必ずしも繪畫を指すに非ず歷史に留めらるといふ意なり、特に丹青の字を用ひたるは韻字の關係による。

一說に丹青は汗青の誤りならん、蓋し晉相近きを以て混れるならんといふも從ふ可からず。

以上第一解　九青の韻（隔句押韻）

第一、二句は正氣の存在せることをいひ、三、四、五句に於てはその表現せる最も著しきものをあげ、七、八、九、十句に於ては就中浩然の氣の泰平・非常の兩場合に就いていふ。

第二解以下は「時窮節乃見一一垂丹青」を史上の事實によりて明にするなり。

〔在齊太史簡〕 簡は竹簡なり、歷史をいふ。太史は史官、歷史を書く役。この句は太史、死を以て其の職を守れるを贊したるなり。左傳襄公二十五年に「齊太史、書崔杼弑其君。杼殺之。其弟嗣書。而死者二人。北弟又書。乃舍之。南史氏聞太史盡死、執簡以往。聞既書矣、乃還」とあり。「崔杼殺君」の君は齊の莊公なり。崔杼は齊の大夫。棠公死し、杼之れを弔し、棠姜と通ず。杼遂に莊公を弑して景公を立て、自ら之れに相たり。故に史官、死を以て其の事實を記し亂臣の非を明にせるなり。

〔在晉董狐筆〕 晉に在つては史官董狐の直筆となつた。

左傳宣公二年に「晉靈公不君。趙盾驟諫。靈公欲殺盾酒一伏甲將攻之。其下知之、扶盾以下。盾遽出奔。盾昆弟趙穿襲殺靈公。而迎文公之子黑臀于周。立之。是爲成公。盾復任國政。太史董狐書之曰、趙盾弑其君。以示於朝。盾曰、殺者趙穿、我無罪。狐曰、子爲正卿亡不越竟、反不討賊、非子而誰。孔子曰、董狐古之良史、書法不隱云云。」

〔在秦張良椎〕 秦の時には張良が仇うちの鐵椎となつた。

張良、韓のために仇を報ぜんとして、博浪沙中にて力士をして、始皇を椎擊せしめしをいふ。

〔在漢蘇武節〕 漢の時には蘇武の匈奴に使した時の節旄となつた。

節は節旄にて天子の使者の信として持ち行く旌なり。西漢の武帝の時、蘇武、帝の命を奉じて匈奴に使す。單于、之れを降さんと欲せしが、武、屈せざりしかば、乃ち武を北海上におき、羊を牧ぜしむ。武、起臥、漢の節を持し、節旄盡く落つるに至りしも遂に屈せず。後、宣帝の世に及び、始めて還ることを得たり。武、匈奴に留まること十九年、はじめ强壯を以て出でしが、還るに及びて鬚髮悉く白き事は漢書蘇武傳に詳なり。

〔爲嚴將軍頭〕 三國の時の劉璋の將たる嚴顏が頭となつた。嚴顏は頭を斫られんとしてもへいきであつた。

嚴將軍とは三國の時、劉璋の臣たりし嚴顏をいふ。蜀志張飛傳に「先主（蜀漢の皇帝劉備）入益州、還攻劉璋。飛與諸葛亮等溯流而上、分定鄱縣、至江州、破璋將巴郡太守嚴顏、生獲顏。飛呵顏曰、大軍至、何以不降而敢拒戰。顏答曰、卿等無狀、侵我州。但有斷頭將軍、無有降將軍也。飛怒、令左右牽去斫頭。顏、色不變曰、斫頭便斫、何爲怒邪。飛、壯而釋之、引爲賓客。」とあり。

〔爲替侍中血〕 晉の嵇紹が惠帝を保護して爲に斬り殺され其の血が帝の衣にかゝつたので、天子は之を記念として洗はれなかつた。

晉の惠帝の時、嵇紹侍中たり。帝既に蒙塵し、軍衝搏潰散す。紹身を以て御輦を捍ぐ。飛矢雨集し、遂に害に遇ふ。血、帝の衣に濺ぐ。左右之を浣はんと欲す。帝曰く此れ嵇侍中の血なり、去ること勿れと。晉書嵇紹傳に見ゆ。

この「嵇侍中血」とは帝の曰へる「此れ嵇侍中の血なり」の語をとれるなり。

〔爲張睢陽齒〕　唐の張巡が敵を罵りて嚙み碎いた齒となつた。

張睢陽は唐の睢陽の張巡、賊を罵りて齒を嚙み皆碎く、賊刀を以てその口を裂く、齒の存せしもの僅に三四のみ。事は唐書張巡傳に見ゆ。

〔爲顏常山舌〕　唐の顏杲卿（カウケイ）が賊を罵りてやまなかつた故、遂に斷ち切られた、あの舌となつた。

唐の常山の太守顏杲卿、（眞卿の弟）安祿山を拒ぎ、戰ひて獲らる。乃ち罵りて曰く犬羊狗何ぞ速に我が殺さざると。祿山怒りて之を橋柱に縛す、詈りて口を剌たす、賊その舌を斷つ。事は唐書本傳に見ゆ。

〔或爲遼東帽清操厲冰雪〕　或は後漢の管寧が遼東に行き黑帽を冠つて全うした節操となり、その操は冰雪よりも清い。

後漢の管寧少くして節操を以て稱せらる。時に漢室衰微し天下大に亂る。寧遼東に往き居ること二十年、（一說に三十七年）魏の明帝安車蒲輪を以て之を聘すれども至らず。寧家貧にして學を好み、常に皂（皂は昨ウ黑色ないふ。）帽布襪を著くるのみ事は魏志に見ゆ。

〔或爲渡江楫慷慨呑胡羯〕　或は晉の祖逖（ソテキ）が江を渡る時、えびすを滅ぼさんと誓つて、楫をたゝいた事となり。その時の慷慨の氣は既にえびすを呑んでゐた。

匈奴・鮮卑・氐・羌・羯の五胡をいふ。晉室大に亂れ、胡羯の種族なる劉淵・石勒の輩、間に乘じて中原に割據す。祖逖少くして大志あり兵を率ゐて之を討たんとして、江を渡るにあたり、中流楫を擊ち必ず中原を清めんと誓ふ、遂に進みて賊を破り、河以南晉に歸す。事は晉書本傳に見ゆ。

〔或爲擊笏逆賊頭破裂〕　或は唐の段秀實の笏となり賊朱泚（シ）を擊つてその頭を傷けた。

逆賊は逆賊といはんが如し。賊とは罵しる語なり。こゝは朱泚を指す。

唐の德宗の時、段秀實、涇原節度使たり、朱泚の反するや刺かして秀實を降さんとす、秀實大に怒り、泚の面に唾し笏を以てその額を擊ち額を傷く、事は唐書本傳に見ゆ。

以上第二解、四賢九層の叶韻。時窮して正氣の表はれし史上の事實を舉げ。

〔是氣所磅礴。凜烈萬古存〕　この正氣が滿ち渡れる事績は立派に永久に殘る。

磅礴は充ち塞がる貌、凜烈は寒冷の意、又けだかく立派なること、こゝは後の意。萬古は永久。

〔當其貫日月生死安足論〕　正氣の最も盛なる時には人は生死など問題にしないのである。其は正氣。

〔地維賴以立天柱賴以尊〕　天地もこの正氣によりて支持せらるゝないふ。賴は正氣に賴りてなり。地維・天柱は列子湯問篇に「天柱折、地維絕。」とあり。地維は四方の「ツナギ」、天柱は天を支ふる柱。

〔三綱實繫命〕　三綱の命も此の正氣によつて存すとなり。三綱は君臣・父子・夫婦をいふ。君は臣の綱、父は子の綱、夫は婦の綱たるをいふ。

〔道義爲之根〕　正氣は皆道義より根ざして出づるをいふ。

孟子公孫丑上に「其爲氣也、配義與道、無是餒也」とあり。

以上第三解　十三元の韻。

正氣を讚す。

〔嗟予遭陽九。隸也實不力〕　自分はわるい運にあつて、しかも將士のものもつとめてくれぬ。讚は遭也。あふと讀む陽九は厄運のこと。漢書匈奴傳「今天下遭陽九之厄」此年饑饉」左思吳都賦に「世際陽九」註に「陽厄五、除厄四、合爲九」隸也は臣隸をいふ。天祥の部下の將が奮戰せず、爲めに天祥の執へられるに至れるをいふ。一說に天祥自身が器量のない爲め、國を救ひ主を救ふことが出來なかつたのを責める意ともいふ。

〔楚囚纓其冠。傳車送窮北〕　楚の囚人の如く、執へられても國を忘れずして宋の冠を結び、驛車で北方に送られた。

楚囚は楚の鐘儀が晉に囚はれたのをいふ。纓は音エイ冠の紐。楚人鐘儀が晉に囚はれ獨り尙ほ楚國の冠を著けて故國を忘れざりし故事は左傳、成公九年に「晉侯觀于軍府、見鐘儀、問之曰南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭所獻楚囚也」とあり。

傳車は驛傳の車、窮北は極北、こゝは北京をいふ。

〔鼎鑊甘如飴求之不可得〕　かまいりに處ぜらるとも、忠義の爲なれば飴の如く甘しとするのだが、今はそれなのぞんでもしてくれない。

鼎はかなへ、鑊はおほがま。

〔陰房闃鬼火春院閟天黑〕　自分の囚はれてゐる陰氣な部屋には鬼火が淋しく出で、世は春だのに牢獄は戸をとざして眞暗である。

陰房は陰氣な部屋、こゝは牢屋をいふ。闃は音ゲキ、靜なり。鬼火は所謂おにび、杜甫の玉華宮詩に「陰房鬼火青」とあり。春院とは春の部屋、閟は戸をとざすこと、闃天黑とは戸をとざして暗きこと。杜甫の大雲寺贊公房詩に「天黑閉春院」とあり。

この二句は天祥の囚はれて居る牢屋の陰氣なることをいふ。

〔牛驥同一皁雞栖鳳凰食〕　のろい牛と駿馬とが同じものを食ひ、鷄の巢に鳳凰が生活する。

靜と鳳凰とに文天祥自らたとへしなり、己は牛や鷄の如き他の罪人とは同一ならざるに相混じて一樣に扱はれ居るをいへるなり。皁は音サウ、かひば桶なり。漢書、鄭陽傳「使不羈之士、與牛驥同皁」。柄は巢なり。

〔一朝蒙霧露分作溝中瘠〕　一朝蒙霧露とは一朝霧露の毒に犯されれば、即ち病にでもなればの意。

分と作は溝中瘠に「溝中の瘠となるか分とす」

と讀む。分は運命なり本分なり。「瘠」は獲なり、贏獲せざる屍ないふ。瘠せはてたる死骸となりて溝の中にでも捨てられるのを己の本分だと覺悟したとなり。荀子榮辱篇「是其所以不免於……爲溝壑中瘠者也」

〔再暑寒〕 二年を經過せること。

〔百沴自辟易〕 文天祥の凛然たる正氣には百沴も辟易して害を加へ得なかつたとなり。沴は郎計切、音レイ、惡氣なり辟易は驚き退くなり。

〔哀哉沮洳場。爲我安樂國〕 かなしいかな、この獄中のじめ〳〵した處が、自分の極樂世界であるとは。

沮とは水の浸す處で、卑くて濕つた地。獄中の陰濕なのをいふ。安樂國は佛語で極樂淨土の意。

病にもかゝらず獄中に生き長らへるをいへるなり。

〔豈有佗繆巧。陰陽不能賊〕 なんで他にうまい手段があらうか、唯、この正氣があるために陰陽の邪氣も自分をそこなふことが出來ないのである。佗は他。繆は音ビウ、(慣用音ベウ)詐なり。繆巧はたくらみ。遺書、韓安國傳に「意者、有於繆巧、可以爲之、則臣不知也。」

〔顧此耿耿在。仰視浮雲白〕 己をかへりみれば祖國のことが氣がかりで、心安からず、天を仰いで浮き雲の白きを見て長歎する。耿耿は音「カウカウ」不安なり。仰視の句は下の蒼天曷有極の句を起す。

〔悠々我心憂、蒼天曷有極〕 悠々は憂ふる貌。詩經小雅十月之交に「悠々我思、註に「悠々、憂也」とあり。「蒼天曷有極」は蒼天の窮りなきが如く、我が憂も極り無きをいふ。

〔哲人日已遠。典刑在夙昔〕 古のすぐれた人はすでに死んで久しいが、我等の典刑とすべき事蹟は古代に歷々として示されて居る。

哲人は明哲の人、卽ち智者。前の十二人を指す。典刑は則るべき法度、詩經の大雅に「雖無老成人、尙有典刑」夙昔は昔なり。「雖無老成人」とは則るべき手本が昔にある。卽ち昔の本にかゝれて今迄殘つて居るなり。

〔風簷展書讀。古道照顏色〕 風の吹く軒端で書を開いて讀めば、古人の行つた道が目の前にありありと見ゆる。照顏色とは古人義烈のあとがかゞやきわたりて文天祥の顏を照らすとなり。

以上第四解 十三職の韻。

文天祥自身のことを說く。

三三 和文天祥正氣歌並序

要旨

前課と聯關してこの課を授け諷誦に資す。

解釋

〔先君子〕 亡父のこと、こゝは東湖の父幽谷を指す。

〔擊節〕 拍子をとること。

〔歷歷〕 明らかなる貌、一一數へらるゝ樣。

〔宛然〕 さながら、もとの通りに。

〔性善病〕 生れつき多病。

〔公駕〕 公は水戸藩主德川齊昭を指す。

〔及公獲罪彪亦就禁錮〕 齊昭、幕府有志派のために嫉まれて、江戸駒込の邸に幽ぜらるゝに當り、東湖も亦禁錮ぜられ、後三年にして釋さる。

〔風窗雨室〕 風の洩る窓雨の入る室にて囚はれし室をいふ。

〔濕邪〕 濕氣と邪氣。

〔菲衣疏食〕 うすぎと粗食、菲は薄なり。

〔辛楚〕 辛苦といふに同じ。「楚」は痛なり、別に悽に作る。陸機の興二弟士衡一詩に「慷慨含二辛楚一」とあり。

〔宿痾〕 年來の病、ふるき疾病のこと。

〔睥睨宇宙〕 氣宇の大なるなり、意氣の盛なるなり。睥睨は見まはして勢を示すなり。

〔貧於天祥歌〕 貧は取なり、とりて助とすること。

〔宋社〕 宋の社稷。

〔古人有云死生亦大矣〕 死といひ生といふ事は人にとりて大事件なるをいふ。莊子德充符に「仲尼曰、死生亦大矣、而不

二得二與一之變一」

〔因陋〕 陋は陋に同じ、苦なり。

〔不以慊於意〕 心中不滿足に思ふ。

〔粹然鍾神州〕 粹然は純粹にして邪氣の少しも雜はらざるをいふ。神州は日本國なり。鍾はあつまると訓す。

〔不二〕 不二は富士と音相通ずるによつて用ふ。

〔巍巍〕 高大の貌。論語に「巍巍乎、唯天爲レ大。」とあり。

〔大瀛水〕 大海といふに同じ、瀛は海なり。史記孟子荀卿傳に「乃有二大瀛海一環二其外一」とあり。

〔洋々〕 水の盛んなる貌。詩經衞風碩人篇に「河水洋々」。孔傳に「洋々、盛大也」とあり。

〔發爲萬朶櫻衆芳難與儔〕 萬朶は多くの枝。朶は枝なり。衆芳は多くの花。儔は「タグヒス」と訓む。

〔八洲〕 我が日本國の異稱の大八洲の略。

〔蓼〕 音ボウ、廣韻に「兜蓼首鎧」とあり。即ち「カブト」なり。

〔藎臣皆熊羆、武夫藎好仇〕 藎臣は忠臣と同じ。詩經、大雅「王之藎臣」の疏に「藎、忠愛之篤、進進無已」熊羆はくまとひぐま、以て勇猛の士を喩ふ。書經、康王之誥に「亦有熊羆之士、不二心之臣」武夫は武士に同じ。好仇は、よい相手。仇は逑と同じく匹なり。詩經、周南兎罝篇に「赳々武夫、公侯好仇」

以上第一解　十一尤の韻

正大の氣天地間に磅礴せることをいふ。

〔神州誰君臨、萬古仰天皇〕 萬古は永遠の意。萬世。

〔皇風洽六合明德侔太陽〕 六合は、天地四方。洽はあまねしと訓ず。皇風明德共に上句の天皇にかゝる。侔はひとしと訓す。

〔不世無汙隆、正氣時放光〕 汙隆は、盛衰と云ふも同じ。

汙は衰下なり。また汚字に作る。隆は起なり。禮記檀弓篇「道隆從」隆、道汙從」汙」」こゝは汙の意味が主なり。世衰へし時正氣光を放つとなり。下文に於てその事實を舉ぐるなり。

以上第二解　七陽の韻。

我が神州に於て世運衰頽の時正氣光を放つ事ないふ。

〔乃參大連議侃侃排群曹〕 大連は「オホムラジ」と訓む。上古大臣と並んで朝政を執れる官名。參は參與參議の參あづかるなり。正大の氣が大連の議論に參して佛を排擊せりとなり。侃侃は剛直の貌。侃は音カン。論語、鄉黨篇に、「朝與二士大夫一言、侃侃如也」羅馨音「クドン」釋迦を謂ふ、もと釋迦種族の名稱で（Gautama）の音譯なり。欽明天皇の御宇、百濟より經論及佛像を獻ぜし時、帝はその信ずべきや否やを問ふ。大臣蘇我稻目は之を祭らんとし、大連物部尾輿、連中臣鎌足等は之を不可として排す。

〔乃助明主斷、燄燄焚伽藍〕 明主は英明なる君主にて、欽明天皇を指し奉る。助とは正氣が天子の英斷を助けしなり。燄燄は火の盛に燃え上る貌、伽藍は衆或は園と譯して、寺院の梵語 Sangharama の音譯。是時疫病大に流行しければ尾輿鎌足等此れ蠻神を奉ぜしため我國の天神地祇の御怒りに觸れたるなりと奏す。帝乃ち有司に命じて佛像を難波の堀江に投じ、向原寺を焚かしむ。

〔中郎營川之宗社磐石安〕 中郎は中臣鎌足なり、郎は男子の美稱、「之」は正氣、宗社は宗廟社稷の略。磐石安とは磐石の如く安泰なりの意。

孝極天皇の御代、中臣鎌足が蘇我入鹿を誅せしをいふ。

〔妖僧肝膽寒〕 妖僧は惡僧、弓削道鏡を指す肝膽寒とはきもをひやすこと。非常に懼るゝこと。

〔忽揮龍口劒〕 揮とは正大の氣が劍を揮ひしなり。後宇多天皇の建治元年、元の使者杜世忠・何文著等九人、長門に至り、留まりて去らず。必ず我が國の返書を得んと欲せしかば、北條時宗、之れを鎌倉に送り、龍口に於て斬る。

〔忽起西海颶怒濤殲妖氛〕 颶は颶風、海上の大風なり。妖氛はあしき氣、不祥の氣。元軍を指していふ。氛は氣なり。殲は殲滅、つくすと訓す。

〔陽爲鳳輦巡〕 御巡幸のふりをした。陽は佯と同じ、ふりをすること。志賀（滋賀縣大津）の明月の夜、大納言藤原師賢、後醍醐天皇の御衣を借り、陽りて鳳輦の御巡幸に擬して叡山に赴き、その間に天皇を南都に逃れしめ奉れり。

〔芳野戰酣日、又代帝子屯〕 帝子は護良親王なり。屯は音チュンなやむ、故障あるの意。說文に「難也。象二草木之初生、屯然而難一从二中貫一一、一地也。尾曲」と。村上義光が護良親王に代りて死せしをいふ。

〔慣慣〕 憂ふる貌。

〔慇懃〕 委曲の貌。

〔或殉天山云云〕 武田勝頼、綾田氏に攻められ天目山に逃る。小宮山內膳さきに勝頼に幽閉せられしが、君の急を聞き、來りて難に殉ぜり。

〔或守伏見城〕 石田三成、德川氏をはかるや家康の臣、鳥居元忠、伏見城を死守せり。

〔承平二百歲〕 承平は天下太平の世をつゞくること。

漢書食貨志に「今累世承平」とあり。

德川氏天下を統一してより太平約二百年續けるをいふ。

〔斯氣常獲伸〕 太平つゞきしため正氣は事もなく流行し特に目立ちたる光を放さなかつた。

〔然當其鬱屈〕 鬱屈は鬱鬱屈伏なり。上句「伸」に對す。「其」は正氣。世の衰運に方りては正氣鬱屈して其の顯はるゝ所を求めてその光を發するなり。こゝは元祿時代、士道地に墜ちんとせし際、正氣が四十七士となれるをいふ。

〔乃知人難亡〕 正氣を發揮する人はその時代々々で死んでも、その英靈（卽正氣）は滅しない。

〔誰能扶持之卓立東海濱〕 しからば今日誰がよくこの正氣を扶持して居るかといへば、それは外でもない東海の濱卽ち常陸に卓立したる齊昭公其人である。東海濱は常陸を指す。卓立はぬき出て高く立てること。

〔忠誠尊皇室孝敬事天神〕 水戸家では忠誠を以て一天萬乘の君を尊び、また孝敬を以て天神地祇に事へて居る。

〔修文兼奮武、誓欲淸胡塵〕 文武を兼備し誓つて夷狄を攘はんとしてゐられた。公の文武を勵まし、外夷を攘はんとしたることを述ぶ。胡塵は蠻夷の塵にて外國人を指す。

〔一朝天步艱、邦君身先淪〕 然るに時運非にして、我が君齊昭公が幕議に因り駒込邸に蟄居せられた。天步艱は時運非であるを云ふ。艱はなやむと訓す。淪はしづむと訓す。

〔頑鈍不知機〕 頑鈍にして禍危を道る、

機を知らずとなり。東湖激していふ語。

〔罪戾〕「戾」は乖なり、罪なり。左傳文公四年に「以自取戾」とあり。

〔困葛藟〕 連坐せられて苦しむこと。易の困卦上六の「困于葛藟」の註に「葛藟、引蔓纏繞之草」とあり。

〔何以報先親〕 以上第三解、十一眞、十二文、十四寒の通韻。正氣光を放てる實例を歴叙し、終に水戸藩と己の身上とに及ぶ。

〔荏苒〕 猶ほ漸進の如し。長引くこと歳月の移り代るをいふ。文選の張茂先の勵志の詩に「日歟月歟、荏苒代謝」とあり。

〔周星〕 周星は十二年のことなれど、こゝは二年の意に用ひたり。

〔萬死〕 必ず死す場合。

〔與汝〕 汝は正氣をいふ。

〔屈伸付天地〕 正氣の屈伸を天地にまかせる。

〔張綱維〕 三綱五常の人倫を明かにし、禮義廉恥の四維を張らんとなり。四維は、管子に「何謂=四維、二曰禮、二曰義、三曰廉、四曰恥。」とあり。また「四維不張、國乃滅亡」。

〔極天護皇基〕 極天は天地を極めての意、天地のあらん限り。皇基は皇室の基礎。以上第四解 四支の韻。自己の覺悟をいふ。

備考

挿圖の自筆は、東湖遺稿に取れるもの（本課は之に據る）と多少文字の異同あり。遺稿に取れるものは、東湖、後更に自ら推敲を加へしものなるべし。

三四 述懷

要旨

前課と關聯し東湖の忠憤に感激せしむ。

解釋

〔三決死矣而不死二十五回渡刀水〕 三度逃死を覺悟したが死を免れ、二十五回も利根川を渡つて水戸と江戸を往來し國事に奔走した。

刀水は利根川（刀根川）なり。

東湖十九歳の時、（文政七年）英船、常陸の北邊大津村に來る。幕府遠法に處分せずして漂泊の例を以て之を寛待す。東湖、父の内意を承け、直ちに夷を鏖殺せんとし、將に發せんとする時、幕吏薪水を夷奴に給與して去らしむと聞きて果さず。これ死を決して死せざる一なり。

年二十四の時、（文政十二年）藩主哀公病み、繼嗣未だ定まらざるを以て、人心危懼す、東湖深く之を憂ひ、死を決して同志と密に江戸に上り、苦心奔走、終に哀公の弟烈公を立つ。これ死を決して死せざる二なり。

烈公寺鐘を鑄て巨砲を造り、僧徒の讒に遭ひ、異志を抱くの嫌疑を以て、江戸駒込の邸に幽せらるゝや、東湖君寃を雪がんとして盡力し、罪死を覺悟せしに、幽閉にて、事濟みぬ。これ死を決して、死せざる三なり。

〔五乞閒地不得閒、三十九年七處徙〕 乞閒地とは官を辭して閑散の地につかんとせしなり。七處徙とは七度居處をうつれるなり。

以上四句、罪を獲て屏居するにあたり、己の過去の閲歴を回顧して、無限の感慨を寓す。

〔邦家隆替非偶然〕 國家の盛衰は偶然に來るものではない。必ずその原因がある。（故にたゝず隆盛の素地を作るべきだ）この邦家は主として水戸藩についていふ。隆替はおこるとすたれると盛衰。

〔人生得失豈徒爾〕 人の一生に起る禍福は決して無意義ではない。福は禍の本、禍は福の因、今我禍をうくといへどもこれが却つて後の福の本となるかも知れない。回天詩史に「己の父は民間より擧げられ、文學を以て仕へ、己も亦近臣に列し、榮寵極れり。衆人の嫉惡を受くる、固より怪しむに足らず。我が公すら猶今日の禍あり、我が死を免れて、唯幽閉に止るは固に大幸たり。昔、菅公も貶竄の禍に遭はずんば、其盛名を千載に傳ふる能はざりしならん。是に由て之を言へば、我が公の讒に遭ふ

も、未だ必ずしも申すべからず、吾が禁錮に就くも亦甚だ不幸とはなさず。」といへり。

〔自驚塵垢盆皮膚猶餘忠義塡骨髓〕 今幽囚せられて、皮膚には、我ながら驚く程、あかが一ぱいたまつてゐるが、しかし忠義の心は益盛で骨のしん迄滿ちて居る。回天詩史に、「余嘗讀柳宗元文、至於其叙謫居之苦、曰、一搔皮膚、塵垢盆爪。愛其文之極奇、而疑其言之皆實也。今處實地、始信其言之不妄矣。」又、「蘇紱有言、道理貫心肝、忠義塡骨髓、直須臾談笑於死生之間。余深服斯語。亦舉以勵子弟。以爲蘇子斯語、可以註孟子浩然之氣也。」

〔嫖姚定遠不可期〕 今、自分は幽閉の身なる上に、幕府の忌避する所なれば、霍去病や班超の如き攘夷の功は、とても立て得る見込はない。

嫖姚は霍去病にして、漢の武帝のとき、嫖姚校尉となり、匈奴が南侵せるを驅逐して功あり。定遠は班超にして、後漢の成帝の時、西域を服し、功を以て定遠侯に封ぜらる。

烈公の時、露國頻に我が北邊を窺ひしかば、公は蝦夷を開拓し、防備を嚴にするの策を建て、却て幕府の嫌忌する所となる。回天詩史に、「嗚呼公屈萬里飛揚之志、幽處別邸小室之中。慨夷亦不得探虎穴、而偃蹇於蝸廬之下。夫天未欲驅除醜虜、手、然則黠夷窺雲邊海者、何日而擯、鄂睿蠶食北陸者、易時而遏。」(黠夷は英國を指し、鄂睿は露國をいへるなり。)

〔丘明馬遷空自企〕 武功を建つることは到底期することが出來ぬから、此上は左丘明や司馬遷の如き史書を著して後世に遺さんと、企てゝなるが、それも或は空だのみとなるかも知れぬ。漢の司馬遷は刑せられて、發憤の餘、史記を作り、周の左丘明は左傳を作れり。東湖も幽囚の鬱屈を伸べんと欲して、斯る志望を起せしなり。

〔苟明大義正人心皇道奚患不興起〕 苟くも人として最も大切な君臣の大義を明にして人心を正しさへせば、我が國固有の道德は必ず盛となならう。

大義は君臣間の關係、皇道は我國固有の道德。

〔斯心奮發誓神明古人有云斃而已〕 大義を明にし人心を正して皇道を振起せと欲するこの心もて大に努力し、神に誓つて、死んでもやめまい。

こゝの斃而後已は死するまでは已めず、といふよりも、むしろ死んでもやめぬといふ位の意氣をあらはすなり。古人云……とは古人もいへるあの如くやりたいとの意なり。禮記表記に「忘身之老也、不知年數之不足也。俟焉日有孳孳、斃而後已」とあり。

回天詩史の終に、「彪賁質雖駑、竭畢生之心、極終身之力、從事於斯、將上以報國家之涵恩、下以遂先臣之遺志也。所謂斯心奮發誓神明、斃而後已者、豈徒手裁、豈徒手裁。」

備考

本詩は古詩體にして、十四句より成り、四紙(仄韻)の韻を押す。死・水・徒・爾・髓・企・起・已が韻字なり。

三五　讀文天祥正氣歌

要旨

文章はその人の人格の表現なることを知らしむ。

作者

芳野金陵。名は世育、字は叔果、下總の人、文久二年、昌平黌の儒官と爲り維新後大學中博士に任ぜらる、明治十一年歿、年七十四。

解釋

〔文以氣爲主〕 蘇轍の上樞密韓太尉書に「文者氣之所形」とあり。

〔凜凜〕 寒氣の身にしみわたる貌、又、勇氣のはげしき貌、こゝは後者の意。

〔耿耿〕 不安の貌、又光り輝く貌。こゝは後者の意。

〔語發忠誠字含風霜〕 語々皆忠誠の至情より出で字々皆森嚴の氣を含むとなり。

〔衣帶贊〕 教科書頭注參照。

〔以此養之〕 「此」は「孔曰成仁孟曰取義」をうく、「之」は「氣」を指す。

孔曰成仁は教科書頭注參照、孟曰取義は孟子告子上「生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而取義者也。」

〔極其剛大〕 「其」は「氣」、孟子公孫丑上「其爲氣也、至大至剛。」

〔其始卒莫不出于此者〕 天祥の始終の行爲は皆この至大至剛の氣より發せざるはなしとなり。

〔偶發言于土窖耳〕 たゞその氣を牢獄中にて偶々言に發して正氣歌となりしのみ。

土窖は地中の穴(窖はあなぐら)こゝは牢屋をいふ。

〔末造〕 末世、季世、造は至なり。末に至る世の義なり。禮記、郊特牲「諸侯之有冠禮、夏之末造也。」

〔婦弱息〕 婦はやもめ、弱息は年若きむすこ、こゝは度宗の后楊太后と、益王・衛王をいふ。

〔延一線之喘于江南半壁之地〕 一線之喘とは、今にも絶えんとする餘喘。江南は長江以南。半壁は半邊、半輪といふがごとし、缺け殘つた。わづかの土地。

〔父母有疾云々〕 宋史文天祥傳に「元丞相悖羅怒曰、爾立二王、竟成何功。天祥曰、立君以存宗社、存一日、則盡臣子一日之責、何功之有、曰既知其不可、何必爲、天祥曰父母有疾、雖不可爲、無不下藥之理、盡吾心焉、不可救則天命也。

今日天祥至レ此有レ死而已、何必多言。」

〔困踣萬狀〕　困踣は苦しみたふること、踣はハイ、ホク、ホウの三音あれど慣用音はハイ、なり。萬狀はさまざまなるといふ。

〔庶幾萬一焉〕　萬に一つも恢復出來ること。こひねがふ。

〔趙孤葬魚腹〕　度宗の幼子衞王、瑞宗につぎて立ちしが、崖山の戰に破れ、入水して死す。趙は宋の姓。

〔雖天非其天而天祥之天則全矣〕　天命は文天祥にとりては非命の天ではあつたが、天祥自身の天は完全にして遺憾なし（よく義を盡せり）となり。

〔養而無害則塞于天地之間〕　孟子公孫丑上の文、第三十七課參照。

〔煥乎成章〕　光り輝いて立派な文章となつたとなり。論語、泰伯「煥乎其有ニ文章一」

〔布置琱繪之末〕　布置は文字のくばり方。琱繪はみがき、色どることにて文の修飾をいふ。文章形式的の末技。

三六　舍生而取義

要旨

出處進退必ず義を以てすべきことを知らしむ。

解釋

〔熊掌〕　熊の掌の肉なり。魚と熊掌とは、皆美味なるものにして熊掌は最も美味なり。

魚を以て生に譬へ、熊掌を以て義に譬ふ。

〔舍生而取義〕　義當に死すべきときは其の爲に我が生をすつとの意。義は生よりも一層重きが故なり。舍は捨なり。義は理に適ふこと、「仁」の對。梁惠王上篇に「王何必曰レ利、亦有ニ仁義一而已矣。」の朱注に「仁者、心之德、愛之理、義者、心之制、事之宜也。」とあり。論語衞靈公篇に「志士仁人、無ニ求レ生以害ニ仁。有ニ殺レ身以成ニ仁。」とあり。孔子の謂ふ所の「仁」には孟子の言ふ「義」をも包括するものなるが故に、本章は孟子が孔子の言を敷衍せしものと見るべし。

〔所欲有甚於生者〕　我が欲する所には於ては生よりも一層欲するものありとの意にて、義を云ふなり。

〔不爲苟得〕　得は生を得るなり、苟得とは義をすてゝまで生を得んとするなり。

〔患有所不辟〕　患は患難、わざはひ、こは生命を失ふ程の患をいふ。辟は避と通ず。さくと訓ず。

〔如使〕　如は若と通ず、如使二字にて假定を示す。

〔凡可以得生者何不用也〕　凡そその事で死を免れ得る手段ならばどんなことでも用ひないことはない。

卽ち義を辨へずば、どんなきたない行爲をしてでも生を得ようとするとなり。

〔由是則生而有不用也〕　ある手段によれば必ず死を免れ得る場合でも、その手段を用ひないことありとなり。（卽ち不義の手段を用ひて迄、死を免れようとしないなり。）

「是」はあること（手段）を假定す。秉彝の良心を指すといふは非なり。

「由レ是則可ニ以辟一患」の「是」も同じ。

〔非獨賢者有是心也〕　「是心」とは義を欲し不義を惡む心なり。

〔一簞食一豆羮〕　少しばかりの飲食物をいふ。簞は音タン、飯を盛る器、竹にて製す。食は音シ、飯なり。豆は木器、食物を盛る。羮は音カウ、あつもの。

〔嘑爾〕　叱るやうにして呼ぶさま。「オイ」「ソラ」など、と呼びかくること。趙注に、

「嘑爾猶呼爾「嗚咤之貌。」とあり。

〔行道之人〕　その邊を通つて居る凡人。

〔蹴爾〕　蹴るさま。

呼爾、蹴爾共に無禮なる行爲なり、不レ受レ之、不レ屑はその無禮を怒ればなり。

〔萬鍾則不辨禮義而受之〕　凡人乞人の如きでさへ死に迫れども、嘑蹴の食の無禮なるを怨みて之を受けざるに、今人萬鍾の祿は禮義を問はずして之を受くるは心得すとなり。「萬鍾」は祿の多きを言ふ。「鍾」は左傳昭公三年に「釜十則鍾。」注に「六斛四斗」とあり。安井息軒は「萬鍾約當二我五千七百五十餘石」といへり。

禮義は禮と義なり。不辨禮義而受之とは、無禮な取扱を受けても、不義な行爲をしても、一向かまはずに、喜んで大祿を受くとなり。

〔萬鍾於我何加焉〕　萬鍾の祿も、わが身の眞價に於て增益する所はなしとなり。

〔爲宮室之美妻妾之奉云々〕　禮義を辨ぜずして大祿を受くるのは、居處を美にせんが爲か、妻妾のあてがひを十分にしたきが爲か、知人の貧乏せる者に恩を施さんが爲かとなり。

「奉」は奉養の奉、あてがひ養ふこと。「得」は「德」と通ず、恩を感ずることなり。

「得我」とは我彼に施し、彼我に恩德を感ずるなり。

〔鄉爲身死而不受〕　さきには其の身死するが爲なるも、しかも嘑蹴の食を受くるを肯ぜざりきとの意。「鄉」は嚮と通ず。

〔爲之〕　「之」は「受」をさす。萬鍾の祿を受くるを云ふ。

〔是亦不可以已乎〕　この三者の爲に受くるのは、實にやむを得ずしてであらうか。（實はさにあらざらん）となり。

三七　浩然之氣

要旨

浩然の氣の何たるかを知らしむ。

解釋

〔加齊之卿相〕　若し齊の卿相の役名を夫子の身上に加へられて肩書を以つてと假定していふ。

〔雖由此霸王不異矣〕　霸王は當時並稱せし故、こゝもその用法に從へるなり。異は怪なり不異矣とは不思議なことはあるまい。夫子は優に之を爲し得んとなり。

〔動心否乎〕　動心とは未だ成らざる時、其成らざるを恐れ、既に成れる後、その成るを喜ぶないふ。

〔過孟賁遠矣〕　孟賁は古の勇者、能生牛の角を拔く。

公孫丑思へらく孟子意志の力を以て心を制し動かさゞるならんと、故に意力の强き孟賁と比較していひしなり。遠矣とは遙かに越えて居る（矣）となり。

〔告子先我不動心〕　孟子の答なり。單に意志を以て心を制して動かさないといふだけなら、告子でも我より以前に之を制し得たりとなり。

〔北宮黝之養勇也〕　養勇也とは勇を養ふにはなり。

〔不膚撓〕　皮膚がたるむといふことなせぬ。其體挺然としてびくともしない。

〔不目逃〕　目がぢつと物を見とどける。

此二句、膚不撓、目不逃と語法を異にして、特に人の注意を引けり。

〔以一毫挫於人〕　少しでも人から侮辱をうけるなり。挫は折なり、辱と同意。以一毫挫於人とは人に挫めらるゝことが一毫の如く少しでもの意なり。

〔捷之於市朝〕　大勢の人中でむちうたれる。市朝は市中の朝なり。さばきをする所。

〔不受於褐寬博〕　褐寬博は、褐は毛布寬博はゆるやかに仕立てたる衣、賤者の服なり。故に賤者をいふ。不受とは、挫辱を受けぬなり。

〔褐夫〕　卽ち褐寬博なり。

〔無嚴諸侯〕　嚴はばかると訓す、諸侯だからとてはゞかり恐るべきものはない。

〔惡聲至〕　人から惡口をされる。

〔必反之〕　必ずそのしかへしをする

〔孟施舍之所養勇也〕　所養勇也とは勇を養ふ方法は、なり。所は所以と同意。

〔視不勝猶勝也〕　到底勝つ見込のない場合でも、勝つつもりでゐる。

〔量敵而後進、慮勝而後會云々〕 敵の力をはかりて後進み、大丈夫勝てると考へた上で會戰するのは敵の大軍を畏れる者である。

〔能爲必勝哉〕 きつと勝つかどうかはわからぬが。

〔孟施舍似曾子〕 孟施舍、必ずしも勝を求めず、己の懼れざる心を守るは、曾子の道の要領を得たるに似たり。

〔北宮黝似子夏〕 北宮黝、事々皆勝つことを求むるは、子夏道を知るの多きに似たり。

〔孟施舍守約也〕 守約とは守る所要を得たるなり。約は要なり。

案ずるに守約、諸本此の如し。然れども下文「孟施舍之守氣、又不如曾子之守約也」とあれば、この「守約」當に「守氣」に作るべきなり。氣は氣分なり、懼れざる氣性ないふ。

〔自反而不縮吾不惴焉〕 自ら反省して直くない所あれば相手をおそれる。

縮は直なり。禮記檀弓篇に「古者冠縮縫、今也衡縫」とあり。縮は縱なり、物縱にすれば直し。故に直の意となる。惴は心がびくびくするなり。

〔吾往矣〕 おそれず進んでゆく。

〔吾聞大勇於夫子〕 この夫子は孔子を指す。

〔不得於言求於心〕 相手の人の言に理解の出來ぬ所があつても、わが心に理解しようとつとめるなり強いて理解せんとすれば却つて心を動かすに至ればなり。言は相手の言、心は己の心なり。

〔不得於心勿求於氣〕 理性に訴へて己の心に不安のあるときに、氣分で之を判斷してはいかぬ。

〔志氣之帥也〕 志は心の之く所にして、或目的に向ふ心の作用卽ち意志、氣は氣分帥は元帥なり。

〔氣體之充也〕 氣分は肉體に充みてゐるものなり。

〔志至焉氣次焉〕 志がある目的地點へゆきつけば、氣分は之に帥ひられてそこ迄ゆきそこにおちつく。上の焉はある所。下の焉は上の焉をうく。次は舍なり、やどる落着く。

〔故曰持其志無暴其氣〕 元帥たるその志をしかと持つて、卽ち自らよくその心を反省して、徒に氣をして暴動させてはいけない。暴其氣とは、事の直不直を考へず、徒に喜怒の氣分を動かすことなり。暴は暴動なり。

故曰は孟子の平生の持論として、かく言つて居るといへるか、又は古語或は諺などにあつて一般によく人に知られたる辭を引き來つて、それだから、かくかく、いつてあるといふなり。

〔志壹則動氣〕 壹は專壹なり、志專壹なれば從つて氣を自由に動す。

〔氣壹則動志〕 氣が專壹に動けば、その帥たる志迄も動かす。

是れ「持其志」といひ更に「無暴其氣」と言へる所以なり。

〔夫蹶者趨者是氣也〕 あの蹶いとつて、はしつてるのは是れ氣の作用だ。者の字は俗語の的に當る。ことさらに二者の字を疊み用ひて語勢を急迫ならしむ。急迫の氣は一定の意志にても、抑へ止めかねるといふ。

〔夫子惡乎長〕 先生は告子に比してどういふ點でまさつてゐるのですか。

〔我知言〕 自分は他人の言論をきけば、一一理解することが出來る。卽ち智なり告子が不得於言勿求於心といへるに對して言ふ。

〔我善養吾浩然之氣〕 我が身體に充滿せる活力氣分に、意志の力で、道義的修養を加ふるなり。

〔難言〕 其の心に獨り得る所にして、形もなく、聲もなく未だ言語を以て形容し易からざるを云ふ。

〔至大〕 限量なきを云ふ。

〔至剛〕 屈撓すべからざるを云ふ。

〔塞于天地之間〕 天地間に充ち塞る程に發育する（卽ち至大至剛なり）

〔配義與道無是餒也〕 浩然之氣は正義公道と共に在るもので、正義公道が無ければ內容の無いものとなる。

義と道とは一物の兩面にして、上文の「直」なり。餒はうゑと訓す。

〔是集義所生者非我襲而取之也〕 この氣は義が集り合し積み重なれる中から自然と發生して來る者で、外にあるのを自分が俄に襲ひ取つて出來るものではない。我の字を通行本に義に作れるは非。

〔行有不慊於心〕 自ら內に省みて疚ましき所あるなり。卽ち不義を行はゞなり。

〔告子未嘗知義〕 告子は仁は內、義は外なりとなす故に義を知らずといへるなり。

〔有事焉〕 浩然の氣を養ふ事を常に心がけて居れ。

人は平生常に必ず自分の心中に、或る意識活動をして居なくてはいけぬ。茫然として暮して居てはならぬ。焉は我が心中を指す。

〔而勿正〕 正は預期なり、而勿正とはしかし、意識活動のあまり必ず或一事の成功を豫期してかゝるなとなり。以上二語は當し古語なり。

〔勿忘也、勿助長也〕 此二語は孟子が上の二語を解說せるなり。必有事とは心中に注意を怠つてはならぬといふことである。勿正とは助け長ずるといふことをしてはならぬといふことである。

〔無若宋人然〕 宋人のやつたあんなことをするな、（下文に逸ぶる如きあんなこと）宋人の行爲は古書に多く物笑の種子とせらる。

〔揠〕 ぬくと訓す、心を拔くこと、自分の方の苗か、他人の方の苗より早く成長せしめんとて、上に引き拔いて高からしむ。

〔芒芒然〕 こゝに病矣。疲れはてた貌、芒は茫と同じ。槁矣、寡矣と同じ句法を三度重ねて文勢をなせり。

〔其人〕 家人なり。

〔助長〕 「助成」とは異れるに近來往々助成の意に使用せる有るは誤れりと知るべし。助長は故意に人力を用ひて成長を助けるものにして善き意味に非ず。例へば幼稚園、小學等にて、むやみに開發主義を振り廻し

幼稚の者を直ぐ成人なみの者に作り上げんと浸持教員の努力するが如き、正にそれなり。

〔知言〕　前に我知言、我善養吾浩然之氣と二件を擧げ、先づその下句の方より說きて之より反りて上句を說くなり。言を知るとは凡そ言語の方法、性質、等に就いて言ふ。

〔詖辭知其所蔽〕　ねぢけた言論を聞けば、その人の心が他の物におほはれてゐることがわかる。詖辭に於ては我その云々の意なり。

〔淫辭知其所陷〕　度を過した言論を聞けば、その人の心が或る過に陷つてゐることがわかる。

〔邪辭知其所離〕　よこしまな言論を聞けば、その人の心が正しい道理に離れてゐることがわかる。

〔遁辭知其所窮〕　遁げ言葉を聞けば、その人の心が窮してゐることがわかる。

〔生於其心〕　蔽・陷・離・窮がその心中に生すればなり。其事、其政、其政を其事とあるも曬文公篇に照して見るに、政、事の二字互に錯置されたるを知るべし。（履軒說）

〔聖人復起必從吾言矣〕　不動心の論はこゝに終る。以下餘論。吾言に從はんとあるの吾言は前の「曰……」以下全部を指す。此等の言は皆、心の內部より外部の種々の形樣に發現したるものなることを示す。故に生於其心とある四字を以てこの一節の眼目とす。

〔宰我子貢云々〕　公孫丑の問なり。論語先進篇に「子曰、德行顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語宰我・子貢、政事冉有・季路、文學子游・子夏」

〔孔子兼之〕　孔子は言語德行ともに兼ねてすぐれてゐた。

〔說辭〕　說は理由を擧げて立說し又は遊說する等の事、辭は言辭にて概念や斷定を發表するもの。

〔辭命〕　言辭と敎命卽ち論理的思想發表の方法、主義及人を指敎し命令する方法。

〔然則夫子旣聖矣乎〕　孔子ですらも辭命の事は十分に出來ぬと言つてゐるに孟子は言を知るとまで言ふ。そんなら先生（孟子）はもう全く聖人でありませうか。

〔惡、是何言也〕　惡はひどく非とする情を表はす故に音は「ヲ」と云へど字は惡の字を用ふ。此の字の「亞」は上下より壓しつぶした鏡にて至つて容貌の醜きをあらはす。その「亞の心」を惡とせるなり。惡の一字、空に向つて一喝す。「是」は「そりや」なり。

〔問於孔子〕　孔子の方へ特に問ひかけるの意。故に「於」の字あり。

〔聖人之一體〕　一體は一肢なり身體の一部分をいふ。

〔具體而微〕　全體の各部分を具備して居れど小さい。

〔敢問所安〕　失禮ながらお尋ねするが、以上數子の內どちらに安んじ居られますか。

「安」は自ら許して落着き居ること。

〔姑舍之〕　その問はまあ〳〵やめておけ。（孟子、以上の數子を以て自ら處るを欲せざりしなり。）

〔伯夷〕　孤竹君の長子なり、弟叔齊と互に國を讓り、殷の紂王の暴虐を避けて隱居し、周の文王の德を聞きて之に歸す、武王の紂を伐つに及び又去りて首陽山に隱れ、遂に餓死す。

〔伊尹〕　有莘の處士なり、湯王聘して之を用ひ、之をして桀に就かしむ、桀用ふること能はず、復湯王に歸す、是の如くすること五度に及び、乃ち湯王を相けて桀を伐ち天下を一統す。

一說、趙岐の注によれば此の所の伊尹二字は後文に據り、後人が加へしならんと云ふ。

〔不同道〕　伯夷・伊尹らの兩人の道とも異れりの意。（孟子は孔子の道を道とするなり。）

〔非其君不事、非其民不使〕　仕進を輕々しくせざるをいふ。其君とは己の理想に合せる君なり。

〔何事非君〕　どんな君に事へても、事へてゐれば君になつてくる。君の善惡などはどうでもかまはぬ。

〔吾未能有行焉〕　焉は上の三人をうく。

〔乃所願則學孔子也〕　どちらかといへば自分の願ふ所は孔子を學ぶことだ。

〔若是班乎〕　そんなに似て居るか。

班は玉を刀で二つに割りたるもの、故に同等、並び似たものゝ意となる。

〔一不辜〕　一人の罪なき者。

〔汗不至阿其所好〕　たとひ三子誇大にいつても己の好む人に諂ふやうなことはない。汗は夸と通　大なり。故に此の三子の評語は信を取るに足る。因つて次にその評を擧げしなり。

〔予〕　宰我の名。

〔等〕　猶ほ品等と云ふが如し。等級をつけるなり。

〔丘垤〕　垤は蟻封なり。蟻の穴の上の土の堆きもの。

〔類〕　何れも民の類。

〔拔乎其萃〕　群り聚れる者に拔け出でたるなり。萃は聚なりこゝでは類を出たる諸聖人の、その萃よりも拔けるを云ふ。

練習

有獻不死之藥於荊王者。謁者操之以入。中射之士問曰、「可食乎」曰、「可」。因奪而食之。王大怒、使人殺中射之士。中射之士使人說王曰、「臣問謁者。曰可食。臣故食之。是臣無罪、罪在謁者也。且客獻不死之藥。臣食之而王殺臣。是死藥也。是客欺王也。夫殺無罪之臣而明人之欺王也、不如釋臣。」王乃不殺。

〔荊王〕　荊の王なり。荊は戰國の楚國のこと。

〔謁者〕　王に仕へてとりつぎを掌る官。

〔中射之士〕　射人の中に在る者、卽ち近衞兵なり。

〔不如釋臣〕　釋はゆるすと訓す。

可の兩義——可能と許可——との使ひ分けに注意。

この文は戰國策周策に出づ、戰國策については本巻考書九十七頁中段參照。

三八　漁父辭

要旨

屈原が忠貞の純情に共鳴せしむると共に辭の一體を知らしめ諷誦に資す。

作者

屈原名は平、原は其の字なり。戰國時代楚の同姓にして、懷王の左徒となり、甚だ重んぜらる。上官大夫なる者あり、屈原と列を同じうせしが、その能を妬み懷王に讒す。王之を信じ遂に屈原を追放す。原、放流せらると雖も、心故國を忘れず、王の不明にして邪曲の公正を害するを憤し終に汨羅に投じて死す。

題名

辭とは古代支那南方に發達せし律語の一體の名なり。賦が客觀的描寫を主とするに對し辭は主觀的描寫を主とす。漁父は隱遁者の名と見る說あれども、寧ろ漁夫（さかなとり）と解するの穩當なるに如かず。この篇、漁父の言に託して作られたる故漁父辭と名つく。

出所

楚辭は漢の劉向が、楚の屈原及其門下の作と、屈原の作に倣へる漢人の作とを輯めて命名せる總集なり。後世注家各〻意を以て其篇章を變置せしを以てその體例一ならず。坊間普通に行はるゝは後漢王逸の注せし十七卷本なり。

解釋

〔既放游於江潭〕　放は放逐。潭音シン（慣用音タン）水深き所。游は遊なり。江潭のほとりをさまよひしなり。

〔行吟澤畔〕　ぶら〳〵と岸邊に口すさんでゐた。

〔顏色憔悴〕　顏色がやつれてゐる。

〔形容枯槁〕　身體つきが痩せ衰へてゐる。枯・槁共に木のかれること。

〔三閭大夫〕　春秋の時、楚の官名。其の職は王族の三姓、昭・屈・景を掌る。離騷の序に「屈原與レ楚同姓、仕ニ於懷王一、爲ニ三閭大夫一。三閭之職、掌ニ王族三姓一、曰昭・屈・景。屈原序ニ其譜屬一、率ニ其賢良一、以厲ニ國士一」と見ゆ。

〔何故至於斯〕　なぜ、こんな所へやつて來たかとなり。「斯」は此と同じ。場所を指す。

〔舉世〕　「舉」は、ことごとくなり。舉世は天下の人悉く皆なり。下の衆人と對用せられ同意なり。

〔皆濁〕　滔々として利欲にはしり、正魂の地を拂へるをいふ。

〔清〕　己を潔くすること。卽ち潔白なり。

〔皆醉〕　醉は濁と同意。

〔獨醒〕　醒は清と同意。

〔是以見放〕　かく世人と異なるが故に放逐せられて此に至れりとなり。

この句は「何故至ニ於斯一」に應ず。

〔聖人不凝滯於物〕　聖人は變通自在にして物事にとらはれない。

〔與世推移〕　世俗に隨つて行動し、頑固でないこと。

〔何不淈其泥云々〕　何故に人並に泥水を立て、人並の波を揚げぬぞとなり。

二「其」字は「世人」をうく。淈はにごすと訓す。

〔何不餔其糟云々〕　何故に人と同じく糟を食ひ、うす酒をのんで自分も醉はぬぞとなり。

餔はすゝゐと訓す。醨は薄り、糟に水を混じたるうすい酒。

〔深思〕　君と民とを深く憂ふるなり。（上文の「凝滯於物」なり）

〔高舉〕　世人と歩調を合せず、獨りえらさうにする。

〔自令放爲〕　忠直に過ぎて、自ら放逐せらる、樣なことをするか。

〔新沐者必彈冠〕　今新に髮を洗ひし人は、必ず其の冠の塵を拂ふ。これ人情なりとの意。「沐」は髮を洗ふこと。

〔新浴者必振衣〕　「浴」は「ユアミ」なり。「振レ衣」は衣服の塵を振ふなり。

〔安能以身之察々云々〕　何ぞ潔白なる身を以て、汚辱を蒙ることをせんやとなり。察々は潔白なる鋭、汝々は不明、又けがらはしきこと。

〔鼓枻〕　枻は音エイ、かぢ、かい等舟をこぐ道具。鼓枻とは、かいなどで舟ばたをたたくなり。

〔滄浪之水清兮云々〕　滄浪の水清まば冠の紐を洗ふが宜しかるべく、濁らば足を洗ふが宜しからん。

かく四圍の事情によりこちらの行爲を變じ、世治らば出でて仕へ、亂れば退きて隱るべしとなり。

滄浪之水の歌は孟子離婁上篇にも引かれたり、但その意義は同じからず。

三九　賣花翁

要旨

此の詩は賣花翁を借りて、萬幅の感慨を吐露せし者なれば、經國の才を抱きて空しく死するは甚だ惜しむ可きなることを知らしむべし。但し、生徒をして誤つて、危險思想的に解せざらしむる樣、注意せらるべし。

作者

坂井虎山、名は公實、字は華、虎山は其の號なり。別に臥虎山と號す。安藝の人。幼にして儁異、十五歳の時、藩の學問所にて或る空室に入り、頻に春秋左氏傳を讀み、人を驚嘆せしめたりき。頼山陽は同郷の先輩にして、虎山より長ぜる十八歳なり。山陽京師より歸省せし時、虎山の作れる游湊辯記と題する一篇の文章を讀み、其の長進せるに驚けり。彼は少壯の時より、詩文を作るには一氣呵成にして、筆を下せば、立ちどころに數百千言となれり。其の學、洛閩に本づき、博くして、雜ならず。又講說を善くし、之を古今の治亂興敗に參し、極めて日用に切近なりき。嘉永三年九月六日歿す。年五十三。門人、私に謚して文成先生といふ。著はす所、杞國策、論語講義、詩文集あり。

題名

〔賣花翁〕　花を賣る翁。

押韻

便宜上解釋の部にて隨處に說明せり。

解釋

〔住在洛城東〕　みやこの東に住んでゐる。

「洛城」洛陽をいふ洛水の北にありて古都なり。日本にては京都のことをいふ。

〔竹扉……如蓬〕　彼の家の竹の扉は半ば破れ、頭髮は亂れて蓬のやうである。

「鬢」鬢毛。

以上、「東」「蓬」上聲一東の韻。

〔自少……七十〕　若い時分から花を栽培し始め、七十歳の今日に到つてゐる。

〔培養……法〕　かくて花を培養するに就ては、他とは異なり勝れた一家の法を傳へてゐる。

以上、「十」入聲十四緝の韻、「法」三十七洽の韻。共通なり。

〔栽花雖巧……生〕　花を栽培するのは巧みだが生計を立て計ることが下手である。

〔未免……行〕　それ故、かゝる老年になつても生計の爲めに、やはり、呼び賣りしながら行かねばならぬ。以上、「生」「行」下平八庚の韻。

〔日暮……歎息〕　日が暮れ、家に還つて我と我が身、歎息する。それは何故かといへば、次の如き理由で。

〔滿擔……直〕　擔へる限りの花代が、僅か一壘の酒の値段にさへ當らぬ。それで歎息するのである。

「滿擔」一杯滿つる程擔へる花。

「抵」あたる、當。「直」値と同じ。

〔辛苦……觀〕　辛苦して自ら栽培しながら、其の花を自分で觀て樂しまずに。「觀」次の句の「醉」に係るとみても可なり。賞翫して醉ひ樂しむないふ。

〔徒使……春色〕　徒に、他人をして我が栽培した花を眺めて春色に醉はしめる。

以上、「息」「色」入聲十三職の韻、「直」上聲四寘の韻なれど「職」韻に通用。

〔嗟呼……然〕　あゝ、世間の事は、大概皆左樣なものだ。此の賣花翁の事柄に似てゐる。

〔不須……憐〕　獨り此の賣花翁の爲にのみ憐む要はない。

〔蠶婦……漏〕　例へば、養蠶をする女自身には着物がなく、建築を仕事とする大工自身の家は、雨が漏り。

〔經國……問〕　（此の句は最も力强し。）國家を經綸することのできる有爲の才を抱く人が、時に遇はない爲に、草深い田舍に老死する。かやうな事は多い。世事皆賣花翁の樣なものである。誠に惜しみても餘あることだ。

以上、「然」「憐」下平一先の韻、「問」上聲十五翰の韻、共通なり。

教授上の參考

明の詩人高青邱に賣花翁の詩あり。

四〇 伯夷頌

要旨

三十九課と關聯し伯夷の高義淸節を評せし文を讀解せしむ。

題名

頌は文の一體なり。人の盛德を美するを以てその本質とす。

解釋

〔士之特立獨行云々〕 自己の信ずる所に從ひ、たゞ義に適つた行動をして、他人の批評などに耳をかさない士は、道を信ずること篤くよく自己を知れる豪傑である。特は、他と離れて別なること。特立は卽ち特別にひとり立つなり。特立獨行は、ひとり自己の信ずる所を遂行することなり。禮記儒行篇に「其特立獨行、有ニ如ニ此者一。」適はかなふと訓ず。能く適當すること。適ニ於義一とは正義に合するなり。

○以上第一段豪傑之士の本領を論じ一篇の大綱となす。

〔窮天地亙萬世而不顧者也〕 天地間のあらゆる人、すべての時代のあらゆる人から非難せられても顧みず所信を斷行した人である。窮天地は空間上の最大限。亙萬世は時間上の最大限。

一家――一國一州――皐世――窮天地亙萬世と次第にその程度を增す。不顧は人之是非を顧みざるなり。力行而不惑と同意にて第一行目の不ニ顧ニ人之是非一に應ず。

〔昭乎〕 日月の明かなる貌。昭然、昭々乎と同じ。韓詩外傳に「昭々乎若ニ日月之光明一、煌々乎若ニ星辰之錯行一。」

〔崒乎〕 崒は音シュツ、高くそびゆる貌。

〔泰山〕 山東省泰安縣の東北五十支那里に聳ゆる山。支那五岳の一にして東岳といひ、古は岱宗、岱山、東岱などと稱す。海拔五千尺あり。風俗通、山澤篇に「泰山、山貴者」といへり。古來、泰山を以て山の最も高くして尊きものと稱へ、種々の譬喩に用ふ。

〔巍乎〕 高く大なる貌。論語泰伯篇に「巍々乎、唯天爲レ大。」昭乎より不足容也までは、伯夷の信念の强さを譬喩を以て述べしまり。

○以上第二段伯夷最も大なる豪傑なるをいふ。

第二段は層一層その程度を進めて行く說き方なり。かゝる方法を修辭上漸層法と名づく。

〔微子〕 殷紂王の同母庶兄なり。諸父王子比干、箕子と共に三仁と稱せらる。紂、淫亂、數々諫めて用ひられず。遂に祭器を持ちて去り、祀を存す。史記殷本紀に「紂愈淫亂不レ止。微子數諫不レ聽。乃與ニ大師少師一謀遂去。」

〔祭器〕 祖先の祭祀に用ひる器具。史記殷本紀に「殷之大師少師乃持ニ其祭器一奔レ周。」とあり。

〔武王周公〕 武王は文王の子、名は發、立ちて十三年、殷を亡して周の第一世となる。周公は武王の弟、名は旦、武王を佐けて殷を亡し、曲阜に封ぜられて魯公と稱す。後、成王に攝政たり。

〔乃獨以爲不可〕 乃はかへつて、以は武王周公をば。

〔宗周〕 宗は本家のこと、轉じて主として尊ぶこと。

〔恥食其粟〕 周に仕へて其の祿を食まざる意。「粟」は穀物、ここは俸祿の意なり。

〔餓死而不顧〕 不顧は「不顧人之是非」なり。

〔夫豈有求而爲哉〕 名聲を博せんとして爲しゝに非ずの意。「適於義」に應ず。夫はソレと讀めば發語の辭、カレと讀めば彼と同用伯夷を指す。

〔信道篤而自知明也〕 本課第二行目の同語に應ず。

○以上第三段伯夷道を信ずること篤く自ら知ること明なるをいふ。

〔彼獨非聖人〕 彼は伯夷、聖人は武王周公を指す。

〔聖人乃萬世之標準也〕 聖人は萬代に亙りて模範となるものなりとの意。この句の次に然るに「彼は之を非とせり」といふ意味を加へて解せよ。

○以上第四段伯夷の特立獨行について說く。

〔雖然――接迹於後世〕 伯夷の特立獨行は、萬世の標準たる聖人の道には遠つて居るけれども、若し伯夷の事がなかつたときは、武王の紂を殺せしを口實として、君父を弑するものが後世に續々と起らん。然らば伯夷叔齊の人心世道を繫いだ手柄は大きい。「雖然」は萬世の標準たる聖人に背くとは云への義なり。

〔亂臣賊子〕 亂臣は君を弑したる臣、賊子は親を弑したる子。孟子、滕文公下に「孔子成ニ春秋一而亂臣賊子懼」とあり。

〔接迹於後世〕 後世引きつゞきて起らん。

○以上第五段伯夷の豪傑之士たる特質を明にしその功を頌す。本篇の主意茲に在り。

四一　聖之時者

要旨

孔子人格の最も偉大なる所以を知らしめんとす。

解釋

〔不視惡色〕　惡色とは非禮の色にて、行正しからざる美人等をいふ。不視と「視」字を用ひたるは、近づけてよく視る。卽ち愛寵せざる意なり。

〔不聽惡聲〕　惡聲とは非禮の聲にて淫猥な音樂等をいふ。「聽」字を用ひたること「視」字より推して知るべし。

〔非其君不事非其民不使〕　仕進が輕々しくせざるをいふ。其君とは己の理想に合せる君なり。

〔橫政之所出……坐於塗炭也〕　橫政とは橫暴にして道に合せざる政治なり。橫民とは法度に循はざる不良の民なり。鄉人とは鄉里の常人にて、不良には非ざるも、粗野なる人をいふ。塗炭とは泥と炭とにて、他を汚しやすきもの、意なり。如ㇾ以ㇾ朝冠坐ㇾ於塗炭ㇾ とは、朝儀に列する時の晴の衣冠を著けて、塗や炭の中に坐するが如くに唯其の己を汚さんことを恐るるなり。

伯夷は唯に仕進を輕々しくせざるのみならず、その居る所も、苟くもせず、實に潔癖なるをいへるなり。

〔頑夫廉〕　頑は鈍なり節操なきこと。廉は稜なり、節操のきびしきこと。

〔懦夫有立志〕　懦は奴隸切、音ダ、弱なり、懦夫はいくぢなしなり。有立志とはふるひたつなり。

以上伯夷の人物を寫す。

〔伊尹〕　三十七課浩然之氣參照。

〔曰天之生斯民也云々〕　伊尹曰なり。

〔先知〕　常人よりも先に道を知る人、先覺も同じ。

〔天民〕　天の生ずる民なり。天之生ㇾ斯民ㇾ也に應す。

〔此道〕　己の懷ける堯舜の道。

〔此民〕　天之生斯民也の斯民なり。

〔思天下之民……如己推而內之溝中〕　孟子が伊尹の心中を推して述べしなり。

匹夫匹婦は一夫一婦の義にて最下級の民をいふ、こゝは匹夫匹婦に至るまでもの意なり。

〔與被堯舜之澤〕　與被はアダカリカウムルと讀む、澤は恩澤德澤。

〔內之溝中〕　之は不與被堯舜之澤者をうく。內は納と同じ。

〔自任天下之重〕　天下といふ重きものを自分が背負うてゐる。

以上伊尹の人物を寫す。

〔柳下惠〕　本名展禽、一名獲、字は季、魯の人、柳下に居る、よりて號となす、惠は諡なり。

〔不羞汙君〕　行の汚れた君に事へることをも羞としない。

〔遺佚〕　放棄なり、君から放棄せらるゝなり、上句「進不隱賢……」の進に對す。

〔阨窮〕　阨は厄と同じ、困窮するなり。

〔與鄉人居由由然不忍去也〕　九七頁の「思與鄉人處云々」と對す。

由々然は滿足する貌、公孫丑篇に「由由焉、與ㇾ之偕而不ㇾ自失ㇾ」

〔爾爲爾我爲我……爾焉能浼我哉〕　柳下惠の語なり。公孫丑上篇にはこの文の上に故曰の二字あり。

爾爲爾我爲我とは、爾は爾、我は我、全然別のものだから、爾のすることは我と關係無しとの意。

「袒裼」とは上衣を脫して臂を露すこと、卽ちはだぬぐこと、「裸程」とは全衣を脫して身を露はすことにて、卽ちはだかになること、背無作法なる行爲なり。

爾焉能浼我哉は上文の「爾爲爾、我爲我」の意にて非禮なるは汝にあり、これによつて毫末も我を汚すこと能はずとなり。浼はけがすと訓ず。

〔鄙夫寬〕　度量の狹きものも、化ぜられて寬大となるとの意。鄙は狹陋なり。

〔薄夫敦〕　薄情なるものも、敦厚となるとの意。

以上柳下惠の人物を寫す。

〔接淅〕　かしよれを手にすくふ。接は米を水中よりすくひとるなり。淅は音セキ、水に漬せる米なり。米を漬して將に炊がんとす、而して速に去らんと欲ぜし事の生ぜしが故に、炊ぐ暇なく手を以て水中の米をすくひ取りて行くなり。

〔遲遲吾行〕　孔子自らその途上の情を云ひしなり。詩經邶風谷風篇に「行ㇾ道遲遲、中心有ㇾ違」

〔去父母國之道〕　孔子がかく遲々たりし所以の者は、故國を離れ遠ざかるの道情義に於て然らざるを得ざりしなりと、孟子が說明を加へしなり。

〔可以速而速〕　或る國を速に去るべき場合には速に去るとの意。

〔可以久而久〕　或る國に久しく留まるべき場合には留るとなり。

〔處〕　仕へずして野に處るなり。

〔仕〕　出でて仕ふるなり。「速・久・處・止」の四つは、孔子の出處進退の宜しきにかなへるを云へるなり。

以上孔子の人物を寫す。

以下更に孟子曰と起して四人を併せ評し、主きは孔子に歸す。

〔聖之淸者也〕　聖は聖人、淸は節操高潔にして些の汚點なきなり。伯夷は聖人の淸の方面を代表する人なり聖の全體を得たる人に非ずとの意。

〔任〕　天下の重きを一身に荷ふこと。

〔和〕　寬にして衆を容れ、和ぎ樂しみて些

の人と異なる所なきなり。

〔時〕 中正にして出處進退其の時のよろしきに當るなり。

〔孔子之謂集大成〕 伯夷、伊尹、柳下惠三人は聖人の域にいらざるに非るも、その德なほ偏する所あり、孔子のみ三聖の德を一身に集めて一大聖人たりとの意。

〔金聲而玉振之〕 金は鐘の屬、聲は宣玉は磬、振は收なり、八音合奏の時先づ金鐘を以て宣べ、終りて玉磬を以て收むるなり、こは孔子の人格たば音樂の合奏に喩へしなり。

〔金聲也者始條理也〕 金聲すとは（卽ち金鐘を以て聲を宣ぶるとは）衆音が起すことである。

條理は衆音亂れず條理あり脈絡あるをいふ。

〔玉振之也者終條理也〕 終條理とは衆音を總合して一段の音樂を成し終るなり。

〔始條理者智之事也〕 音樂をはじめることはいはゞ事を創造するにて、智者の事に屬すべし、總合大成する事とは差あり。伯夷、伊尹、柳下惠はこの部に屬す。

〔終條理者聖之事也〕 條理を終るは、全體を總合することにて、智のみにてはなし能はず、智の外に仁德を備へたる聖人の成し得る事なり。孔子は是なり。

〔智譬則巧也云々〕 以下更に射を以て喩ふるなり。

巧は特殊の技巧なり、智はたとへば射の特殊の技巧のやうなものだとなり。

〔聖譬則力也〕 聖は智だけの偏したるものに非ずして完全なる全體的人格なれば、たとへば全身の力のやうなものだとなり。

〔其至爾力也其中非爾力也〕 其至は射の矢が的に達すること。二の爾は伯夷、伊尹、柳下惠を指す。非爾力とは技巧によるとなり。

伯夷等三人の力は矢を的に達せしむるに足る（卽ち聖を以て許さるゝに足る）然れども三人の力は常には正しく的に中つる能はず、時には中れどもそは力によるに非ず。技巧を以て中つるなり。（卽ち三人は聖の時たる能はずして唯清たり、任たり、和たるにとゞまるとなり）

孔子は聖の全體力を有して必ず常に時中し得。

備考

この章は公孫丑上篇末章と參觀すべし。

四二　此之謂大丈夫

要旨

大丈夫の本領を知らしむ。

解釋

〔景春〕 孟子の時の人にして縱橫の術をなせる者傳未詳。

〔公孫衍〕 戰國、魏の人、號して犀首となす。常に五國の相印を帶びて縱の長となれり。秦王の孫なるを以て公孫といふ。

〔張儀〕 戰國、魏の人、鬼谷子に學び、遊說を以て名を顯はす。楚の相、誣うるに金を盜むを以てす。鞭打たれて歸り、その妻に謂ひて曰く、吾が舌を視よなほありや否やと、妻曰くありと、曰く舌あらば足ると、その說ける遠衡の術行はれて秦の相となる。

〔一怒而諸侯懼〕 公孫衍、張儀等一たび怒れば諸侯を懼へて、強をして弱を攻めしむ、故に懼といへるなり。

〔安居而天下熄〕 二人安居して遊說せずば、天下事やみて、人々安心す。熄はやむと訓ず、もと火の滅する意、轉じて事のやむこと。一說熄は息なり、天下の人々安息すと解す。やすむ、又はいこふと訓ず。意林、孟子の此文を引きて息に作れり。この二句にて公孫衍張儀の當時に於ける勢力をみるべし。

〔丈夫之冠也父命之〕 男子が元服の禮を行ふ時は、父親が之を指圖する。

この句は次の句に對する副なり。

〔女子之嫁也母命之〕 この句が主なり。以下、これに關して述ぶ。

〔往送之門戒之〕 出發にあたり。母親が門まで見送り、くれぐれも注意を與ふるなり往は旗が往かんとするに方りの意なり。

〔往之女家必敬必戒無違夫子〕 女家とは嫁入先をいふ。夫子はあの人、夫をいふ。無違夫子とは夫の命に違ふなく、よく柔順なるべしとなり。

〔以順爲正者妾婦之道也〕 公孫衍、張儀共に時君の意に迎合して縱橫の術を說くのみにて、一も義を以て君を匡すこと能はず。そは恰も妾婦の夫に迎合して、たゞ違はざらんことをこれつとむるが如し。故に孟子この言あるなり。

〔居天下之廣居〕 仁を行ふこと。廣居は廣き所、仁をいふ。よく仁德を體せばよく物を容るゝが故にこれ廣居なり。

〔立天下之正位〕 禮を行ふこと。正位は正しき位置、禮をいふ。人よく禮を行はゞその身中正にして偏邪なきが故にこれを正

位といふ。

〔行天下之大道〕　義を行ふこと、大道は義なり、義に從ふ時は、その心公平にして、ふさがりさはる所なければ、之を大道といへるなり。
行はゆくと讀む大道を歩行するなり。上句居・立と對して皆身體の動作にたとふ。おこなふと讀むは宜しからず。

〔得志與民由之〕　志を得て位置を得ば民と共にこの仁禮義に從ひ行ふ。

〔不得志獨行其道〕　其道は仁禮義なり、志を得ずば己獨り之を行ふなり。

〔富貴不能淫〕　淫とは其心をとろかし亂すなり。

〔貧賤不能移〕　移とは其節操を變ぜしむるなり。

〔威武不能屈〕　屈とは其志を挫くなり。

四三　留侯論

要旨

論文の命意結構を知らしめ、從つて着眼點の重要なる所以を悟らしめ、且つ東坡の留侯論を味はしむ。

作者

蘇東坡　十一課參看。

出典

文章軌範　七課參看。

段落

第一段　豪傑、大勇者の意義を說きて、留侯を論ずるの準備とす。
第二段　圯上老人の何物なるかを說きて、後段の論旨に信を措かしむる素地とす。
第三段　圯上の事は、夫の老人が子房の匹夫の勇を抑へて、能く忍ばしめ、眞の豪傑たらしめしものなることを縱橫に論破す。本論の要旨は此の一段にあり。（山陽曰く、且其意不レ在レ書、纔一語、便入ニ韓亡秦盛當時大勢。才大、氣豪、觀レ此可レ見。自レ是一瀉說下。至ニ秦皇不レ能レ驚、項籍所レ不レ能レ怒也、不レ可ニ段落一云々。）
第四段　高祖の能く忍び、大業を成しゝは、子房の輔導によることを述べて、篇を結ぶ。（山陽曰く、引入ニ史公語一、翻案生レ色。一結悠然。）
第五段　餘波として、子房の狀貌、一般の豪傑と異なることを述べて、篇を結ぶ。（山陽曰く、結、極奇而冷。）
王闓修云く、結、極奇而冷。）

解釋

〔過人之節〕　一般の人より拔け出づる所の氣性なり。

〔人情有ニ所レ不レ能レ忍者一〕　普通の人情として忍び難きことを忍ぶ所あり。

〔匹夫〕　普通一般の人の意。東坡の荀卿論に、「匹夫匹婦之所ニ共知一」の語あり、左傳桓公十年に、「匹夫無レ罪」とあり。

〔挺身〕　「挺」は音「テイ」、「ヌキンズ」と

訓す。衆に先立ちぬきんづるをいふ。

〔卒然〕「にはかに」の意。卒は猝に同じ、急遽なり。

〔加之〕無禮を之に加ふるなり。

〔其所挾持〕其の心中に抱持する所の理想なり。

〔子房〕留侯張良の字。

〔圯上之老人〕「圯」は橋なり、說文に「東楚謂橋爲比。」廣韻に「圯、土橋名。」又史記留侯世家の文、李奇の註に「下邳人謂橋爲圯。」「圯」は別字。毀に通ず。老人は黃石公を指す。（教授上の參考の條參看）

〔隱君子〕世間を避けて、獨り其の德を修め、ことさらに名を世に揚ぐるを厭ふ人をいふ。

〔觀其所以微見其意者云々〕「其所以微見其意」とは、老人が張良に、長者に對する作法を諭し、ことを指す。老人が張良に諭し、言の如きは、古來聖賢の教訓することにて、少しも不思議にあらず、となり。

〔以爲鬼物〕怪物なりと思ふこと。史記、留侯贊に、「太史公曰、學者多言無鬼神、然言有物。至如留侯所見老父予書、亦可怪矣。」とあり。蘇東坡は其の妄なを辨ぜしなり。

〔其意不在書〕老人が子房を教へんとする目的は、書物を授くるにあらずして、他に有り、となり。そは後段に說く所の如し。

〔刀鋸鼎鑊〕刀は割く刑、鋸は刖る刑、鼎鑊は釜いりの刑なり。

〔待天下之士〕天下の士を待遇するに、高位厚祿を以てせず、知つて之を疑ひて、刑罰の具を以て臨むなり。

〔夷滅〕たひらげほろぼす。誅滅。支那には一人罪あれば其の親族を皆誅するの刑あり。これを夷といふ。「夷三族」「夷九族」この如き、是なり。

〔雖有賁育無所得施〕古の孟賁・夏育の如き勇者と雖も、勇力の施し方なからん、となり。孟子滕に、「帝王世紀云、秦武王好多力之人、齊孟賁之徒、並歸焉。孟賁生拔牛角」とあり。史記、范雎傳に、「成荊・孟賁・王慶忌・夏育之勇而死。」注に、「夏育衞人、力舉千斤。」とあり。

〔夫持法—未可乘〕法刑を嚴急に利用するものは、有無を言はせず、疑はしきものを處分するゆゑ、其の鋒鋒當るべからず、且其の警戒嚴重なる形勢に對しては、乘じて擊つべき隙なし、となり。

〔匹夫之力〕向ふ見ずの勇氣をいふ。孟子、梁惠王篇に、「夫撫劍疾視曰、彼惡敢當我哉。此匹夫之勇、敵一人者也。」

〔逞於一擊之間〕逞は目的を遂するをいふ。

〔其間不能容髮〕生死の境の、髮一筋を容るる隙間もなき程にて、非常にきはどきをいふ。枚乘諫吳王書に、「繫絕於天不可復結。墜入深淵雖以復出。其出不出、間不容髮。」

〔千金之子—不死足以死也〕富豪の子は盜賊の手に死せず、何となれば、其の身命は最も大切にして、盜賊などを相手にして殺さるるは馬鹿らしければ、多少の錢穀は與ふるとも、其の難を免るるなり。

〔蓋世之才〕この世をおほひかぶする程の大なる才。項羽の垓下の歌に、「力拔山兮、氣蓋世、云云。」

〔伊尹太公之謀〕伊尹は殷の湯王に相として、夏桀を伐ち、太公望は周の武王を輔けて、殷紂を伐つ。共に萬全の計により、堂々の陣を張りて、敵に對し之を滅せり。

〔荊軻〕戰國の末、燕王喜の太子丹、秦に質たりしが、秦王政の無禮を怒りて、逃歸り、之に報いんと欲す。衞人荊軻の俠名を聞き、禮を厚うして之を招き、裝遣す。軻計を以て秦王に見え、之を刺さんとして果さず。遂に殺さる。卷三、三十二課參看。

〔聶政〕周の安王五年、（皇紀二六四年）韓政、韓の相俠累を殺す。初め濮陽の嚴仲子、韓の哀公に事ふ。韓の相俠累と郤あり。誅を恐れて、亡げ去り、人の以て俠累に報ゆべきものを求む。齊人聶政の勇を聞き、黃金百鎰を以て、政が母の壽をなし、因て以て讐に報いんと欲す。政曰く、老母あり、政が身未だ以て人に許すべからずと。母卒するに及び、政往きて仲子を見る。仲子、累を刺さしむ。累方に府に坐す。兵衞甚だ嚴なり。政直に入つて之を刺す。因て自ら面を皮はぎ、眼を抉り、腸を屠つて死す。其の姊の從來して死せんことを恐れてなり。

〔僥倖於不死〕危險なることをしながら、まぐれあたりに、死を免れんことを希望するなり。僥倖は僥に「コボレザイハヒ」といふ。まぐれあたりなり。

〔鮮膜〕鮮は少なり、膜は厚なり。厚きこと少し、即ち輕蔑又は無禮の意。一說に、輕薄なり。

〔彼其能有所忍也云々〕老人が傲慢無禮を以て、故らに試みしに、子房は能くこれを忍べり。斯くてこそ大事を成就すべけれ、となり。

〔鄭伯肉袒牽羊以迎〕周の定王十年、（皇紀六四年）楚の莊王、鄭を圍むこと十旬、これに克つ。鄭の襄公肉袒し、羊を牽きて以て降る。莊王、鄭伯の能く人に下るを以て、師を退くる數里にして、之に和を許す。此の事、左傳宣公十二年に詳なり。肉袒して羊を牽けるは、服して臣僕となることを示す。鄭は伯爵の國なり。故に鄭伯といふ。

〔必能信用其民〕必ず誠信以て其の國の民を用ふるならん、となり。

〔舍〕「ユルス」と訓ず、捨て放つなり。

〔臣妾於吳者三年〕越王勾踐、夫椒に吳王夫差のために敗るゝや、身は臣となり、妻は妾とならんことを請ひて漸くに釋され、國に歸る、其の間三年なり。陳鱣曰く、「按吳越春秋、吳敗越罷歸。勾踐與妻入臣于吳。留之隘三年。乃行賂、始得釋歸。歸而苦身、修政、求報于吳。史記不言是。前書晚出。史遷不反見耳。」と。

〔平生之素〕舊より相識るをいふ。「素」は平素からの馴染といふが如し。

〔僕妾之役〕下僕婢妾の下賤の類のすべきこと。靴を拾ひ來つて跪きて之をさゝげしめたるなさす。

〔油然〕おだやかに落ち着きたる樣。

〔秦皇之所不能驚、而項籍之所不

能レ怒〕　僕妾の役を命ぜらるゝも、落ち着きはらひて、怪しまざる所より見れば、始皇の凶威にも驚かず、項羽の暴慢をも怒らず、遠大の目的に向つて進むこと明かなり、となり。或は曰く、「驚」は「衆」に作らされば、意通ぜずと。

〔輕用二其鋒一〕　何等の思慮もなく、輕卒に戰爭するなり。

〔養二其全鋒一而待二其弊一〕　高祖は其の兵食が充實し、其の實力が養ひて滿を持し、項羽の疲弊するを待ちしなり。

〔淮陰破レ齊〕　淮陰は淮陰侯韓信なり。當時、もとの六國の裔、各〻其の故地に據りて王と稱し、項羽に屬せしかば、韓信は魏・趙を攻め破り、燕を降し、更に齊を攻めて之を破り、其の地を定む。

〔見二於辭色一〕　辭は言辭、色は顏色なり。「見」は「現」に通ず。

〔非二子房一其誰全レ之〕　子房にあらざれば、高祖の忍ぶ能はざる所を諫め、其の事業を全うする能はざりしならん、となり。

〔太史公疑二子房一云々〕　司馬遷が史記留侯世家の贊に於て、子房を疑ひて曰く、「余以爲其人計魁梧奇偉、至レ見二其圖一狀貌如二婦人好女一。」といへり。嗚呼、其の狀貌と志氣と釣合はざりし所が、卽ち子房の特色にして、他の英雄と異なる所以なるか、との意なり。

「魁梧奇偉」は、身體偉大にして卓異なるをいふ。

教授上の參考

(一)名家の評一二を左に錄す。

謝疊山評　主意謂、子房本大勇之人。唯年少氣剛、不レ能二涵養忍耐一以就二大功名一。如二用二力士一提二鐵槌一擊二秦始皇一之類一、皆不レ能レ忍。老父之二圯上一、始命レ之、取レ履、納レ履、復與レ之期二五更相會一、數怒罵レ之。正所レ以折二其不レ能レ忍之氣一、教レ之以能忍一也。

沈歸愚評　老人教二子房一以二能忍一是正義。子房又教二高祖一能忍一是餘意。作レ文必如レ此推論。

(二)史記の留侯世家の條を參考の爲め摘記せん。

留侯張良者、其先韓人也。大父開地、相二韓昭侯・宣惠王・襄哀王一。父平、相二釐王・悼惠王一。悼惠王二十三年、平卒。卒二十歲、秦滅レ韓。良年少未レ宦二事韓一。韓破、良家僮三百人。弟死不レ葬。悉以二家財一求レ客、刺二秦王一、爲レ韓報レ仇。以二大父父五世相レ韓故一。良嘗學二禮淮陽一。東見二倉海君一得二力士一、爲二鐵椎一重百二十斤。秦皇帝東游、良與レ客狙擊二秦皇帝一。誤中二副車一。秦皇帝大怒、大索二天下一求レ賊甚急。爲二張良一故也。良乃更二名姓一亡匿下邳。良嘗閒從容、步游二下邳圯上一。有二一老父一、衣レ褐至二良所一、直墮二其履圯下一。顧謂レ良曰、「孺子下取レ履。」良愕然。欲レ毆レ之。爲二其老一、彊忍、下取レ履。父曰、「履レ我。」良爲二取レ履。因長跪履レ之。父以レ足受、笑而去。良殊大驚、隨目レ之。父去里所、復還、曰、「孺子可レ教矣。後五日平明、與レ我會レ此。」良因怪レ之、跪曰、「諾。」五日平明良往。父已先在。怒曰、「與二老人一期、後何也。」去。曰、「後五日早會。」五日雞鳴良往。父又先在。復怒曰、「後何也。」去。曰、「後五日復早來。」五日、良夜未レ半往。有レ頃、父亦來。喜曰、「當レ如レ是。」出二一編書一曰、「讀レ此則爲二王者師一矣。後十年興。十三年、濟北穀城山下黃石、卽我矣。」遂去無二他言一。不二復見一。旦日視二其書一、乃太公兵法也。良因異レ之、常習誦讀之。

四四　博浪沙

〔要旨〕

前課に因み、張子房の膽勇を詠ぜし詩を授く。

〔作者〕

陳孚　字は剛中、台州臨海の人。曾て安南に使し、書を致して安南の官人の無禮を責む、辭氣直壯なり。還りて翰林待制に除せらる。尋いで疾を以て家に卒す。海臨郡公に追封し、文惠と謚す。孚天材人に過ぎ、性任俠不羈。其の詩文を爲る、大抵意に任せて成り、雕琢を事とせず。文集あり、世に行はる。

〔押韻〕

七言絶句、平聲二篇の韻、搖・銷。

〔題名〕

博浪沙　河原の名、今の河南省懷慶府陽武縣にあり。秦の國家は已に動搖し始めたり。

〔解釋〕

〔一擊車中膽氣豪〕　博浪沙に於て車中の秦の始皇を一擊のもとに椎せんとしたる子房の膽氣には豪なるものあり。刺客滄海公を得て鐵椎百二十斤以て要擊せしなり。

〔祖龍社稷已驚搖〕　鐵椎は副車に中りて其の志は成らざりしも、其の事たる、すでに始皇の天下をして驚駭せしめ、爲めに「祖龍」の祖は始、龍は人君の象、秦の始皇の異稱。史記、始皇本紀に、「今年祖龍死。」「社稷」の社は土の神、稷は穀の神、國は土穀に資りて以て人を養ふ、故に立てゝ之を祀る。轉じて國家の義とす。孝經に、「保二其社稷一而和二其民人一。」

〔如何十二金人外、猶有二人間鐵未銷一〕　天下の兵器を悉く收めて十二の金人を作り、以て己を害する者無からしめしが、猶人間には銷する能はざる鐵卽ち子房の如きものあるを如何ともするなかりしなり。「十二金人」は、史記、秦始皇本紀に、「收二天下兵一、聚二之咸陽一、銷以爲二鍾鐻金人十二一。重、各千石。置二廷宮中一。」と。「鐵未銷」の鐵は、天下の兵器を以て鑄し十二金人の外の人間の鐵なり、張子房をいふ。人間の豪氣は鐵椎となりてあらはれたるなり。「銷」はとかすなり。

四五　經下邳圯橋懐張子房

要旨

前々課に關聯して李太白の詩を授け、張子房の英懐を偲ばしめ、諷誦の資たらしむ。

作者

李太白　二課參看。

出典

唐詩選　四課參看。

題名

下邳、縣名なり、今の江蘇省徐州府邳州なり。

圯橋、說文に「東楚謂橋爲圯。」、共に「はし」なり。廣韻に「圯、土橋名」、史記留侯世家の文、李奇の註に「下邳人謂橋爲圯。」因に圯とは別字。圯は毀に通ず。

張子房　姓は張、名は良、子房は字、韓の人。韓の宰相と爲ること五世、子房の時、韓は秦のために亡さる、子房の志、韓の爲め秦を擊つに汲汲たりしなり。

押韻

五言古詩、平聲六麻韻、家・沙。上聲一董韻、動。上聲二腫韻、腫。（一董、二腫は通韻）平聲一東韻、風・公・空。

解釋

〔子房未虎嘯破產不爲家〕　子房の未だ爲すあらざる時、家財を散じて天下の豪傑と交を結び、家事を治めざりき。

「未虎嘯」、晉の王褒の聖主得賢臣頌に、「虎嘯風冽」とあり、虎は臣に喩へ、風は君に喩ふ。子房が韓敗れて浪々の身爲す能はざる時をいふ。

「破產」は、字の如く家財を散じて天下の豪傑と交はるなり。

「不爲家」の爲は「なさむ」の意。韓の爲め

歸を報ぜんがために家事の如きは顧み惜しまざりしなり。

〔滄海得壯士椎秦博浪沙〕　滄海に刺客を得て、鐵椎を以て秦皇を博浪沙に於て擊ちしなり。（前課參看）

「滄海」は地名。此の地にて一壯士、卽ち刺客滄海公を得たるなり。

「椎秦」、椎は鐵椎、重さ百二十斤。之を以て山上より秦の始皇の車を擊ちしなり。

「博浪沙」は河原の名、今の河南省懐慶府陽武縣にあり。

〔報韓雖不成天地皆震動〕　韓の爲めに讐を報じて成就せず、卽ち始皇を殺し得ざりしも、其の膽氣には天地悉く震動せしなり。「報韓」は韓の國恩に報ゆる意。「報復」の「報」に非ず。

史記留侯世家に、「報仇強秦天下振動。」とあり。

〔潛匿遊下邳豈曰非智勇〕　遁れて下邳に隱れ遊ぶ。豈豈下皆しの譬にもれず、索めて知るに由なし。まことに子房が智勇には測り知れざるものあるなり。博浪沙の一擊は勇、下邳の潛匿は智なり。

「匿」は音「ゲヨク」、又音「トク」。

〔我來圯橋上懐古欽英風〕　我今此の有名なる橋上に來りて、秦末の事を追懐し、英雄子房の威風を欽慕するの情に堪へざるなり。

「懐古」、李太白の唐代より秦末漢初を見れば八九百年を隔つるなり。

〔唯見碧流水曾無黃石公〕　黃石公は子房のために此の圯上に於て兵法を授けたり。而も今日は黃石公も無く、子房亦無く、唯水流のみ潺々たるあり。「碧流水」は一に「碧水流」に作る。

〔歎息此人去蕭條徐泗空〕　子房此の人已に無く、黃石・澳高も亦なく、邳州の地唯蕭條、無情の流水あるのみと歎息するなり。

「蕭條」は、さびしきさま、喧雜ならざるなり。

前に「無黃石公」といひて子房なきを言はず、茲には「此人去」と子房のみ去るといひて黃石公なきを言はず、其の妙を知るべし。

「徐泗」は、徐州を流るゝ泗水なり。頭注にいづれも川の名とあるは誤につき訂正ありたし。泗水は泗河とも云ひ、山東省泗水縣より江蘇省（徐海道）沛縣・銅山縣等を經、東南流し淮河に入る、卽ち下流大運河の一部に當る。

四六　上樂翁公書

要旨

上書の一體を讀解せしむると共に、山陽の日本外史撰著の目的抱負を知らしむ。

題名

上書は文體の名なり。秦以前、下より天子に奉りて意を陳ぶるを皆上書と稱せしが、秦の世之を奏と稱し、漢以後、表・奏・疏・議・上書、封事等の異名を生ぜしも、その實は皆一類にして古の所謂上書の範圍を出でず。而して唐宋に至りては上書の名は天子以外に執政大臣に致すものをも包含することゝなれり。山陽のこの上書は唐宋の上書體に倣へるものにて、特に宋蘇轍の上＝樞密韓太尉＝書に負ふ所大なるものの如し。

解釋

〔布衣〕　布衣は庶人の服なり、古、庶人は老人以外は絹を用ひず故に官位なき庶人をいふ。史記、田單傳「王蠋布衣也」

〔少將樂翁公〕　少將は近衛少將の略。樂翁とは陸奥白河の城主松平定信隱退後の號なり。

〔閣下〕　貴人の姓名の下に添ふる敬語、閣は大門の傍に在る小門、貴人の門皆閣の設あり。或はいふ閣下は閣下の誤れるものなりと。

〔蘇轍〕　字は子由、潁濱と號し、又潁城と號す。蘇洵の次子、軾の弟なり。十九歲の時、兄とともに進士に登第し、累遷して翰林學士門下侍郎となる。崇寧中致仕して室を許州に築き、專ら經史子類を研究す。その爲人沈靜高潔、文その人の如し、唐宋八家の一人なり。

〔韓魏公〕　名は、琦、魏國公に封ぜらる。詳細は本參考書五〇頁中段を見よ。蘇轍の韓魏公に上りし書とは唐宋八大家文讀本卷廿六に收められたる「上＝樞密韓太尉＝書」のことなり。

〔有求而自售〕　官を得んとして自分の才能を賣る。售は音シウ、うると訓ず。

〔澹泊〕　淡泊と同じ、私慾なくあつさりして居ること。

〔當路秉權〕　官の要路にありて政權を執ることなり。秉はとると訓ず。字、手に禾を持ち居る構成なり。當路は孟子公孫丑上「夫子當＝路於齊＝管仲晏子之功可＝復許＝乎」

〔閣下今代之魏公也〕　樂翁公嘗て幕府の老中となり、名聲一世に高し、その憂世の性亦魏公と似たり、故にいふ。

〔勇退高蹈〕　勇退とはいさぎよく官を退くこと、高蹈とは世俗をはなれて隱居すること。

〔貴賤懸絕不啻如轍於魏公〕　私と閣下との身分のかけへだたつてゐることは蘇轍の魏公に於ける差よりももつとひどい。

〔則徒仰而心嚮之而已〕　そんなわけだから、たゞ心中ひそかにお慕ひ申して居るだけであつて書を上ることもようしなかつた。

〔尊嫡君侯〕　御家督の殿樣。樂翁公の嗣子定永侯をいふ。

〔膺幕命入朝謝大拜之恩〕　幕府の命をうけて朝廷に參內し將軍家齊の太政大臣に拜せられた御禮を申上げた。膺はうくと訓ず、あたると訓ずるも同意。書經、武成篇「誕膺＝天命＝」入朝は京都の朝廷に參內せしことをいふ。大拜とは文政十年二月將軍家齊太政大臣に任ぜられしことをいふ。

〔伏在草莽〕　仕官せずして田舍にうもれてゐる。（時に山陽京都にありしなり）

〔邸吏〕　お屋敷のお役人、樂翁公の家來をいふ。

〔來就襄家〕　私の家までお出で下されて定永侯入洛の際松平家の家臣が山陽の家をたづねしなり。

〔私史〕　私に作れる歷史（官撰の史に對していふ）こゝは日本外史を指す。

〔愧悚交至〕　餘りにれんごろなおとりなしに對し、はづかしさとおそれ多さとが交々胸中に往來したとなり。悚は懼なり。

〔夫襄不敢求於閣下而閣下求於襄〕　上文「徒仰而心嚮之而已」と照してみよ。

〔接謦欬〕　人に接することを謙遜していふなり、謦も欬もせきばらひなり、欬は咳と同じ。

〔詞命〕　おことば、おほせごと。

〔亦可以自壯〕　まだ御目にかゝることは出來ないがおほせごとを頂戴しただけでも、非常に元氣が出る。

〔蕪穢〕　雜草のしげれることなるが、こゝは日本外史のつまらぬものなることをいふ。

〔下執事〕　執事は貴人に仕へてその家政を掌るもの。下執事といひしは、上執事に奉る程のものではないから、下執事にあげると謙遜せしなり。

〔瀆告〕　お耳をけがす。長者に申上ぐること。瀆は、けがすこと。

〔史遷〕　漢武帝の太史公司馬遷なり、史記を撰す。史遷文とは史記を指す。

〔古史〕　宋蘇轍撰、七本紀、十六世家、卅七列傳すべて六十卷、伏犧より秦始皇に至る。轍、史記の疏略にして聖賢の意を得ざるを病ひて之を改修してこの書をなす。然れどもその文は史記に及ばざること遠し。

〔總領〕　すべてを領有すること。

〔寒陋一書生〕　貧しく賤しき一學生。寒は貧乏なり。

〔不自揣〕　自分の力をかんがへず。身の程を知らず。揣ははかると訓ず。

〔招大方嗤笑〕　識者のもの笑となるなり。大方は識者・賢者の意オホカタと讀むべからず。莊子、秋水篇「河伯自言、嘗見レ笑二於大方之家一。」

〔少小〕　若きこと、老大に對す。唐賀知章回鄉偶書の詩「少小離レ鄉老大回、鄉音無レ改鬢毛摧」

〔國乘〕　國史、日本の歴史なり。乘は事物を書き乘せたものの意にて歴史をいふ、孟子、離婁篇「晉之乘」

〔常藩史〕　常は常陸、常藩は、水戸藩。常藩史とは水戸藩にて編修せし大日本史をいふなり。

〔浩穰〕　浩は大、穰は物事の多く盛なること。こゝの浩穰は大日本史の量の多きをいふなり。

〔先輩撰著〕　中井積善の逸史、安積覺の列祖成績などをいふ。

〔遷史世家〕　司馬遷の史記は、本紀・表・書・世家・列傳より成る、世家には諸侯の沿革を記す。世家とは世世祿秩ある家の意なり。

〔斷自源平氏至於今代〕　日本の長い歴史の内、源平時代から切りとつてそこからはじめ、徳川時代までの各家について書くことなり。（源・平・北條・新田・足利・織田・豐臣・德川の各家なり）

〔中興諸將〕　建武中興の際勤王に從事せし諸將、卽ち楠木・北畠・名和・菊地・土居・得能等。

〔割據群雄〕　戰國時代、一地方に割據して勢力を有せし英雄たち。卽ち後北條・武田・上杉・毛利等。

〔博引旁搜〕　ひろく諸書より材料を引き出し、關係あることをあまねくさがして求めること。

〔辨析錙銖〕　こまかいことをすぢみちたてゝ明にすること。錙銖は量の極めて少きこと。十黍を絫とし、十絫を銖、二十四銖を兩、六兩を鎰とす。

〔所謂無求之心〕　教科書一〇六頁一行「無求可知也」と應ず。

〔引据剪裁〕　材料の取捨のしかた。引据は引據と同じ證據を引くこと、剪裁二字共にきること。

〔私乘〕　官撰の史にあらで、個人が私に作つた歴史。

〔寫錄體貌〕　文章のかきかた、體貌は體裁、やうすなり。

〔輓近〕　近頃。輓は晩に通ず。

〔文縟〕　繁文縟禮の略、くだ〳〵しきこと。

〔拮据二十年〕　大に骨折ること二十年にして外史を完成せりとなり。拮据はいそがしく働くこと。

〔篋笥〕　四角なはこ、こゝは本箱。

〔今乃得閣下之寓目〕　今はからずも閣下のお目にとまつて。

〔雖無求於今日而不無求於千百載〕　求於千百載とは後世に名をのこすをいふ。この二つの無求は一〇六頁の無求と應ず。

〔其損益於世道人心尤不可不加謹〕　苟くもこの書がひろまれば、世上の道德人間の心情によかれあしかれ影響するから、大に愼重にやらねばならぬ。

〔病羸〕　やみてつかれたること、病弱なること。

〔不能效力父母之邦〕　山陽の父春水、安藝藩の儒官たり、山陽その長子なりしも、病弱の故を以て父のあとをつぐを得ず故にいふ。

〔庸陋之筆墨〕　平凡にして陋劣なる文章、謙遜していへるなり。

〔裨補萬一焉〕　極盛の世に極わづかでもたすけおぎなへば。

〔苟以爲可敎而敎之則幸矣〕　兎も角も私のやうな者にも敎へてやる資格があると思召されて、敎へて下さるならば大變な仕合せですの意。蘇轍の上樞密韓太尉書には「苟以爲可敎而辱敎之又幸矣」に作る。

〔敎襄焉〕　焉は蘇轍が魏公に謂つた語を

〔冒瀆尊嚴〕　尊嚴は對者の尊嚴なり。冒瀆はなかしけがすこと。上書文の結末に置いて敬意を表する語なり。

四七　送母路上短歌

要旨

五十にしてなほ赤子の心を失はざる山陽の孝情に感激せしめんとす。

解釋

〔東風迎母來北風送母還〕　東風は春の風、北風は冬の風なり。

文政十二年山陽五十歳なり、その二月十八日春水の十三回に歸省し、三月七日母堂梅颸を奉じて出發、上洛す。（第一句はこのことをいふ。）かくて伊勢近江等を遊覽し、十月廿三日梅颸を奉じて攝津筑前に觀楓し、十一月三日廣島に着す。（第二句はこの歸路のことをいふ）

〔來時芳菲路忽爲霜雪寒〕　第三句は第一句に應じ、第四句は第二句に應ず。芳菲は草花、又、花のよい香ひ、こゝは草花など咲きぬた路なり。

〔聞雞卽裏足侍輿足槃跚〕　雞鳴を聞いて直ちに脚絆などつけて出發し、大分歩いたのでびつこをひきながら、母の輿に侍して行く。

槃跚は足が疲れてびつこひく貌。

五・六・七・八の句は、歸途母に侍して行く樣子を寫せるなり。

〔獻母一杯兒亦飲初陽滿店霜已乾〕　夜明からの旅行で疲れた故、途中の茶店などに休憩せしなり。

初陽は朝日。滿店は日影があまねく店内にさしこめるなり。

〔五十兒有七十母此福人間得應難〕　五十の兒が七十の母を持ち共に樂しくくらすこの幸福は世間ではなかなか得られないことだ。

この句以下は山陽の五十にしてなほ老母を有する幸福感を詠ぜるものなり。最後の二句は「此福人間得應難」より出づ。

備考

この詩は古詩なり上平十四寒十五刪通韻。還・寒・蹣・安・乾・難・歡が韻字なり。

四八　中秋無月侍母

要旨

山陽、其の母に奉ずること篤きを知らしむ。

題名

〔中秋〕　秋の眞中。陰曆八月十五日。夢粱錄に「八月十五日、中秋節。此日三秋恰半。故謂之中秋。此夜月色倍于常時。又謂之月夕。」

〔無レ月〕　夜陰つて月の無いこと。

解釋

〔不レ同此夜……〕　此の中秋明月の夜を、同じくせざりしこと十三度であつた。十三年もの久しき間、母と離れてゐたので、中秋明月の夜を母と共に賞することができなかつたことをいふ。

〔重得……〕　今、重れて、秋風の此の中秋の夜、母に酒杯を奉ずることができた。眞に嬉しい。「重」以前まだ母と共に在りし時、杯を奉じたことがあつたが、今こゝに重れて母と共に觀月の宴を催さんとて、母に杯を奉るをいふ。「秋風……」月無きを以て、明月といふ代りに、秋風といへるならむ。

〔不レ恨……〕　夜陰りて、此の酒樽の前に、月光が無いからとて恨みに思はない。

〔免看……〕　月色の無い方が却つて有り難い。何となれば、我が頭の鬢の邊の白髮を、母に看らるゝを免れるからである。我が衰へた樣を見られぬ方が母に心配をかけず安心になる。「兒子」母に對して自らをいふ。

備考

高青邱に「中秋無レ月無レ酒」の詩あり。

桂樹香窓掩畫樓。江雲黯淡蔽中秋。道人莫喚嫦娥出。照見空樽却轉愁。

四九　柳子厚墓誌銘

要旨

墓誌中の絶調と稱せらるゝ本篇によりて墓誌の體制を知らしむると共に、柳宗元の事蹟韓退之の宗元に對する友情を知らしむ。

題名

墓誌銘とは死者生前の事蹟を記して之を石に刻し壙中に埋むる文にして、誌は散文を以て作られ銘は韻文より成る。文體明辯に曰く「按ずるに誌は記なり、銘は名なり。古の人、德善功烈の世に名づく可きありて、歿すれば則ち後人之が爲めに器を鑄て以て銘し、而して無窮に傳へしむ。蔡中郎の集に載する所の朱公叔の鼎の銘の若き是れのみ。漢の杜子夏に至りて始めて文を勒して墓側に埋む。遂に墓誌あり。後人之に因る。蓋し葬る時に於て、其の人の世系名字閥里・行治・壽年・卒葬日月と其の子孫の大略とを述べて、石に勒し、蓋を加へ、壙前三尺の地に埋め、以て異時陵谷變遷の用となす。（中略）其の題を論ずるに至りては墓誌銘といふあり。誌あり、銘ある者是れなり。墓銘並に序といふは、誌あり銘ありて又先づ序ある者是れなり（中略）墓誌といへば誌ありて銘なし。墓銘といへば銘ありて誌なし。然れども亦單に誌といひてかへりて銘あり。單に銘といひてかへりて誌ある者あり。題に誌といひてかへりて是れ銘、題に銘といひてかへりて是れ誌ある者あり。皆別體なり」。

分段

第一段　一一二頁五行まで
　柳氏の世系を叙す。
第二段　一一三頁四行まで
　子厚の履歴、仕官するまで。
第三段　一一三頁八行まで
　子厚の履歴、貶せられて却つて文章に益ありしこと。
第四段　一一四頁五行まで
　子厚の履歴、その事業上の功績。
第五段　一一四頁末行まで
　子厚の友情に厚かりしことを叙す。
第六段　一一五頁六行まで
　子厚の友情に關して作者の感慨を叙す。
第七段　一一六頁四行まで
　子厚の文章を叙す。
第八段
　葬地、子女、及び歸葬の由を叙す。

解釋

【諱（イミナ）】　實名なり。死者の子孫は、其の父祖の名を忌みて言はざるが故に之を諱といふ。左傳桓公六年に「周人以レ諱事レ神。名終將レ諱レ之」の疏に「自レ殷以往、未レ有二諱法一。諱始二於周一。周人尊レ神之故、爲レ之諱レ名」

【拓跋（タクバツ）魏】　後魏或は北魏ともいふ。三國曹氏の魏と別つ爲に、其の氏を冠して拓跋魏といふ。晉の太元十一年、苻堅の屬、召成帝の嫡孫なる拓跋珪の建てしところなり。

【侍中】　官名。天子の左右に侍して、衆事を參導し、顧問應對等を掌る。

【曾伯祖（セツ）祖】　曾伯祖は曾祖父卽ちヒイヂヤの兄。唐高宗紀に「武后以二長孫無忌一不レ助レ己、深怨レ之、顯慶四年削二無忌官一、黔州安置遂良先一年卒、至レ是無忌與二初議者柳奭・韓瑗一皆被レ殺」。

【宰相】　辭源に「宰相、謂レ輔二相天子一、宰二制天下一者也。秦漢以來之丞相・相國及三公、唐宋之中書・門下・尙書三省長官及同平章事、明清之大學士皆是」とあり。我が國現在の國務大臣に當る。

【祖】　高宗の時、中書令たりし故に宰相といへるなり。

【褚遂良（チヨスイリヤウ）】　字は登善、褚亮の子。博く文史に涉り、楷隸を巧にす。貞觀中、諫議太夫より黃門侍郎に累進し、高宗の朝、尙書右僕射に遷る。高宗の永徽六年、后王氏を廢して武氏を立てゝ皇后となさんとするや、之を不可とせし爲愛州刺史に貶せられ憂を以て顯慶三年卒す。年六十三。

【韓瑗（カンエン）】　字は伯玉、仲良の子なり。幼より節行を負ふ博學にして吏事に曉かなり。高宗の時侍中兼太子賓客たり。武氏を后となすの議に抗して振州刺史に貶せられ、尋で

顯慶四年、武后のために柳奭と同じく殺さる。

〔皇考〕　亡父を尊んでいふ、皇は大なり。考は亡父なり。禮記曲禮下に「父曰皇考、母曰皇妣」とあり。

〔以事母乗太常博士〕　母に事へんが爲に太常博士の任命を辭退せるなり。太常博士は太常寺の職員。太常寺は邦國の禮樂・郊廟・社稷に關する事務を掌る。太常卿一人、少卿一人、丞二人、主簿二人錄事二人、太常博士四人、太祝、奉禮郎、協律郎等あり。

柳子厚の先侍御史府君神道表に據るに「居德清君之喪、哀有レ過而禮不レ逾。爲レ士者咸服。服已除、吏部命爲太常博士。先君固曰、有奉老孤嗣在吳、願爲宣城令。三辭而後獲、徙爲宣城」とあり。鎭は老母と幼弟等の德清縣に在る爲に宣城令となることを願へるなり。宣城縣は安徽省に在り。

〔求爲縣令江南〕　宣城令となりんことを求めしをいふ。縣令は縣の長官、江南は揚子江以南の地。

〔不能媚權貴失御史〕　權貴は、權勢ありて位貴きもの、宰相竇參を斥す。竇參、寇府と比黨し、正士を誣陷し、以て私讐を報ゆ、此時鎭殿中侍御史と爲り、抗して屈せず、參、終に中つるに他事を以てし夔州の司馬に貶す。居ること三年、參等誅につく。乃ち復た侍御史に拜せらる。事は先侍御史府君神道表に見ゆ。

〔號爲剛直〕　世人が鎭を號して剛直と爲せしなり。剛直は剛毅にして正直なること。

〔子厚少精敏〕　精敏は事理にくはしくして敏捷なること。舊唐書、柳宗元傳に「宗元少聰慧絕レ衆、尤精二西漢詩騷一、下レ筆構レ思、興レ古爲レ侔、精裁密紱、瑩若二珠貝一、當時流輩成推レ之、登二進士第一、應二舉宏辭一、授二校書郎藍田尉一」

〔逮其父時〕　逮ぶは及ぶ。其の父の存命のうちにの意。

〔已自成人〕　少年にして已に「おとな」の如きをいふ。

〔取進士第〕　進士に及第せしこと、本參考書五一頁上段參照。

〔嶄然見頭角〕　づぬけて目に立つこと。嶄然は山の高峻なる貌、頭角は頭のさき、見はぬけ出てゐること。

〔柳氏有子矣〕　柳家にはよい子があるわいと衆人の評していへるなり。單に「有レ子」「有レ人」といへば必ず立派なる子、立派なる人あるの意なり。

〔博學宏辭〕　博學能文の士を考拔する爲に行ふ試驗科目なり。

〔集賢殿正字〕　集賢殿は圖書を掌る處、正字は職名なり。

集賢殿は玄宗の開元二十三年に之を置き、經籍を刊緝し、佚書を搜索し、顧問應對に備はることを掌る。學士・直學士・待讀學士・校書・正字・修撰官・校理官・中使・孔目官・知書館等の官あり。正字は定員二人なり。

〔儁傑廉悍〕　才能人より秀ですぐれて正直剛强なるを云ふ。儁は俊に同じ、廉は稜なり、かどのあること、方正を云ふ。悍は剛勇なり。

〔議論證據今古〕　其の議論が空論に非

ずして、古今の事實を證據となすを云ふ。

〔出入經史百子〕　經史百家の說を引用するを云ふ。「經」は經書、「史」は歷史「百子」は諸子百家なり、「百」とは數の多きをいふ。

〔踔厲風發〕　すぐれてすぐるどき議論が風の如く勢よく出ること。

踔は卓なり、高遠なり。厲は烈なり、風發は風の發するが如く、極めて疾く勢よく出ることなり。

〔諸公要人〕　諸の官位高き人、及び要路にありて威權ある人。

〔欲令出我門下〕　己が門下として、柳子厚を官職に推薦せんと欲せしなり。

權要の地位に在る人が有能の士を己の門下として官職に推薦し以て己の勢威を張るなり。

〔貞元〕　唐、德宗の年號。

〔藍田尉〕　藍田縣の警察官。

藍田は陝西省の縣名、尉は司法警察を掌る官。

〔監察御史〕　六典に「監察御史掌分察百僚、巡按郡縣、糾視刑獄、肅整朝儀」とあり。

〔禮部員外郎〕　「禮部」は尙書省の六部の一。天下の禮儀・祠祭・燕饗・貢舉等に關する事務を掌る。「員外郎」とは定員外の官なれば云ふ。

六典に「禮部員外郎、掌貳尙書・侍郎一舉其職制一而辨其名數」とあり。

〔遇用事者得罪事〕　用レ事者とは天子の寵を得て、勢力を振ふ者を云ふ。ここは王叔文を斥す。王叔文が罪を得たるに際し、宗元もそのまきぞへをくひしなり。

〔例出爲刺史〕　例とは同例の意にて他の人々と共になり、出は朝廷より出されて地方官とされること。刺史は州の長官。この時宗元は邵州刺史を得たるなれど、未だ至らざりしを以て、州名を著さざるなり。

〔貶永州司馬〕　永州は今の湖南省に屬す。司馬は軍旅の事を掌る官、刺史の下に屬す。唐制每州一人あり。

資治通鑑「憲宗卽位、貶二禮部外郎柳宗元一、爲二邵州刺史一。朝議謂、王叔文之黨、或自二員外郎一出爲二刺史一、貶之太輕、再貶爲二永州司馬一。」とあり。

〔務記覽爲詞章〕　記覽はよく覺え博くみること、詞章は詩文。

〔汎濫停蓄〕　「汎濫」は大水の物を泛ぶる貌にて諸子百家の學に博く涉るをいふ。「停蓄」はとどめ貯へ置く義。

〔無涯涘〕　際限なきなり。「涘」は音「シ」水涯なり。詩經王風に「在二河之涘一」。

〔自肆於山水間〕　山水の景を見て我が心を氣儘に樂ましめしなり。肆はほしいまま、にすと訓す。始得二西山一宴游記其の他の游記、卽ち所謂永州八記はこの時の作なり。

〔柳州〕　廣西省に屬す。子厚、柳州と號するは柳州刺史たりしによる。

〔是豈不足爲政耶〕　かゝる過土と雖も、政敎を施すの價値十分なりとの意。

〔以男女質錢〕　金錢を借るにその男女を以て抵當とすること。質は音チ。しちにお